岐阜県文化財保護センター調査報告書　第46集

たのもと遺跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）
埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集

１９９８

岐　　阜　　県

財団法人　岐阜県文化財保護センター

西区Ⅲ層出土のⅣ期の土器

序

丹生川村折敷地五味原地区においては、平成５年度から８年度までの４年間に５遺跡の発掘調査が実施されました。岐阜県土木部河川課宮川上流河川開発工事事務所が行う丹生川ダム建設に伴い、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当した次第です。

本報告書は、平成８年度に調査を実施した「たのもと遺跡」の発掘調査結果をまとめたもので、丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財調査報告書の最終の第５集にあたります。調査の結果、特に第４集までの遺跡の調査では希薄であった縄文時代後期前葉について、住居跡や周辺の生活跡およびまとまりのある土器群・石器類などの貴重な資料を得ることができました。

五味原地区という限られた地域内での集中的な発掘調査が完了したことで、それぞれの遺跡の関連づけや対比等が、今後は重要になってくると考えられます。発掘調査によって蓄積された資料によって、連綿と続くこの地域の縄文時代についての研究が、さらに深まることを大いに期待したいものです。

報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しまして、関係諸機関・各位から多くのご指導・ご協力を賜りました。また、関係諸機関、丹生川村教育委員会、地元の関係各位の皆様からは終始多大なご支援・ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、改めて厚くお世話になった方々にお礼申し上げます。

平成10年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は岐阜県大野郡丹生川村折敷地字西田に所在するたのもと遺跡（遺跡番号21601-08762）の発掘調査報告書である。

2．本調査は丹生川ダム建設に伴うもので、宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、平成8年度に実施し、渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導のもとに上原真昭が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は次の者が主に行った。

　土器　清田由美子　田井孝子　所　洋子　荒井尚子

　石器　牛丸富士子　脇渕純子　上原真昭

　土偶　古田奈緒子

5．実測図のトレースは次の者が主に行った。

　中村映子　脇渕純子

6．遺物の写真撮影は、佐藤右文氏（奈良県在住）に依頼した。

7．本書の執筆については、第2章第1節は清見村立清見小学校教頭岩田修氏に玉稿を賜った。第3章第3節9は古田奈緒子が執筆し、他は上原真昭が執筆した。自然科学分析に関しては、それぞれ執筆者名を明記した。編集は上原が行った。

8．事前地形測量は(株)興栄コンサルタントに委託して行った。

9．空中写真撮影と空中写真測量は、(株)イビソクに委託して行った。

10．自然科学分析は、(株)パレオ・ラボに委託して行った。

11．発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

小島俊彰　戸田哲也　谷井　彪　橋本　勉　金子直行　細田　勝　田中　彰　冨井　眞

大石崇史　領塚正浩　岩田　修　吉朝則冨　藤根　久　藤本健三　岐阜県工芸試験場

丹生川村教育委員会　上宝村教育委員会

12．発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の者が参加した。

古田奈緒子　矢嶌和子　岩佐　勇　白田清子　大平　勇　白田良恵　飯塚八十子　黒田美奈子

上村かな子　黒木明三　清水佐市　新家正次　山田博子　志多縫子　西田幸平　和座雅子

瓜田英明　白川良平　沢之向保　白石和代　稲本　嗣　坂谷正道　清水　武　倉本正幸

蒔田利光　渡瀬　保　牛丸富士子　柚村幸子　清田由美子　田井孝子　所　洋子　田村由美子

横井さだ子　垣添敦子　中村映子　荒井尚子　大西和子　瀬戸幸子　畠中裕子　脇渕純子

13．土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（1993）を参照した。

14．調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例言
第１章　発掘調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……2
第２章　遺跡の環境……4
　第１節　地形・地質環境……4
　第２節　周辺の遺跡（五味原遺跡群）……6
第３章　西区の遺構と遺物……9
　第１節　基本的層序……9
　第２節　遺構と出土遺物……13
　第３節　包含層出土遺物……39
第４章　東区の遺構と遺物……74
　第１節　基本的層序……74
　第２節　遺構と出土遺物……74
　第３節　包含層出土遺物……84
第５章　自然科学分析……97
第６章　まとめ……106
主要参考文献

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　グリッド設定図……3
第３図　遺跡付近の地形図……5
第４図　五味原周辺の遺跡分布図……7
第５図　地形測量図（調査範囲・土層断面の位置）……8
第６図　土層断面図（西区）……10
第７図　遺構配置図（西区）……11
第８図　西区の遺物出土状況……13
第９図　SB１……15
第10図　炉内出土土器（SB１）……15
第11図　SB１遺物出土状況……16
第12図　SB１出土土器……17
第13図　SB１出土石器(1)……18
第14図　SB１出土石器(2)……19
第15図　SB１周辺図（焼土跡群・SX15・SX23）……22
第16図　焼土跡群出土遺物……24
第17図　SX15出土遺物……25
第18図　SX17周辺図……26
第19図　SX17出土石器……26
第20図　SX21周辺図……27
第21図　SX21（水場遺構）……29
第22図　SX23……30
第23図　SX21・SX23出土遺物……31
第24図　西区のおもな土坑・ピット……34
第25図　西区の土坑・ピット出土遺物(1)……36
第26図　西区の土坑・ピット出土遺物(2)……37
第27図　SX２出土土器……38
第28図　西区II期の土器・IV層出土の石器……39
第29図　西区III期の土器……41
第30図　西区IV期の土器(1)　第１群１類・２類……43
第31図　西区IV期の土器(2)　第１群５類・第２群……45
第32図　西区IV期の土器(3)　第２群・３群・８群……47
第33図　西区IV期の土器(4)　第４群～６群……51
第34図　西区IV期の土器(5)　第８群・９群……53
第35図　西区IV期の土器(6)　第１群１類……55

第36図　西区IV期の土器(7)　第１群２類～第２群……56
第37図　西区IV期の土器(8)　第２群～４群……57
第38図　西区IV期の土器(9)　第５群～８群……58
第39図　西区IV期の土器(10)　第９群……59
第40図　西区IV期の土器(11)　底部……60
第41図　西区III層出土石器(1)……62
第42図　西区III層出土石器(2)……63
第43図　西区III層出土石器(3)……64
第44図　西区III層出土石器(4)……65
第45図　西区III層出土石器(5)……66
第46図　西区III層出土石器(6)……67
第47図　西区Ｖ期の土器……67
第48図　西区VI期の土器……69
第49図　西区II層出土石器(1)……71
第50図　西区II層出土石器(2)・石製品……72
第51図　西区出土の土偶……73
第52図　西区の歴史時代の遺物……73
第53図　遺構配置図（東区）……75
第54図　土層断面図（東区）……77
第55図　東区の遺物出土状況……79
第56図　FP１周辺図および周辺出土石器……79
第57図　SX22周辺図……80
第58図　SX22……80
第59図　SK５……81
第60図　東区の遺構出土土器……83
第61図　東区Ｉ期・III期の土器……84
第62図　東区IV～Ｖ期の土器……85
第63図　東区VI期の土器(1)・時期不明の土器……87
第64図　東区VI期の土器(2)……89
第65図　東区VI期の土器(3)……90
第66図　東区出土石器(1)……92
第67図　東区出土石器(2)……93
第68図　東区出土石器(3)・石製品……94
第69図　東区出土石器(4)……95
第70図　東区の歴史時代の遺物……96

付　表　目　次

第１表　五味原周辺の縄文遺跡一覧……6
第２表　SB１ピット一覧表 ……15
第３表　不明遺構一覧表（西区）……21
第４表　土坑・ピット一覧表（西区）……33
第５表　不明遺構一覧表（東区）……78
第６表　土坑・ピット一覧表（東区）……82
第７表　大型植物化石一覧表 ……101
第８表　放射性炭素年代測定結果 ……102
第９表　たのもと遺跡出土木材の樹種同定結果 ……105
第10表　遺構出土のⅣ期の土器（西区） ……106
第11表　石鏃計測表 ……111
第12表　石錐計測表 ……112
第13表　削器計測表 ……113
第14表　ヘラ形石器計測表 ……113
第15表　両極剥離痕のある石器計測表 ……113
第16表　抉入石器計測表 ……114
第17表　二次加工のある剥片計測表 ……114
第18表　使用痕のある剥片計測表 ……114
第19表　石核計測表 ……115
第20表　石錘計測表 ……115
第21表　接合剥片（SX15）計測表……116
第22表　打製石斧計測表 ……116
第23表　横刃形石器計測表 ……120
第24表　礫器計測表 ……120
第25表　磨製石斧計測表 ……120
第26表　磨石・凹石類計測表 ……121
第27表　石皿計測表 ……124
第28表　砥石計測表 ……124
第29表　石製品計測表 ……124
第30表　石器組成表 ……124

図 版 目 次

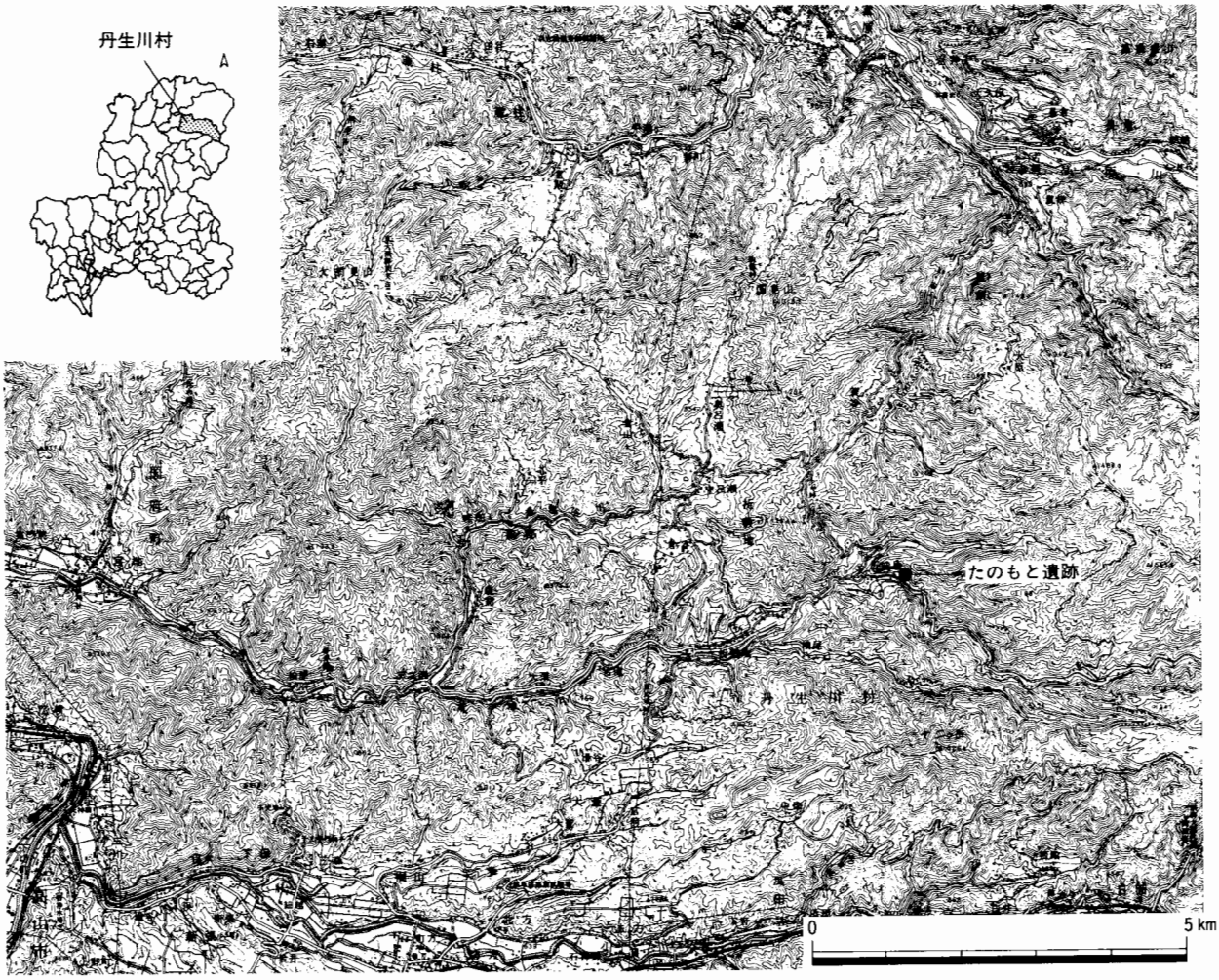
口絵カラー図版　西区III層出土のIV期の土器
図版１　１．遠景　２．遺跡全景　３．Ｉ列北壁セクション　４．西区作業風景
図版２　５．西区全景　６．SB１(検出前)　７．SB１石囲炉　８．SB１　９．石鏃出土状況(SB１)
10．削器出土状況(SB１)
図版３　11．土器出土状況(SB１炉内)　12．焼土跡①(SX１)　13．焼土跡⑨(SX11)
14．SX17遺物出土状況　15．Ｐ３
図版４　16．クルミ出土状況(SX21)　17．水場遺構(SX21)　18．木片出土状況(Ｆ10区III層)
19．IV期第５群５類土器出土状況(Ｇ９区III層)
図版５　20．東区全景　21．東区作業風景　22．SX22　23．SX24　24．クルミ出土状況(SX22)
図版６　25．SB１出土土器　26．SB１出土石器１・西区遺構出土石器１
図版７　27．SB１出土石器２　28．SB１出土石皿　29．SB１出土石器３・西区遺構出土石器２
図版８　30．西区遺構出土石器３　31．西区遺構出土土器１
図版９　32．SX21出土土器１　33．SX21出土土器２　34．SX21出土木片　35．SX23出土土器
図版10　36．西区遺構出土土器２　37．SX２出土土器
図版11　38．西区II期の土器　39．西区III期の土器１(第29図―194)　40．西区III期の土器２(196)
図版12　41．西区IV期の土器１(第１群１ａ類197)　42．同２(同198)　43．同３(同２類199)
図版13　44．同４(第１群１ａ類)　45．同５(同１ｂ類)
図版14　46．同６(同１ｃ類)　47．同７(同２類)　48．同８(同３類)　49．同９(同４～６類)
図版15　50．同10(同５類201)　51．同11(同202)　52．同12(第２群203)　53．同13(同204)
図版16　54．同14(第２群)　55．同15(同)
図版17　56．同16(同205)　57．同17(第３群１ａ類206)　58．同18(同207)　59．同19(同208)
60．同20(同１ｂ類209)　61．同21(同２類210)　62．同22(同６類211)
63．同23(第４群214)　64．同25(第２群330)
図版18　65．同26(第３・４群)　66．同27(第５群４類215)　67．同28(同５類216)
68．同29(第６群１類218)　69．同30(同２ａ類219)
図版19　70．同31(第５～６群)　71．同32(第７群)
図版20　72．同33(第８～９群)　73．同34(第９群)
図版21　74．同35(第８群２ｂ類221)　75．同36(第９群１ａ類222・同１ｂ類224)
76．同37(同１ｂ類226)　77．同38(同２ａ類228)　78．同39(同１ａ類223)
79．同40(同２ｂ類229)　80．同41(同３ｂ類231・232)
図版22　81．西区III層出土石器１　82．西区III層出土石器２
図版23　83．西区III層出土石器３　84．西区III層出土石器４
図版24　85．西区III層出土石器５(石皿)　86．西区Ｖ期の土器１　87．同２(551)　88．西区出土の土偶
図版25　89．西区VI期の土器１　90．同２(554)　91．歴史時代の遺物１(604)　92．同２(605)

図版26　93．西区II層出土石器１　94．西区II層出土石器２
図版27　95．東区の遺構出土遺物　96．東区遺構出土土器(611)　97．東区遺構出土土器(610)
98．東区Ｉ期の土器(625)
図版28　99．東区III期の土器　100．東区IV～Ｖ期の土器
図版29　101．東区IV～Ｖ期の土器(650)　102．東区VI期の土器１(第２群２ｃ類651)
103．同２(同２ｄ類653)　104．同３(同３類654)　105．同４(第１群)
図版30　106．同５(第２群１類～２類)　107．同６(第２群４類・第３群)
図版31　108．東区出土石器１　109．東区出土石器２
図版32　110．東区出土石器３　111．東区出土灰釉陶器１　112．東区出土灰釉陶器２
113．東区出土陶器
図版33　出土した大型植物化石
図版34　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)
図版35　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)
図版36　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

たのもと遺跡の発掘調査は、岐阜県宮川上流河川開発工事事務所による丹生川ダム建設に伴う緊急発掘調査の一環として行われた。丹生川ダム水没地内埋蔵文化財発掘調査の経緯については、第１集の「西田遺跡」の発掘調査報告書に記述されているとおりである。たのもと遺跡は、第２集の「カクシクレ遺跡」のＢ地点およびＣ地点や、第４集の「丸山遺跡」と同様に事前の試掘調査により確認された遺跡である。水没地内のうち荒城川右岸上流部の水田部分については、平成６年８月に小型重機を利用して、34ヵ所のトレンチを入れ試掘を行った。その結果、階段状に造成された水田の６ヵ所で縄文土器片等の出土を確認し、水田部分の地名から「たのもと遺跡」として新規に埋蔵文化財包蔵地の登録をした。開墾等によりほとんど旧地形を留めていないのが現状であったが、遺物包含層が深く遺構が残存する可能性の高い西区（1,100㎡）と、比較的まとまって遺物散布が見られる東区（800㎡）の２地点で発掘調査を行うこととした。



第１図　遺跡の位置

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成８年度に行った。４月下旬までに現場事務所設置等の準備や、地形測量および重機による表土剝ぎを行い、４月30日より現地での調査を開始した。

発掘調査にあたっての地区設定は、国土座標に合わせて８×８ｍの区画を設け、北から南へＡ～Ｐ、西から東へ１～25と番号をつけてグリッド名を表すことにした。Ａ列北壁は、国土座標第Ⅶ系のＸ＝23916、１列西壁は、同Ｙ＝19380となっている(第２図)。調査区が２地区に分かれていたので、16列以西（７～16列）を西区、20～25列を東区と呼ぶことにした。以下、調査経過を記述する。

第１・２週（４.30～５.10）　西区の杭打ちを終え、Ｈ・Ｉ列のＩ～II層の掘削から開始する。縄文晩期の土器片が出土。５月８日の午後に丸山遺跡にて２遺跡合同の調査始め式を行った。

第３・４週（５.13～５.24）　H10区東西トレンチおよびH11区南北トレンチで縄文後期の遺物包含層（III層）を確認した。Ｇ９～Ｆ９区の南北トレンチでは砂礫の堆積が厚く、１ｍ下がってもIII層は確認できなかった。Ｉ11区の砂礫層直下でSB１の石囲い炉の一部を検出した。Ｉ13区II層から土偶片出土。５月23日に東区の杭打ちを完了。H10区III層で焼土跡を検出した（SX１）。

第５～８週（５.27～６.21）　Ｉ13区IIｃ層で縄文後期土器が一括出土（SX２）。G10区東側からＩ12区にかけては、重機により砂礫層除去を行った。Ｉ12区III層で焼土跡を２基検出した。

第９・10週(６.24～７.５）　雨天の日が多かった。６月27日は西区湧水のため、東区で作業を行う。SB１周辺で新たに検出した焼土跡の実測および写真撮影を行った（SX６～９）。

第11・12週（７.８～７.19）　焼土跡をさらに３基検出（SX10～12)。SB１床面より多くの石器が出土。SB１の炉内より炭化クルミ片および土器片が出土した。

第13・14週（７.22～８.２）　SB１の精査を進めピットを確認した。SB１の西で玉髄フレークの集中出土地点を検出（SX15）し、周辺の平石の配置を実測した。G12区III層の斜面上で磨製石斧３本と打製石斧１本がまとまって出土した(SX17)。SB１周辺でピットを検出(Ｐ８まで)。Ｇ９区南東部III層で、縄文後期前葉の土器片が多く出土。H10区IV層より縄文前期の土器が出土。

第15・16週（８.５～８.16）　G11区III層より土偶片出土。ピット掘削前のSB１の実測・写真撮影を行った。Ｇ９区はシルト層に入り遺物の出土は見られなくなった。

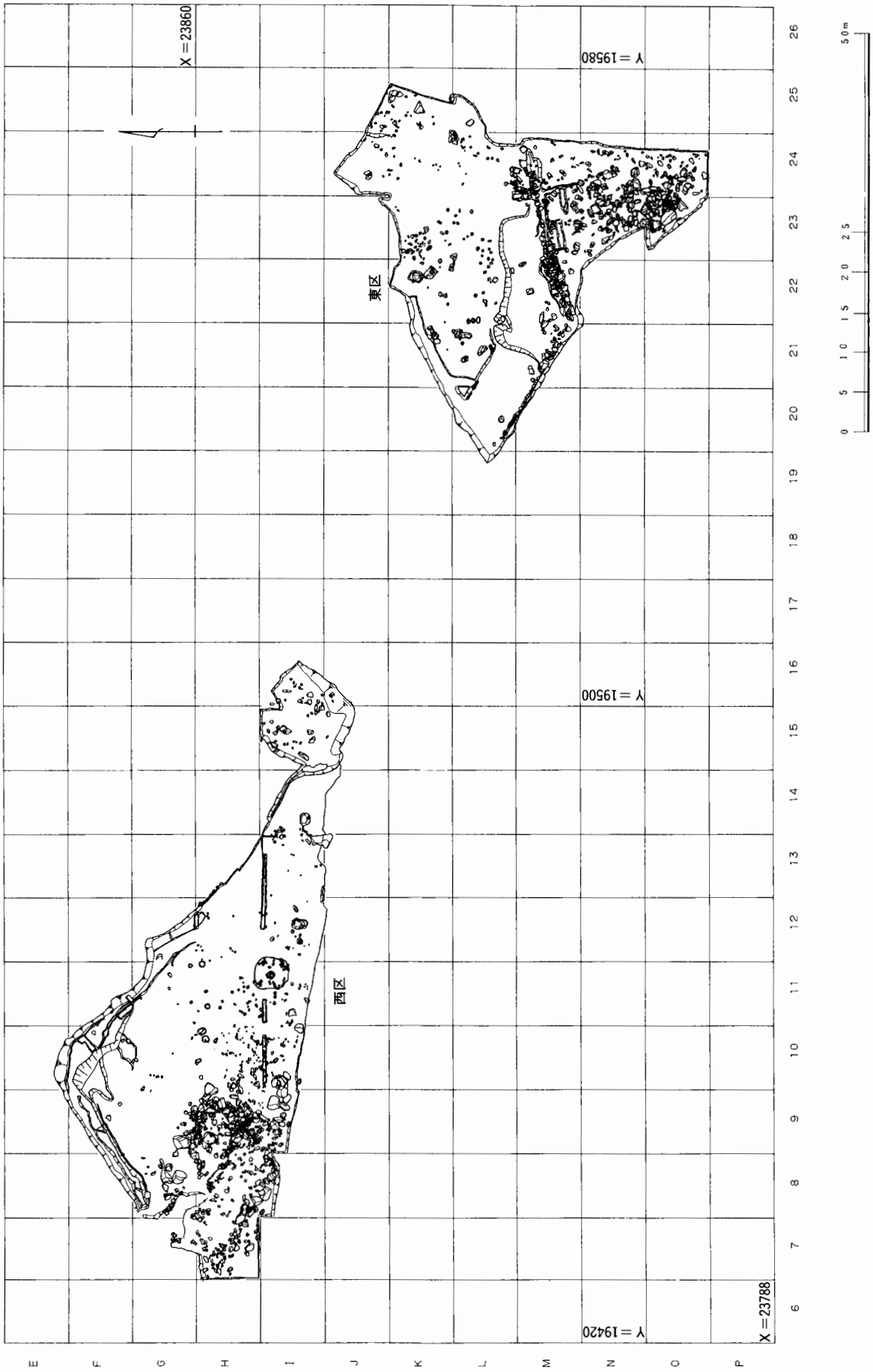
第17～21週(８.19～９.20)　G10区III層より縄文後期土器がまとまって出土。８月27日より雨天が続き、西区は湧水のため作業困難となる。８月30日より東区の調査に入る。K22区III層より縄文晩期土器が出土。K25区IV層より縄文早期土器が出土。

第22～24週（９.23～10.11）　L20区IV層で縄文早期の炉穴を検出した（FP１)。SB１・SX２・FP１出土の炭化材の年代測定を依頼した。L22～23でピット群を検出（P30～39)。

第25・26週（10.14～10.25）　西区の調査を再開し、G10区北側で水場遺構を検出（SX21)。10月19日に現地説明会を実施した。10月23日に空中撮影を行った。

第27～29週(10.28～11.15)　SB１北側の土層観察用トレンチから縄文土器片が出土(SX23)。P56より打製石斧が2本出土。11月11日に現地調査を終え、翌12日に遺物等の引越し作業を終了した。11月15日に、SX21周辺の追加測量を行った。

以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所内の国府整理所にて整理作業に入った。


X＝23860
Y＝19580
東区
Y＝19500
西区
Y＝19420
X＝23788
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
5
10
15
20
25
50m

第２図　グリッド設定図

第２章　遺 跡 の 環 境

第１節　地形・地質環境

１　地形的特徴

丹生川村五味原地域には、わずかに緩斜面と河岸段丘がみられ、そこには縄文時代以降の人跡が発見されている。この五味原の平坦地は、荒城川本流と主な支流である大脇谷との合流点付近に発達している(第３図)。たのもと遺跡は、荒城川本流添いに位置し、河川によって形成された地形上に位置している。

近隣では、6500年前のアカホヤ火山灰層が確認されているので、それ以前からこのような地形形成が始まっていたと考えられる。現在、この辺りの荒城川の河床では岩盤が露出していることから全体的に侵食環境にあったが、扇状地状の低位河岸段丘がみられるので、一時期は堆積物が集積するようなことがあった。荒城川流域では、低位段丘はよく発達しているが、中位段丘やこのような扇状地状の緩斜面はあまり見られない。

２　地質的特徴

この付近の地質は、中生代白亜紀最後期（約６千５百万年前）に噴出した大雨見山層群中の酸性火山岩である明ヶ谷溶結凝灰岩層と、新生代第四紀更新世中期（約60万年前）に噴出した上宝火砕流堆積物の分布域である。これらの火山岩は、いずれも大規模な火砕流堆積物であり、高温で堆積して自らの熱で軽石などが溶結した、いわゆる溶結構造を有している。

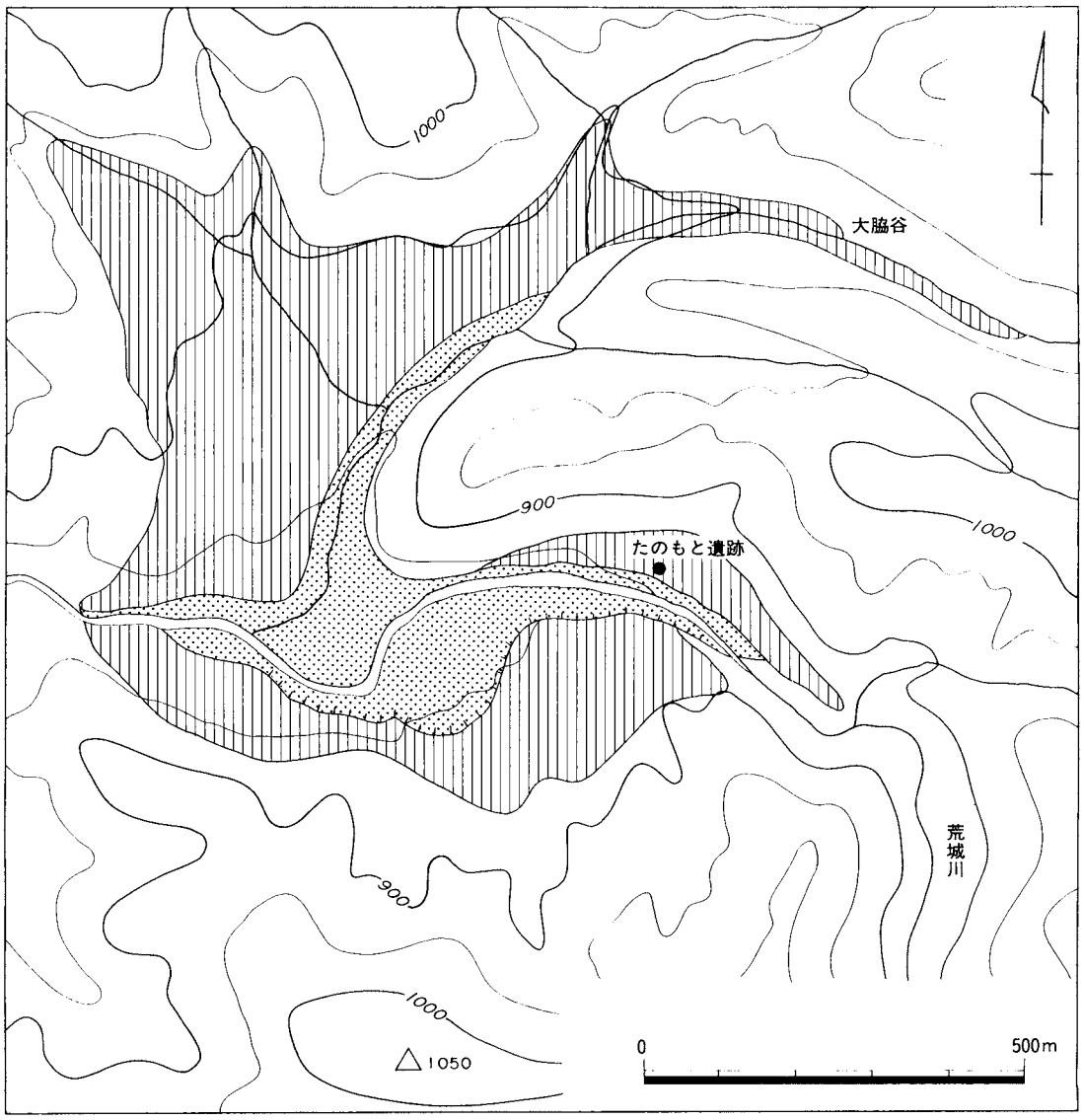
明ヶ谷溶結凝灰岩層の特徴は、笠原氏によれば、最大層厚300mであり、流紋デイサイト～流紋岩で、粗粒のカリ長石・石英・斜長石・黒雲母・単斜輝石などの鉱物を含んでいる。少し上流側には、上宝火砕流堆積物が広く分布している。上宝火砕流堆積物は流紋岩質で、斑晶は斜長石・石英・黒雲母などで、溶結構造を持つ本質レンズを多く含む。かなり多孔質で加工しやすいが、石器としては柔らかすぎるのであまり利用されていない。また、周辺には古生層の荒城川層が見られ、河川の礫中にも緑色岩、泥岩などが多く存在している。五味原グラノファイアも分布している。

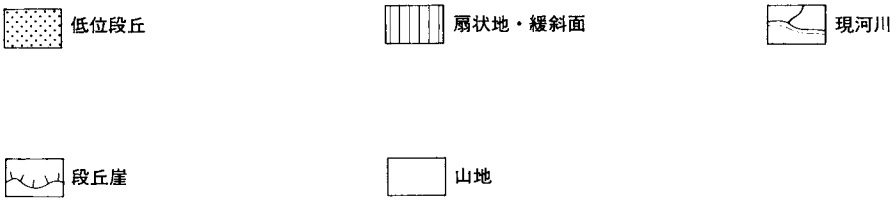
このように、石器や炉石には、多孔質で柔らかい上宝火砕流堆積物は使用しないで、比較的硬い大雨見山層群の流紋岩類をよく利用している。

大雨見山層群の溶結凝灰岩と上宝火砕流堆積物（溶結凝灰岩）は、いずれも溶結構造をもつ、風化に対しての抵抗力の弱い岩石であることから、五味原地区の緩斜面形成の一要因になったことが考えられる。

〈参考文献〉

笠原　芳雄（1988）「大雨見山層群―飛騨外縁帯の白亜紀末期の湖成層と火砕流堆積物―」
『飛騨の大地をさぐる』（教育出版文化協会）





第3図　遺跡付近の地形区分

第2節　周辺の遺跡（五味原遺跡群）

たのもと遺跡が所在する岐阜県大野郡丹生川村折敷地の五味原地区は、北アルプスを水源とする荒城川の上流部にある。荒城川は宮川、神通川を経て日本海に通じており、河口から五味原地区までの距離は約100km程である。集落の中心部に西田遺跡があり、その北西斜面に丸山遺跡および牛垣内遺跡、対岸にカクシクレ遺跡、上流にたのもと遺跡がそれぞれ半径500m以内の圏内に位置している。

五味原地区では丹生川ダムの建設に伴い、上記の5遺跡7地点の発掘調査が行われた（第1表No.1～7、第4図)。この5遺跡に平成元年の林道工事の際に発掘調査された上流部のなべり谷遺跡(第1表No.8）を加えた6遺跡8地点によって構成されるのが、五味原遺跡群である。この遺跡群では、限られた地域内での縄文早期後半から晩期までの人々の生活の跡を、ほとんど切れ間なく辿ることが可能である。同遺跡群の出土遺物総数は30万点に上り、遺物研究のみならず、集落の変遷や集落構造等を探る上でも重要な遺跡群である。

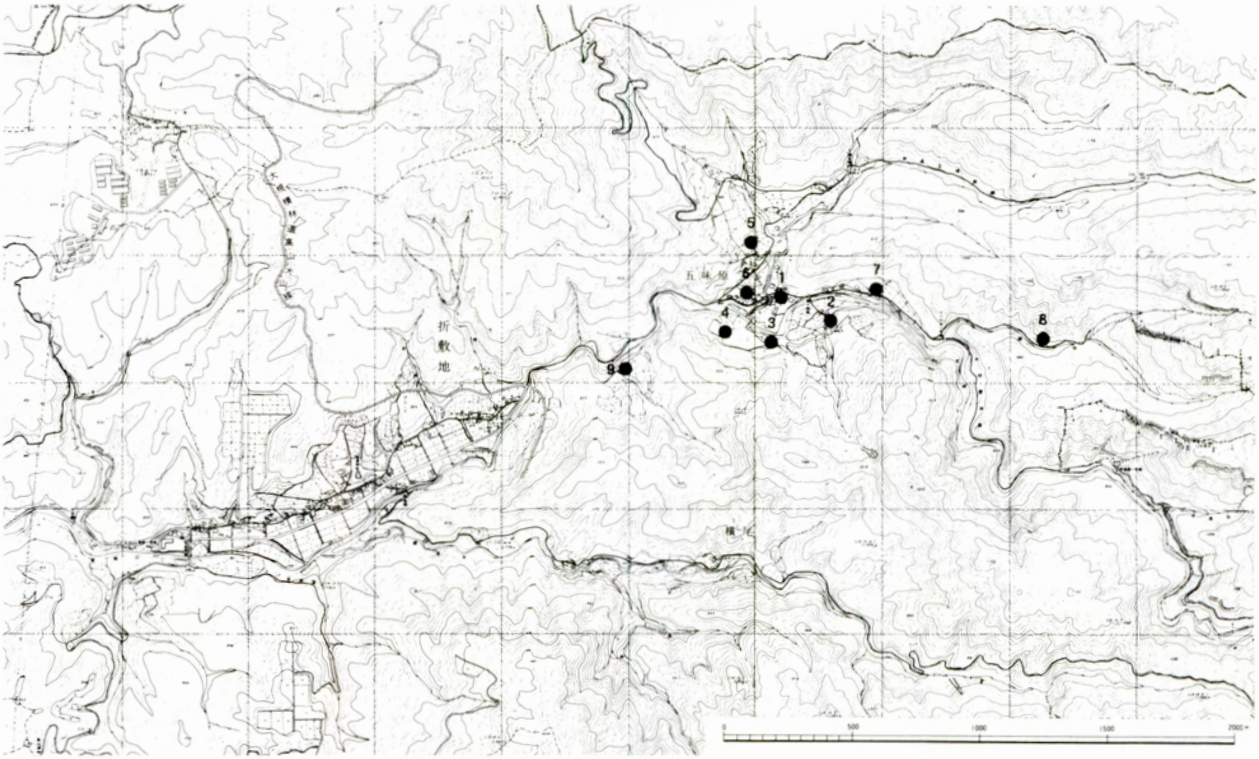
縄文時代の資料が充実している五味原遺跡群であるが、弥生時代、平安時代、中世、近世の各時代の遺物や遺構も断片的に検出されている。なお、村内および周辺の歴史的環境については、丹生川ダム関連の同遺跡群発掘調査報告書第4集までに詳述されているので、省略する。

第1表　五味原周辺の縄文遺跡一覧

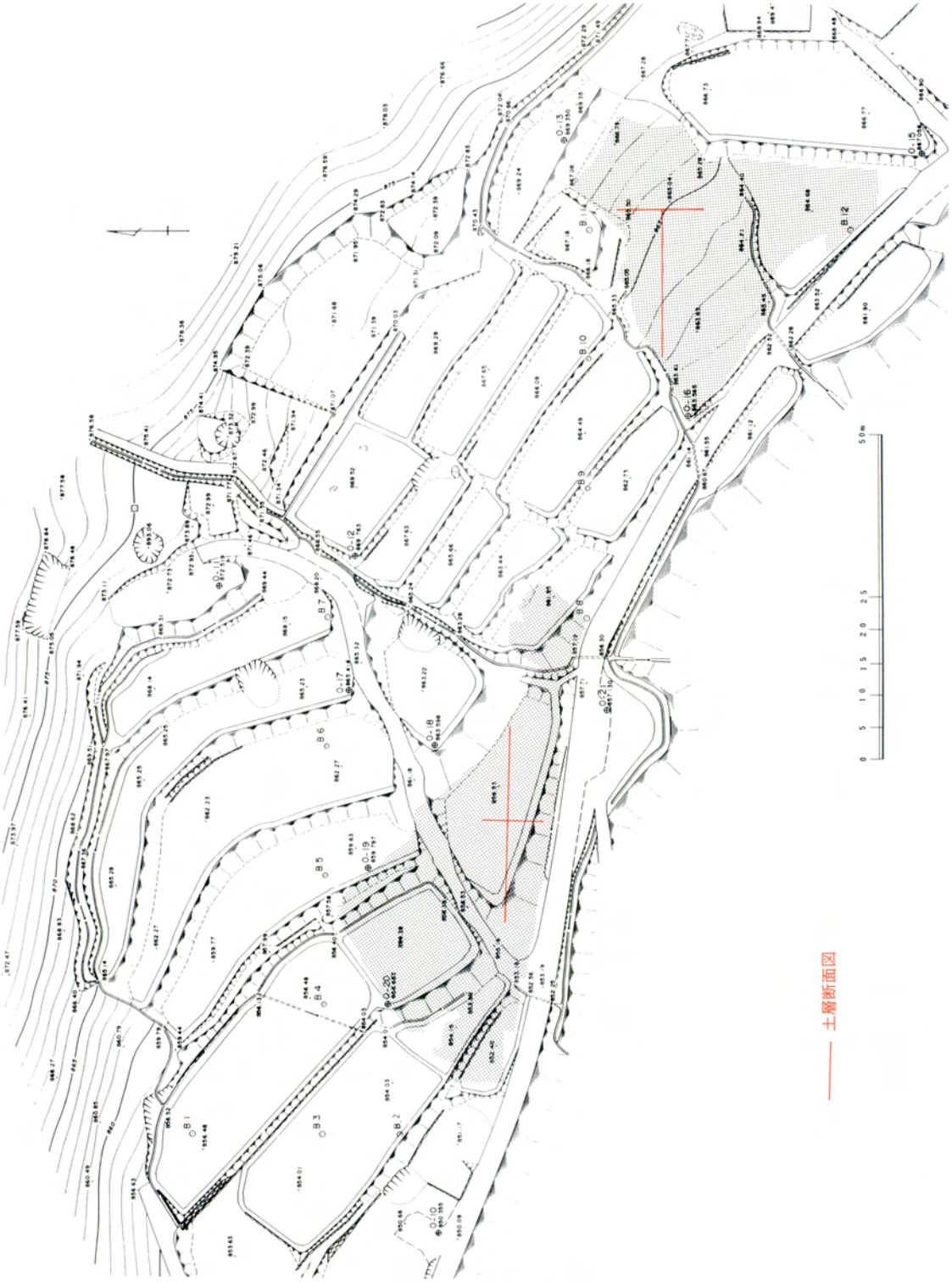
No.	遺跡名	縄文時代					調査結果		備考
		早期	前期	中期	後期	晩期	おもな遺物	遺構	
1	西田	◎	○	○	◎	◎	・早期、後晩期を中心に多量の土器や石器類 ・後晩期の土偶や土製品	・住居跡21軒 ・焼礫集積遺構73基など	H5・6年度発掘調査
2	カクシクレ（A地点）	△		◎		◎	・中期および晩期の土器や石器類 ・各種植物遺体や昆虫遺体	・住居跡1軒 ・水さらし場遺構など	H7年度発掘調査
3	カクシクレ（B地点）	△		○	○	△	・中期初頭および後期後半の土器	・ピット ・石組み遺構	H7年度発掘調査
4	カクシクレ（C地点）				○	△	・後期中葉から後葉の土器 ・打製石斧や磨石類などの石器類	・土坑 ・巨大炭化木	H7年度発掘調査
5	牛垣内	○	△	◎	○	◎	・早期、中期、晩期のまとまった土器群 ・平安時代の墨書土器	・住居跡9軒 ・焼礫集積遺構4基など	H6・7年度発掘調査
6	丸山	○	△	◎	△	△	・中期初頭の土器群 ・ナツメ玉状の琥珀製品	・住居跡3軒 ・土坑67基など	H8年度発掘調査
7	たのもと	△	△	△	◎	○	・後期前葉の土器や石器類 ・クルミやトチなどの植物遺体	・住居跡1軒 ・水場遺構など	H8年度発掘調査
8	なべり谷				△	△	・後晩期の土器	・未検出	H元年調査
9	細越洞						・磨製石斧、打製石斧、石皿等の石器類		丹生川村史

＊No.は、第4図の遺跡番号に準ずる。
＊表内の◎・○・△は、発掘調査で出土した土器を中心とした遺物の量による。

五味原遺跡群（1995年12月撮影）



第４図　五味原周辺の遺跡分布図



第５図　地形測量図（調査範囲，土層断面の位置）

第３章　西区の遺構と遺物

第１節　基 本 的 層 序

たのもと遺跡の西区は、標高860m前後の段丘上にある。水田が数段にわたって造成されており、山麓の傾斜地が削平と埋土により耕地化されたため、現況から旧地形を見極めるのは困難であった。調査範囲は、階段状の５枚の水田部分で、特に東側の２枚の水田は段差が激しく先端ほど埋土による人為的な堆積部分が大きいと判断し、重機による表土の剥ぎ取りを行った。

第Ｉ層は、耕作土である。水田造成前の畑の耕作土と考えられる部分についても第Ｉ層として扱った。第II層は、非常に不安定な層である。縄文後晩期の遺物を含む黒褐色土中の随所に、砂礫層の堆積がみられた。第III層は、縄文後期前葉以前の遺物包含層である。大小の礫が混じる厚い砂層の直下にあり、全般に堆積は浅めであった。第IV層は、一部に縄文時代前期の遺物を含む褐色土層である。以下第６図を参照に補説したい[1]。

第Ｉ層（10YR5/2　灰黄褐色土）表土で、水田や旧耕作地の耕作土である。

第II層　部分的に砂礫が混入する不安定な層である。非常に複雑な堆積状況を示していたが、ａ～ｅまでに細分した。なお、前後の層がサンドイッチ状に混在する部分については、その主となる部分を優先してダッシュ記号（′）をつけて区別した。

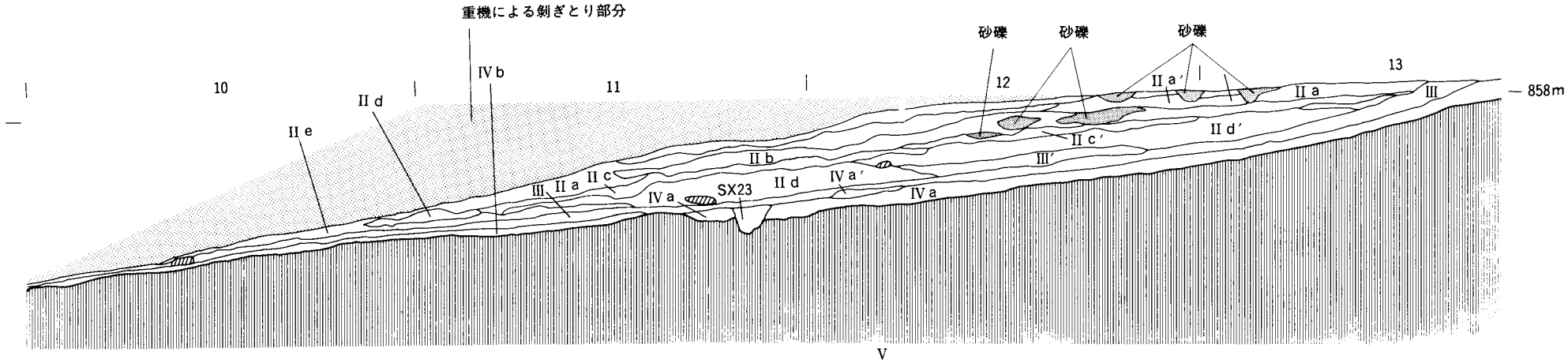
IIａ（10YR4/2　灰褐色土）　しまりのない砂質土である。縄文晩期の遺物を含む。
IIｂ（５Y7/2　灰白色土）　径３cm前後の礫を含む砂の層である。遺物はほとんどなし。
IIｃ（10YR3/1　黒褐色土）　ややしまりのある砂質土である。縄文後期中葉以後の遺物を含む。
IIｄ（2.5Y7/6　明黄褐色土）　大小の礫が多く混じる砂礫の堆積層である。
IIｅ（7.5YR3/2　黒褐色土）　しまりのない砂質土で、３～５cmの礫を含む。

第III層（10YR2/1　黒色土）　しまりのある砂質土で、炭化物を多く含む（遺物包含層）。G10区以北では、上層のIIｄ層との間に鉄分が沈着して硬化した層を挟んでいる。

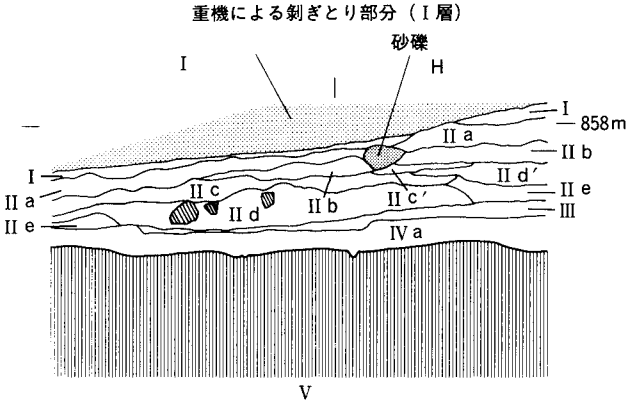
第IV層　ピンク色の角礫（火砕岩）を多く含む砂質土で、遺構検出面である。
IVａ（7.5YR4/2　灰褐色土）　ややしまりのある砂質土である。
IVｂ（10YR4/4　褐色土）　角礫を多く含む砂質土である。縄文前期の遺物を含む。

第Ｖ層（10YR7/6　明黄褐色）　大小の礫を多く含む砂質土で、地山と判断した層である。

1）西区の東端（Ｉ～Ｊの15･16）は、間に谷を挟んだ場所にある。層序は西側と異なり、Ｉ層は表土、II層は水田造成時の埋土、III層が遺物を含む黒褐色土で、間に砂礫層はなく西側のII～III層にあたる。



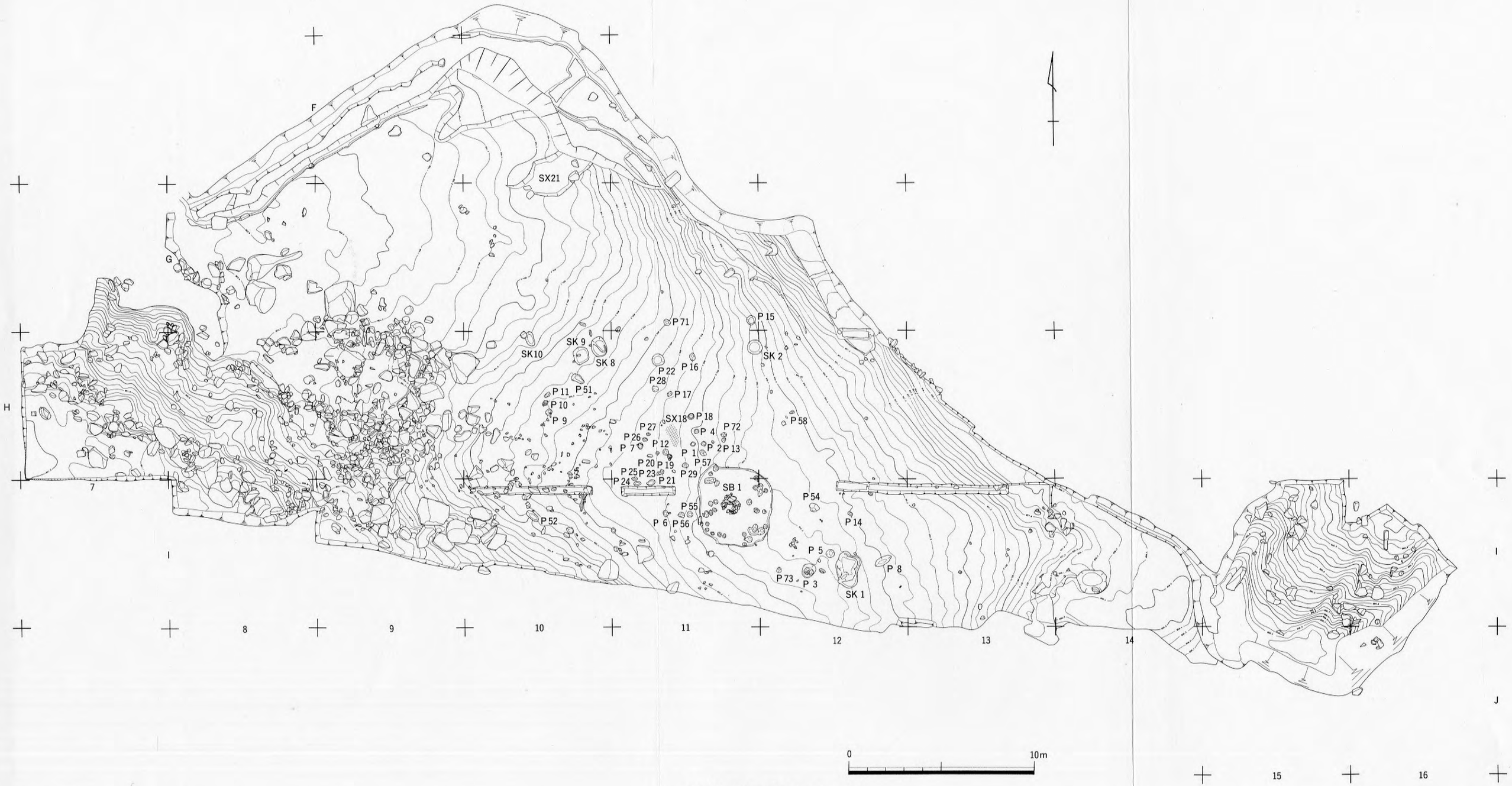
I列北壁セクション



12列西壁セクション

I　灰黄褐色土（10YR5/2）表土・旧水田耕作土
II a　灰褐色土（10YR4/2）砂質・VI期の土器出土
II a′　II aに砂が多く混じる
II b　灰白色土（5Y7/2）砂礫層
II c　黒褐色土（10YR3/1）砂質・V期の土器出土
II c′　暗褐色土（10YR3/3）II cに砂が混じる
II d　明黄褐色土（2.5Y7/6）砂礫層・礫を多く含む
II d′　明黄褐色土（2.5Y6/6）サンドイッチ状に黒褐色土
II e　黒褐色土（7.5YR3/2）砂質・小礫を含む
III　黒色土（10YR2/1）砂質・IV期の遺物包含層
III′　IIIの黒色土にサンドイッチ状の砂層
IV a　灰褐色土（7.5YR4/2）砂質・角礫を含む
IV a′　IV aの土に黒色土が混じる
IV b　褐色土（10YR4/4）砂質・II期の土器出土
V　明黄褐色土（10YR7/6）砂質・地山

第6図　土層断面図（西区）



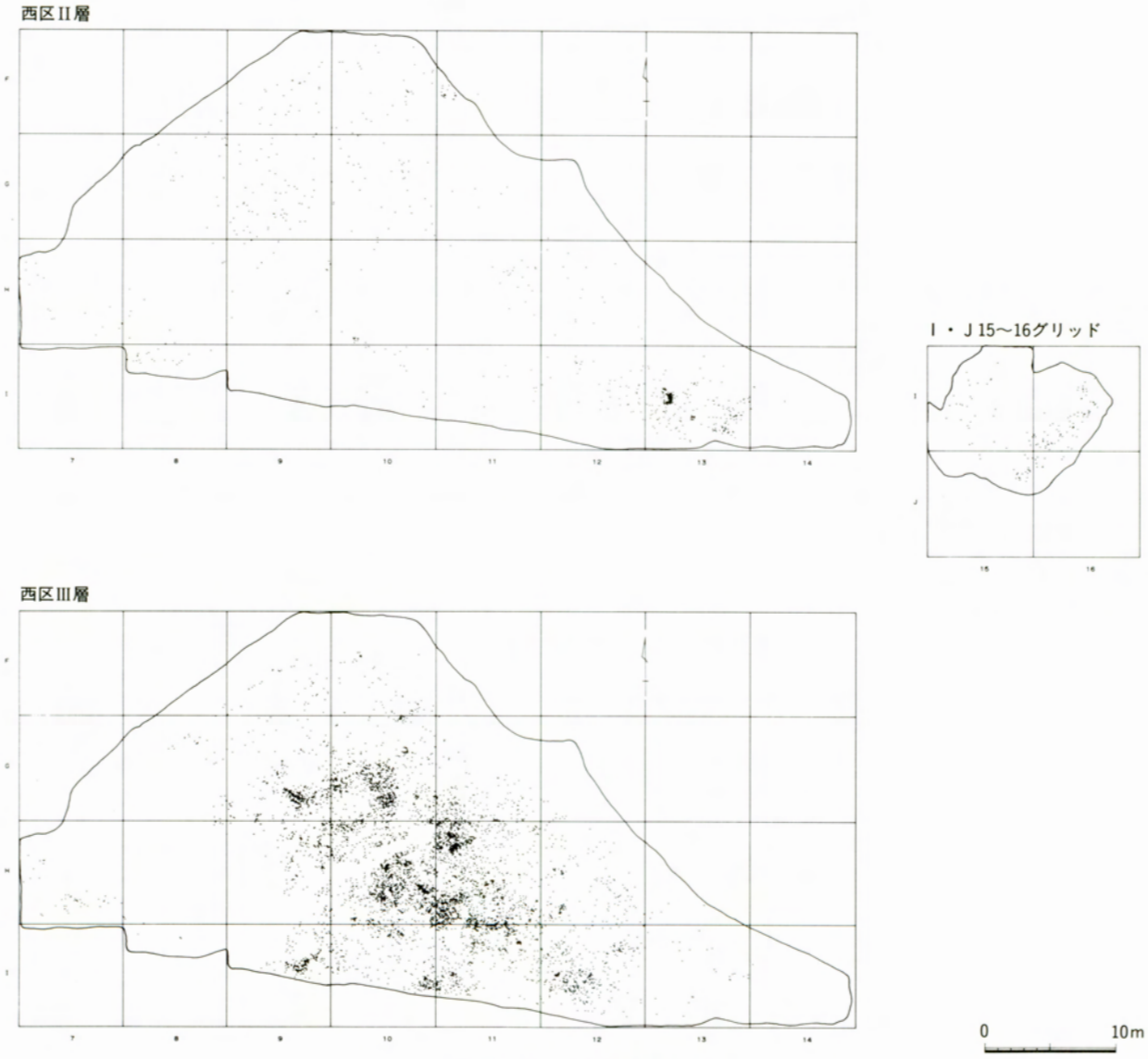
0 10m

第７図　遺構配置図（西区）

第２節　遺構と出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物の総数は、約32,000点である。西区からは、約22,000点の遺物が出土したが、その大部分は縄文時代のものである。西区の遺物出土状況を第８図に示した。II層からの出土遺物数は約2,000点で、前述したように不安定な層のため遺構の検出は困難であった。大半の遺物はIII層出土で、調査区の中央10～11区周辺の緩斜面上に、遺構および遺物の集中が見られた。

西区で確認した遺構は、住居跡（SB）１軒・不明遺構（SX）19基・土坑（SK）５基・ピット（P）39基である（第７図）。検出時に判断不明の遺構についてはすべてSXで処理し、その後所属時期や性格等について検討を加えた。焼土跡・遺物集中出土地点・水場遺構などがSXに含まれる。遺構番号はすべて検出順で、西区と東区が混在している。欠番も多く煩雑であるが、遺物の混乱等を避けるため並べ変えは行っていない。それぞれの地区および遺構ごとに一覧表を作成した。



第８図　西区の遺物出土状況

１　竪穴住居跡

SB１（第９～11図、図版２・３）

SB１はＩ11区の北東部に位置し、その範囲は部分的にH11・H12・Ｉ12区に及んでいる。大小の礫混じりの厚い砂礫の堆積層（IIｄ層）を掘り下げたところで、まず石囲炉の一部が確認された。覆土の堆積は浅く、遺物のほとんどは床面に近い部分から出土している。覆土は、周辺のIII層の土と同様の砂質の黒色土（10YR2/1）で、細かい炭化物や炭化材の破片を非常に多く含んでいた。石囲炉の北側の床面直上で検出した炭化材の^{14}C年代測定値は、3,860±120yrBP であった（第５章）。

住居の規模は、長軸4.4m、短軸4.1mで隅丸方形を呈する。第IV層を掘り込んであったが、確認された壁の深さは５～15cmと浅い。中央に方形に組まれた石囲炉がある。規模は100×95cmで、周辺の石のほとんどが被熱により赤く変色し、割れて散乱していた。石囲いは二段構造で、炉の内側の大きさは42×32×23cmである。炉内より炭化したクルミの殻（10ｇ）と縄文土器片が出土した。

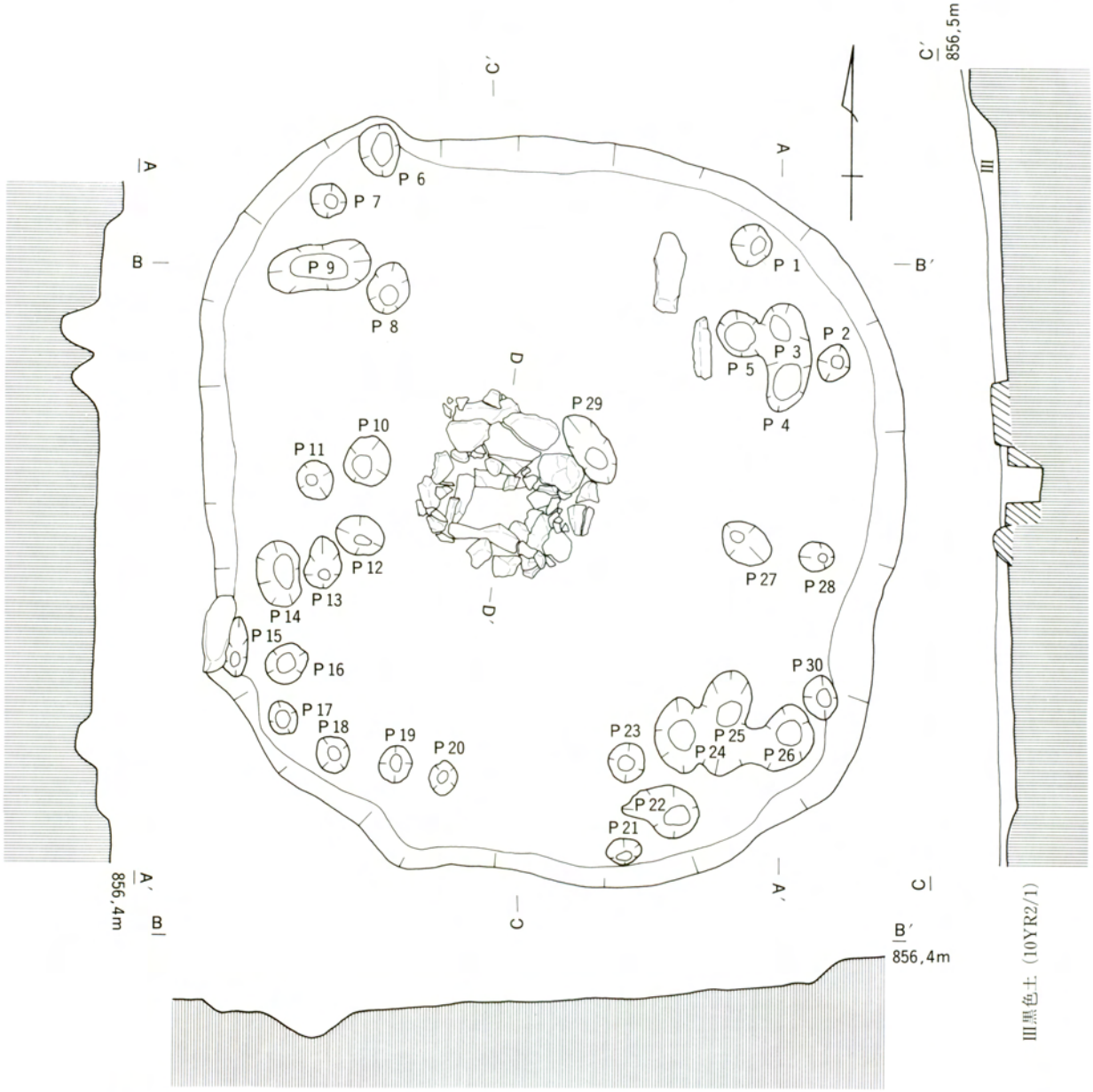
ピットはＰ１からＰ30まで確認したが、すべてが本住居跡に伴うものであるとは判断できない。その位置や埋土および深さ等から、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ18・Ｐ22を主柱穴と推定した。石囲炉の形状や柱穴の位置および周辺の遺構の配置等から、入口は北側と推定される。なお、中軸線はＮ－７°－Ｅであった。

出土遺物は、縄文土器片257点、石器類70点である。縄文土器片はほとんどが小破片で、住居の時期を特定する上で重要な有文土器の出土は少なかった。おもな出土石器は、石鏃６点、石錐３点、削器１点、両極石器２点、打製石斧３点、横刃形石器１点、磨石・凹石類10点などである。住居跡の西半分、特に炉の北西部分（Ｐ８周辺）に遺物の集中が見られた（第11図）。

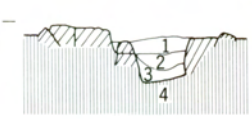
SB１の出土遺物（第10～14図、図版６・７）

第10図の１～８は炉内より出土した土器片である。炭化したクルミの殻を含む黒色土が下層の灰褐色土に変わる境目あたりで出土したもので、二次焼成を受けている。１～７は隆線の両脇がナデにより断面三角形に仕上げられた微隆起線よって文様を描く土器の胴部破片である。８はやや外反する口縁の土器である。地文は縄文で、口縁部は無文である。

第12図の９は包含層出土の破片と接合して部分復元された土器の口縁の一部である（第33図―214）。口縁端部にハの字状の刻みを巡らせ、波頂部を弧状沈線で仕上げている。外反する器形で、波頂部から胴部にかけて刻みのある隆帯が２条垂下している。10は刻みを有する低い隆帯で文様を描く土器の口縁である。波状口縁の波頂部に刻み付きの装飾がみられる。11はやや外反する土器口縁部で、無文帯の下に原体不明の圧痕がみられる。12は口縁部に沈線文のある土器である。13～15は沈線文の土器の胴部破片である。16は沈線間に RL の縄文を充填する土器の胴部破片である。包含層出土で復元された口縁部が内屈する鉢と同一個体と考えられる（第33図―218）。17～23は微隆起線文の土器の胴部破片である。21は橋状把手を持つ大型の壺状土器の一部である。Ｉ９区III層でまとまって出土した破片と接合し復元できた土器である（第31図―204）。24～27は無文部分の胴部破片である。28・29は丸い刻みのある隆帯で縁取られた土器の口縁部である。30・31は無文土器の口縁部である。32～40は地文に縄文の施された土器の胴部破片である。縄文は33～37が RL、32・38～40が LR である。全体に器厚５㎜前後の薄手のものが多い。41はＰ６出土の胴部破片、42･43はＰ26出土の無文の口縁部と RL

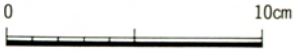


第９図　SB１



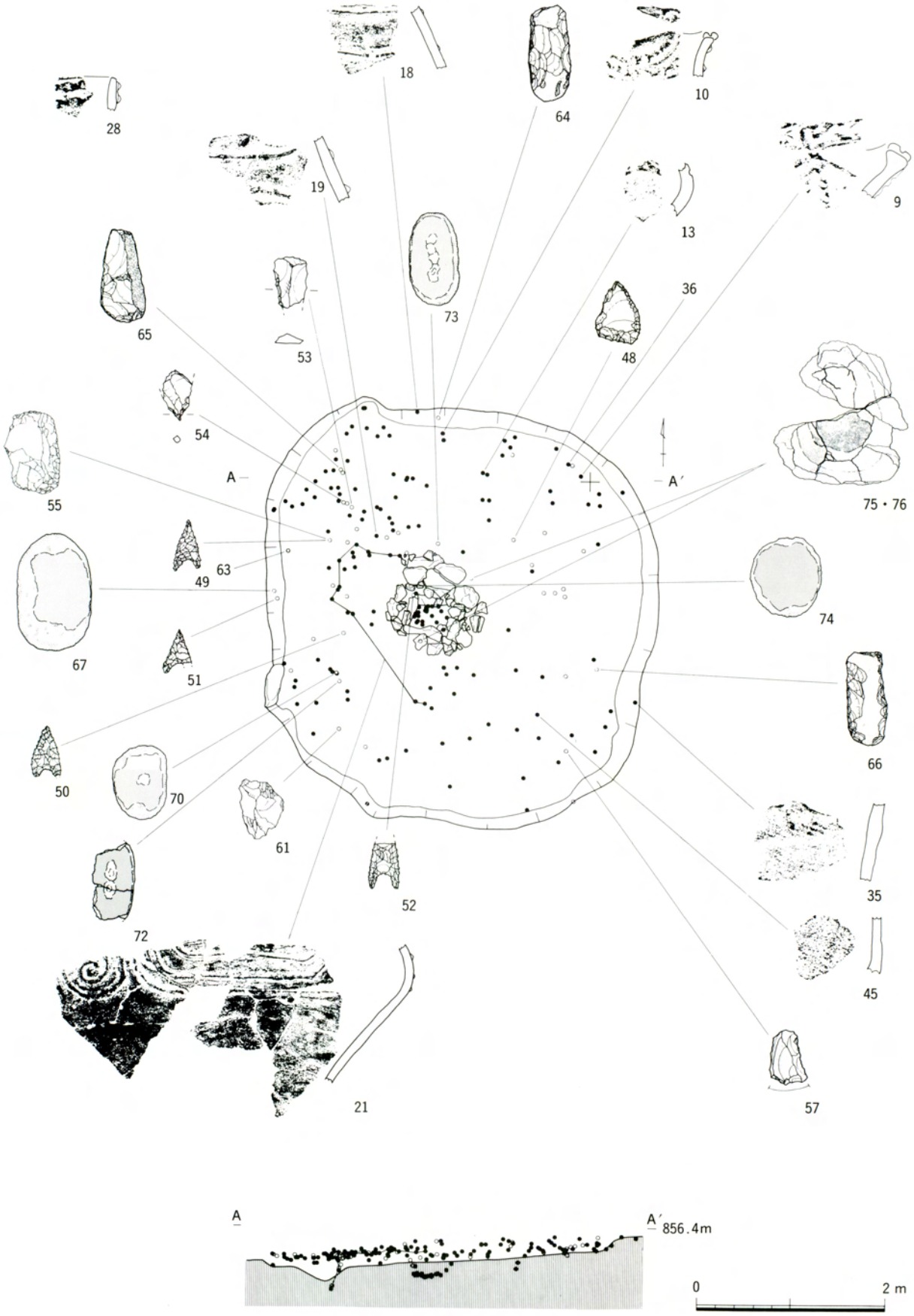
SB １炉土層説明
１黒褐色土（7.5YR3/2）炭化物を含む
２黒色土（7.5YR2/1）砂質・炭化クルミ出土
３灰褐色土（7.5YR4/2）砂質・土器片出土
４にぶい黄褐色土（10YR5/4）

第10図　炉内出土土器（SB１）

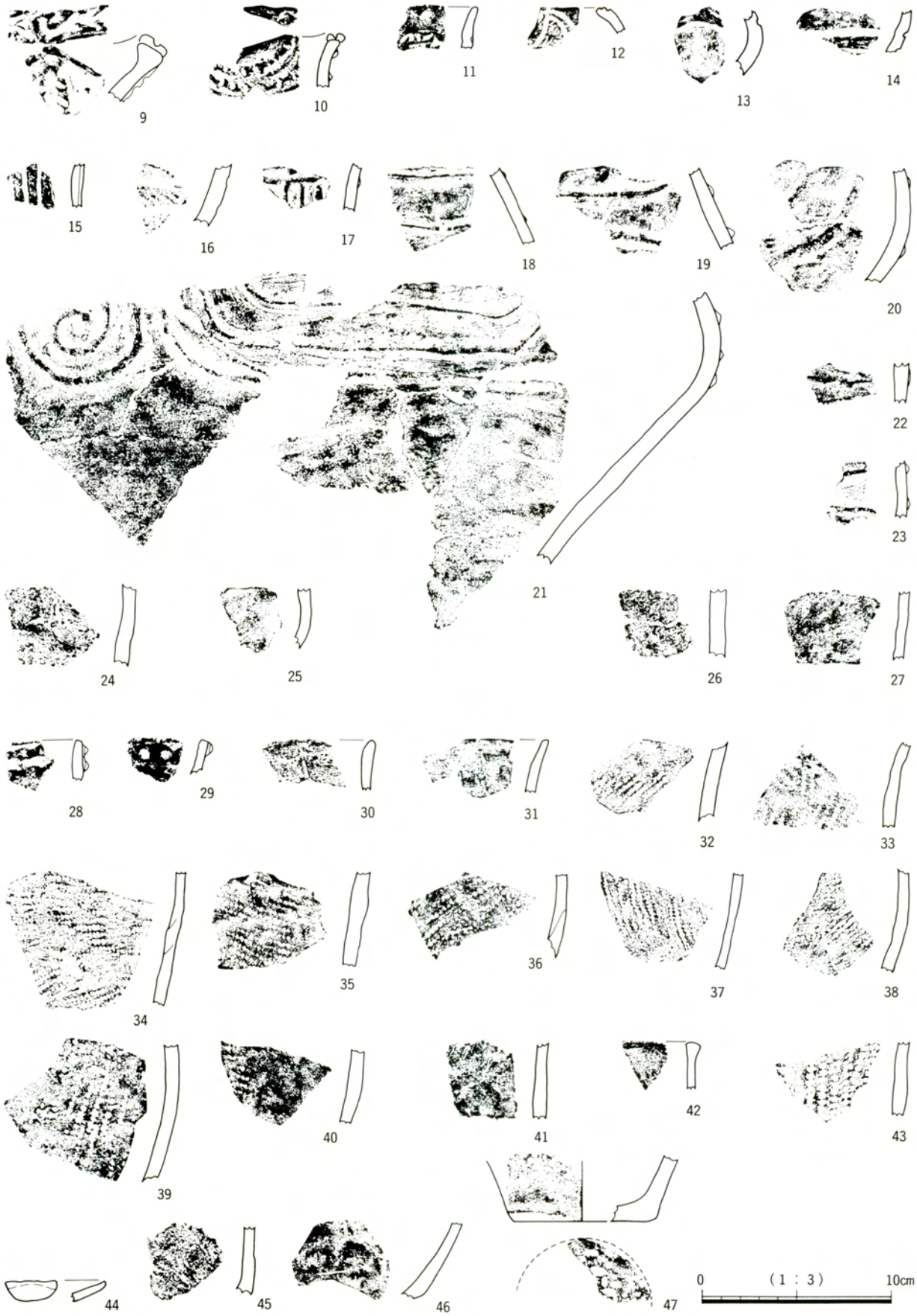


第２表　SBIピット一覧表

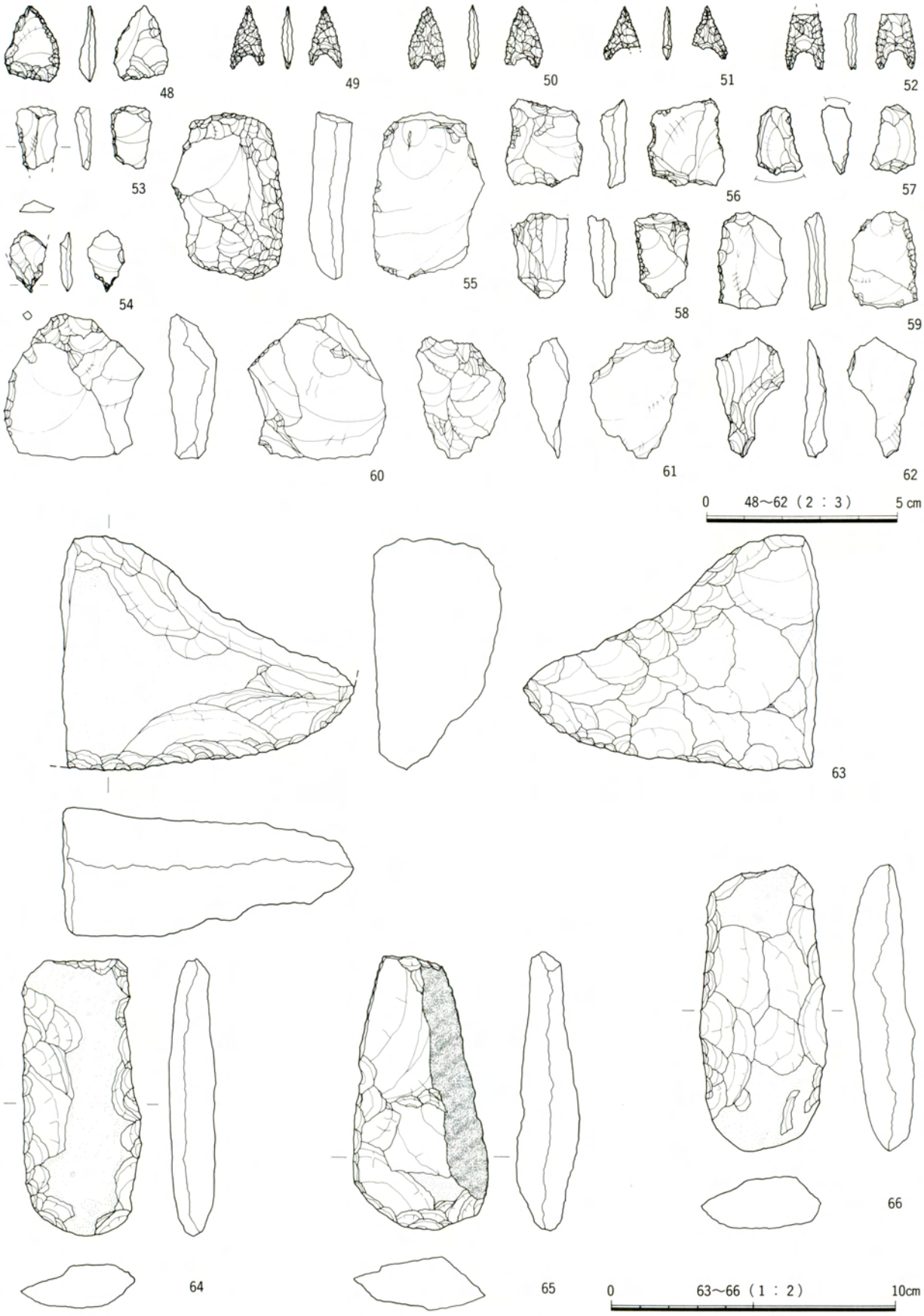
No.	PNo.	長径×短径×深さ	覆　土	遺物
1	P1	24×18×37	①黒(炭混じり)②黒褐色	
2	P2	22×18×18	①黒褐色(炭混じり)②黒褐色	縄文土器片2
3	P3	30×24×27	①黒褐色(炭混じり)②黒褐色	
4	P4	34×24×21	①黒褐色(炭混じり)	縄文土器片2
5	P5	30×24×10	①黒褐色	
6	P6	32×24×31	①灰黄褐色(炭混じり)	縄文土器片3
7	P7	21×20×24	①黒褐色②灰黄褐色	縄文土器片3
8	P8	30×24×27	①黒褐色(炭)②灰黄褐色(炭)	
9	P9	60×30×20	①黒褐色(炭混じり)②灰黄褐色	
10	P10	30×26×32	①黒褐色②灰黄褐色	
11	P11	27×20×28	①灰黄褐色	
12	P12	30×24×16	①黒褐色②にぶい黄褐色	
13	P13	30×20×24	①黒褐色	
14	P14	38×26×22	①にぶい黄褐色(炭多い)	磨石2
15	P15	32×12×13	①灰黄褐色	
16	P16	22×22×13	①黒褐色	
17	P17	20×18×9	①黒褐色	
18	P18	22×20×25	①黒褐色(炭混じり)	
19	P19	24×20×11	①黒褐色	縄文土器片1
20	P20	20×16×9	①黒褐色	
21	P21	24×18×12	①黒褐色②にぶい黄褐色	
22	P22	42×34×29	①黒褐色②灰黄褐色	磨製石斧片1
23	P23	24×22×10	①黒褐色	縄文土器片1
24	P24	43×26×16	①黒褐色(炭混じり)	縄文土器片3
25	P25	60×28×17	①灰黄褐色	縄文土器片1
26	P26	40×32×16	①黒褐色	縄文土器片1
27	P27	32×22×8	①黒褐色	
28	P28	20×18×18	①黒褐色	
29	P29	43×22×36	①黒褐色(炭混じり)	
30	P30	24×20×13	①黒褐色	



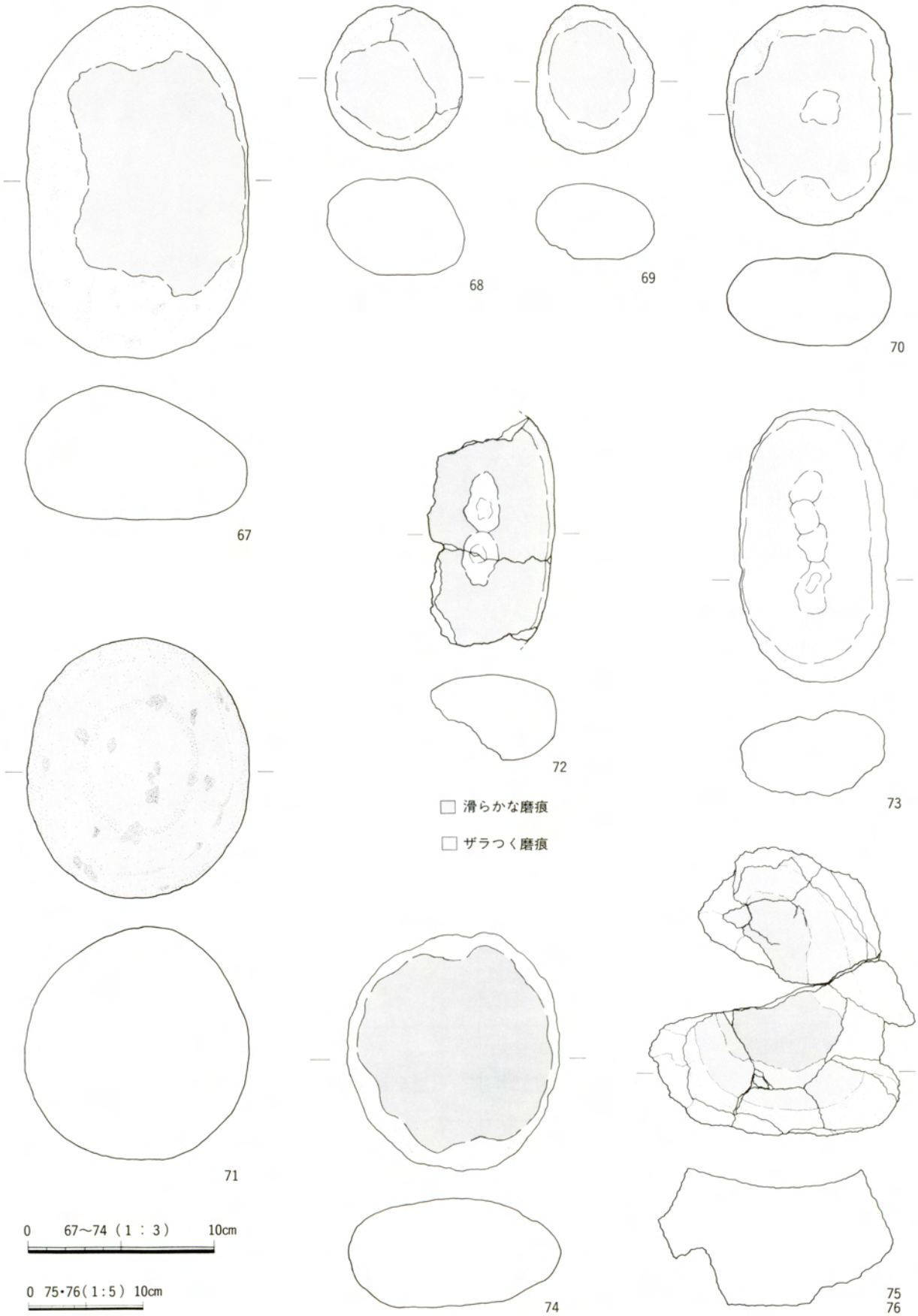
第11図　SB１遺物出土状況



第12図　SB１出土土器



第13図　SB１出土石器(1)



第14図　SB１出土石器(2)

の縄文が施された胴部破片である。44は無文のミニチュア土器である。45～47は底部付近および底部の破片である。47は地文に RL の縄文を施す土器で、底部の網代圧痕は磨耗している。

第13図の48は下呂石製の円基鏃である。49・50は下呂石製の凹基無茎鏃で、側縁は鋸歯状である。51は片脚を欠く凹基無茎鏃で、石材は黒曜石である。52の石鏃は炉石を除去した際にその隙間から出土した。下呂石製で尖端を欠損している。側縁は鋸歯状で、両脚は長めである。53はチャート製の石錐で、尖端の錐部が欠損している。54の石錐は錐部が著しく短いタイプのものである。頭部は素材の剥片の形状を残していると考えられるが、欠損している。55は灰色チャート製の削器である。素材は肉厚な縦長剥片で、刃部は片面加工である。56はチャート製の両極石器で、辺縁部の剥離痕は２対である。57の両極石器は下呂石製で、クサビ形を呈しツブレを有する辺縁部は交差する位置関係にある。58～60は二次加工のある剥片である。石材はすべてチャートで、縦長剥片の側縁に連続剥離により刃部が形成されている。61・62は使用痕のある剥片と考えられるもので、側縁部に微細な剥離痕が観察される。石材は61が下呂石、62はチャートである。63は凝灰岩製の横刃形石器である。西区Ⅲ層出土の他の同製品に比べると大型で厚手で、用途が異なることが考えられる。原石となった偏平な川原石の自然面の一部を両面に残している。64～66は打製石斧である。すべて10cm程の小型の製品である。64・66は凝灰岩製の短冊形で、刃部の一部は川原石の自然面をそのまま利用している。65は緑色片岩製の撥形で、表の右半面は節理面である。

第14図の67～74は磨石･凹石類である。67は大型の磨石で、表裏両面ともよく使用されている。68･69は表裏両面の使用痕が顕著な磨石である。69は被熱により変色している。70は表裏に浅い凹痕のある凹石である。磨石としてもよく利用された形跡が残る。71は断面が丸い大型の磨石である。使い込まれた結果丸くなった様相を示しているが、浅い凹痕も数ヵ所認められる。72は表面にやや深めの凹痕が２ヵ所認められる。滑らかな磨痕を残しているが、被熱による変色と破損が顕著である。73は石囲炉のすぐ近く（北側）から出土した凹石兼磨石である。表裏に連続した凹痕があり、側面にも浅い凹痕が数ヵ所認められる。被熱により変色し、裏面の一部が欠損している。74は石囲炉の内側から出土した磨石である。表面には非常に滑らかな磨跡が残り、裏面はややザラつく磨痕を残している。SB１出土の磨石・凹石類の石材はすべて凝灰岩である。75・76は石皿の接合資料である。炉石の一部として二次利用された形跡があり、被熱による変色と破損が顕著である。厚みのある凝灰岩製で、非常に滑らかな磨面を残している。

２　Ⅲ層の不明遺構（SX）

西区の不明遺構19基のうち SX２を除く18基は、Ⅲ層を掘削中に検出したものである。ほとんどがSB１周辺に位置し、SB１と同時期と考えられるものが多い（第３表）。

焼土跡群（第15図、図版３）

SB１周辺で14基の焼土跡を検出した（SX１・SX４～14・SX16・SX18）。すべてが、第Ⅲ層中で確認されたが、SX１はやや上層で、SX18は下層での検出であった。いずれも明赤褐色の焼土の堆積は２cm前後と浅いが、遺物が絡んでいるものが多かった。

第３表　不明遺構一覧表（西区）

西区No.	No.	遺構名	地　区	内　訳	出土遺物
1	1	SX 1	H10Ⅲ	焼土跡①	
2	2	SX 2	I 13Ⅱ	縄文土器集中出土	縄文土器（復元）
—	欠番	SX 3			
3	3	SX 4	I 12Ⅲ	焼土跡②	縄文土器片24　チャート剥片１
4	4	SX 5	I 12Ⅲ	焼土跡③	
5	5	SX 6	I 12Ⅲ	焼土跡④	縄文土器片26
6	6	SX 7	H11Ⅲ	焼土跡⑤	縄文土器片20　打製石斧１
7	7	SX 8	H10～11Ⅲ	焼土跡⑥	縄文土器片29　石鏃等２
8	8	SX 9	H10Ⅲ	焼土跡⑦	
9	9	SX10	H10Ⅲ	焼土跡⑧	
10	10	SX11	H11Ⅲ	焼土跡⑨	縄文土器片９　石鏃等４
11	11	SX12	H11Ⅲ	焼土跡⑩	縄文土器片２
12	12	SX13	H11Ⅲ	焼土跡⑪	縄文土器片26　チャート剥片１　炭化クルミ片
13	13	SX14	H11Ⅲ	焼土跡⑫	縄文土器片１
14	14	SX15	I 11Ⅲ	玉髄剥片集中出土	縄文土器片５　石鏃１　玉髄剥片等36（168ｇ）
15	15	SX16	H10～11Ⅲ	焼土跡⑬	縄文土器片14　炭化クルミ片
16	16	SX17	G12Ⅲ	磨製石斧集中出土	磨製石斧３　打製石斧１
17	17	SX18	H11Ⅲ	焼土跡⑭	
—	欠番	SX19			
—	欠番	SX20			
18	18	SX21	F10Ⅲ	縄文後期水場	縄文土器片46　磨石等３　植物種子多数
—	東区	SX22			
19	20	SX23	SB 1	土器出土	縄文土器片12　チャート剥片１
	東区	SX24			
—	欠番	SX25			
—	東区	SX26			

SX 1

H10区のⅡｄ層直下で検出した。70×55cmの大きさで、楕円形である。周辺からは、Ⅳ期第５群６類の土器が出土している。

SX 4

I 12区の第Ⅲ層中で検出した。70×70cmの大きさで、ほぼ円形である。焼土内より縄文土器片24点とチャート剥片１点が出土した。

SX 5

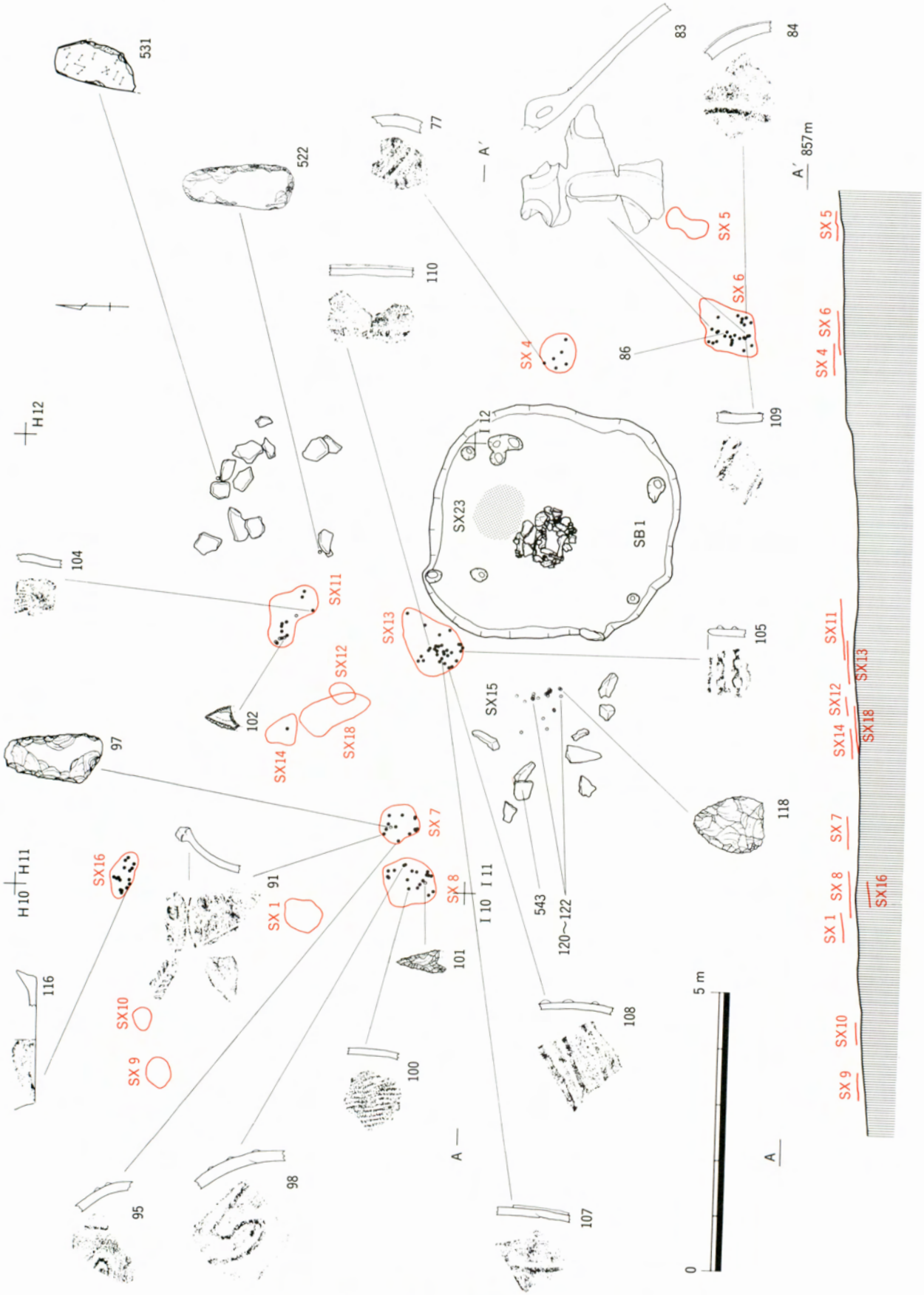
I 12区の第Ⅲ層中で検出した。80×40cmの大きさで、不定形である。焼土内に遺物はなかったが、緩斜面にそって SX 4 と同一面と考えられる。

SX 6

I 12区の第Ⅲ層中で検出した。130×90cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片26点が出土した。

SX 7

H11区のⅢ層中で検出した。70×70cmの大きさで、ほぼ円形である。焼土内より二次焼成を受けた縄文土器片20点と打製石斧1点が出土した。



第15図　SB１周辺図（焼土跡群，SX15，SX23）

SX８

H10～11区のIII層中で検出した。90×80cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片29点と石鏃およびチャート剥片が各１点出土した。

SX９

H10区のIII層中で検出した。55×45cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

SX10

H10区のIII層中で検出した。40×35cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

SX11

H11区のIII層中で検出した。120×60cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片９点と石器類が４点出土した。

SX12

H11区のIII層中で検出した。40×35cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

SX13

H11区からＩ11区のIII層中で検出した。130×90cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片26点とチャート剥片１点および炭化したクルミの殻が出土した。

SX14

H11区のIII層中で検出した。60×50cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片１点が出土した。

SX16

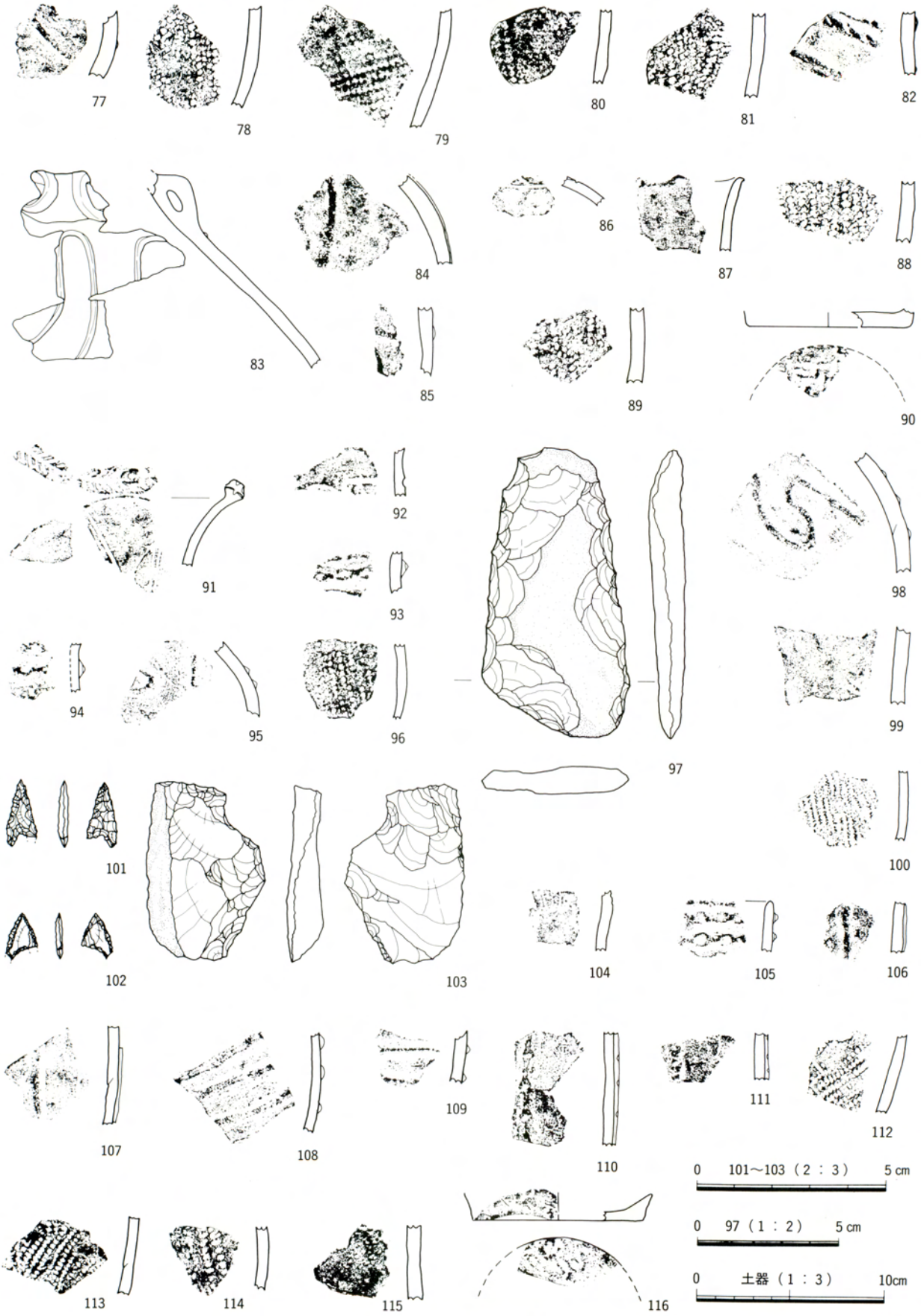
H10～11区のIII層中で検出した。85×45cmの大きさで、楕円形である。焼土内より縄文土器片14点と炭化したクルミの殻が出土した。

SX18

H11区のIII層中、SX12の下層で検出した。130×60cmの大きさで、不定形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

焼土跡群の出土遺物（第16図、図版７・８）

第16図の77～81はSX４の出土遺物である。77は微隆起線文の土器の胴部破片である。78～81は地文にRLの縄文が施された土器の胴部破片である。いずれも薄手で二次焼成を受けている。82～90はSX６から出土した。82は刻み入りの隆帯で施文された土器の胴部破片である。83～85は微隆起線で施文された橋状把手を伴う壺状土器の一部である。86は口縁部の2本の沈線間に右下がりの刻みを入れた鉢の一部で、包含層出土遺物から復元できた土器である（第33図―219）。87は無文の口縁部である。88・89はRLの縄文の施された土器の胴部破片である。90は底部破片である。いずれも二次焼成を受けている。91～97はSX７から出土した。91は口縁端部をハの字状に短沈線で刻む土器である。刺突のある小突起を有し、外反する頸部には縦方向の沈線がみられる。図の左側の破片はP73から出土した同一



第16図　焼土跡群出土遺物

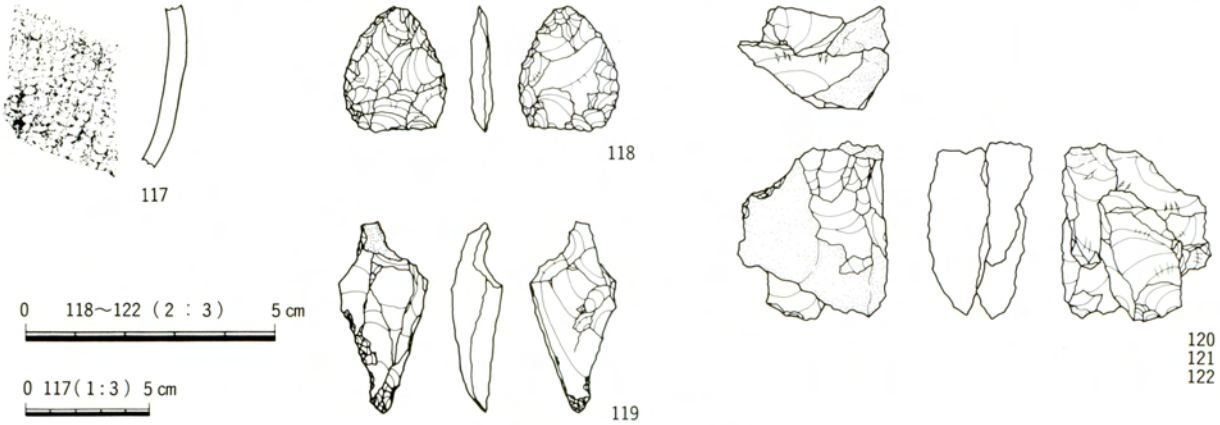
破片である。92は沈線文の土器である。93・94は丸い刻みのある隆帯が横走する土器である。95は微隆起線文の土器の胴部破片である。96は RL の縄文が地文に施された土器である。97は凝灰岩製の打製石斧である。撥形で薄手であるが、被熱の形跡はない。98～101は SX８から出土した。98は微隆起線文の壺状土器の胴部である。SX６出土の83～85と同一個体と考えられる。99は無文部分の胴部破片である。100は地文に RL の縄文が施された土器の胴部で、包含層出土で復元された深鉢と同一個体と考えられる（第34図―226）。101は下呂石製の石鏃である。側縁は鋸歯状で、一方の脚部を欠損している。被熱の形跡はない。102～104は SX11から出土した。102は灰白色のチャート製石鏃である。薄い板状の剥片の端部に丹念に調整を加えた凹基鏃である。103の石材はチャートで、側縁部に剥離痕のある剥片である。104は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片で、二次焼成を受けている。105～113は SX13から出土した。105は丸い刻みのある隆帯が横に２本巡る土器口縁部である。106～109は微隆起線文を持つ薄手の土器の胴部破片である。110～111は縦の隆帯に刻みを有する胴部破片である。112・113は地文に LR の縄文を施した土器である。ほとんどの土器が二次焼成を受けている。114～115は SX16から出土した。114･115は地文に縄文を施す土器の胴部破片である。116は土器の底部である。いずれも二次焼成を受けている。

玉髄剥片集中出土地点（SX15）（第15図）

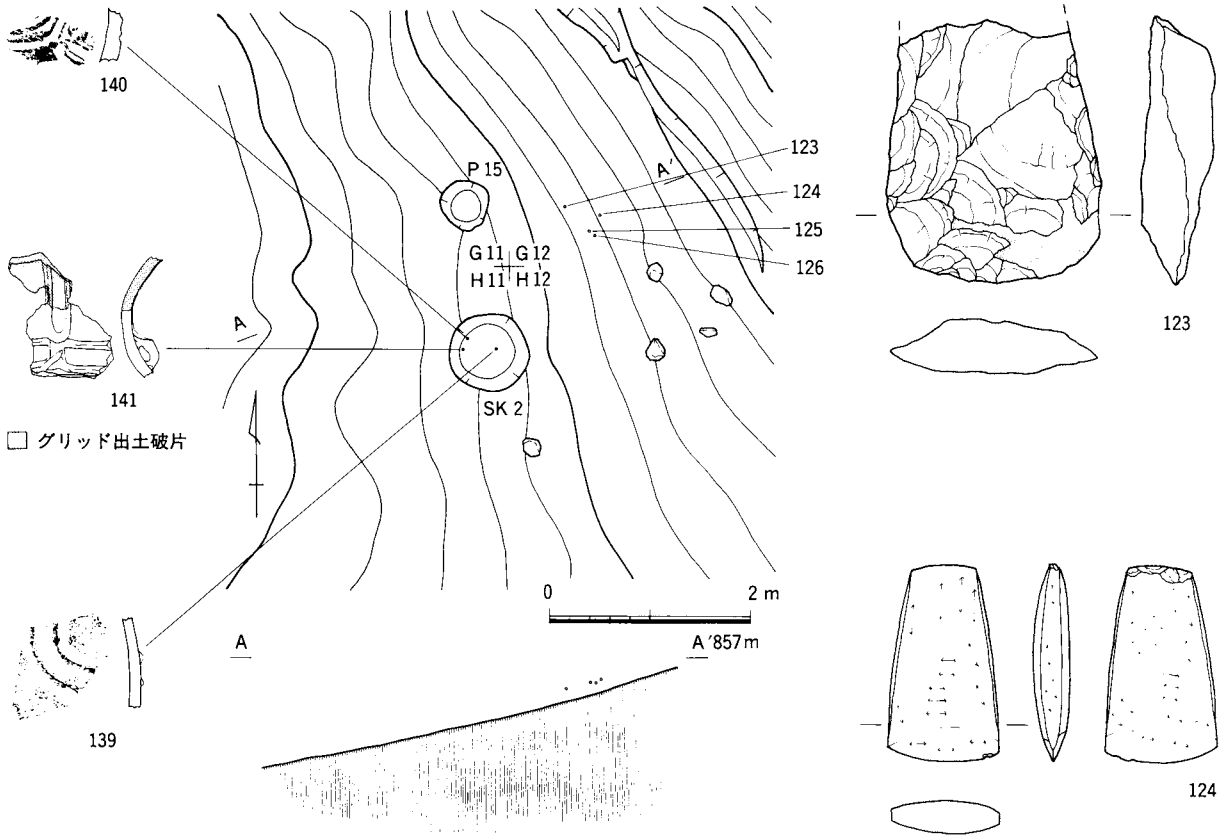
SB１の約１m西側（Ｉ11区Ⅲ層）で、玉髄の剥片が80×80cmの範囲で集中して出土した。周辺には偏平な石の配置がみられ、作業台を想定させるような敲打痕のある石皿（第46図―543）が含まれていた。同様の偏平な石の配置は SB１の約３m北側でもみられ、石に絡んで磨製石斧と打製石斧が出土している（第15図）。SX15の出土遺物は、縄文土器片５点、石鏃１点、石錐１点、玉髄剥片32点、チャート剥片３点である。遺跡全体でみると、玉髄製の石器や玉髄剥片の出土は非常に少なく、玉髄剥片の大半はこの SX15からの出土である。なお、SX15より１m程北西の地点（Ｉ11区Ⅲ層）で玉髄製の石錐が出土しているが、SX15の玉髄とは質が異なるようである（第41図―488）。

SX15出土の遺物（第17図、図版６・８）

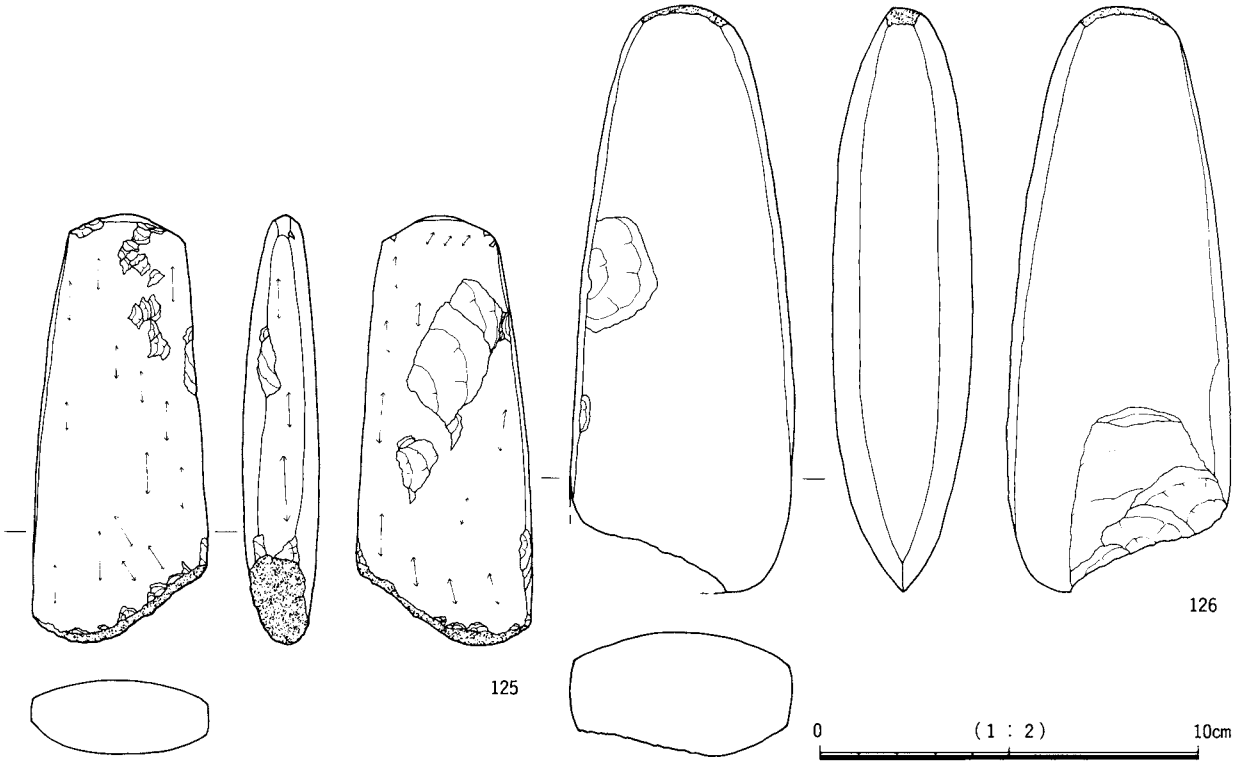
第17図の117は地文に RL の縄文を施す土器の胴部破片である。118は下呂石製の平基鏃である。薄手で尖端が丸いので、削器等に転用された可能性も考えられる。119は玉髄製の石錐である。素材剥片



第17図　SX15出土遺物



第18図　SX17周辺図



第19図　SX17出土石器

の形状をそのまま残し、側縁および尖端に粗い調整が加えられている。120～122は玉髄剥片の接合資料である。母岩は径４cm程度の小礫である。まとまって出土した多くの剥片と同様に、定型化した剥片取りを目指したような意図的な剥離の跡は見出せなかった。

磨製石斧集中出土地点（SX17）（第18図、図版３）

Ｇ12区Ⅲ層を掘削中に、斜面に沿って磨製石斧３本と打製石斧１本が同時に出土した。ピット等の遺構を伴わず、斜面上に放置されたか或いは意図的に置かれたものと考えられる。磨製石斧の大きい方２本は基部を斜面の下方に向けた形でＶ字状に重なり、小型の磨製石斧と基部を欠損した打製石斧は共にその刃先を北西方向に向けていた。斜面の下方約1.5m南西にＳＫ２が位置し、Ⅳ期の土器片が出土している。

SX17出土の遺物（第19図、図版８）

第19図の123は凝灰岩製の打製石斧片である。表裏に原石の自然面を残しており、偏平な川原石を原石としたと考えられる。124は緑灰色の蛇紋岩製の磨製石斧である。長さは52㎜で刃こぼれが観察される。125は薄緑色の蛇紋岩製の磨製石斧である。現長は113㎜で刃部は欠損している。欠損部分に著しい敲打痕があり、敲石として転用されたと推定される。126は薄緑色の凝灰岩製の磨製石斧である。現長は153㎜で刃部を大きく欠いている。

第20図　SX21周辺図

水場遺構（SX21）（第20・21図、図版４）

Ｇ10区北端でⅢ層を掘削中に微隆起線文土器がややまとまって出土した。その下層の砂の層よりクルミが出土したので貯蔵穴を想定して、プランの検出を図った。周辺は掘り下げの進行と降雨により湧水が激しく、湧水点が切断面の上方にもあったので作業は困難を極めた。東側に排水溝を設置し水を迂回させながら精査を進めたが、遺構内の湧水は止むことがなかった。北西部分の黒褐色土中よりトチの果実および種子や数種の植物種子が出土したため、先のクルミ出土地点と合わせて２ヵ所で自然科学分析のためのサンプリングを行った（第５章）。

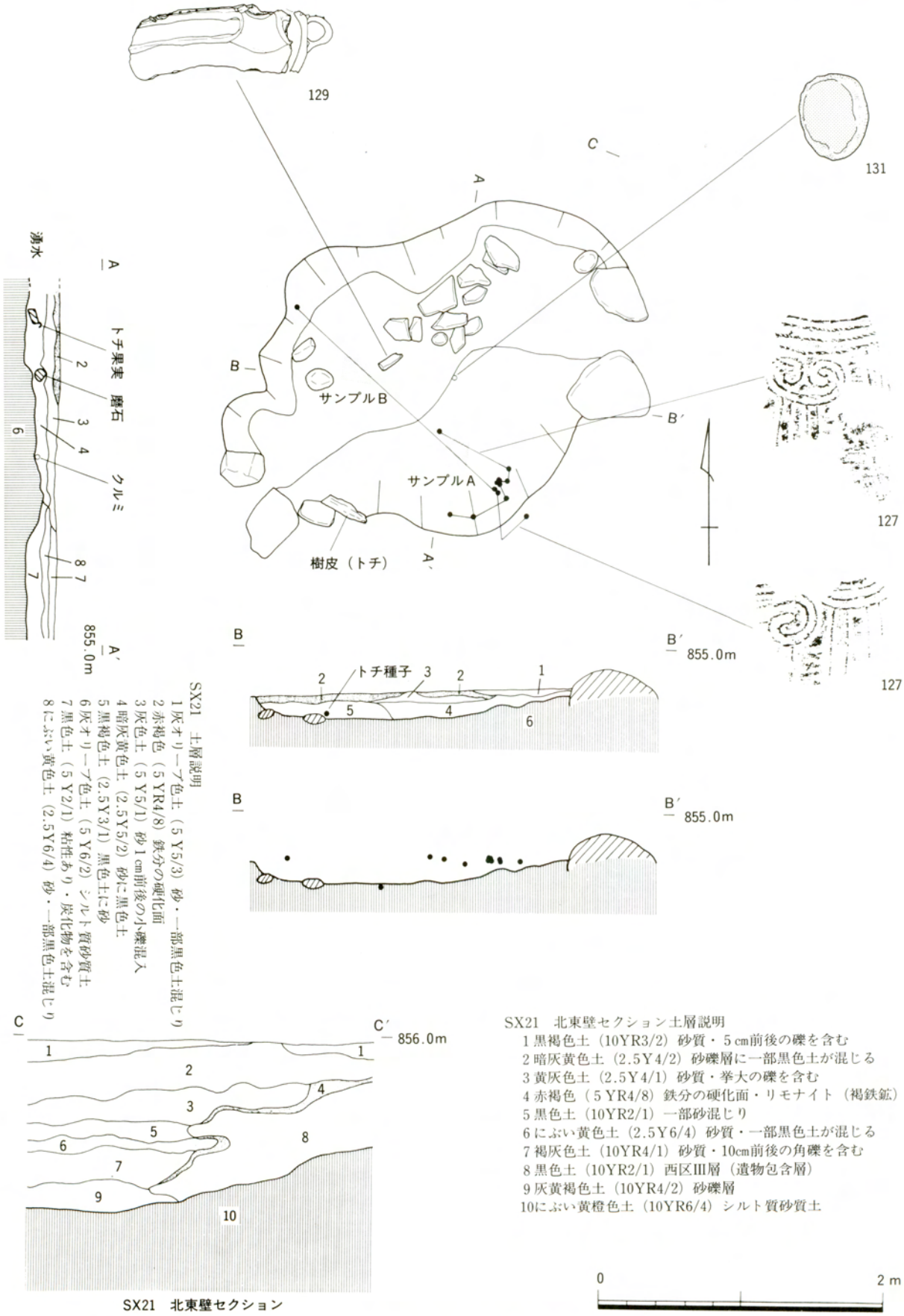
周辺の状況からちょうどこの辺りが旧地形の谷部分だったと考えられる。植物種子を含む土砂の堆積は、320×230×30cmの範囲に限定され、ここがかつての自然流路内の一部だったと推定される。流れは北東方向から南西へと向かっており、両端に２個ずつ配置された石は入口と出口の水量調節を行う水門であったと考えられないこともない。

出土遺物は、縄文土器片46点、チャート剥片１点、磨石２点、木片２点、各種植物種子である。クルミはそのほとんどが南側の暗灰黄色土（砂質）中から出土し、内訳は完形７個（湿重量68ｇ）、嚙跡付１個、２分の１破片40個（湿重量120ｇ）、および砕片（湿重量80ｇ）であった。同じ場所からミツバウツギの種子が多数出土している。検出時は真空パックされたように鮮やかな黄褐色を呈していた。トチの種子は、ほとんどが砕片で個数の推定は困難であるが湿重量で約200ｇ、クリが約10ｇ出土している。トチの果実や幼果が同時に出土し、すぐ際に栃の木があったことも想像される。出口手前の南側砂層の下層で検出された樹皮は分析の結果トチノキの根材であることが判明している。なお、同材の^{14}Ｃ年代測定値は4,010±110yrBP であった。さらに、SX21の右岸に相当するＦ10Ⅲ層出土のケヤキの根について^{14}Ｃ年代測定を行った結果は、3,850±100yrBP でほぼ SB１と同数値を示している（第５章参照）。

SX21は明確な人工構築物を伴う遺構ではないが、周辺の状況や出土遺物等から SB１の時期には水場として利用された場所であったと考えたい。

SX21出土の遺物（第23図、図版６・８・９）

第23図の127は SX21の直上から出土した土器片である。小破片が接合され大きく左右２ブロックを形成しているが、左右の接点は推定である。樽形を呈する大型の深鉢で、同一個体と思われる破片がＧ10区およびＨ10区Ⅲ層より出土している（第35図―267･268）。波状口縁の土器であるが欠損部分が大きくその全貌はつかみ難い。口縁部を横走する３条の微隆起線は途中で文様帯となっている。上の２条がループ状になり、その先端を右回りに内側に巻き込んで止めている。３条目の微隆起線はこのループにぶつかる所で止まっている。口縁部の微隆起線は細かな刻みを有する部分と刻み無しの部分が混在しているようである。左側の破片では、横走する３条の微隆起線の下にループによる文様が存在し、その両端を下から上へ内側に巻き込むような表現がなされている。それぞれループ文様の下端や口縁部の３条目の線から、縦に２条１対で微隆起線が垂下している。器厚は６㎜前後で薄手である。器面は丁寧に磨かれており、色調は黒褐色である。左側の破片の一部には炭化物の付着が見られる。微隆起線の脇には木製等の工具を用いたナデと考えられ調整痕も残っている。128も微隆起線文の土器の胴部破片である。ループ状の曲線文の一部と思われる。129は SX21の内部のやや深い位置から出土



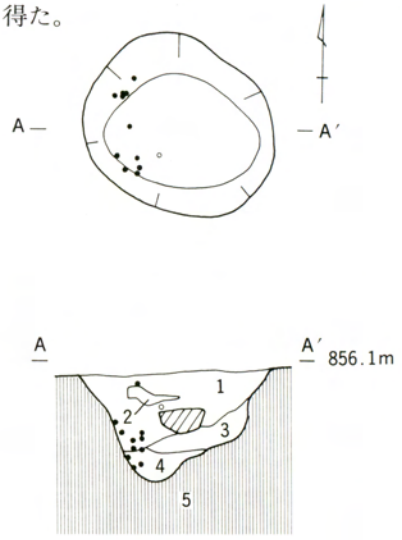
第21図　SX21（水場遺構）

した土器片である。橋状把手を有する大型の鉢形土器の口縁部破片である。推定径45cmで、幅広の把手部分の大きさは３×５×2.5cmである。口縁端部を下にして水没していたため文様部分の一部が失われている。２条の隆線が橋状把手とほぼ同じ幅で横走している。上方の隆線は橋状把手の上方付近で口縁端部の内側へ回り込んで終結している。左側には口縁端部を斜めに跨ぐ２条の隆線が存在する。橋状把手の上方は大きく欠損しているが、隆線文が渦状あるいは同心円状に施されていた形跡を留めている。さらに口縁端部には先の尖った棒状工具によると思われる刺突列が続いており、刺突痕は全部で12ヵ所確認できる。刺突の深さは５㎜程度である。長期間水没していたためか、漆黒の器面は独特の様相を醸し出している[1)]。130は灰色のチャート剥片で、側縁部に不連続な剥離痕がみられる。131・132は凝灰岩製の磨石である。いずれもほぼ全面が使用されているが、表裏両面に顕著にザラつく磨痕を残している。131はSX21内部から、132は上層の鉄分が硬化した（褐鉄鉱）部分から出土した。133は出口付近からトチの種子等と共に出土した板状木片である。材はサワラで、大きさは110×27×７㎜、湿重量5.4ｇである。表面は腐食しており、加工痕は確認できないが、両面とも部分的に炭化している。134は SX21内部の黒褐色土層からトチの種子等と一緒に出土した角棒状木片である。ヒノキ科の材で、大きさは141×10×７㎜、湿重量4.4ｇである。やはり表面が腐食しており、先端の丸い部分が加工や使用に因るものなのかは、はっきりしない。なお、SX21の４ｍ北西のＦ10区Ⅲ層からも一部樹皮を残した34×12×５cmの木片が出土している（第20図、図版４）。樹種同定の結果、この材はカツラであった（第５章参照）。

1）129の土器の表面および内面について岐阜県工芸試験場に依頼して IR スペクトル分析を行ったが、この土器の内外は漆塗膜（春慶塗）とは異なるという分析結果を得た。

縄文土器出土土坑（SX23）（第15・22図）

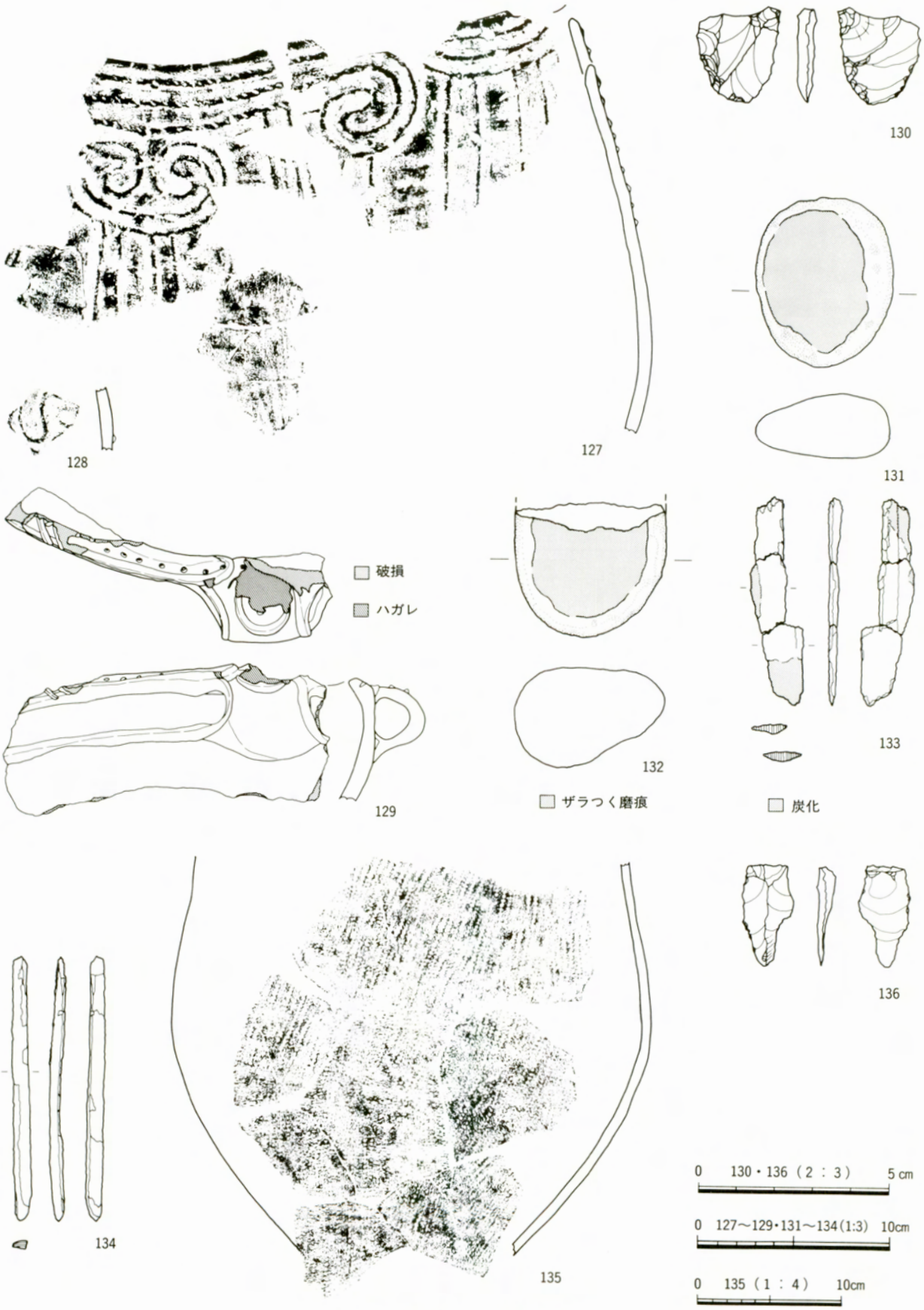
SX23はSB１の精査終了後に、Ｉ列北壁の土層観察のためのトレンチを掘削中に検出した遺構である。SB１の石囲炉に隣接して北東方向に100×80×56cmの土坑が存在したのであるが、土坑の上層部分は堅く住居跡の床面との判別は難しかった。上層部分は埋め戻して踏み固められたような状況の灰褐色土で、SB１の床面と同じⅣａ層の土に、黒色土や下層の明黄褐色土および角礫が混じり込んでいた。下層部分はⅣａ層とⅤ層の土が混在し、掘り進み易い疎らな堆積状況を呈していた。遺物は土坑の西半分に集中し、一つに接合できる縄文土器片12片とチャート剥片１点が出土した。土器片の大半は土坑の中層より深い部分から出土し、その状況から埋められた時点ですでに破片であったと推定される。SB１内より同一個体と考えられる土器片が出土しており同時期の遺構と判断したが、その性格は不明である。遺物として残り難い物の埋納や、地鎮儀礼等を想定したいところであるが、類例の発見を期待したい。



SX23　土層説明
1 灰褐色土（7.5YR4/2）Ⅳａ層の土に黒色土が混じる
2 明黄褐色土（10YR7/6）Ⅴ層と同じ土
3 にぶい黄橙色（10YR6/4）Ⅴ層の土にⅣａ層の土が混じる
4 にぶい黄橙色（10YR5/4）Ⅳａ層の土にⅤ層の土が混じる
5 黄褐色土（10YR7/6）Ⅴ層

0　1 m

第22図　SX23



第23図　SX21・SX23出土遺物

SX23出土の遺物（第23図、図版６・９）

第23図の135はSX23出土の土器片を復元したものである。頸部付近がやや外反ぎみで胴部が丸く膨らむ深鉢の、全体の５分の１程の部分の胴部破片である。現存部分の大きさは最大径34.8cm、高さ28.2cmで、口縁部と底部は欠けている。地文にRLの縄文が施されており、内面調整は粗いナデが観察される。表面はよく使い込まれたものか磨耗が著しく、中央部を中心に広範囲に炭化物が付着している。器厚は６mm前後で薄手である。同一個体と考えられる破片１点がSB１内より出土している（第12図—36）。136は灰色のチャート剥片で、縦長剥片の左側縁部に微細な剥離痕を伴っている。

３　土坑・ピット（SK・P）（第24図、第４表、図版３）

径80cm以上の比較的大きい穴をSK、小さい穴をPとした。P３とP８はSKとすべきであったが、検出時の遺構名をそのまま用いてある。西区のSKおよびPはすべてIII層～IV層の掘削中に検出したもので、IV層表面が遺構検出面になっているものも多い。大きめの穴はSB１北側の斜面上に分布している。縄文土器片等の遺物が出土したものもあるが、用途等その性格は不明である。ピット群はSB１周辺に集中し焼土跡群の分布と共通する部分が多い。特にSX18周辺は、住居跡等の存在を想定させる配列となっているが、プランの検出には至らなかった。それぞれの遺構の概要は表にまとめ、代表的なものを図示した。

SK２

H11区のIII層中で検出した。81×75×27cmの大きさで、ほぼ円形である。磨製石斧集中出土地点（SX17）に近い斜面上に位置している（第18図）。炭化物を多く含む黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片８点が出土した。

SK10

H10区のIV層上面で検出した。90×52×34cmの大きさで、楕円形である。北西部分にやや偏平の石を配している。炭化物を多く含む黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片12点、および下呂石剥片・緑色片岩製の打製石斧片・磨石各１点が出土した。

P３

I12区のIII層中で検出した。82×69×25cmの大きさで、楕円形である。内部に４個の石を配している。炭化物を多く含む黒褐色土中より多くの遺物が出土した。出土遺物は縄文後期前葉の土器片43点、石鏃１点、ヘラ形石器１点、石器剥片18点である。

P５

I12区のIII層中、P３の１m北東で検出した。48×40×43cmの大きさで、楕円形である。炭化物を含む黒色土中より縄文土器片２点、下層の黒褐色土中より凹石１点がそれぞれ出土した。

P７

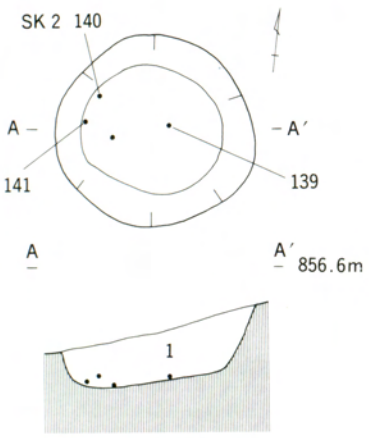
H11区のIII層中で検出した。45×40×28cmの大きさで、ほぼ円形である。黒褐色土中より器厚５mm前後の薄手の縄文土器片17点が出土した。

P９

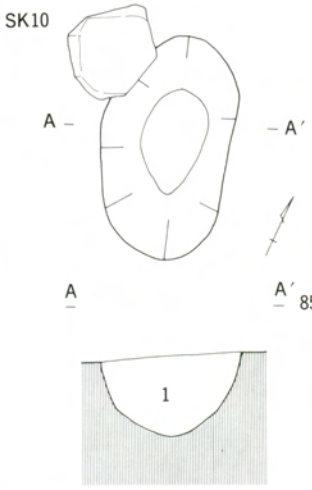
H10区のIV層上面で検出した。40×30×42cmの大きさで、楕円形である。上層の黒褐色土および暗

第４表　土坑・ピット一覧表（西区）

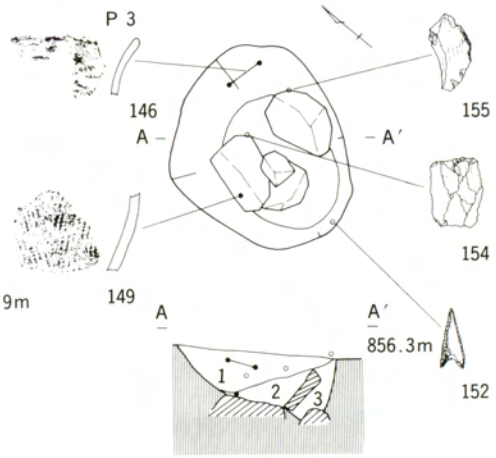
西区No.	No.	遺構名	地区	長径×短径×深さ	遺物	挿図番号
1	1	SK 1	I12III	188×105×30	縄文土器片７　下呂石剥片２	25—137・138
2	2	SK 2	H11III	81×75×27	縄文土器片８	25—139～142
—	欠番	SK 3				
—	東区	SK 4 ～ 7				
3	7	SK 8	H10III	104×84×26		
4	8	SK 9	H10III	100×88×23		
5	9	SK10	H10III	90×52×34	縄文土器片12　打製石斧等３	25—143・144
6	10	P 1	H11III	24×22×28	縄文土器片６	25—145
7	11	P 2	H11III	28×24×30	縄文土器片４　石器剥片２	
8	12	P 3	I12III	82×69×25	縄文土器片43　石器等20	25—146～155
9	13	P 4	H11III	32×25×26	縄文土器片３	
10	14	P 5	I12III	48×40×43	縄文土器片２　磨石類１	25—156・157
11	15	P 6	H11III	36×26×24	縄文土器片１	
12	16	P 7	H11III	45×40×28	縄文土器片17	25—158
13	17	P 8	I12III	100×42×38	縄文土器片３	32—209
14	18	P 9	H10III	40×30×42	縄文土器片29　石器等４	25—159・160
15	19	P10	H10III	32×24×20	縄文土器片13	
16	20	P11	H10III	43×26×27	縄文土器片10　石器剥片１	25—161
17	21	P12	H11III	36×32×12		
18	22	P13	H11III	28×25×18		
19	23	P14	I12III	44×42×49		
20	24	P15	G11III	52×44×25	縄文土器片２　石器剥片１	
21	25	P16	H11III	40×28×55	縄文土器片３	25—162
22	26	P17	H11III	32×20×30		
23	27	P18	H11III	35×30×30	縄文土器片７　下呂石剥片１	25—163
24	28	P19	H11III	24×20×22	石器剥片１	
25	29	P20	H11III	24×16×20	縄文土器片５	
26	30	P21	H11III	44×28×20	縄文土器片４　下呂石剥片１	
27	31	P22	H11III	68×60×30	縄文土器片16	26—164・165
28	32	P23	H11III	52×32×18		
29	33	P24	H11III	40×24×21	黒曜石剥片１	
30	34	P25	H11III	32×20×18	縄文土器片２	
31	35	P26	H11III	28×24×20	縄文土器片２　下呂石剥片１	
32	36	P27	H11III	24×20×20	縄文土器片１	
33	37	P28	H11III	36×28×41	縄文土器片５　石器剥片１	
34	38	P29	H11III	36×25×23		
—	東区	P30～50				
35	60	P51	H10III	72×40×20	縄文土器片３	
36	61	P52	I10III	76×32×22	縄文土器片５	
—	欠番	P53				
37	62	P54	I12III	56×42×24	縄文土器片１　石器２	26—166・167
38	63	P55	I11III	34×30×21	縄文土器片９　石器剥片１	
39	64	P56	I11III	35×30×37	打製石斧２	26—168・169
40	65	P57	H11III	45×30×35		
41	66	P58	H12III	28×25×26	縄文土器片５	
—	欠番	P59				
—	東区	P60～70				
42	78	P71	G11III	40×32×30	縄文土器片３　下呂石剥片１	
43	79	P72	H11III	32×25×32	縄文土器片２	
44	80	P73	I12III	32×28×20	縄文土器片13　石器剥片４	26—170～172
—	東区	FP 1				



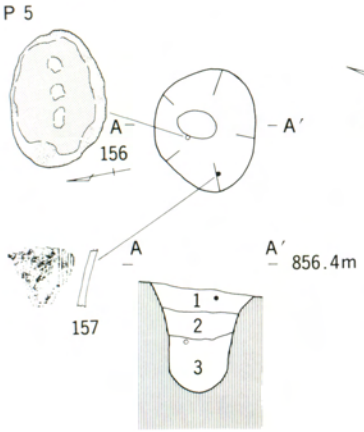
SK 2
1 黒褐色土（10YR3/1）炭化物を含む



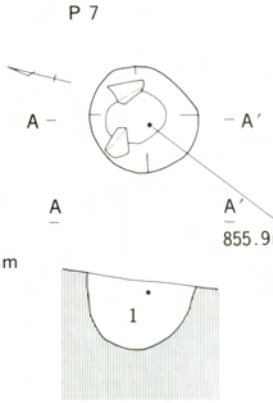
SK10
1 黒褐色土（7.5YR3/1）炭化物が多い



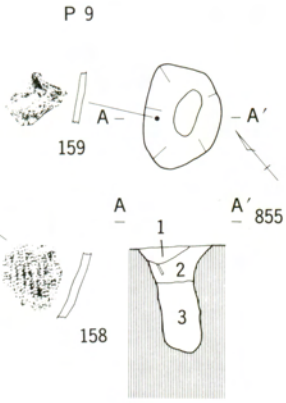
P 3
1 黒褐色土（10YR3/1）炭化物を含む
2 暗褐色土（10YR3/3）砂質土
3 にぶい黄褐色土（10YR4/2）



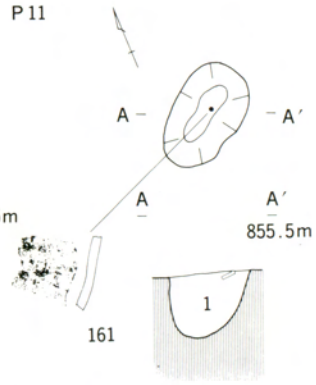
P 5
1 黒色土（10YR2/1）炭化物を含む
2 黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR4/3）が混じる
3 黒褐色土（10YR3/1）炭化物を含む



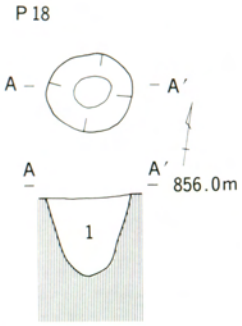
P 7
1 黒褐色土（10YR3/1）



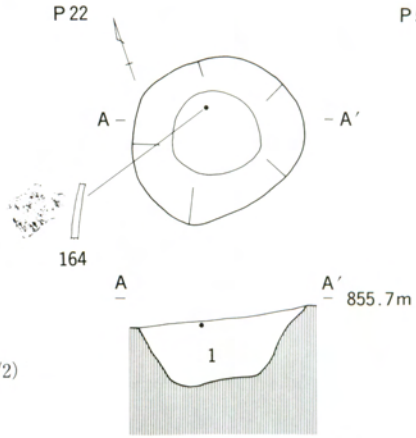
P 9
1 黒褐色土（7.5YR3/1）
2 暗褐色土（10YR3/3）
3 にぶい黄褐色土（10YR5/4）



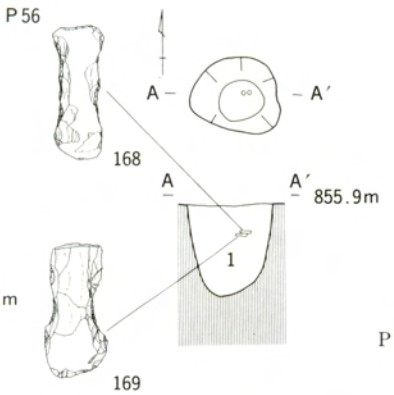
P 11
1 黒色土（7.5YR2/1）



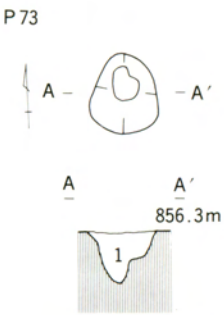
P 18
1 灰黄褐色土（10YR4/2）
炭化物を少し含む



P 22
1 黒褐色土（10YR3/1）



P 56
1 黒褐色土（10YR2/2）



P 73
1 黒褐色土（10YR3/1）

0　1 m

第24図　西区のおもな土坑・ピット

黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片29点が出土した。さらに下層の黄褐色土中より下呂石剥片とチャート剥片が２点ずつ出土した。

P 11

H10区のⅣ層上面、Ｐ９の北隣で検出した。43×26×27cmの大きさで、楕円形である。黒色土中より縄文後期前葉の土器片10点と玉髄剥片１点が出土した。

P 18

H11区のⅢ層中で検出した。35×30×30cmの大きさで、ほぼ円形である。炭化物を少し含む灰黄褐色土中より無文土器片７点と下呂石剥片１点が出土した。

P 22

H11区のⅢ層中で検出した。68×60×30cmの大きさで、楕円形である。炭化物を含む黒褐色土中より縄文土器片16点が出土した。

P 56

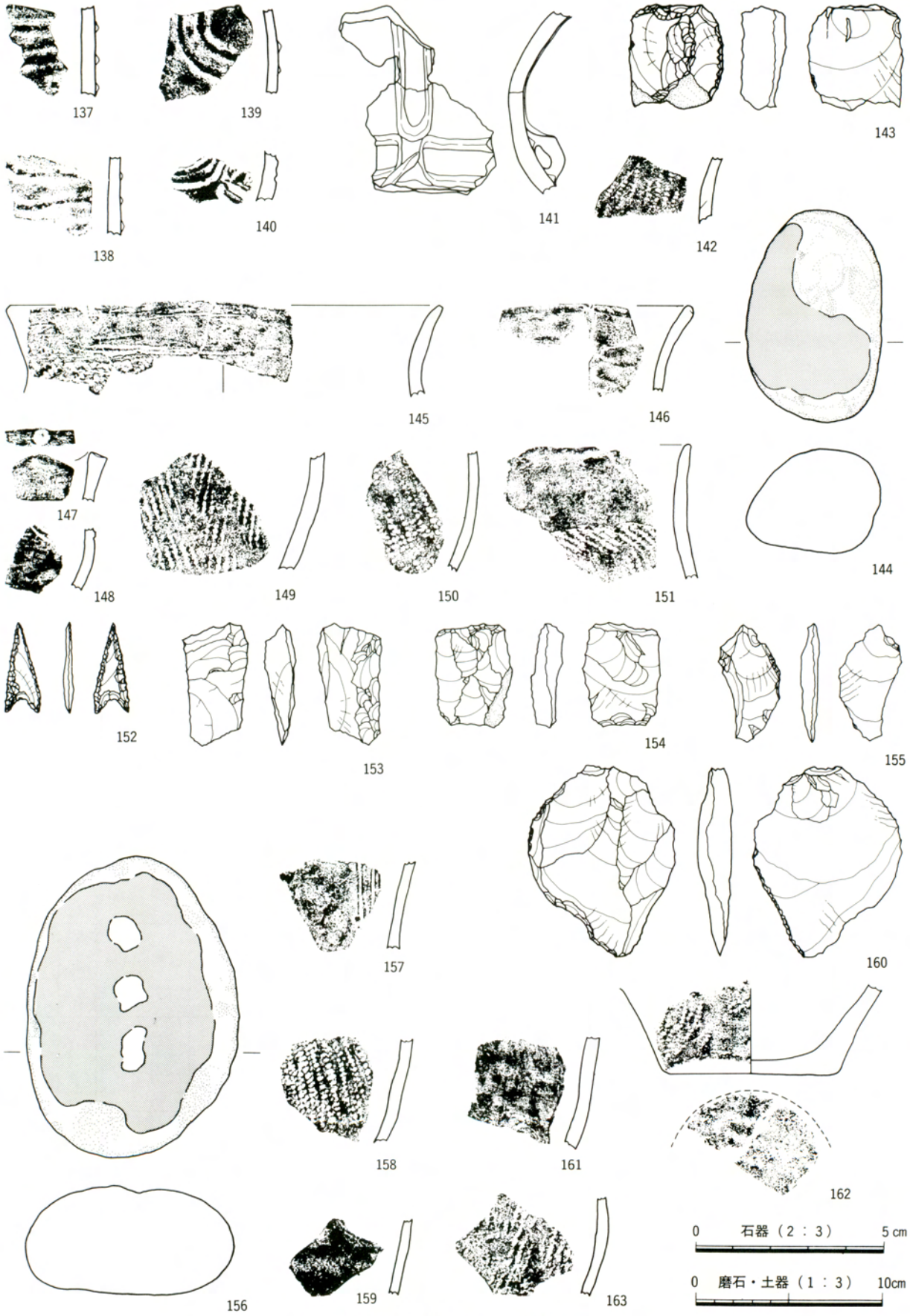
Ｉ11区のⅣ層上面、玉髄剥片集中出土地点（SX15）の下層で検出した。35×30×37cmの大きさで、楕円形である。黒色土中より打製石斧が２点重なって出土した。

P 73

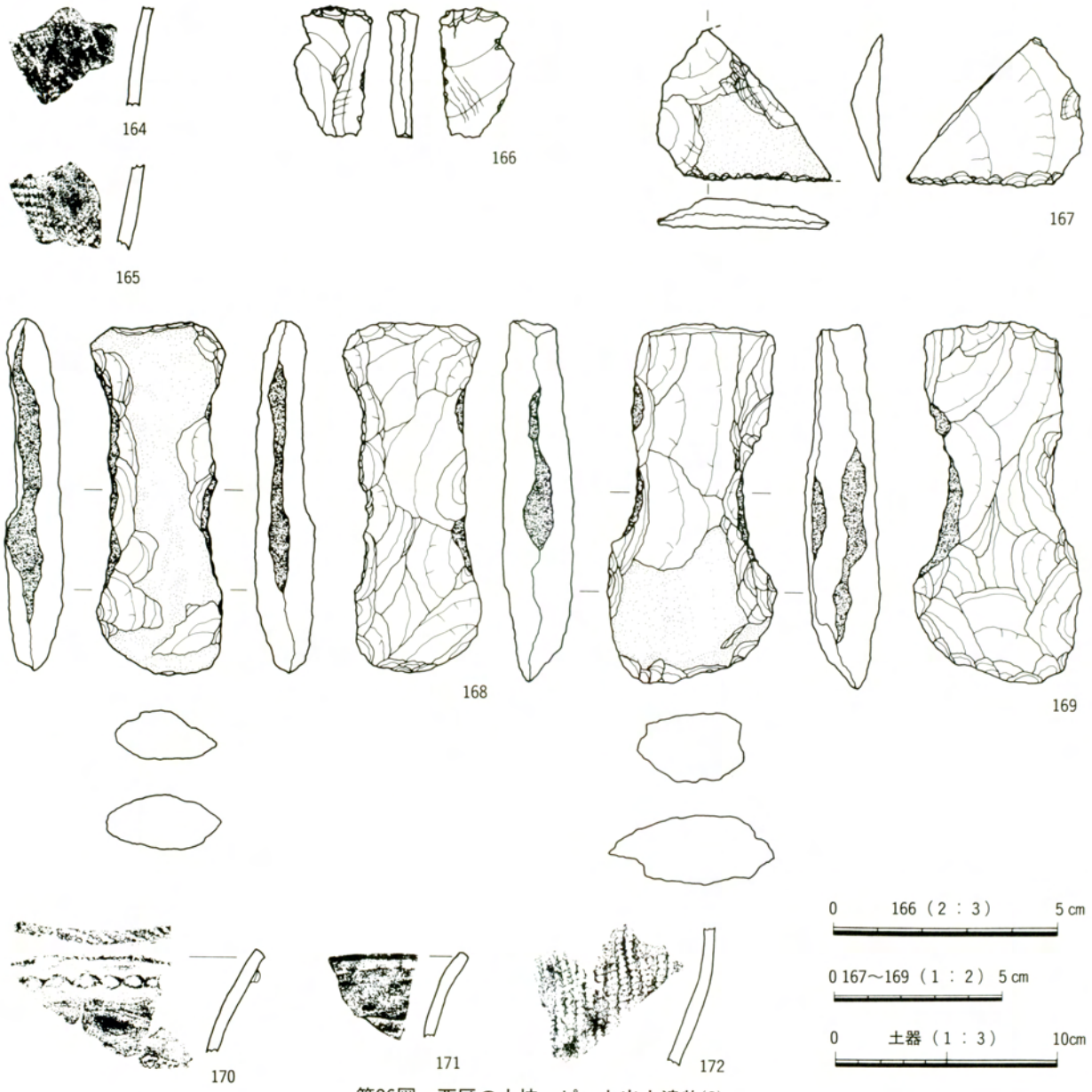
Ｉ12区のⅣ層上面、Ｐ３から1.2m西方で検出した。32×28×20cmの大きさで、楕円形である。黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片13点、下呂石剥片２点、チャート剥片１点、黒曜石剥片１点が出土した。Ｐ73からは SX７出土の土器と同一と考えられる破片も出土している（第16図―91）。

土坑・ピット出土の遺物（第25・26図・図版６・８・10）

第25図の137・138は SK１出土の縄文土器片である。微隆起線で曲線文を描く土器の胴部破片である。粗い砂粒を多く含み黄灰色を呈している。139～142は SK２出土の縄文土器片である。139はループ状の微隆起線によって文様が構成される深鉢の胴部破片である。140は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片である。141は微隆起線文を伴う橋状把手付きの壺状土器の破片である。破片の上方はH11区Ⅲ層出土の破片が接合した部分である。同一個体と考えられる土器の破片が西区Ⅲ層の広い範囲から出土している（第36図―295～297）。142は地文に LR の縄文を施す土器でやや外反する頸部付近の破片である。143・144は SK10出土の石器である。143は表面に一部原石の自然面を残す縦長の下呂石剥片である。右側縁部に片面加工の連続する剥離痕がみられる。144は凝灰岩製の磨石である。ほぼ全面に使用の痕跡がみられるが、特に表裏両面にややザラつく磨痕が残されている。145はＰ１出土の縄文土器の口縁部である。破片が３点出土し、周辺のH11区Ⅲ層出土の４点の破片と接合したものである。ゆるく外反する口縁部に無文帯をつくり、以下地文に LR の縄文が施されている。146～155はＰ３出土の遺物である。146はゆるく外反する土器の無文の口縁部破片である。147は波頂部に圧痕のつく土器の口縁部で、現存部分は無文である。148は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片である。149～151は地文に縄文を施す土器で、151は口縁部に無文帯を有している。152は下呂石製の凹基無茎鏃である。薄い板状の剥片の辺縁部に丹念な剥離調整がみられる鋸歯状側縁の石鏃である。153は両側に折り取り部分を持つチャート剥片である。下端部に微細な剥離痕が認められ、ヘラ形石器と考えられる。154はチャート剥片、155は下呂石剥片である。ともに右側縁部に微細な剥離痕が認められる。156・157はＰ



第25図　西区の土坑・ピット出土遺物(1)



第26図　西区の土坑・ピット出土遺物(2)

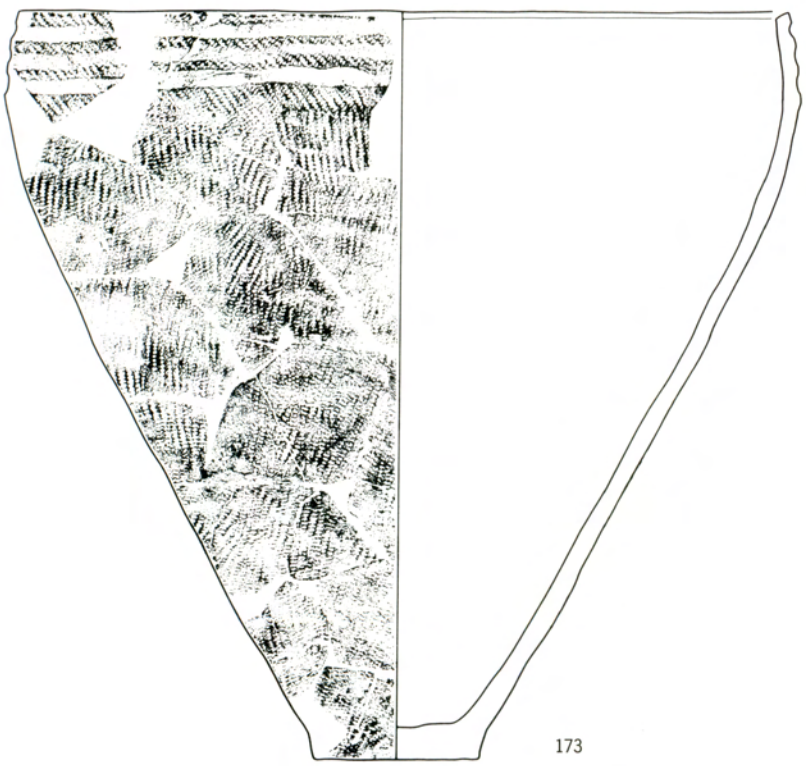
５出土の遺物である。156は凝灰岩製の凹石で、表面に３ヵ所浅い凹痕を残している。表裏両面の磨痕も顕著である。157は縦に２条の沈線が確認できる土器の胴部破片である。薄手で器厚は５㎜前後である。158はＰ７出土の土器で、地文に RL の縄文を施す胴部破片である。159はＰ９出土の縄文土器片である。SB１出土の口縁部に沈線文のみられる土器（第12図―12）と同質で、有文土器の無文部分と考えられる。160はＰ９出土の下呂石剥片である。辺縁部に連続して細かい剥離痕が認められる。161はＰ11出土の縄文土器の胴部破片である。表面はよく研磨されており、有文土器の無文部分と考えられる。162はＰ16出土の土器の底部破片である。胴部には地文に RL の縄文が施され、底部には網代圧痕が残る。163はＰ18出土の土器で、地文に無節の縄文を施す胴部破片である。164･165はＰ22出土の縄文土器片で、地文に LR の縄文を施す胴部破片である。166･167はＰ54出土の石器類である。166はチャートの縦長剥片で、側縁部に微細な剥離痕がみられる。167は凝灰岩製の横刃形石器で、部分的に

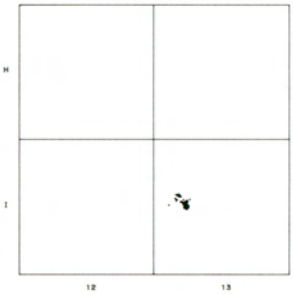
欠損している。168・169はＰ56出土の打製石斧である。２点とも緑色片岩製で分銅形を呈し、全長10cm程の小型の製品である。抉り部分に敲打痕のようなツブレが認められる。装着痕とも考えられるが、168では痕跡が側縁部の広い範囲に及んでいる。170～172はＰ73出土の縄文土器片である。170はＤ字状の刻みのある隆帯が１条横走する土器口縁部で、幅４cm程の無文帯から下にはRLの縄文が施されている。口唇部にもRLの縄文が施文されている。171は無文の土器口縁部、172は地文にRLの縄文が施された土器胴部である。

４　II層の不明遺構（SX）

縄文土器集中出土地点（SX２）（第27図、図版10）

Ｉ13区のII ｃ層を掘削中に縄文後期後葉のものと考えられる土器片が１個体分まとまって出土した。直径1.2m程の範囲から120片余りの破片が炭化木片と一緒に出土し、木片の^{14}C年代測定値は、3,430±130yrBPであった。第27図の173はSX２出土の復元土器である。口径約41cm高さ約40cmの大型の深鉢で、底部径は8.8cmである。地文にRLの縄文が施され、口縁部に３本の凹線が巡っている。174は同時に出土した土器の口縁部である。隆帯と沈線により文様が構成される土器で口縁端部および隆帯上には縄文が施されている。表面の一部に炭化物が付着している。





SX２遺物出土状況

0　174（1：3）　10cm

0　173（1：4）　10cm

第27図　SX２出土土器

第３節　包含層出土遺物

今回の調査では、遺物包含層とそれに準ずる二次的な堆積層より早期から晩期までの各期の縄文土器や石器類が出土した。量的に最も多いのは縄文後期前葉（西区Ⅲ層出土）のもので、次いで晩期のものが多い。

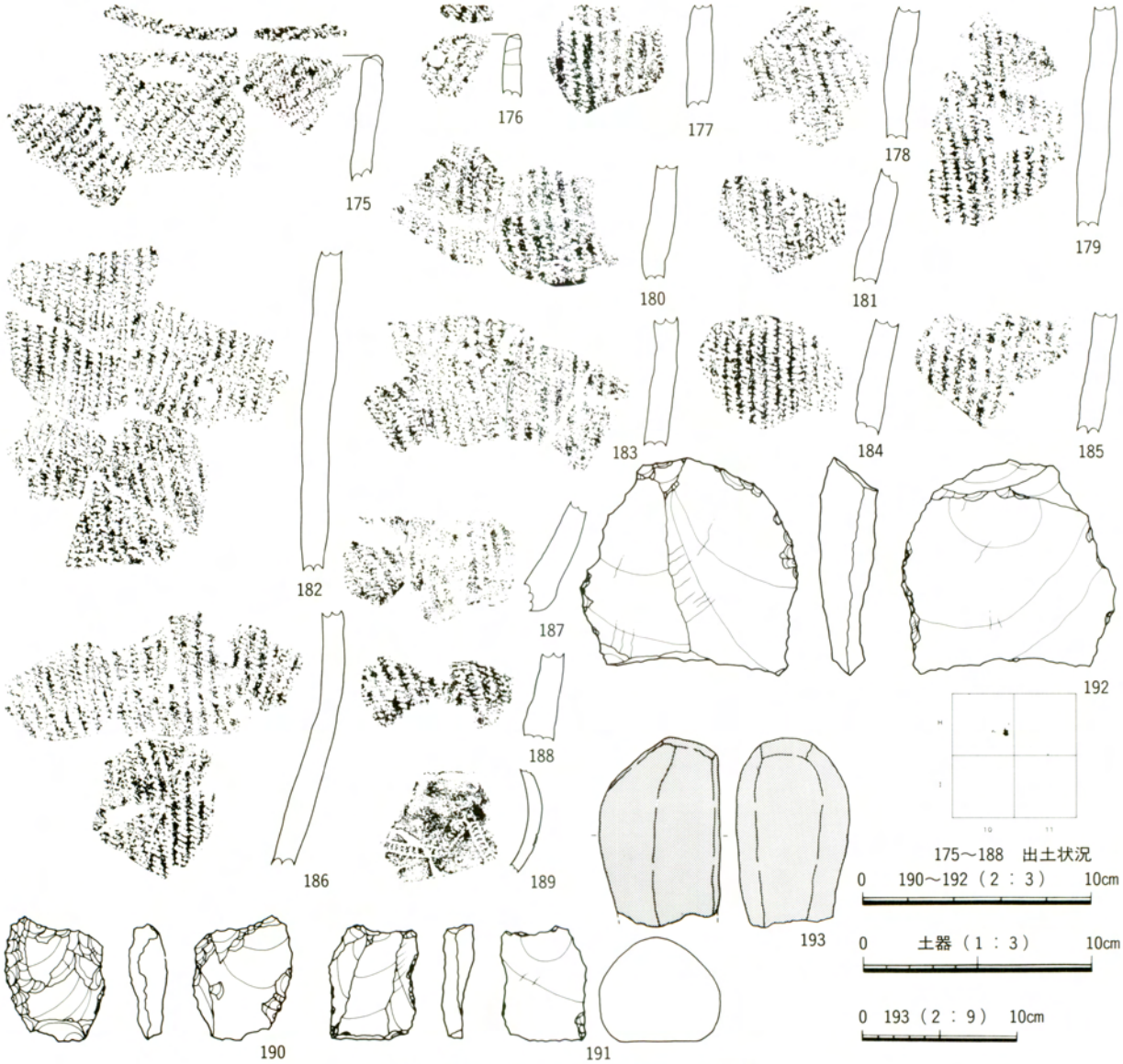
縄文土器については、便宜的に次の６期に大別し、細分および報告を進めることにした。

Ⅰ期　縄文早期（東区）　　Ⅳ期　縄文後期前葉

Ⅱ期　縄文前期（西区）　　Ⅴ期　縄文後期中葉および後葉

Ⅲ期　縄文中期　　Ⅵ期　縄文晩期

石器類については、その分類は五味原遺跡群の西田遺跡（第１集）の報告例に準拠している。層位的に把握できた西区Ⅳ層およびⅢ層については、それぞれ別々に報告することとした。



第28図　西区Ⅱ期の土器・Ⅳ層出土の石器

1　II期の土器（第28図175～189、図版11）

縄文前期前半に属すると考えられる土器が西区IV層より出土している。第28図の175～188はＨ10区IVｂ層(褐色土)からまとまって出土した土器で、胎土中に植物繊維を含んでいる。やや外反する器形の平底の深鉢で、色調は暗褐色および褐色である。縄文は前々段多条の原体が用いられ、口縁部では斜行し胴部では縦走している。なお、口唇部にも縄文が施文されている。補修孔を有する口縁部の破片も出土している（176)。

189はＧ８区III層の下層シルト層より出土した。小振りの爪形文を充填した平行沈線文がみられ、器厚は４㎜前後である。部分的に朱色が残る塗彩土器で、北白川下層IIｂ式に比定できる。

2　III期の土器（第29図、図版11）

III層からIV層において確認できた縄文中期の土器は３個体である。第29図の194はIII層の下層およびIVａ層（灰褐色土）より出土し、Ｉ12区からＨ10区の斜面に沿って破片の散らばりがみられた。中期前半の平出III類Ａ式の土器と考えられる。口径22㎝、高さ29㎝である。195はＧ11区のIII層より出土した。口唇部直下に半截竹管状施文具で水平方向の沈線が施されている。地文はRLの縄文である。196の土器はＨ10区III層下層およびＧ10区III層の２地点から集中して出土した。口縁部の４分の３はＨ10区出土で、比較的大きい破片が重なるように埋まっていたが遺構は確認できなかった。地形的には、Ｈ10区の出土地点が尾根の先端部にあたりＧ10区は谷側の斜面上である。復元できた土器は、口縁部がやや外反し胴部が膨れる波状口縁の深鉢で、底部を欠いている。口縁部に文様帯を持ち、それぞれ大きさが異なる４個の隆帯による渦巻きを、横走する隆帯がつないでいる。胴部には櫛歯状工具による条線文が施されている。文様構成等から縄文中期後葉の土器と考えられる。西区III層出土の条線文の土器はこの１個体のみである。

3　西区IV層出土の石器（第28図、図版22・23）

西区IV層出土の石器類の総数は12点（0.7%）で、その内訳は二次加工のある剥片１点、使用痕のある剥片５点、磨石・凹石類２点、剥片４点である。層位的に縄文中期以前のものと考えられる。

第28図の190はＨ10区IV層よりII期の土器（第28図―175～188）に伴って出土したチャート剥片である。縦長剥片の辺縁部に微細な剥離痕が不規則に認められる。191・192は使用痕のあるチャート剥片である。191はＨ10区より、192はＨ11区よりそれぞれ出土した。193はＦ９区IV層から出土した凝灰岩製の磨石である。全面に顕著な使用痕を残し、断面は多角形を呈している。

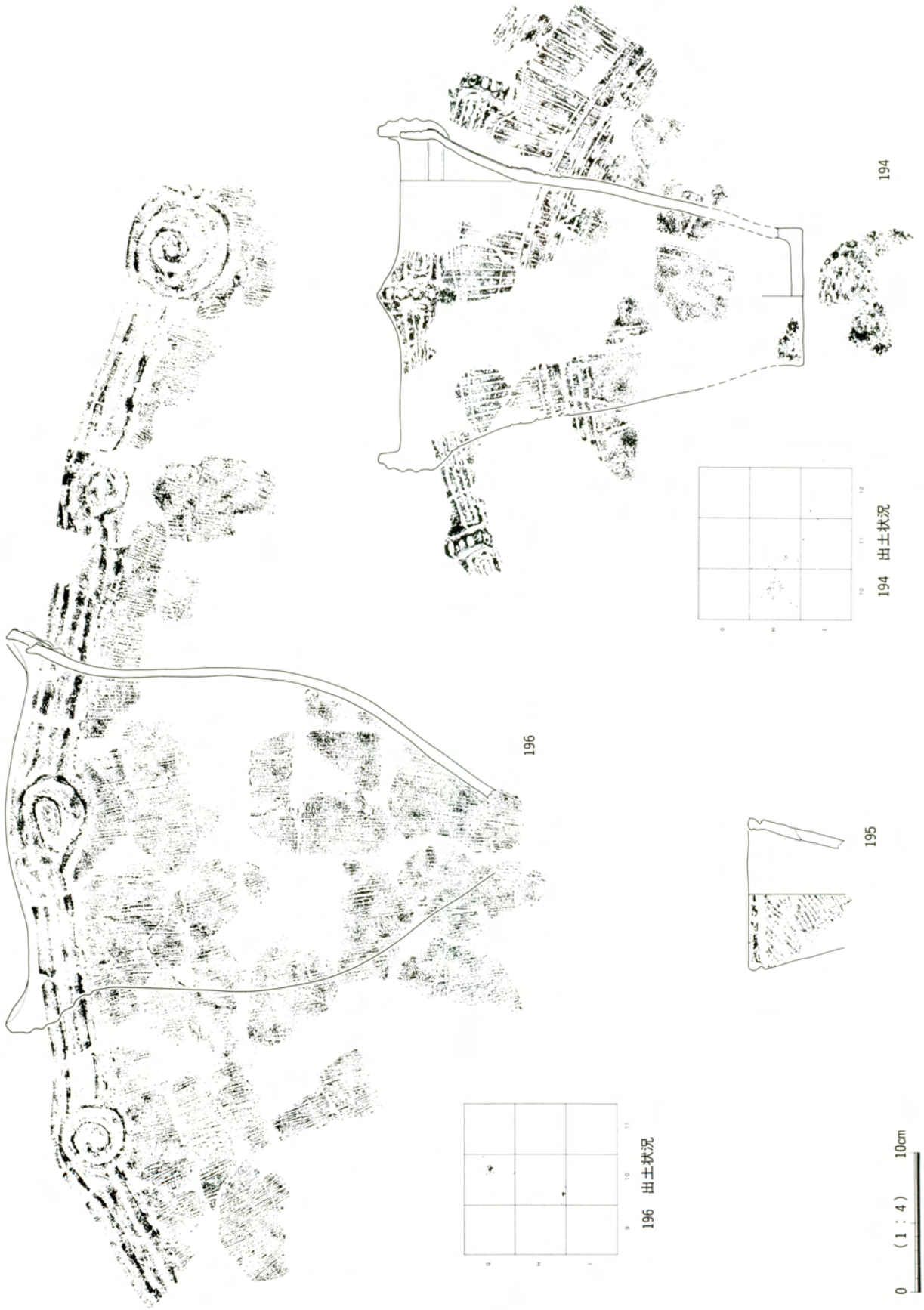
4　IV期の土器（第30～40図、図版12～21）

縄文後期前葉に属し、本遺跡の中心をなすと考えられる西区III層出土の土器群である。器形や文様構成等から９群に大別した。

第１群　微隆起線文の深鉢。６類に区分。（第30・31・35・36図、図版12～15）

１類　樽形の器形でループ状の文様をもつもの（第30・35図）

口縁部がやや内傾し、胴部がふくらむ器形の深鉢である。粘土紐をループ状にして貼り付ける文様



第29図　西区Ⅲ期の土器

が随所にみられる。貼り付けた隆線の両脇がナデにより断面三角形の微隆起線に仕上げられている。

ａ類（197・198・234～250）

波状口縁の土器で口縁部を２～３条の微隆起線が横走し、以下縦方向に文様が展開している。復元個体の単位数を４としたのは推定である。第30図の197はＧ10区Ⅲ層を中心に出土した土器で、益田郡萩原町の桜洞遺跡出土の土器に類例がみられる（紅村1974）。198はＨ11区Ⅲ層よりまとまって出土した器厚５㎜程の薄手の土器である。縦に垂下する微隆起線を横につなぐ曲線文もみられる。第35図の234～237・239～242はＨ12区からＨ９区にかけて出土した薄手の同一個体と考えられる一群である。243は197の一部と考えられる胴部破片である。245～248は本群に特徴的なループの先端を上方に巻き込むような文様をもつ破片である。

ｂ類（251～262）

ａ類と同様の器形と文様構成の土器で、地文の一部にＬＲの縄文が施されている。251～262は同一個体と考えられ、Ｈ11区を中心に広範囲から出土している。口縁部を巡る微隆起線は２条である。

ｃ類（267～270）

口縁部の微隆起線に刻みがある土器である。267･268はＧ10区およびＨ10区より出土し、SX21出土の土器と同一個体と考えられる（第23図―127）。口縁部を巡る３条の微隆起線の一部に右下がりの刻みをもち、そのうちの２条が１組みとなってループ状となり先端を上方に巻き込むような曲線文を描いている。波頂部の破片を欠き、文様構成が不規則なため全体像をつかみ難い土器である。270はＨ10区出土で、口縁部の２条は丸みのある刻みを有し、垂下する２条の微隆起線には刻みがない。

２類　樽形の器形で１本線単位の文様をもつもの（第30図―199・200・36図―271～276）

第30図の199はＨ11区を中心にやや広い範囲から出土した破片をもとに復元できた土器である。第36図の271～273がその同一個体と推定される口縁部の破片である。１類と同様の波状口縁の樽形を呈するが、微隆起線はループ状にはならず、それぞれの線の末端がつながらないで完結するものが目立つ。274・275は同様の１本線単位の文様構成をもつと考えられる土器の口縁部破片で、それぞれが別個体である。第30図の200は底部付近で微隆起線が途切れている例である。

３類　口縁部に垂下する微隆起線をもつもの（第36図―277～287）

１・２類よりもやや厚手の波状口縁の土器である。277～281は２条の微隆起線が斜め方向に垂下する口縁部で、SB１周辺から出土したものが多い。280･281は微隆起線の起点に貫通孔を伴っている。282・283は垂下する１条の微隆起線の起点となる波頂部に押圧痕がある。284～287は同類土器の胴部と考えられる破片である。第２群土器の胴部としたものの一部も本類に含まれる可能性がある。本類は器形および全体の文様構成が明確でなく不安定な一群である。

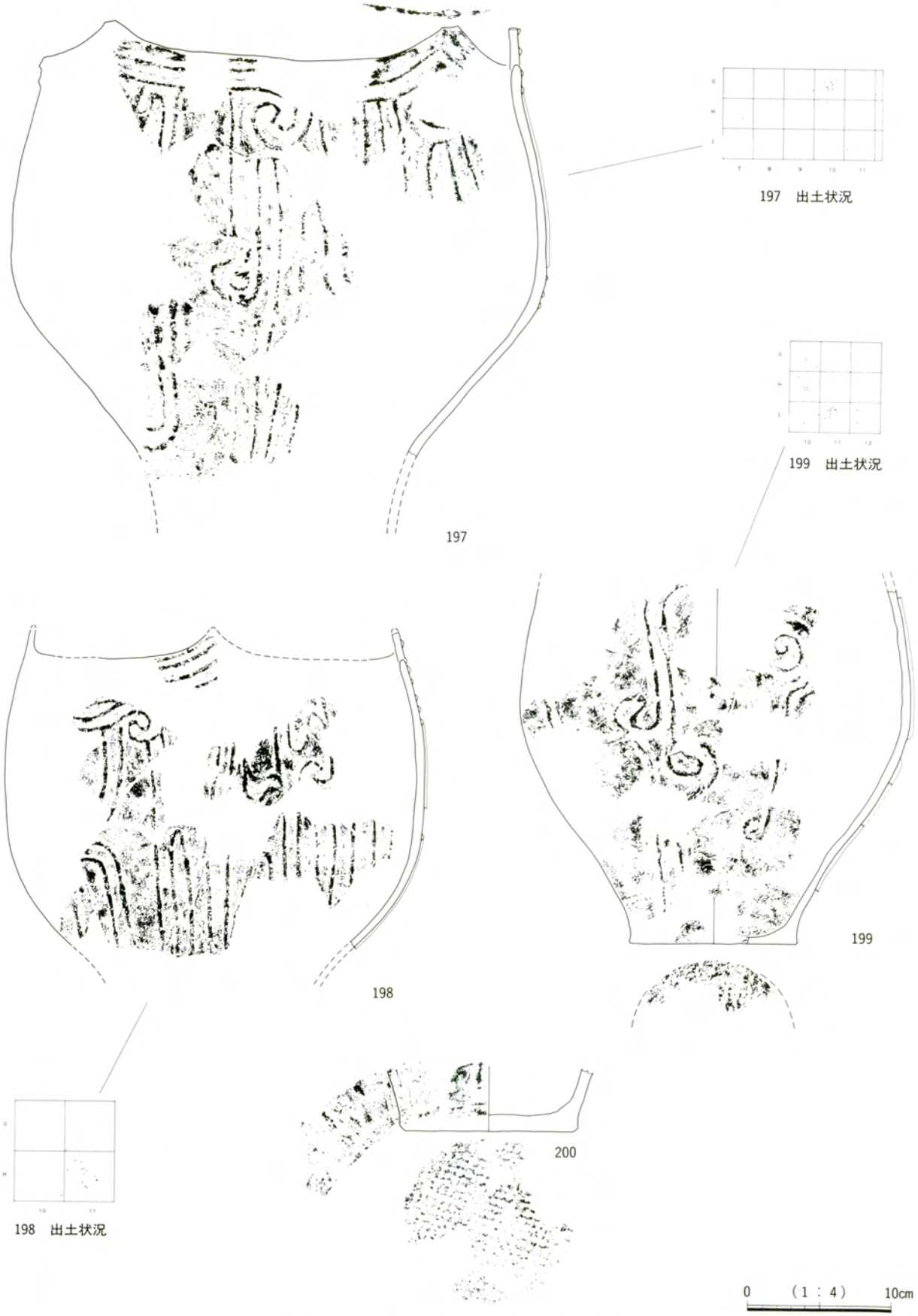
４類　口縁部が外反する器形で口縁部に文様をもつもの（第36図―288）

288はＧ９区出土で、口縁の一部に微隆起線による渦状文が背中合わせに施文されている。器形や胎土等から第９群土器との関連が考えられる。

５類　口縁部がやや内彎しているもの（第31・36図）

ａ類（201）

第31図の201はＨ11区およびＧ10区を中心に出土し復元できた深鉢である。小破片で破片数も少なかったため、正確な波状口縁の形態や文様構成の全体像等は不明である。口縁端部を沈線が巡り、そ



第30図　西区Ⅳ期の土器(1)　第１群１類・２類

の１㎝程下を刻みのある微隆起線が横走している。波頂部では２条の刻み入り微隆起線が弧を描き、そこを起点に８条の微隆起線が垂下している。脇の１条は途中でループ状となり、同群１類にみられた下から上へ巻き込むような渦状の文様を描いている。その内側の微隆起線には刻みが入っている。内側の４条がどう変化するかは不明であるが、別の部分の破片では内側の４条は途中で折り返しU字状に対向している。なお、この部分（201の右図）の微隆起線は全部で６条で、両端の文様を描く２条は見当たらない。頸部が括れ胴部が大きく膨らんでいるが、ちょうど膨らみが最大になる辺りに沈線文が施されている。縦に垂下する微隆起線の文様帯が幅の広い２条の平行沈線でつながれ、さらにその沈線間に斜位の沈線文が施されている。

ｂ類（289・290）

第36図の289は内彎する口縁の波頂部に押圧痕があり、そこを起点に微隆起線文が施されている。290では垂下する微隆起線の起点に横位の微隆起線が存在するようであるが磨耗のため確認できない。

ｃ類（202・291）

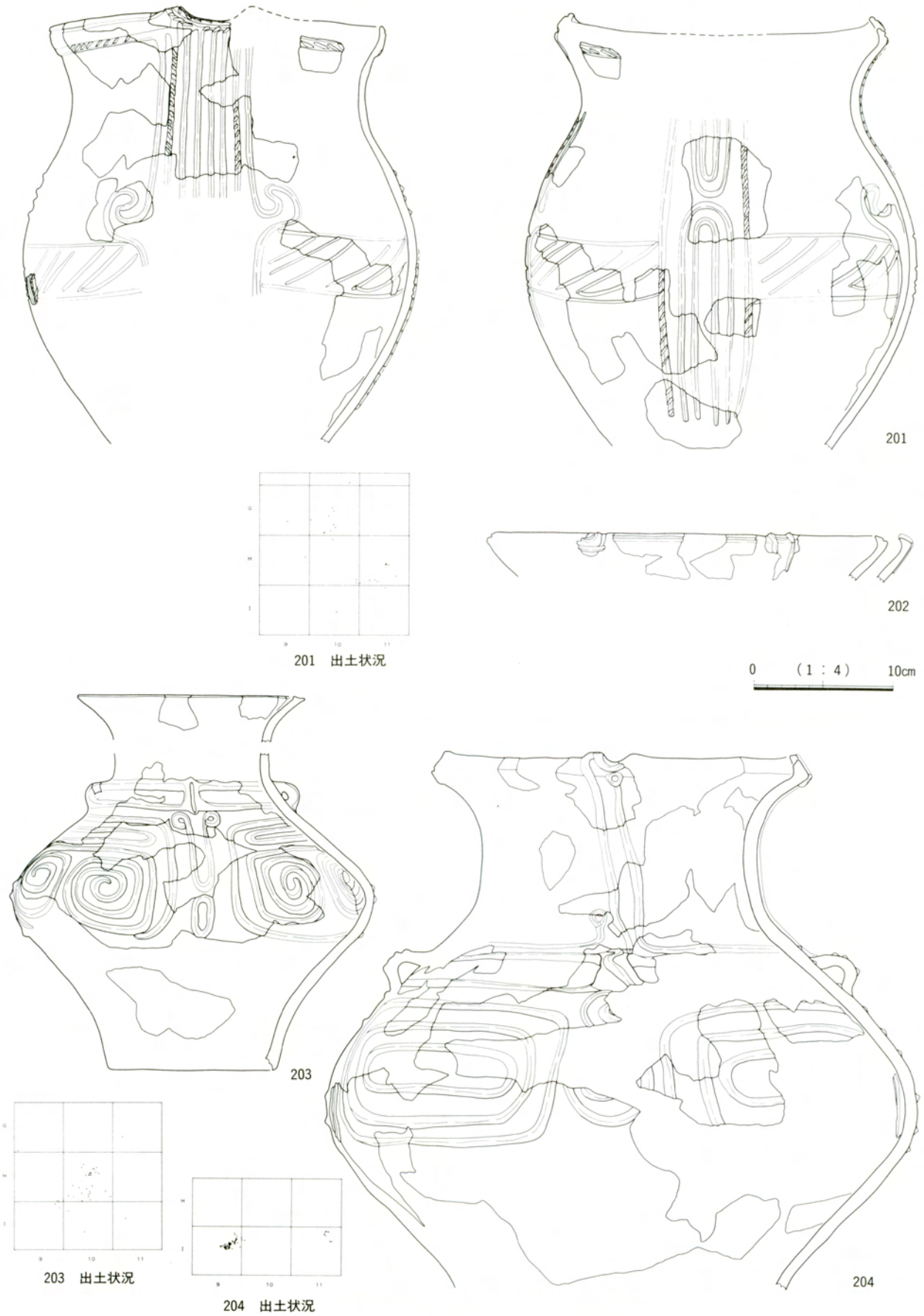
第31図の202は同様に内彎する口縁部をもつ器厚が４㎜程の非常に薄い土器である。口縁端部を沈線が１条巡っている。２条の微隆起線が垂下する部分は４箇所確認できた。さらに、微隆起線によって二重の弧を描くような文様部を伴っている。第36図の291は同一個体の胴部破片である。

６類　地文に縄文が施されているもの（第36図―292～294）

第36図の292・293はＨ７区出土の薄手の土器の胴部破片である。１ｂ類の土器と同様に縄文施文は部分的である。微隆起線が描く曲線文は１本線単位と考えられる。294はG10区より出土した。

第２群　微隆起線文の壺状土器（第31・32図―203～205、36・37図―295～330、図版15～17）

微隆起線によって施文され橋状把手を伴う独特の形態を示す一群である。遺構出土分を含めて全部で７個体を確認した。第31図の203はH10区を中心に出土したやや小型のタイプである。橋状把手は３個出土し４単位と推定した。橋状把手部には縦に沈線が施され、把手間は平行する微隆起線で結ばれている。大きく張り出す胴部の上半分に微隆起線による文様帯をもっている。橋状把手の直下にはその端部を一周させて小円をつくってからU字状に垂下させる文様と縦長の楕円文が施されている。その間を埋める胴部文様は、まず外側に下が開く方形文様があり、その中に横長の楕円文と、最終的に上方で一本につながる２つのやや角張る渦巻き文を配している。地文は無文で器面はよく磨かれている。204はＩ９区でまとまって出土した破片にSB１出土の破片（第12図―21）が接合して復元できた土器である。口径約25㎝、胴部最大径約40㎝、底部を欠くが現高約38㎝の大型の土器である。橋状把手は３個出土し前者と同様４単位と推定した。口縁部は内彎し、単位ごとに飾りを有している。飾り状部分では口縁端部に半円状の窪みを作出し、その縁に弧状に微隆起線を配し左側からつなげて垂下させている。さらに弧状の微隆起線の中央付近から、その先端部分で小円を描く微隆起線を１条垂下させている。小円部分は押圧されボタン状を呈している。この微隆起線は橋状把手の上方で右方向に曲がり、隣の橋状把手の手前で上方に折れた後、再びその先端部で小円を描き終結している。口縁部から垂下する左側の微隆起線は橋状把手の上を通り胴部の文様帯につながると考えられる。橋状把手の下方は一部に渦巻き状の文様がみられるが詳細は不明である。把手間の胴部文様は、三重の隅に丸みをもつ方形文である。203と同様に胴下半部は無文で、器面は丁寧なナデ調整がなされている。第32



第31図　西区Ⅳ期の土器(2)　第１群５類・第２群

図の205はH10区を中心に出土した土器で、胴部の下半分は未確認の個体である。確認できた橋状把手部は２ヵ所であるが、文様展開等から４単位と考えられる。口縁部は大きく外反し、ループ状の粘土紐を貼り付けた後に微隆起線に仕上げる痕跡を残す単位文が観察できる。橋状把手間は203・204の土器と同様に平行する２条の微隆起線で結ばれている。胴部文様は偏平の角張った渦巻き状の文様とみなせるが、欠損部分があり確実ではない。第36図の295～297は SK２出土の橋状把手部分（第25図―141）と同一個体と考えられる土器の一群である。298･299は小振りの橋状把手をもつタイプで、Ｉ12区出土である。SK１出土の土器（第25図―137･138）と同一個体と考えられる。300～306はＨ７区より出土した一群である。やや複雑な文様構成の土器であるが、磨耗が著しく復元は困難であった。308～329は本群土器の胴部と考えられる破片である。324･325は SK６出土の橋状把手をもつ土器（第16図―83～85）と同一個体と考えられる破片である。326～329はやや薄手の土器である。文様展開から本群としたが、第１群土器にふくまれる可能性がある。330は本群に類似したミニチュア土器である。微隆起線が施されているが、橋状把手の有無は確認できなかった。

第３群　縁帯文系の土器。６類に区分。（第32・37図、図版17・18）

１類　口縁部が内外に肥厚し口縁端部に沈線文をもつもの（第32・37図）

ａ類（206～208・331～333）

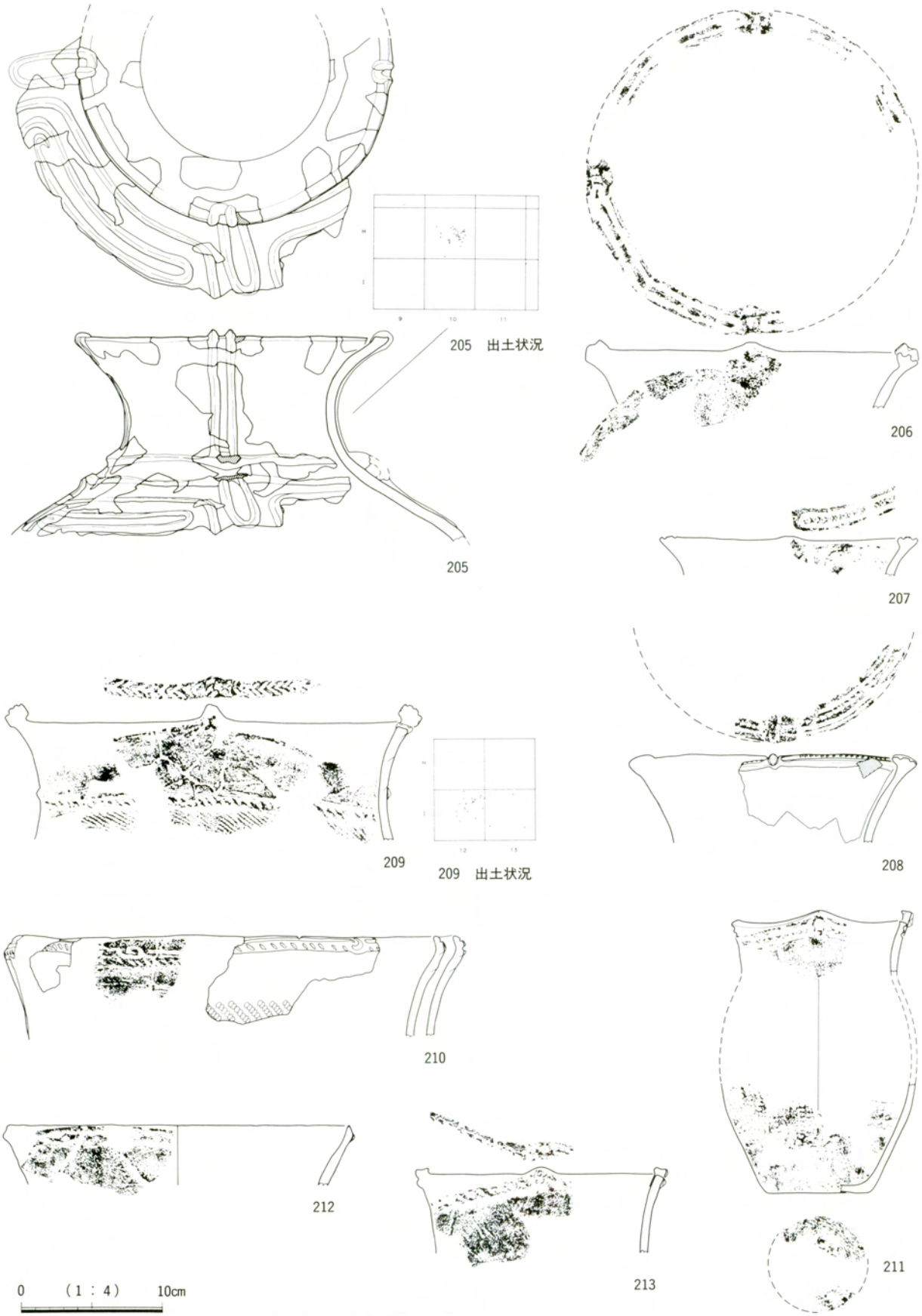
口縁端部に２～３条の沈線が巡り、途中に小突起をもつ。第32図の206では肥厚した口縁端部の突起間に沈線で輪を描いているので、部分的には２条の沈線が巡っているようにみえる。小突起は３個が現存で、内外を押圧しその間を内側に向かって刺突している。頸部は無文、胴部は不明である。出土区はG10区を中心にＨ９～11区と広範囲に及んでいる。207はG11区およびＨ９～10区より出土した。肥厚した口縁端部の突起間に沈線で輪を描き、その間の部分をＤ字状の刺突文で充塡している。小突起部分は外側に伸び、頸部文様へと展開しそうな部分で破損している。H12区出土の第37図の333が同一個体の胴部と考えられる破片で、丸みのある２条の隆帯を伴い、器面はよく磨かれている。208はＧ９区より出土した。207と同様に沈線間をＤ字状の刺突文で充塡している。縦に細長い小突起部分は磨耗してる。頸部は無文、胴部は不明である。331はＦ９区より出土した。口縁端部に輪を描く沈線の間にさらに１条の沈線を加えている。小突起には刻みがみられる。Ｉ11区出土の332では２条の沈線の末端を刺突している。

ｂ類（209・334）

口縁端部にハの字状の刻みがみられるタイプで、遺構出土分を含めて３個体を確認した。第32図の209はＩ12区を中心に出土し部分的に復元できた土器で、Ｐ８出土の破片を１片含んでいる。ハの字状の刻みをもつ口縁端部の肥厚は弱めである。刻みのある小突起は３個が現存で、４単位と考えられる。ゆるく外反する頸部は無文で、胴部との境に右下がりの刻みのある隆帯が１条巡っている。ややふくらむ胴部には LR の縄文が施されている。第37図の334はH11区出土で、肥厚した口縁端部に刺突によるハの字状の文様が刻まれている。SX７およびＰ73出土の土器（第16図の91）では、ハの字に刻んだ中央部に沈線を加えている。

ｃ類（335・336）

肥厚した口縁端部を１条の沈線が巡り、突起部に装飾を加えている。第37図の335・336は同一個体



第32図　西区Ⅳ期の土器(3)　第２群・３群・８群

で、Ｈ９区出土である。台形状に張り出した突起部に沈線文を描き、外側に隆帯を回して貼り付けている。

ｄ類（337・338）

第37図の337はＩ10区より出土した。内外に肥厚させた口縁端部を２条の沈線が巡り、途中に短沈線による曲線文がみられる。沈線間および外端部に右下がりの刻みが加えられている。頸部には沈線文の一部が残っている。338はＩ11区出土の同一個体と考えられる無文部分の頸部破片である。

２類　口縁端部がやや内彎しているもの（第32図―210）

第32図の210はＧ９区およびＨ12区を中心に広範囲から破片が出土した土器である。内彎気味の口縁端部を１条の沈線が巡っている。横走する沈線の途中でその端を渦巻き状にして終結させたり、その端を弧を描く短沈線で囲んでいる部分が６ヵ所みられる。さらに沈線の下を刻み入りの１条の隆帯が巡っている。刻みは短沈線によるもので、その向きは右下がりである。やや外反する頸部は無文帯となり、胴部には RL の縄文が施されている。

３類　幅広の口縁端部に文様帯をもつもの（第37図―339～349）

ａ類（339～347）

第37図の339・340はＨ10区およびＩ10区出土で、同一個体と考えられる土器である。幅広の口縁端部に横走する４条の沈線がみられ、下端部を右下がりの刻みが巡っている。突起状の部分には沈線による渦状文や弧状文がみられる。341～346はＨ11区を中心に出土した同一個体の土器である。口縁端部には３条の横走沈線と突起部を飾る曲線文がみられる。下端部を刻みが巡り、頸部以下には無節の縄文が施されている。頸部が大きく外反し、胴部が膨らむ器形と考えられる。頸部と胴部の境目辺りを右下がりの刻みがある隆帯が巡っている。その隆帯の上下に横方向に展開する曲線文風の沈線がみられる。347はＧ９区とＩ10区から出土した。やや幅広の口縁端部を１条の沈線が横走している。沈線の末端は刺突され、沈線内には刺突列が続いている。突起部には刻みのある半円状の隆帯が付き、その中央部分に押圧を加えている。隆帯内外は沈線で囲まれ、外側の沈線は２条である。大きく外反する頸部は無文で、よく磨かれている。胴部との境目に刻みのある隆帯がみられる。

ｂ類（348・349）

内彎気味の口縁で頸部の外反は緩めである。突起部に相当する部分に沈線による曲線文がみられる。348はＦ９区出土で、頂部に押圧痕がある。349は SX７の周辺から出土し、二次焼成を受けている。上端部に横走する１条の沈線がみられ、その下に渦巻状の文様が展開している。

４類　刻みのある隆帯を伴うもの（第37図―350・351）

１類と同様に肥厚した口縁端部に沈線を横走させた輪が描かれ、結果的に２条の沈線がみられる土器である。突起部に相当する部分には押圧痕がある。右下がりの刻みがある隆帯を伴い、頸部の外反は緩めである。350はＨ10区、351はＩ11区より出土し、同一個体と考えられる。

５類　口縁部に刺突のある平行沈線文をもつもの（第32図―211）

第32図の211は緩やかな波状口縁で、胴部がやや膨らむ器形と推定される小型の深鉢である。口縁部を２条の沈線が巡り、沈線間をＤ字状の刺突で充塡している。間にボタン状の小突起を有し波頂部を形成している。頸部は無文で、胴部には RL の縄文が施されている。１ａ類の207・208と同様の施文形態がみられ、器形は異なるが関連の深い個体と考えられる。Ｇ９区から出土した土器である。

６類　胴部破片（第37図―352～354）

地文が縄文で沈線文がみられる薄手の胴部破片である。Ｇ10区出土で、本群の胴部と考えられる。

第４群　垂下隆帯をもつ土器（第33図―214・37図―355～358、図版17）

口縁部は波状で、頸部が大きく外反する器形の土器である。刻みのある垂下隆帯を主軸に文様が構成されると考えられる。口縁端部にはハの字状の刻みがみられ、波頂部は小突起状に盛り上がっている。波頂部の仕上げは短沈線で弧を描いたものと、押圧されたものがみられる。２条の垂下隆帯は波頂部を起点とし、無文の頸部を通り胴部で左右に分岐している。隆帯の刻みはハの字を意識したような部分とそうでない部分がみられる。胴部文様は刻み付きの隆帯文と沈線による曲線文が組み合わされているようである。部分的に復元できた図33の214については、その出土区はＨ11区を中心にＧ10区とＨ７区におよび、ＳＢ１出土の１点を含んでいる（第12図―９）。同一と考えられる第37図の355はＧ９区およびＦ９区より出土し、356はＩ16区より出土した。357･358は沈線文をもつ同質の胴部破片ということで本群に含めたが、他群の土器である可能性がある。

第５群　沈線文の土器。７類に区分。（第33・38図、図版18・19）

１類　樽形の器形のもの（第38図―359～361）

359・360はＨ10区およびＧ11区出土の土器である。３条の沈線が口縁部を巡り、その下に弧状の沈線や縦方向の沈線がみられる。樽形の器形で第１群土器との関連が考えられるが、小破片のため全体像はつかみ難い。361も３条の沈線が口縁部を巡る土器であるが、第６群に属する可能性もある。

２類　口縁部が内彎するもの（第38図―362・363・第40―456）

362はＩ12区より出土した。沈線が２条垂下し、口唇部にも沈線がみられる。363はＨ12区出土で、垂下する沈線の上に短沈線による刻みがみられる。第40図の456は同じ土器の底部破片と考えられる。

３類　口縁部が外反するもの（第38図―364）

364では外反する口縁部に縦方向の沈線文がみられる。Ｈ７区出土である。

４類　口縁部に幅広の文様帯をもつもの（第33図―215）

第33図の215はＩ11区出土の小型の深鉢で、口縁部が外反し胴部が膨らむ器形の土器である。口縁部から頸部にかけて３条の沈線が垂下し、その横にはコの字状の区画沈線がその開いた部分を上下にして縦に並んでいる。区画内には刺突文がみられ、文様帯の下端となる頸部と胴部の境目辺りを沈線が巡っている。地文は無文で、網代圧痕を有する底部は磨耗している。

５類　横展開の文様帯をもつもの（第33図―216）

第33図の216の土器は口縁部がやや外に開き胴部が膨らむ器形の小型の深鉢である。全面にＲＬの縄文が施され、口唇部にも縄文がみられる。３条の沈線が口縁部を巡り、その１ヵ所から５回の蛇行を経て下に降りた３条の沈線が途中で部分的に４条に変化しながら頸部を一周している。底部には、平行脈の葉脈圧痕がみられる。Ｇ９区Ⅲ層出土であるが、第３群土器の210（第32図）等同グリッド内の大半の土器の出土部分より約40cm程上層からの単独出土である。

６類　Ｚ字状文を伴うもの（第38図―365～367）

第38図の365～367はＨ10区Ⅲ層上層（ＳＸ１周辺）から出土した。胴部に少し膨らみをもつ波状口縁の

深鉢と考えられる。地文はRLの縄文で、途中でZ字状になりながら垂下する沈線が口縁部から頸部を巡っている。波頂部には内側へ押し込むような圧痕がみられる。

７類　胴部破片（第33図―217・38図―368～375）

第33図の217はG12区出土で、破片の上端部に横走する１条の沈線がみられる。第38図の368～375は本群土器の胴部破片であるが、第１・２群に比べて出土点数は少ない。

第６群　鉢形土器。３類に区分。（第33・38図、図版18・19）

１類　磨消縄文の土器（第33図―218）

第33図の218はG～H列より破片が出土した鉢形の土器である。口縁部が丸みをもって大きく内屈する器形で、底部は不明である。２条の沈線が口縁部を巡り、斜行する３条の沈線が途中に渦巻き文を配しながら胴部文様を形成している。沈線間にはRLの縄文が充填され、器面は丁寧なナデによる調整がなされている。SB１より同一個体と考えられる破片が１点出土している（第12図―16）。

２類　沈線文の土器（第33・38図）

ａ類（219）

第33図の219は同群第１類と同様の器形をとると考えられる鉢形の土器である。口縁部を２条の沈線が巡り、沈線間には右下がりの短沈線が充填されている。胴部は無文で、器面はよく磨かれている。破片はＩ12区を中心にＩ11・H11・H10区およびSX６・SX８・Ｐ３から出土した。

ｂ類（376・377）

第38図の376・377も同様の器形の土器と考えられる。口縁部を沈線が１条巡り、その下に刻み入りの隆帯がつく。胴部には斜行する沈線文が施されている。

３類　地文に縄文が施されたもの（第33図―220）

第33図の220は口縁部がやや内彎する鉢形の土器で、Ｉ12区出土である。２条の沈線が巡る口縁部の地文は無文で、沈線より下の胴部にはLRの縄文が施されている。

第７群　その他の有文土器。６類に区分。（第38図、図版19）

１類　刻みのある隆帯で施文されるもの（378～380）

刻みを伴う低い隆起の隆帯で施文される外反器形の土器である。

２類　沈線文と刺突文に貼付隆帯をもつもの（381・382）

口縁部に横走する沈線や刺突列がみられ、隆帯を貼り付けた部分は突起部とも推定できる。

３類　沈線の上に刺突を加えるもの（383～389）

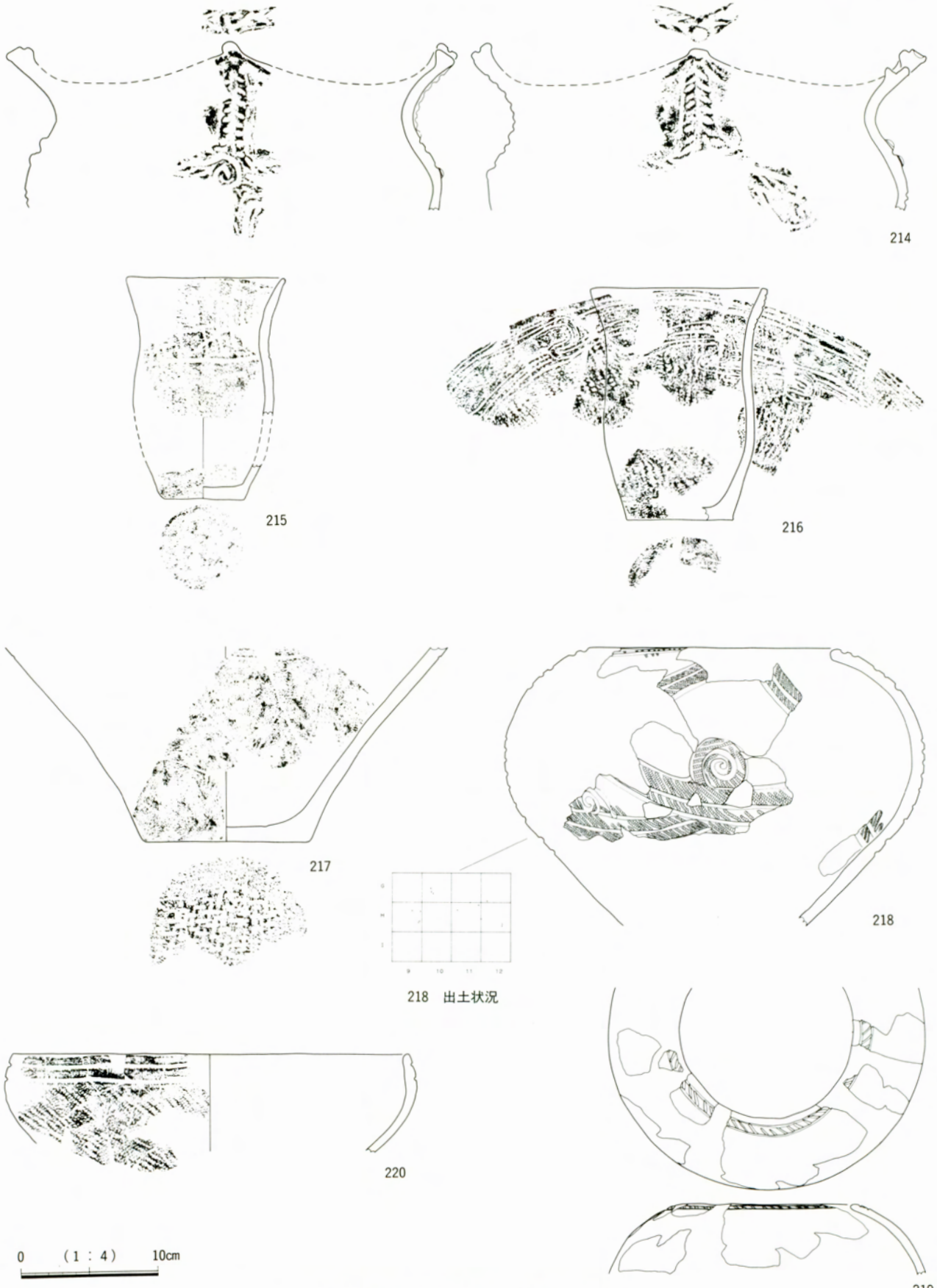
第38図の383～389は内彎する口縁部に文様帯をもち、頸部が外反し胴部がやや膨らむ器形になると考えられる深鉢の破片である。口縁部には４条の横走する沈線と弧状の沈線が施され、沈線上に丸みのある刺突列が充填されている。384は突起状の破片、388・389は胴部破片で無文である。

４類　口唇に刻みをもち隆帯で施文されるもの（390）

口唇にハの字状の細い沈線による刻みがみられる。３群１ｂ類との関連が考えられる土器である。

５類　磨消縄文の土器（391～399）

第38図の391～399は同一個体と考えられる破片である。頸部が括れ胴部に膨らみをもち口縁部が内



第33図　西区Ⅳ期の土器(4)　第４群～６群

彎する小型の深鉢と推定される。2条の沈線によって文様が構成され、沈線間にLRの細かい縄文を充填している。391・397・398では沈線の端をループ状に閉じている。396では渦巻き状の文様がみられる。西区Ⅲ層で確認できた磨消縄文系の土器はこの土器と第6群の218（第33図）の2点である。

6類　突起をもつもの（400）

H10区出土の沈線を多用して飾る口縁の突起部分である。

第8群　口縁部に隆帯等をもつ土器。3類に区分。（第32・34・38図、図版20・21）

1類　微隆起線が横走するもの（第38図―401～405）

口縁部を1～2条の微隆起線が横走しているが、破片が小さいため途中で文様を描くかどうかは不明である。401はH10区出土、402はⅠ11区出土で、胎土等から同一個体と考えられる。口縁部の2条の微隆起線より下は縄文施文である。H10区出土の403も同様に地文に縄文が施されている。404はH12区より出土し、405はH10区から出土した。本類はいずれもⅢ層の上層部からの出土である。

2類　刻み入りの隆帯が口縁部を巡るもの（第32図―213・第34図―221・第38図―406～408）

a類（第32図―213・第38図―406・407）

頸部がやや外反する器形で、隆帯は短沈線によって刻まれている。第32図の213はG10区より出土した。小突起を有し、その頂部を押圧している。胴部には縄文が施されている。

b類（第34図―221・第38図―408）

隆帯貼付によって肥厚した口唇にも刻みを加えている土器である。第34図の221はH10区より出土し、頸部は無文で胴部には縄文が施されている。刻みはD字状である。第38図の408では隆帯の刻みはD字状で、口唇の刻みは右下がりの短沈線である。

c類（第32図―212・第38図―409～414）

隆帯にD字状の刻みや丸い押圧状の刻みがみられる土器である。第32図の212はⅠ12区出土で、隆帯に丸い刻みを有している。第38図の409～413では、隆帯にD字状の刻みがみられる。

3類　口縁部を沈線が巡るもの（第38図―415）

H10区出土の土器で、口縁部を1条の沈線が巡り、口唇には刻みが加えられている。

第9群　無文土器。5類に区分。（第34・39図、図版20・21）

1類　口唇に刻みをもつもの（第34図―222～227・第39図―416～419）

a類（222・223・416・417）

口唇に短沈線による刻みがみられる。第34図の222・223はH9区より出土した。外反の強い222の口縁部は無文である。223の口縁部も無文で、膨らみをもつ胴部には縄文が施されている。

b類（224～226・418・419）

口唇がD字状や押圧痕状に刻まれ、外反する口縁部は無文で胴部には縄文が施されている。第34図の224・225はⅠ12区より出土した。224の刻みはD字状で、225は押圧痕状である。226の土器は広範囲から破片の出土がみられたが、口唇の刻みは押圧痕状で胴部の縄文はRLである。

c類（227）

口唇の刻みは押圧痕状で、口縁部が直立する器形である。Ⅰ12区およびH12区より出土した。

第34図　西区Ⅳ期の土器(5)　第８群・９群

2類　外反する器形で口縁部に無文帯をもつもの（第34図―228～230・第39図―420～435）

a類（228・420・421）

波状口縁の波頂部を押圧している。228（H10区出土）の胴部地文は大粒のRL縄文である。

b類（229・422～428）

口縁部に最大径をもち胴部の膨らみは弱めである。

c類（230・429～435）

膨らみの大きい胴部に最大径をもつ土器である。

3類　口縁部が内彎あるいは直立するもの（第34図―231・232・第39図―436～445）

a類（436～442）

内彎する口縁部の土器で、口縁部は無文である。胴部地文には縄文を施しているものがある。

b類（231・232・443～445）

直立する口縁部の土器で、口縁部は無文である。胴部地文に縄文がみられる。

4類　胴部破片（446～452）

頸部と胴部の境目辺りから縄文が施されるものが目立つ。

5類　ミニチュア土器（453）

I 12区出土の手捏ねによって整形された土器である。

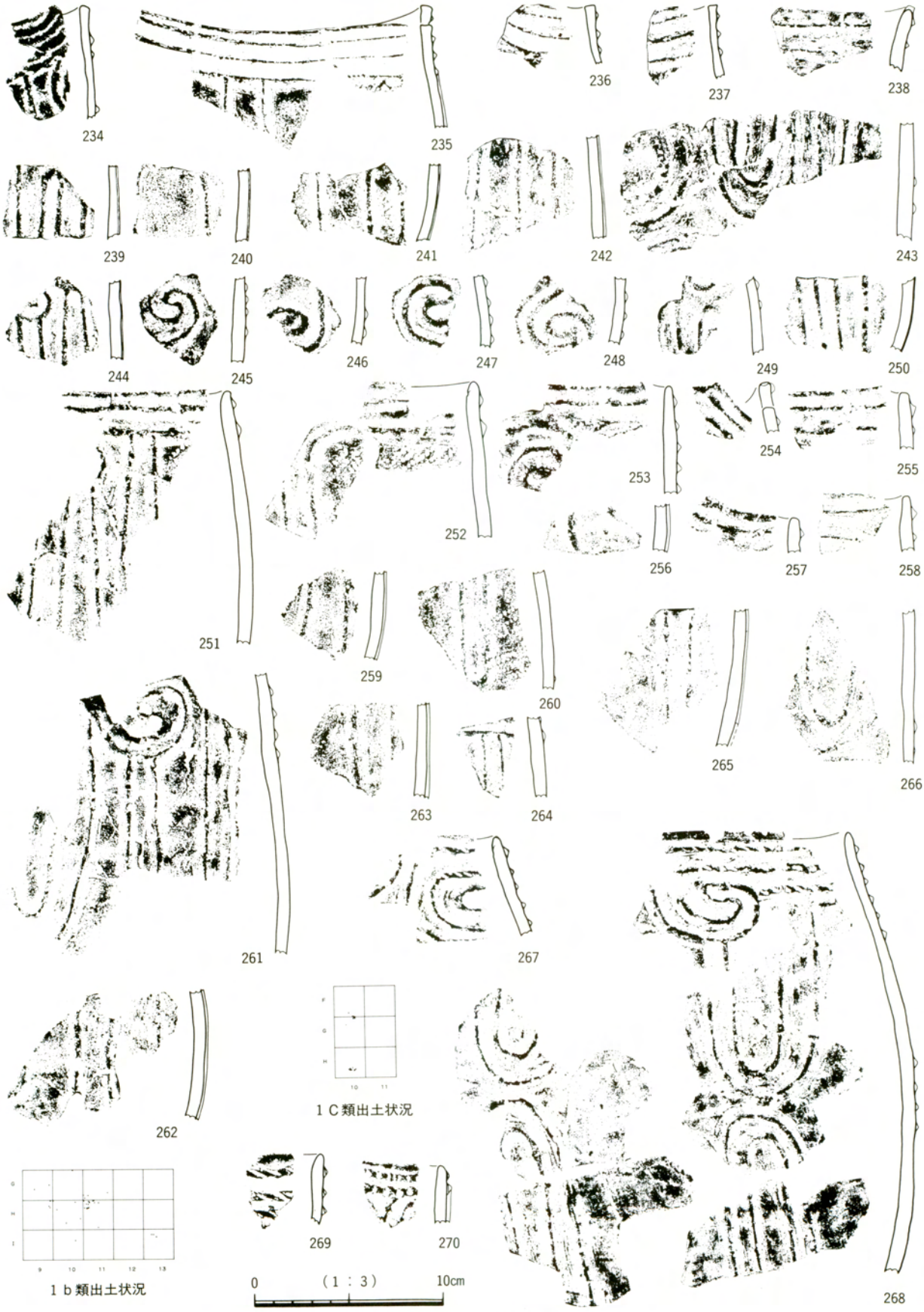
底部（第34図―233・第40図―454～470）

西区III層からは174点の土器底部が出土している。その内の127点（73%）が網代圧痕を伴っている。網代の編み方については、その半数近くが「2本越え2本潜り1本送り」である。

5　西区III層出土の石器（第41～46図、図版22～24）

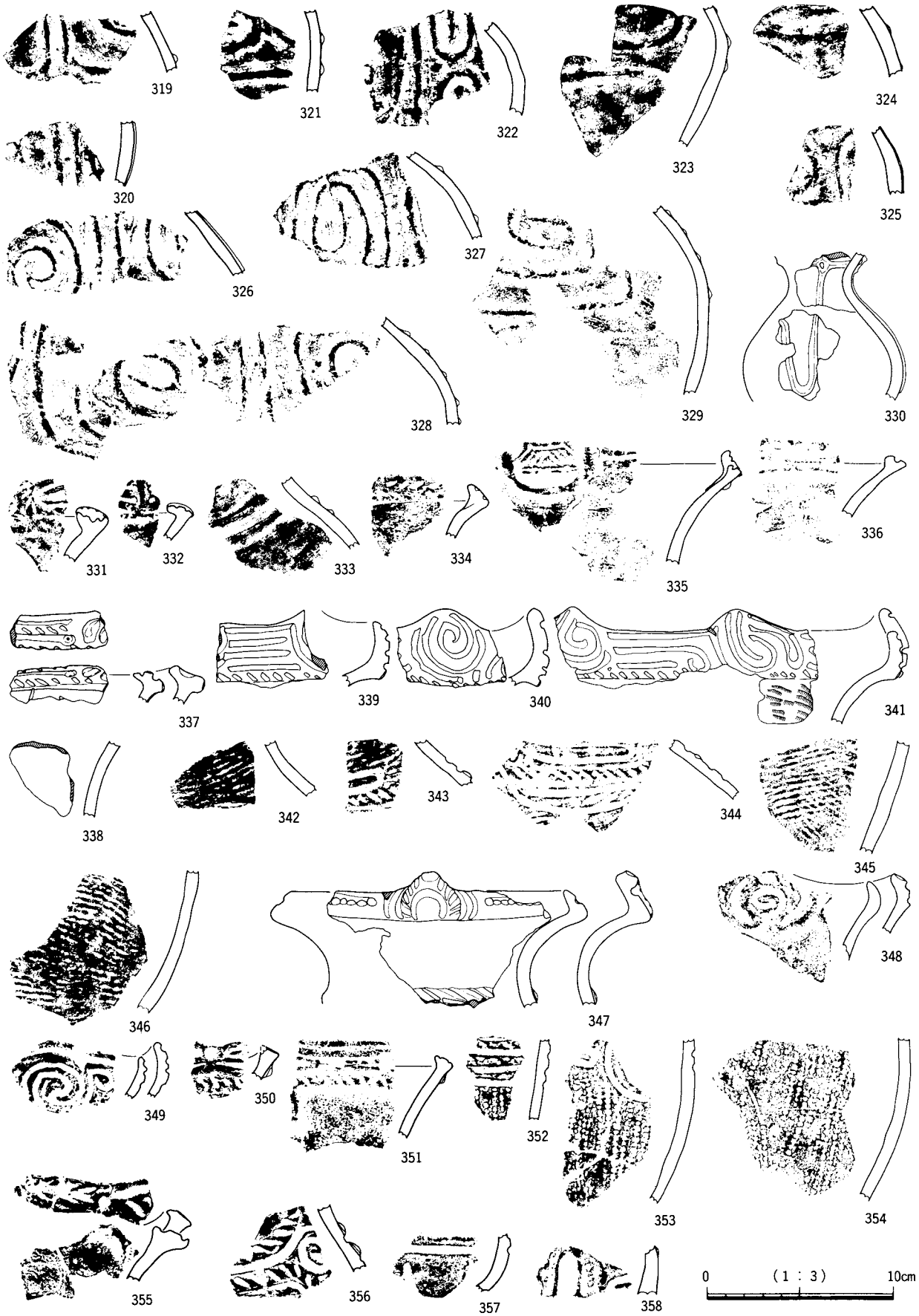
西区III層からは、981点（55.1%）の石器類が出土している。内訳は、石鏃53点、石錐11点、削器4点、ヘラ形石器2点、両極石器17点、抉入石器3点、二次加工のある剥片13点、使用痕のある剥片21点、石核4点、石錘3点、打製石斧54点、横刃形石器3点、礫器2点、磨製石斧10点、磨石・凹石類51点、石皿2点、砥石1点、剥片類727点である。土器の出土状況や遺構との関わりからその大部分がIV期に属すると考えられる。

第41図の471～486はIII層出土の石鏃である。471はG11区出土で、緑灰色のチャート製である。472はH10区、473はG10区出土で、ともに下呂石製である。474～485は11～12区出土の基部の抉りが大きい凹基無茎鏃で、鋸歯状側縁のものが多い。やや角ばった深い抉りに幾分華奢な脚部という組み合わせの製品が目立つ（477、481～485）。石材は478と479が黒曜石、475・477・482・485が下呂石で、他は灰白色および緑灰色のチャートである。486はG10区出土の下呂石製で、基部が丸みを帯びて突出するタイプである。石錐は6点図示した。487はI 11区出土のチャート製で、調整が施されたつまみ状の頭部を有している。488は同じくI 11区出土の玉髄製で、頭部は素材の剥片の形状を留めている。489・490はH11区出土のチャート製で、つまみ状の頭部を持つが錐部が著しく短いタイプである。491・492は錐部と頭部の区分が不明瞭なタイプの石錐で、全面加工のチャート製である。弓形に反った薄い剥片の形状をそのまま利用している。493はH11区のIII層の下層部から出土したチャート製削器である。

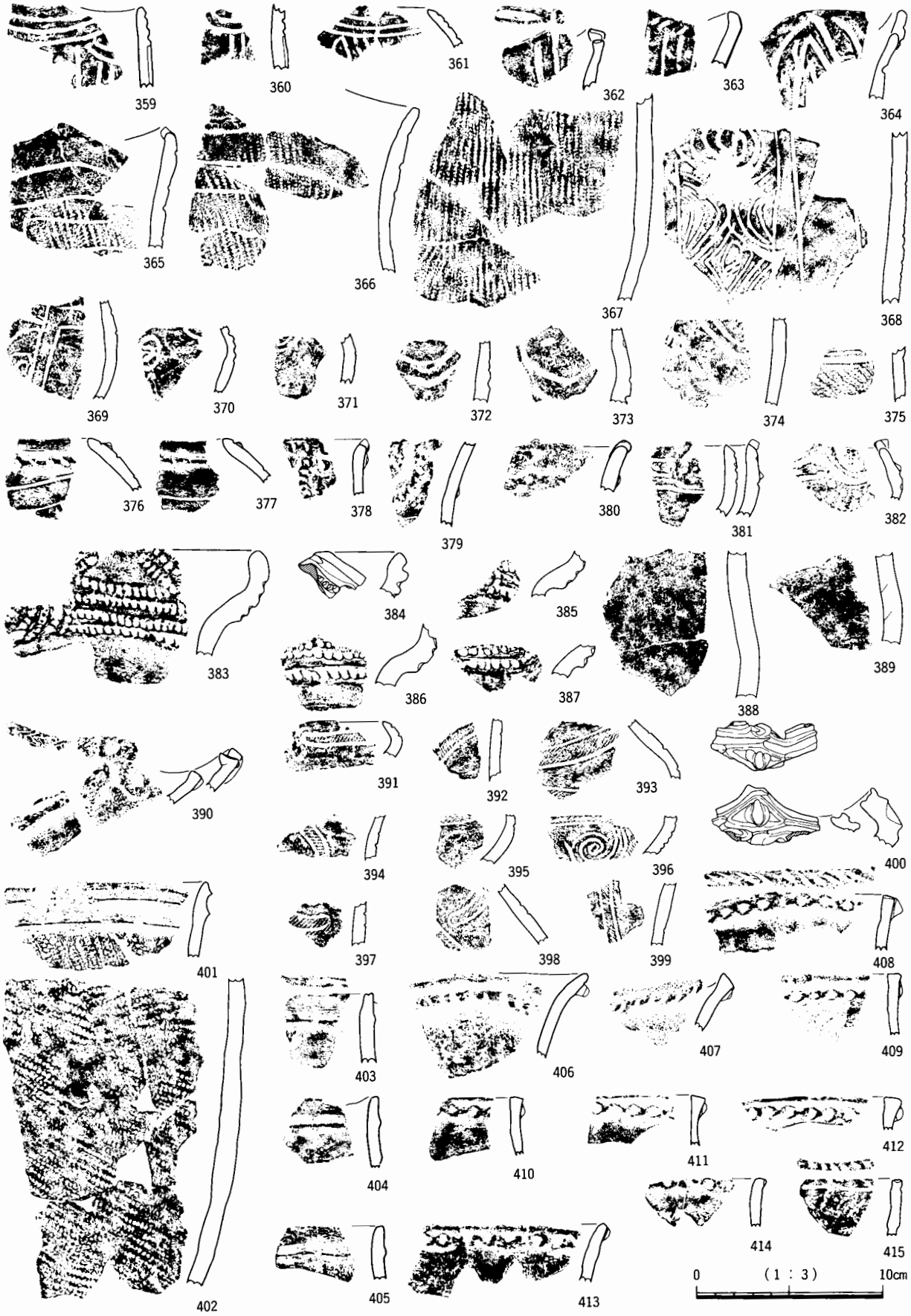


第35図　西区Ⅳ期の土器(6)　第１群１類

第36図　西区Ⅳ期の土器(7)　第１群２類～第２群

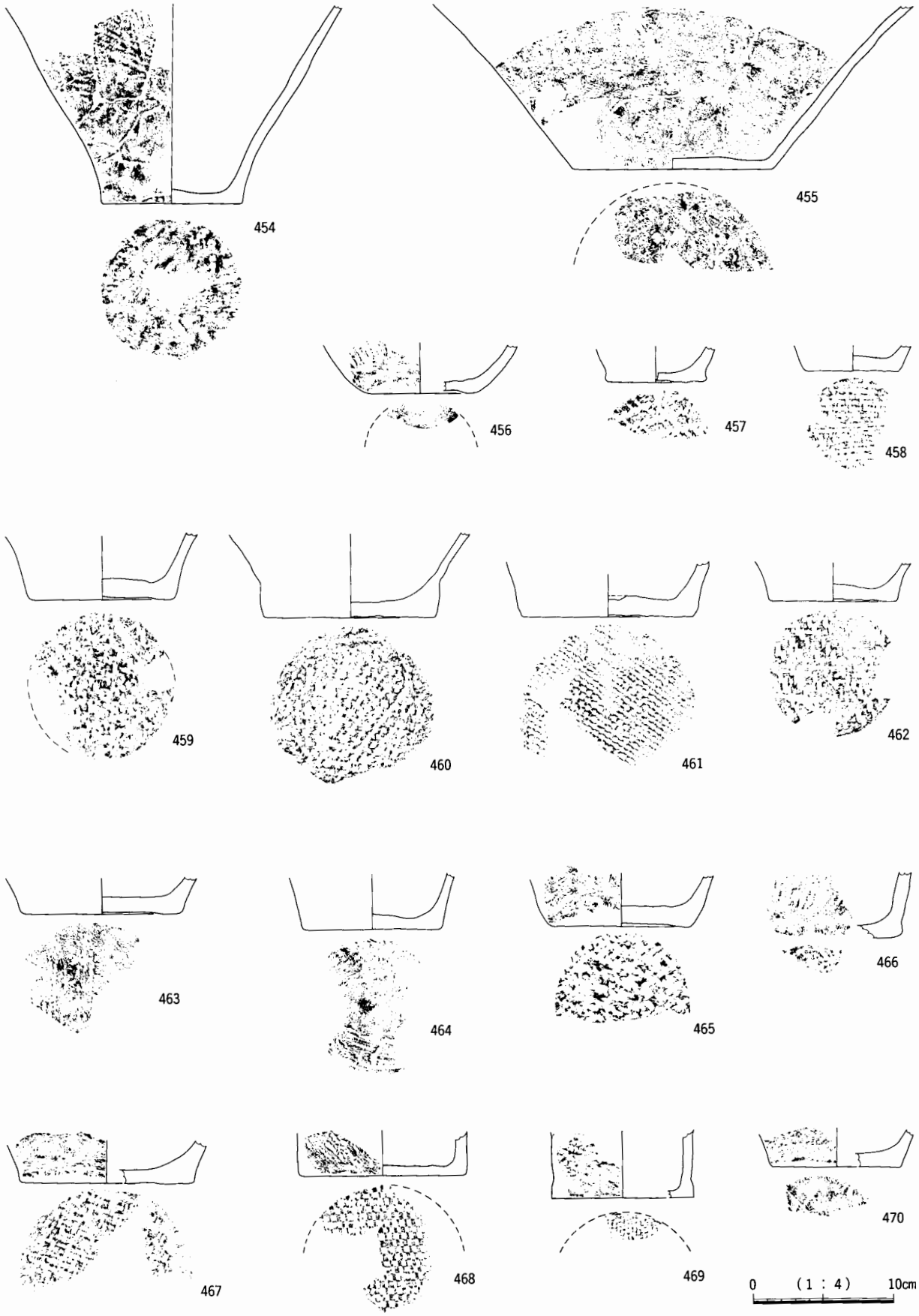


第37図　西区Ⅳ期の土器(8)　第2群～4群



第38図　西区Ⅳ期の土器(9)　第5群～8群

第39図　西区IV期の土器(10)　第9群



第40図　西区Ⅳ期の土器(11)　底部

つまみを意図したような抉りの作出がみられ、刃部は両面加工である。494・495はＩ11区内で約３ｍ離れて出土し、接合できた下呂石製の削器である。側縁の刃部の加工は494が片面、495が両面である。496はＨ10区出土のチャート製のヘラ形石器である。497～500は両極剥離痕のある石器で、いわゆるクサビ形石器と考えられるものである。497はチャート製で、向かい合った二辺にツブレが認められる。その形態から石鏃あるいは石錐の破損品を転用した可能性がある。498はチャート製の縦長タイプ、499は横長タイプの下呂石製である。500の石材は玉髄で、三辺の辺縁部に剥離痕とツブレが認められる。

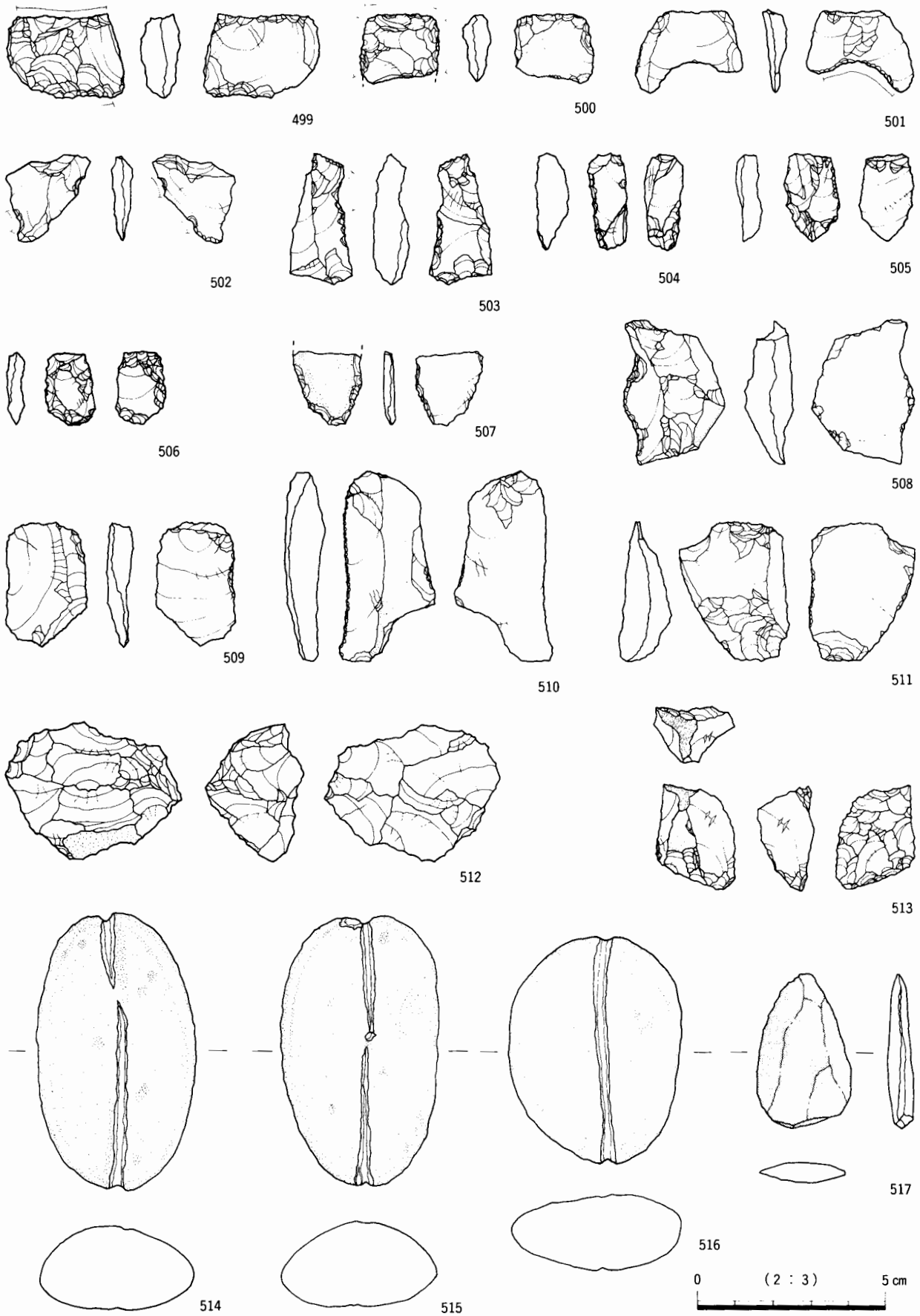
第42図の501～503は抉入（ノッチ）状の加工を有するもので抉入石器としたもの３点である。501はチャート製で、細かい連続剥離によって大きい弧の抉りを作り出している。502は表裏に３ヶ所の抉りの作出が確認できるチャート剥片である。503の石材は下呂石で、縦長剥片の側辺部に浅い抉りが認められる。504～506は側縁部に急角度に調整された連続剥離痕をもつ剥片で、小型の掻器の可能性もある。507･508は側縁に大小の連続剥離痕が認められ、二次加工のある剥片としたものである。509～511は使用痕のある剥片としたものである。510の石材は下呂石で、縦長剥片の左側縁に微細な剥離痕が密接している。石核は２点図示した。512は下呂石、513はチャートである。514～516は凝灰岩製の有溝石錘である。SX21の周辺から２点出土している（514･516）。517は全面に研磨痕を残す厚さ６㎜前後の砂岩製品である。砥石と分類したが、他に用途を持つ磨製石器あるいは石製品とも考えられる。

第43図に打製石斧を６点図示した。518はＦ９区出土の短冊形で、凝灰岩製である。519～523は撥形のタイプである。521はＨ10区出土の緑色片岩製で、両側縁部のツブレがＰ56出土の２本とよく似た状況を呈している（第26図―168・169）。522はＨ11区出土（第15図）で、打製石斧の未製品と考えられる。石材は緑灰色の凝灰岩で、偏平な川原石を原石として利用している。辺縁部には敲石として転用されたような敲打痕を残している。524～526は横刃形石器である。薄い板状の剥片の長辺に粗い調整を加えて刃部を作り出している石器で、すべて凝灰岩製である。

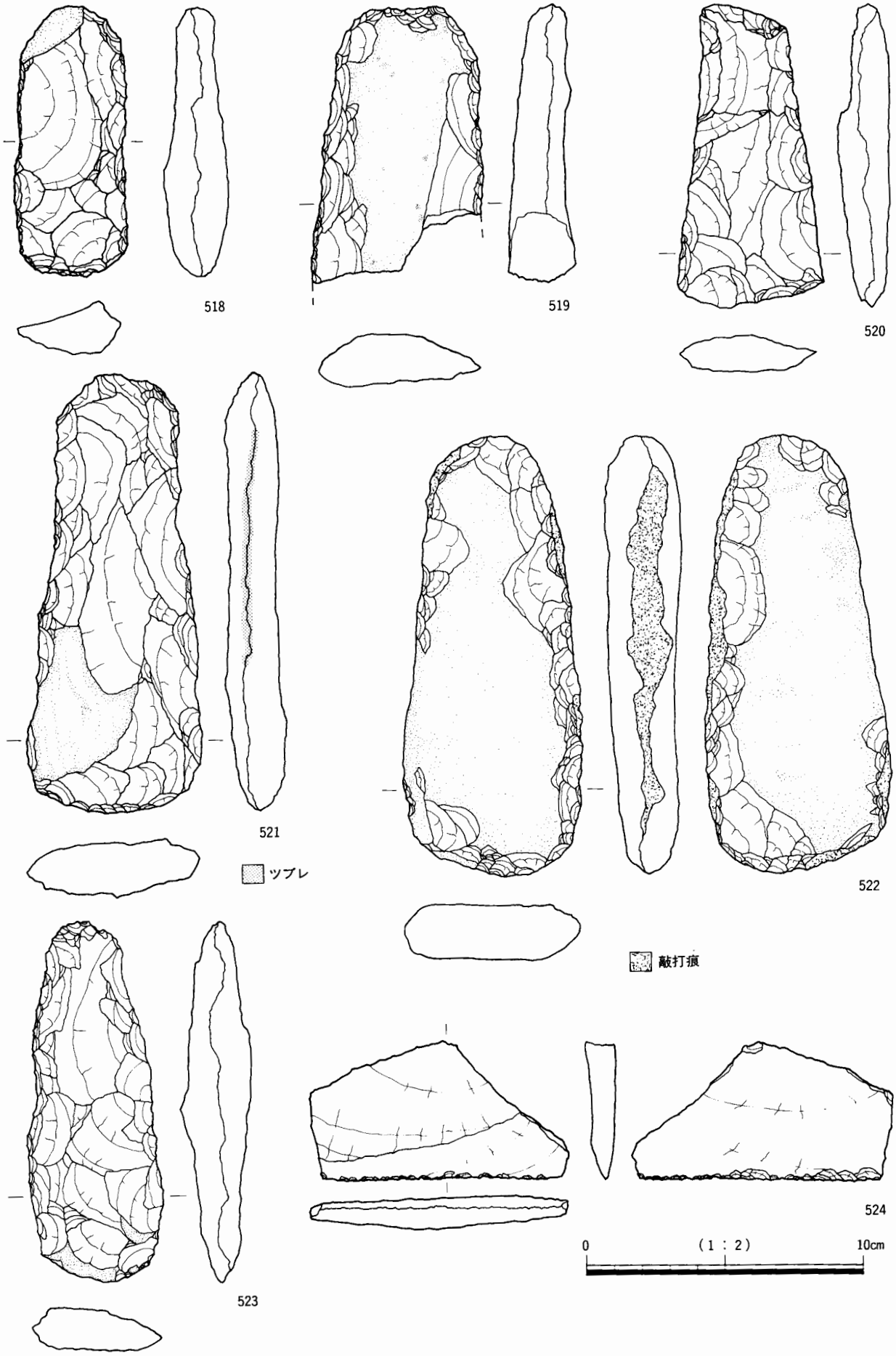
第44図の527･528は飛騨ヒスイ（軟玉）製の礫器である。527はＨ12区より出土した。クサビ形の形状をした自然礫の端部に剥離調整が加えられ、刃部を形成していると考えられる石器である。重さ約574ｇの528はＨ11区より出土し、ハンマーとして使われたと考えられる使用痕を残している。529はＩ12区出土の大型磨製石斧の破片で、砂岩製である。530はＨ９区より出土した定角式磨製石斧である。蛇紋岩製で基部を欠損している。

第45図の531～533は小型の磨製石斧である。531はＨ11区より出土（第15図）し、薄緑色の蛇紋岩製で刃部を大きく欠損している。一方の側面に敲打痕および磨耗痕を残している。532はＩ11区出土で531と同色調で同質の石材を用いた製品である。基部を欠く533はＩ10区出土、ほぼ完形の534はＧ10区出土である。磨石･凹石類は７点図示した。535はＧ９区出土で、断面形が円形のタイプである。表面にすりばち状の凹痕１ヵ所と裏面に浅い凹痕２ヵ所が残されている。536はＨ11区出土で、表裏両面のややザラつく磨痕と右側面の敲打痕が顕著である。Ｈ９区出土の537は、表面の磨痕は滑らかで、裏面の磨痕はザラついている。538はＨ10区出土で、表裏両面のザラつく磨面上に５個の明確な凹痕が残されている。539はＩ10区出土で、全面に顕著な磨面が観察される。特に上面は大きく面取りがなされ、中央部に深い抉りを有している。540･541は同一グリッド内より出土した資料である（Ｈ11区）。断面形が六角形で幅の広い面を磨面にし、その間の幅の狭い面を敲打面にしている。542はＨ11区のIII層の下層部から出土した磨石で、一方の側面に広く敲打痕を残している。

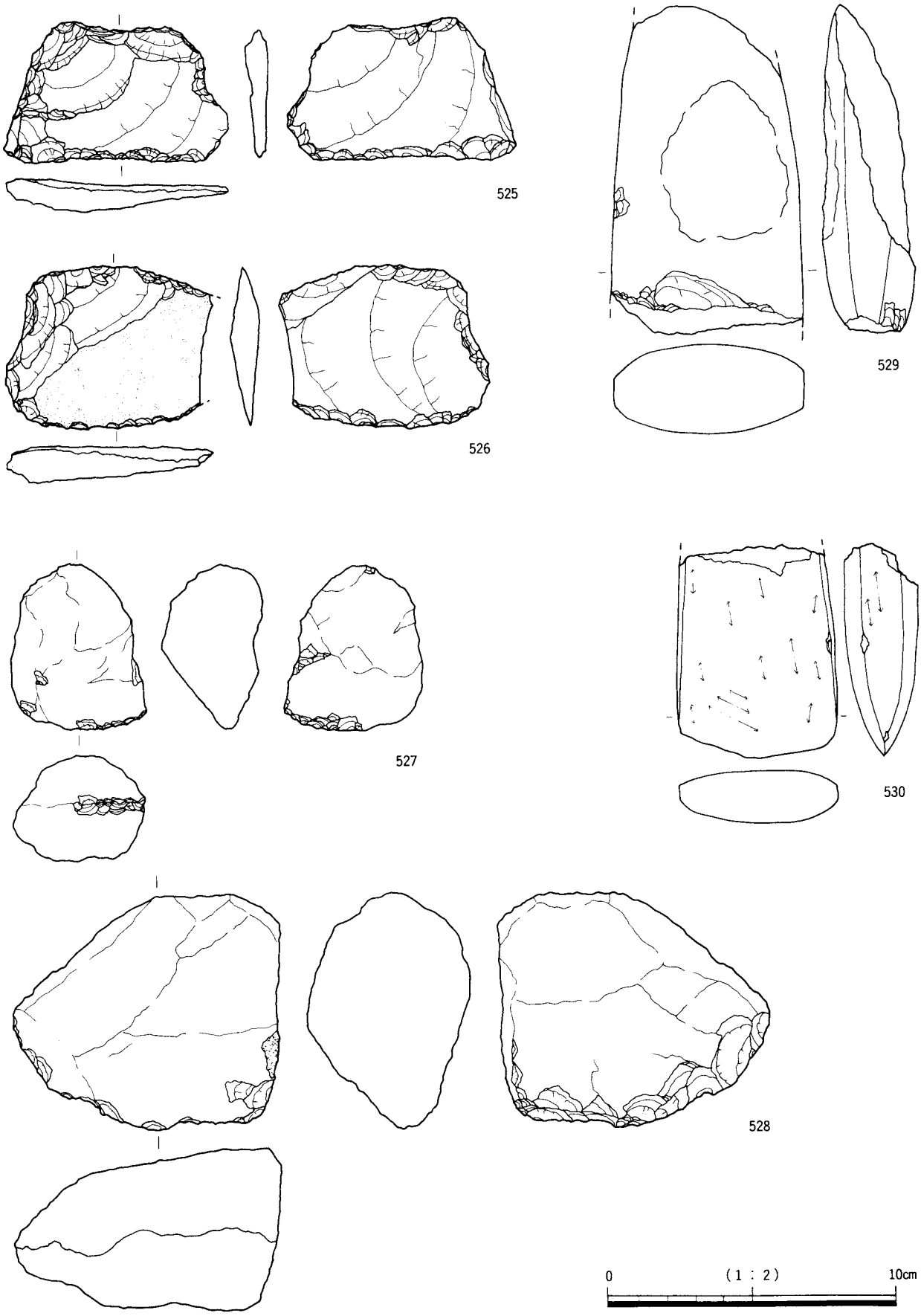
第41図　西区Ⅲ層出土石器(1)



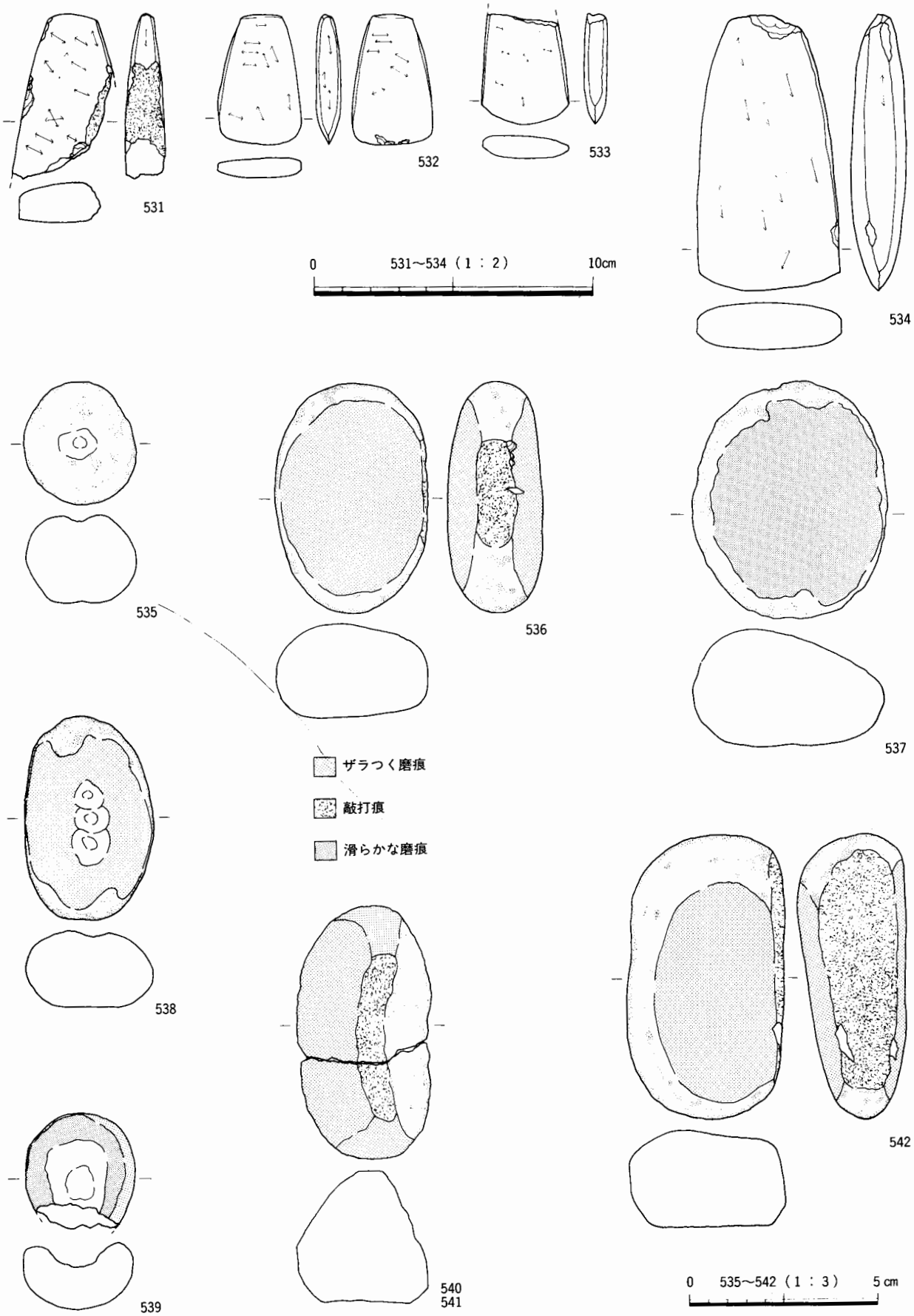
第42図　西区Ⅲ層出土石器(2)



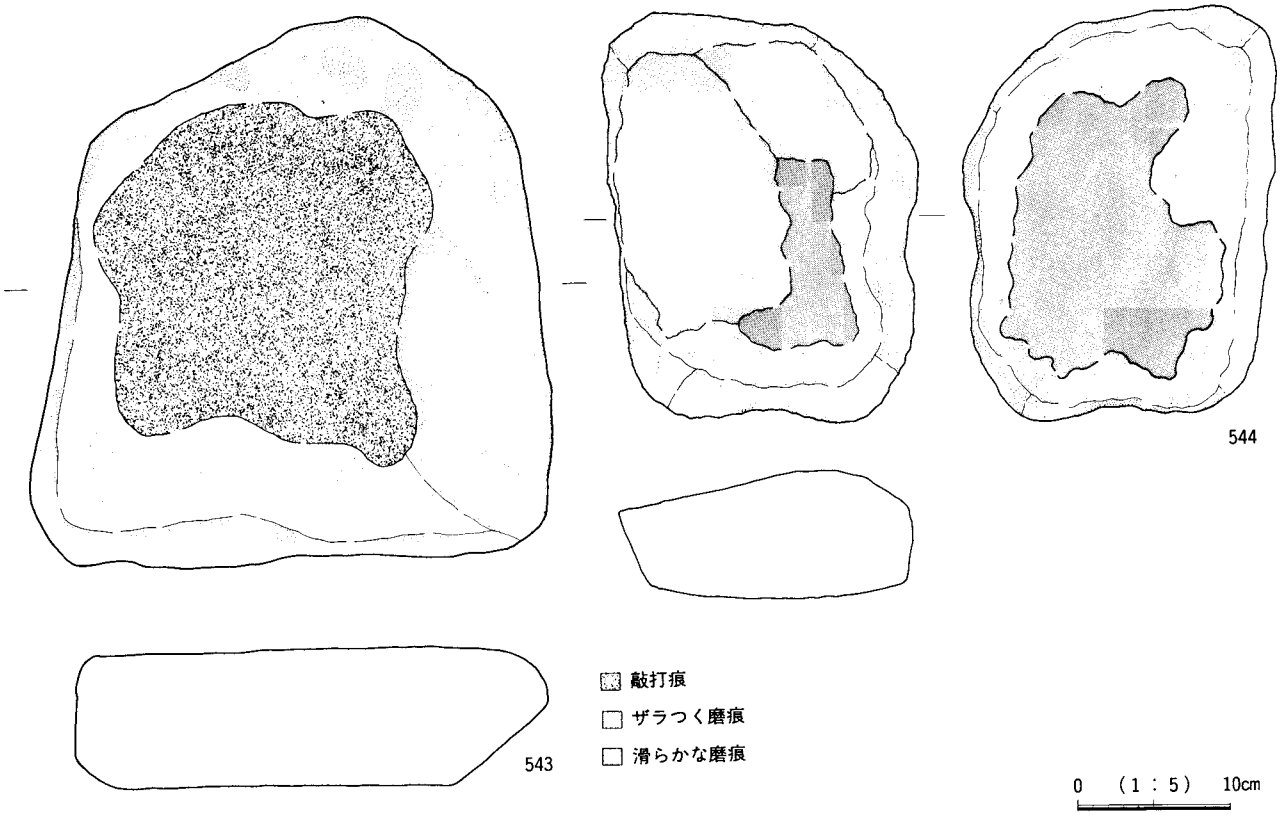
第43図　西区Ⅲ層出土石器(3)



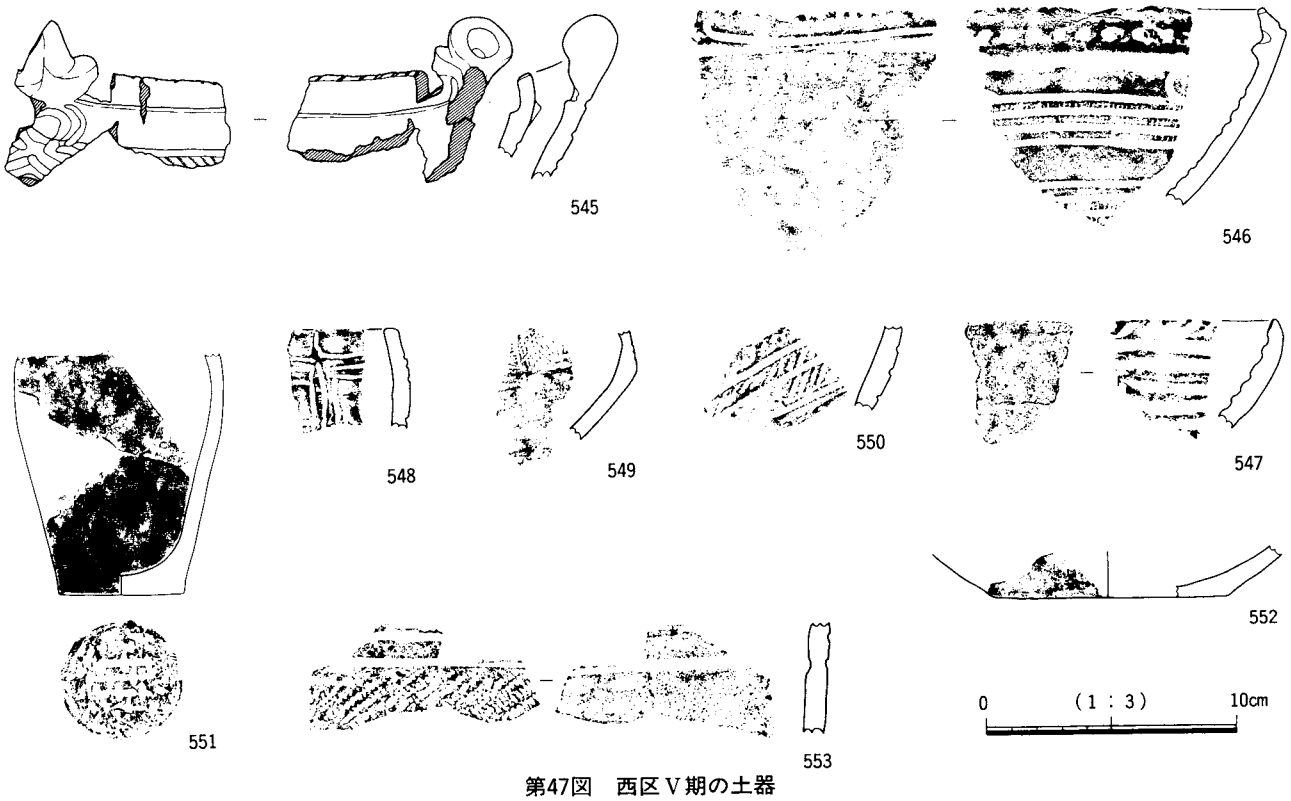
第44図　西区III層出土石器(4)



第45図　西区Ⅲ層出土石器(5)



第46図　西区Ⅲ層出土石器(6)



第47図　西区Ⅴ期の土器

第46図の543はSX15周辺より出土した石皿である(第15図)。偏平な凝灰岩の上面に細かい傷を無数に伴う敲打痕が観察できる。石器製作等に使用された作業台の可能性がある。544はＩ11区より出土した石皿で、表裏両面に滑らかな磨面とややザラつく磨面を有している。

6　Ｖ期の土器（第47図、図版24）

西区のIIｃ層では縄文後期中葉から後葉の土器が出土している。第47図の545はＩ９区から出土した。突起部を含む土器口縁部の破片である。沈線による曲線文がみられ、口唇に刻みを有している。546・547はＩ13区出土の内面施文の浅鉢である。割れ口部分は磨耗が顕著で、ローリングによるものと考えられる。548はＩ11区出土の沈線文を有する土器の口縁部である。以上の４点は加曽利Ｂ１式に比定できる。549･550はＨ12区出土の土器の胴部破片である。551はI12～13区出土の小型土器の胴部で、黒褐色の器面はよく磨かれている。552はＩ11区出土の浅鉢の底部破片である。553はＩ９区出土の地文に縄文を施す土器である。沈線が２条横走し、裏面にも沈線が１条巡っている。

7　VI期の土器（第48図、図版25）

第１群　晩期前半の土器（554～558・560～562）

Ａ類　隆帯文の土器（554）

第48図の554はＦ11区IIａ層より出土した。口縁部に１条の圧痕付隆帯が貼付されている深鉢である。粘土紐を貼り付けた突起の頂部を刺突している。胴部は無文で輪積み痕を残している。

Ｂ類　中屋式段階の土器（555～558）

555はＦ10区IIａ層より出土した。口縁部がくの字状に屈曲して外反する深鉢で、口唇に２条の沈線がみられる。頸部と胴部を連続刺突文が巡り、胴部文様帯には鍵手文がみられる。地文は擬縄文と条線文である。556はＧ８区II層出土、557はＦ９区II層出土、558はＨ12区II層出土である。

Ｃ類　刺突文のある土器（560）

560はＩ９区II層より出土した小型の土器で、内外に小刺突文と凹線文がみられる。

Ｄ類　沈線文の土器（561・562）

細い沈線によって施文される土器の口縁部である。第２群に含まれる可能性もある。561はＨ11区IIａ層より、562はＩ12区IIａ層よりそれぞれ出土した。

第２群　晩期後半の土器（559・563～569）

Ａ類　三叉状の文様をもつ土器（563～566・569）

Ｉ12区出土で、564･566は瘤状の突起を有している。566は磨き込んで隆線部を作り出す浮線文的な土器である。569は沈線内に朱が残る塗彩土器である。

Ｂ類　口縁外帯をもつ土器（567・568）

567はＩ13区II層出土、568はＨ10区IIａ層出土の口縁部破片である。568は薄手の土器で、右下に補修孔を有している。口縁端部内面には凹線がみられる。

Ｃ類　短沈線文の土器（559）

Ｆ９区IIａ層出土の土器である。口縁部を右上がりの短沈線で刻み、その下を２条の凹線が巡って

第48図　西区Ⅳ期の土器

いる。胴部には条痕文がみられる。

第3群　晩期の無文土器（570～582）

A類　口唇に刻みのある土器（570）

Ⅰ13区Ⅱa層出土の鉢形の土器である。口唇の一部を縦に刻んでいる。

B類　口唇を押圧する土器（571～573）

3点出土している。571はH11区Ⅱa層、572はⅠ13区Ⅱa層、573はF9区Ⅱa層出土である。

C類　厚手の無文土器（574）

574はF10区および11区のⅡa層から出土した。口縁部が直立する厚手の無文土器である。

D類　輪積み痕の残る土器（575・576）

F10区およびF9区のⅡa層から出土している。

E類　条痕文の土器（577・578）

Ⅰ12区Ⅱa層から出土している。それぞれ別個体と考えられる。

底部（579～582）

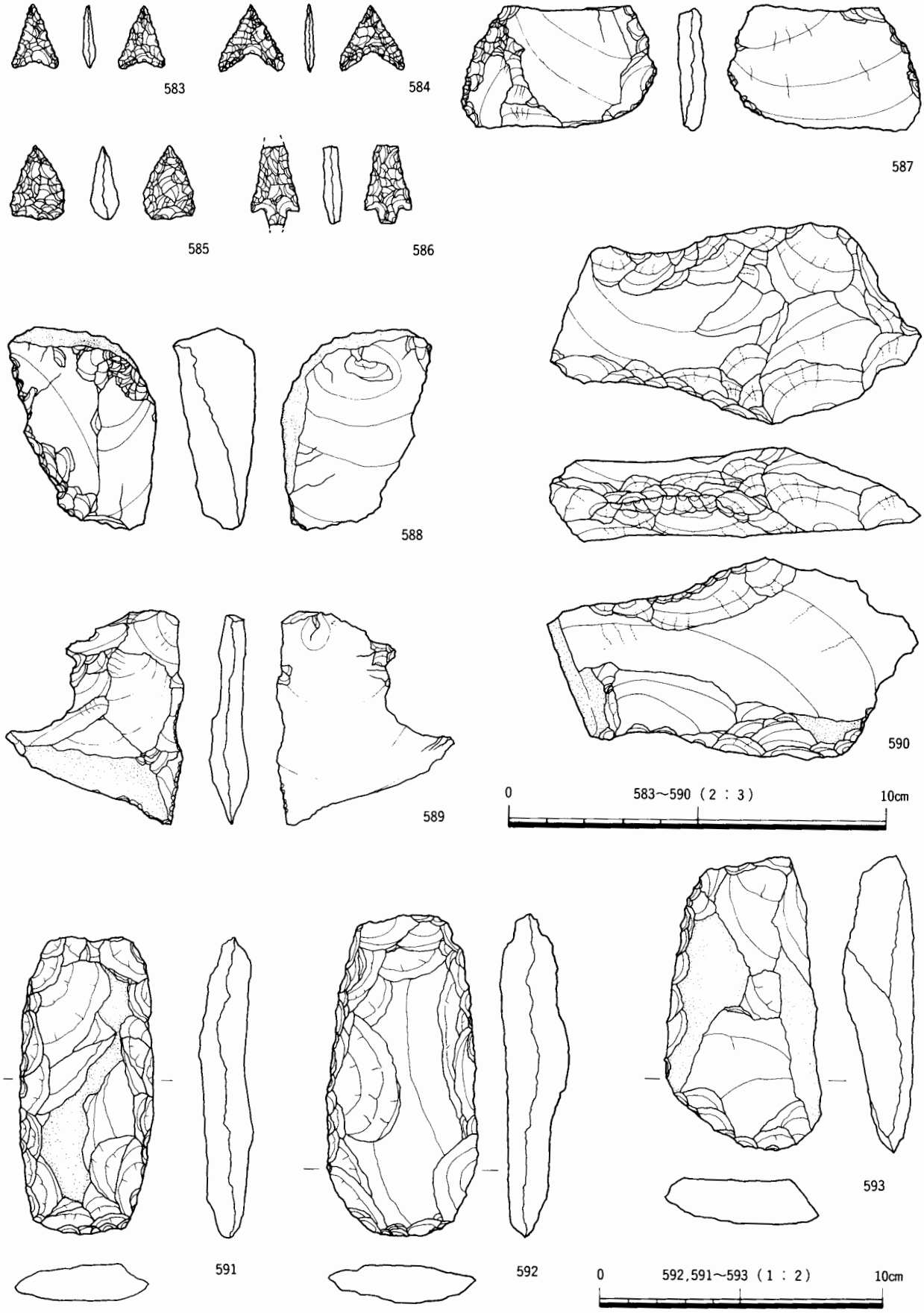
西区Ⅱ層からは39点の土器底部が出土している。Ⅴ期のものも含まれるが、その出土状況から大半はⅥ期に属するものと考えられる。葉脈圧痕のつくものが目立った。

8　西区Ⅰ・Ⅱ層出土の石器（第49～50図、図版26）

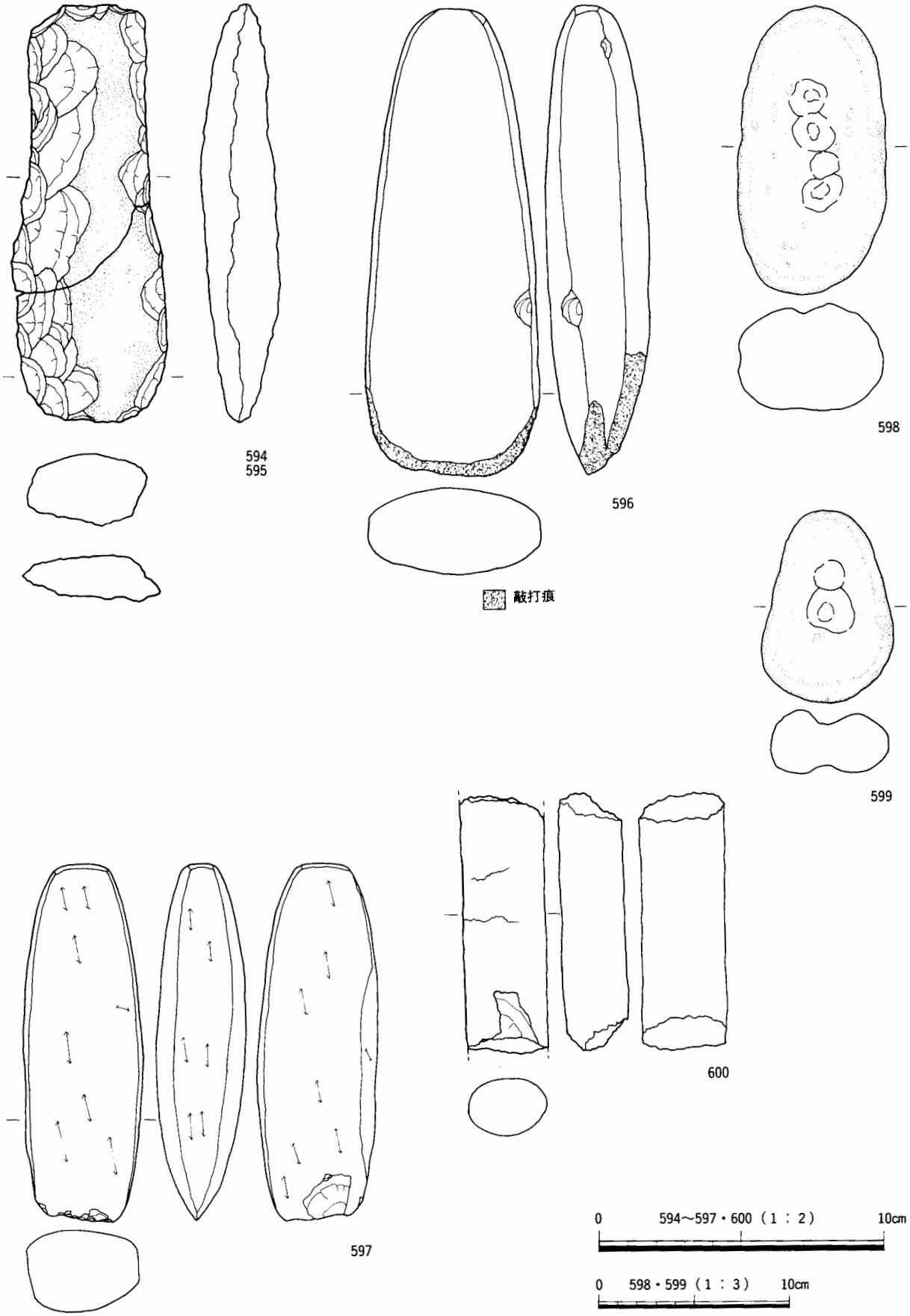
西区Ⅰ・Ⅱ層からは、142点（8％）の石器類が出土している。内訳は、石鏃5点、削器1点、二次加工のある剥片4点、使用痕のある剥片4点、石核1点、打製石斧41点、磨製石斧2点、磨石・凹石類19点、剥片類65点である。土器の出土状況からその大部分がⅤ期～Ⅵ期に属すると考えられるが、15～16区出土のものはⅣ期以前に溯るものも含まれると思われる。

第49図の583はⅠ13区Ⅱ層出土の石鏃である。下呂石製で基部の抉りが浅めの凹基無茎鏃である。584はⅠ16区Ⅲ層より出土した。灰色チャート製の基部の抉りが大きい薄手のタイプで、丁寧な仕上げの製品である。585F10区Ⅱ層より出土した肉厚な平基鏃である。586はⅠ13区Ⅱ層より出土した。欠損部位が目立つが、下呂石製の凹基有茎鏃である。587はH11区Ⅱd層より出土した赤色チャート製の削器で、側縁部に刃部を有している。588は側辺部に二次加工のあるチャート剥片である。Ⅰ12区Ⅱ層出土で、原石の礫の自然面を残している。589はⅠ8区Ⅱ層出土の使用痕のある下呂石剥片である。辺縁部に微細な剥離痕が密接している。590はG10区Ⅱ層出土の下呂石の石核である。打製石斧は4点図示した。591はⅠ12区Ⅱd層から出土した。薄手の凝灰岩製で短冊形を呈している。592はG10区Ⅱ層から、593はⅠ12区Ⅱ層よりそれぞれ出土したものである。594・595はⅠ13区Ⅱ層出土で、破片同士は隣接していた。周辺からはⅥ期の無文土器が出土している。

第50図の596はⅠ12区Ⅱd層より出土した磨製石斧である。凝灰岩製で、刃部は欠損し磨耗している。もう1点の597はG10区Ⅱc層より出土した。蛇紋岩製の細長いタイプで、刃こぼれがみられる。磨石・凹石類は2点図示した。598はH7区Ⅱ層より出土し、表面に4個、裏面に3個、側面に1個の凹痕がみられる。F10区Ⅱ層出土の599は、表裏両面に2個ずつの凹痕が残されている。600はH9区Ⅱ層よ



第49図　西区II層出土石器(1)



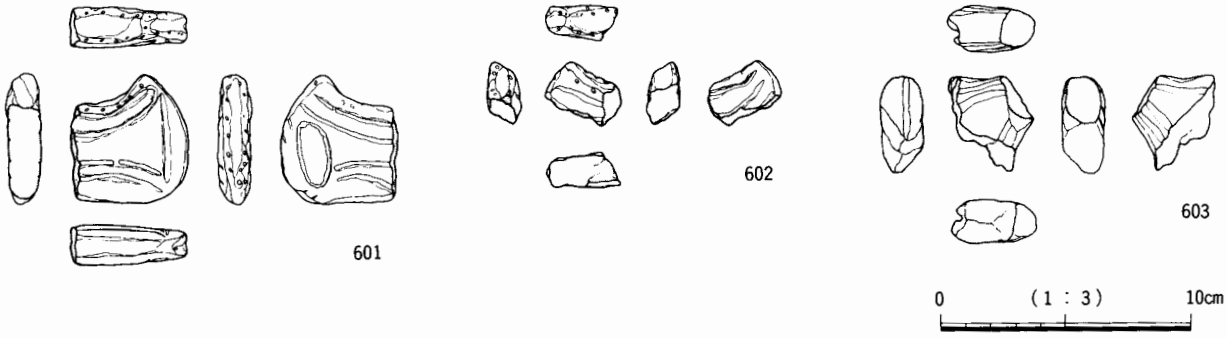
第50図　西区Ⅱ層出土石器(2)・石製品

り出土した石剣の破片資料である。緑色片岩製で被熱による変色が認められる。

9　土偶（第51図、図版24）

西区では３点の土偶破片が出土している。

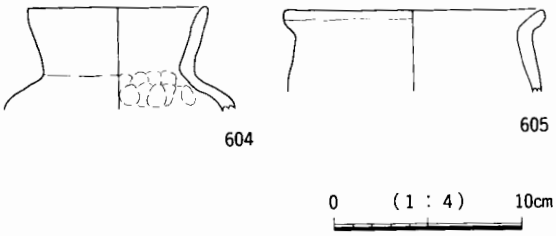
第51図の601は土偶左腕部と考えられる破片である。G11区III層より出土したものであるが、出土地点は段丘の上段へ続く斜面上で、近くからはIII期の土器（第29図―195）も出土している。段丘上段からの流れ込みの可能性があり、正確な所属時期の比定は困難である。破片は上面と側面をわずかに窪ませ、周縁に沿って刺突列文が施されている。また、上面は正面と考えられる側が低く作り出されている。他方、下面が簡単な整形にとどまり文様が省かれているのは同箇所が視覚的にあまり重要ではなかったためと考えられ、本土偶について腕を左右に水平に広げたような形態であると想定した。施文は沈線により、枠状文が認められる。部分的にナデによる調整箇所を確認できるが、全体としてはあまり丁寧な整形はなされていない。胴部との接合面付近で折損したと考えられるが、破損面には粘土接合痕は認められない。淡黄色を呈し、焼成は普通である。602は土偶の右腕部の破片である。Ｆ９区III層より出土した。出土地点はSX21に近い谷の部分であるが、遺物整理過程で土偶と判明したため出土状況の詳細は不明である。淡黄色を呈し、焼成は普通である。胎土等から601と同一個体である可能性が高い。603はＩ13区IIｃ層より出土した。周辺からはＶ期の土器が出土している。肩部もしくは股間部（この場合には実測図の天地は逆になる）に近い胴部砕片と考えられるが断定はできない。破損面に直径2.5～３㎜程の棒状工具によると思われる貫通孔が一部認められる。孔は図の上方へ抜けており、焼成時における木芯の有無については判断できなかったが、製作技法に関わるものとは考え難い。にぶい黄色を呈し、焼成は普通である。



第51図　西区出土の土偶

10　歴史時代の遺物（第52図、図版25）

平安時代のものと考えられる、土師器が２点出土している。604はＩ12区IIａ層より出土し、605はＩ15区II層出土である。



第52図　西区の歴史時代の遺物

第４章　東区の遺構と遺物

第１節　基本的層序

たのもと遺跡の東区は、西区から約50m上流側に位置し、標高は865m前後である。調査範囲は、西側の牧草地と水路を挟んだ東側の水田部分である。東側の水田では、水田造成時に斜面に沿って黒色土層がほとんど削り取られたようである。西側の牧草地では、４段９枚の階段状の水田であった場所が、トラクターを使って削平や埋土によって再造成されており、攪乱が著しい状況であった。表面に遺物が散乱していたので、重機による表土の剝ぎ取りは雑草の除去程度に止めた。以下、第54図に示した土層断面図を補説したい。

第Ⅰ層　攪乱層である。再造成時に崩され埋め戻された部分が大半で、遺物を含んでいる。

第Ⅱ層　旧耕作土、および開墾時に斜面上部より削り取られ埋め戻されられたと考えられる部分である。遺物を含むが、やはり攪乱層である。

第Ⅲ層(10YR2/1　黒色土)　開墾等の人為的な影響を受けていないと考えられる黒色土層である。縄文時代の遺物包含層であるが、削平され部分的にしか残っていない。西区のような砂礫の堆積層は、この層にも、埋め戻されたⅠ・Ⅱ層にも見当たらなかった。

第Ⅳ層(10YR3/2　黒褐色土)　一部に縄文早期の遺物を含む黒褐色土層である。Ⅲ層と同様に削平により消失したと考えられる部分が目立った。

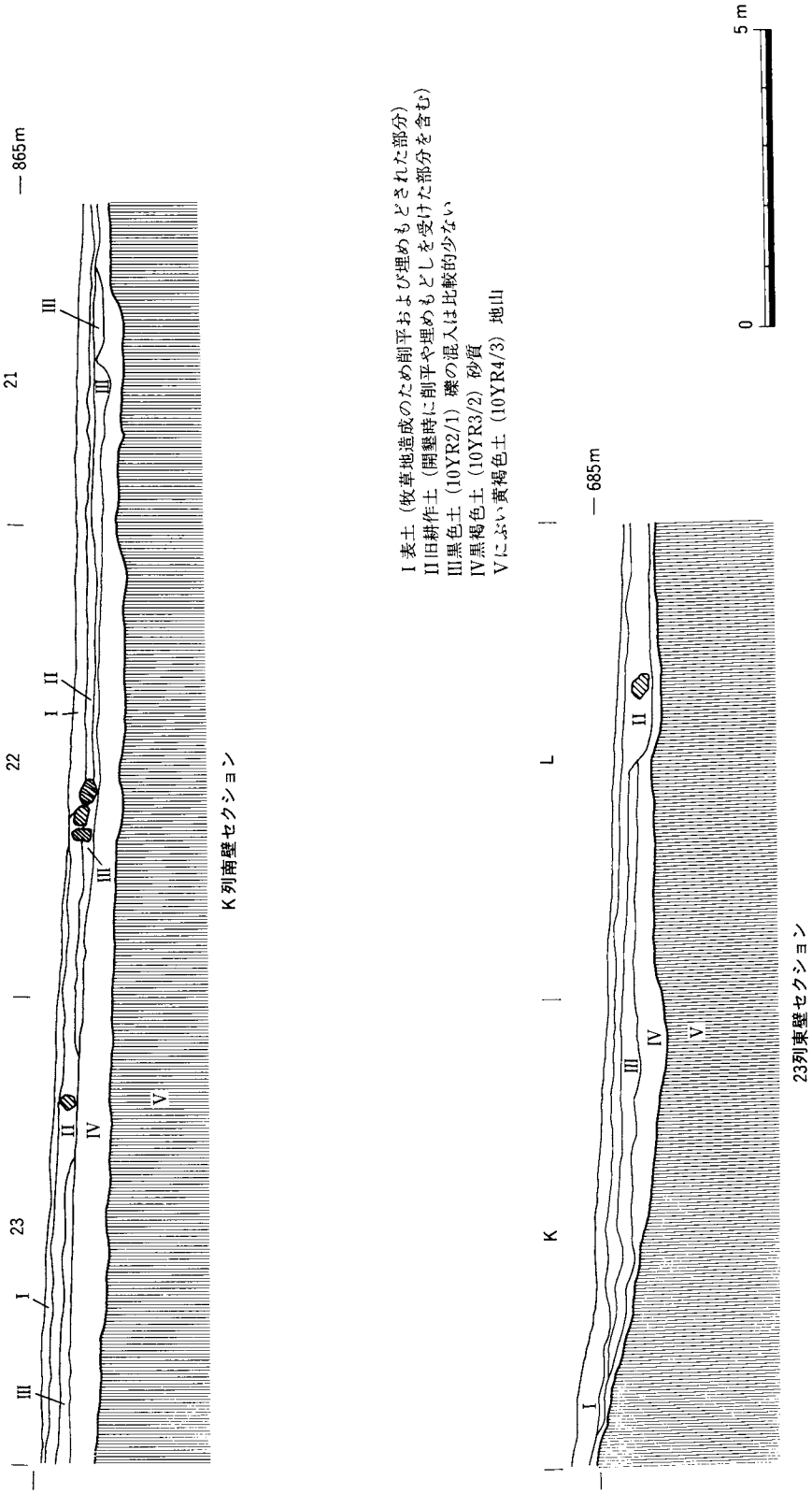
第Ⅴ層（10YR4/3　にぶい黄褐色土）　大小の礫を多く含む砂質土で、地山と判断した層である。

第２節　遺構と出土遺物

日当たりの良い南向きの緩斜面である東区からは、西に白山を遠望することができる。ここからは、約10,000点の遺物（全体の３分の１）が出土した（第55図)。遺物包含層の大半が消失しており、開墾等により遺物が大きく移動しているようである。縄文時代の遺物包含層が比較的よく残っていたのは、K22区・M22区・N23区である。縄文晩期の遺物の出土が顕著であった。

東区で確認できた遺構は、縄文早期の炉穴（FP）１基、不明遺構（SX）３基、土坑（SK）４基、ピット（P）32基である（第53図)。調査区の中央を南西方向に流れる水田の水路に平行するようにかつての湧水路が存在し、SXは水場に関連する遺構と考えられる。土坑・ピット群は、水路の北側、水の流れを基準にすると右岸側に集中している。

第53図　遺構配置図（東区）



第54図　土層断面図（東区）

1　炉穴

FP 1（第56図、図版31）

L20区IV層を掘削中に縄文早期後葉の遺構と考えられる炉穴1基を検出した。大きさは84×72×40cmで、掘り込みはすり鉢形を呈し、平面形は楕円形である。底部に偏平な石を配し、底部の石や壁面の土には被熱による変色の跡がみられた。なお、周辺および埋土に焼礫は見られなかった。壁面および下層に残っていた炭化材の^{14}C年代測定値は、6,670±160yrBPであった。K25区IV層より貝殻条痕文の土器が出土しており、同時期の遺物と判断した(第61図—625)。第56図の606はFP 1の東方約1.4mの地点で同遺構検出面より出土した石鏃である。灰白色のチャート製で、基部のU字形の抉りが特徴的な鍬形鏃である。

2　不明遺構（SX）

東区の不明遺構3基はすべて旧水田用水路の近辺で検出したものである（第53図、第5表)。

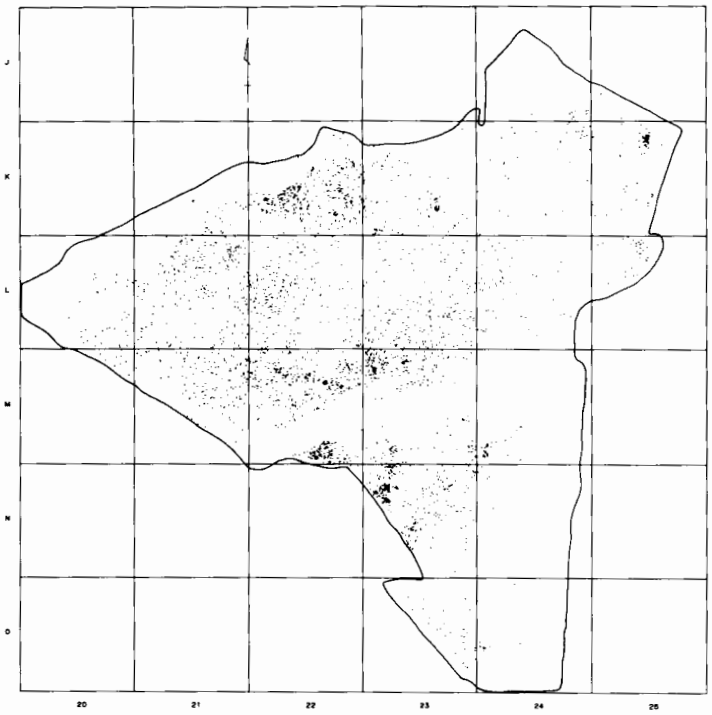
水場関連遺構（SX22・SX24）（第57・58図、図版5）

M23区の中央辺りからM22区の南側に向けて用水路があり、周辺ではやや粘り気があり木の根等を多く含む黒色土（10YR2/1）の堆積がみられた。この層は耕作土（II層）の下に30cm程の厚さで続いており、縄文土器片と灰釉陶器片が混在していたので攪乱層と考えられた。最初にM22区と23区の境目付近でトチの種子が出土し、ピット等を想定し精査を行ったがプランの確認には至らず攪乱による混入と判断した。掘削が進み下層近くになって縄文晩期の土器の出土が目立ち出した頃、M22区の中央部でトチの種子が出土した。精査の結果、下層の砂礫層(明黄褐色2.5Y7/6)を掘り込んだ90×70×22cmの長方形のプランを確認した。内部の黒褐色土（10YR2/2）中にトチの種子が多く含まれているようだったので、自然科学分析のためのサンプリングを行った(第5章)。湿式の貯蔵穴とも考えられたが、その時点で時期および性格不明の遺構であったのでSX22とした。中から一端に焦げ跡のある半割丸太（直径6cm、長さ35cm）と分割材（11×8×0.8cm）が出土したが、ともにクリ材であった。南側に同じような大きさの角礫が3個、落ち込むように入り込んでいた。底部の灰オリーブ色(5YR6/2）の砂層からは、完形のクルミがまとまって出土した。

SX22から出土したおもな植物種子は、トチが湿重量で約360g、クリ同12g(8個体)、完形のクルミ28個（湿重量260g）である。なお、遺構内出土のトチの種子95.3g（乾燥重量21.03g）を用いた^{14}C年代測定の結果は、2,810±110yrBPであった。周辺の状況からこの場所がかつての湧水路または小谷の一部であったと考えられる。SX22は水を利用した堅果類の処理に関連する縄文晩期の遺構と考えたい[1)]。

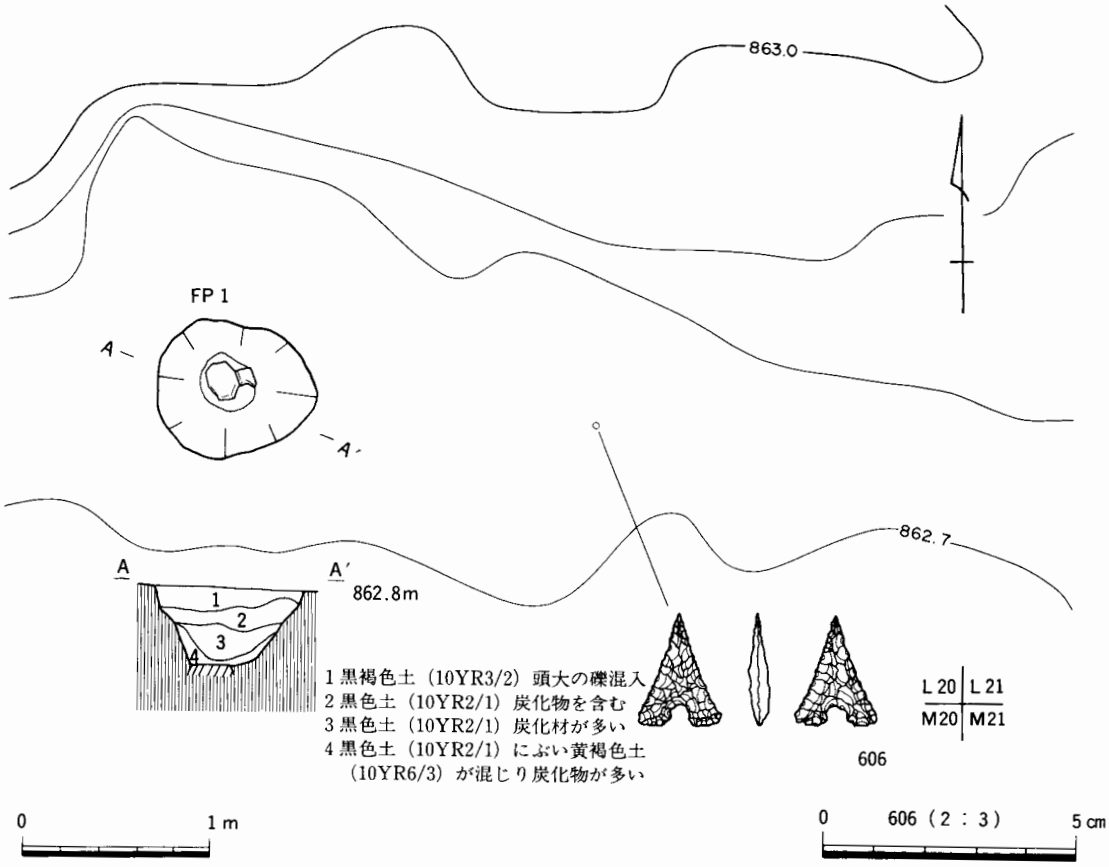
第5表　不明遺構一覧表（東区）

東区No.	No.	遺構名	地区	内　訳	出土遺物
1	19	SX22	M22III	縄文晩期水場	木片　植物種子（トチ・クルミ等）
2	21	SX24	M22IIIS	木杭	木杭片
3	22	SX26	M23II	種子出土ピット	灰釉陶器片1　植物種子（スモモ他）

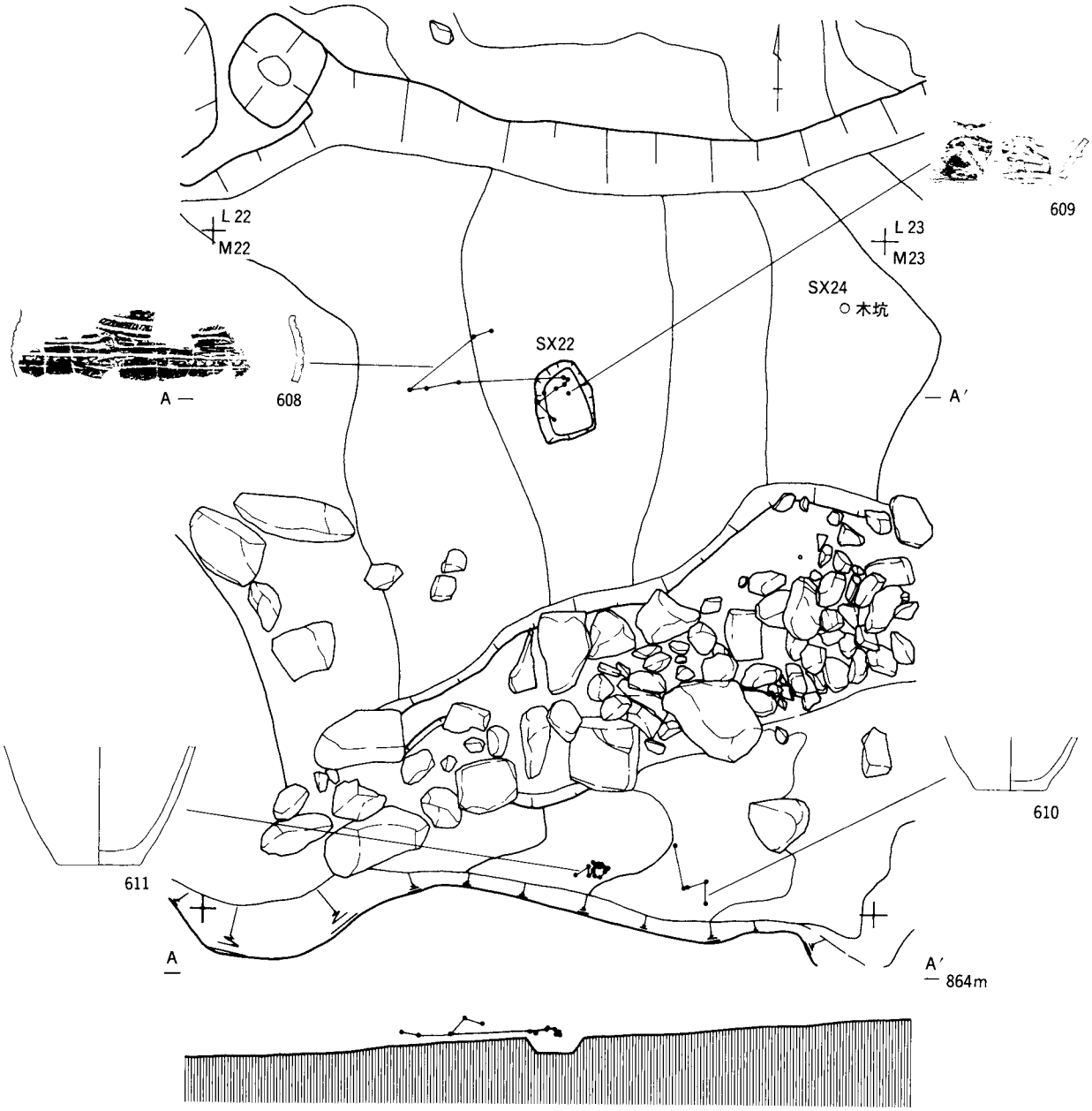


0　10m

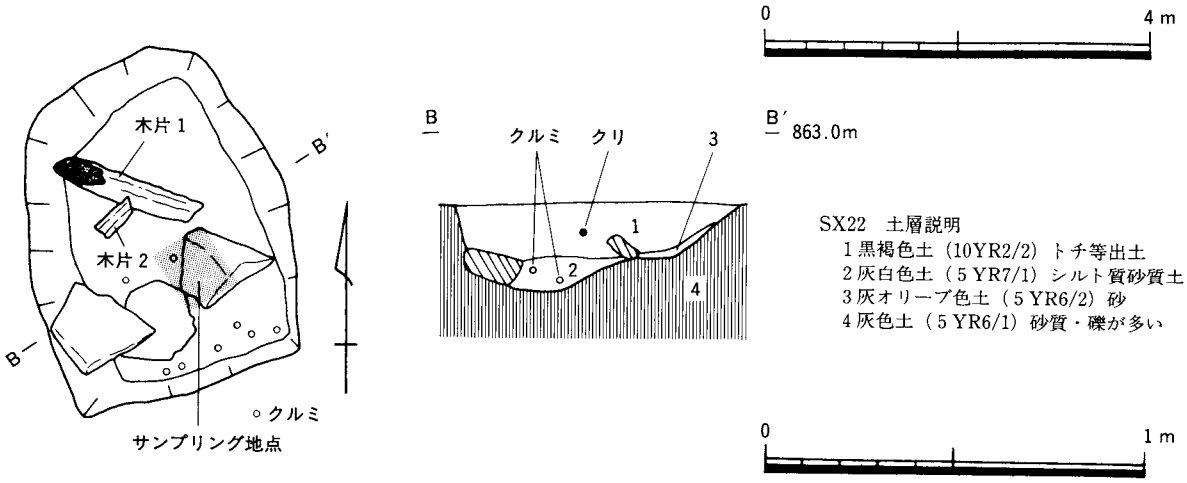
第55図　東区の遺物出土状況



第56図　FP１周辺図および周辺出土石器



第57図　SX22周辺図



第58図　SX22

また、SX22の東方３ｍの地点の砂礫層中で、木杭の一部と考えられる直立木片を検出した。堅い砂礫層の中に埋没しており、掘り込み等は認められなかった。杭列を想定してSX24としたが、確認できたのはこの１本のみであった。直径10cm、現存部の長さは20cmで、材はクリであった(第５章)。層位的にSX22と同時期かそれ以前のものとするのが妥当と思われるが、用途等は不明である。なお、M22区では上層の黒褐色土中からも時期は限定できないが、一端に焦げ跡のある長径約15cm、長さ45cmのヒノキ属の丸木が出土している。

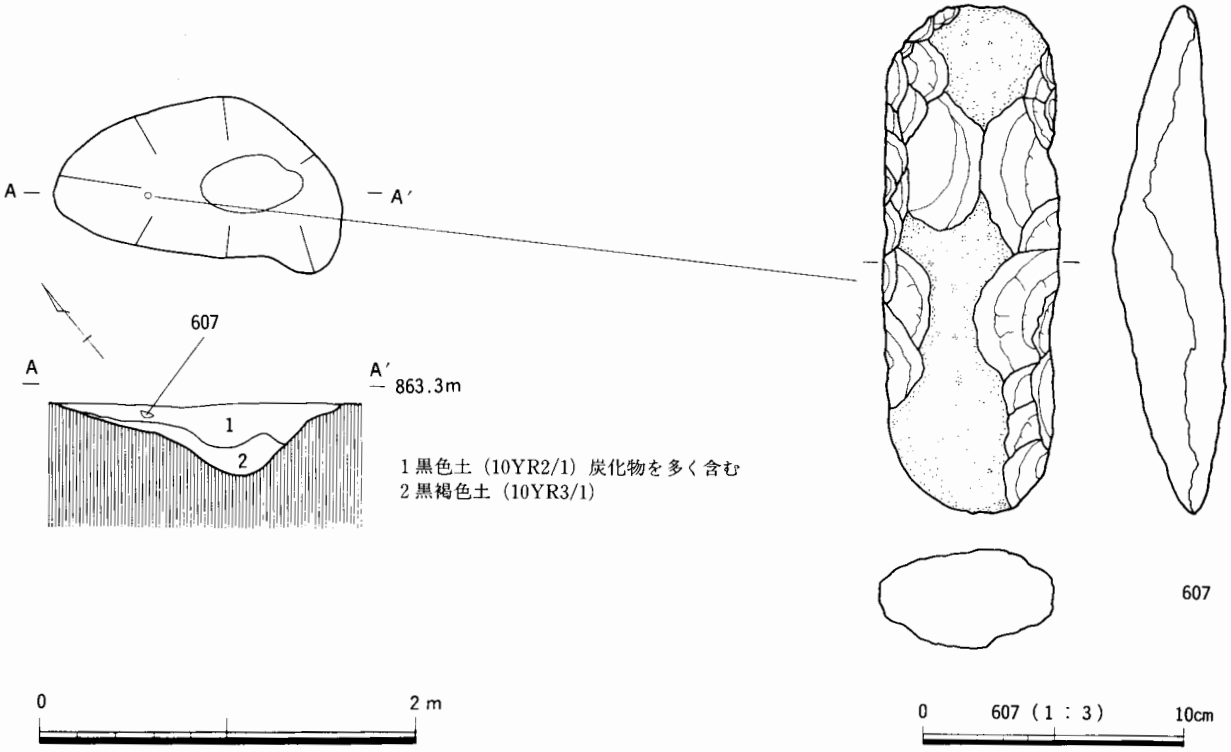
1）対岸のカクシクレ遺跡で検出された縄文晩期前半の「水さらし場遺構」と比較すると、周囲に木組みの遺構を伴わないことや、遺構内の堆積状況が泥炭質土と砂質土の互層でない点などが異なる。

スモモ種子出土ピット（SX26）

SX26は、M23区のII層を掘削中に水路の南側で検出した不明遺構である。40×40×33cmの方形のピット内より灰釉陶器片１点、炭化木片、スモモの種子17点および少量のトチの種子が出土した。出土遺物より平安時代の遺構と考えられる。第60図の612はSX26出土の灰釉陶器である。口径11.6cmの碗で、色調は灰白色、焼成は良好である。

3　土坑・ピット（SK・P）（第53図、第６表）

東区のSKおよびPの遺構検出面はほとんどが第III層最下面ないし第IV層上面である。後世の削平や攪乱が多いためか、明確なプランが確認できるものや用途が推定できるものは見当たらない。打製石斧が出土したSK５を図示し、他は西区と同様にその概要を表にまとめて報告する。



第59図　SK５

第6表　土坑・ピット一覧表（東区）

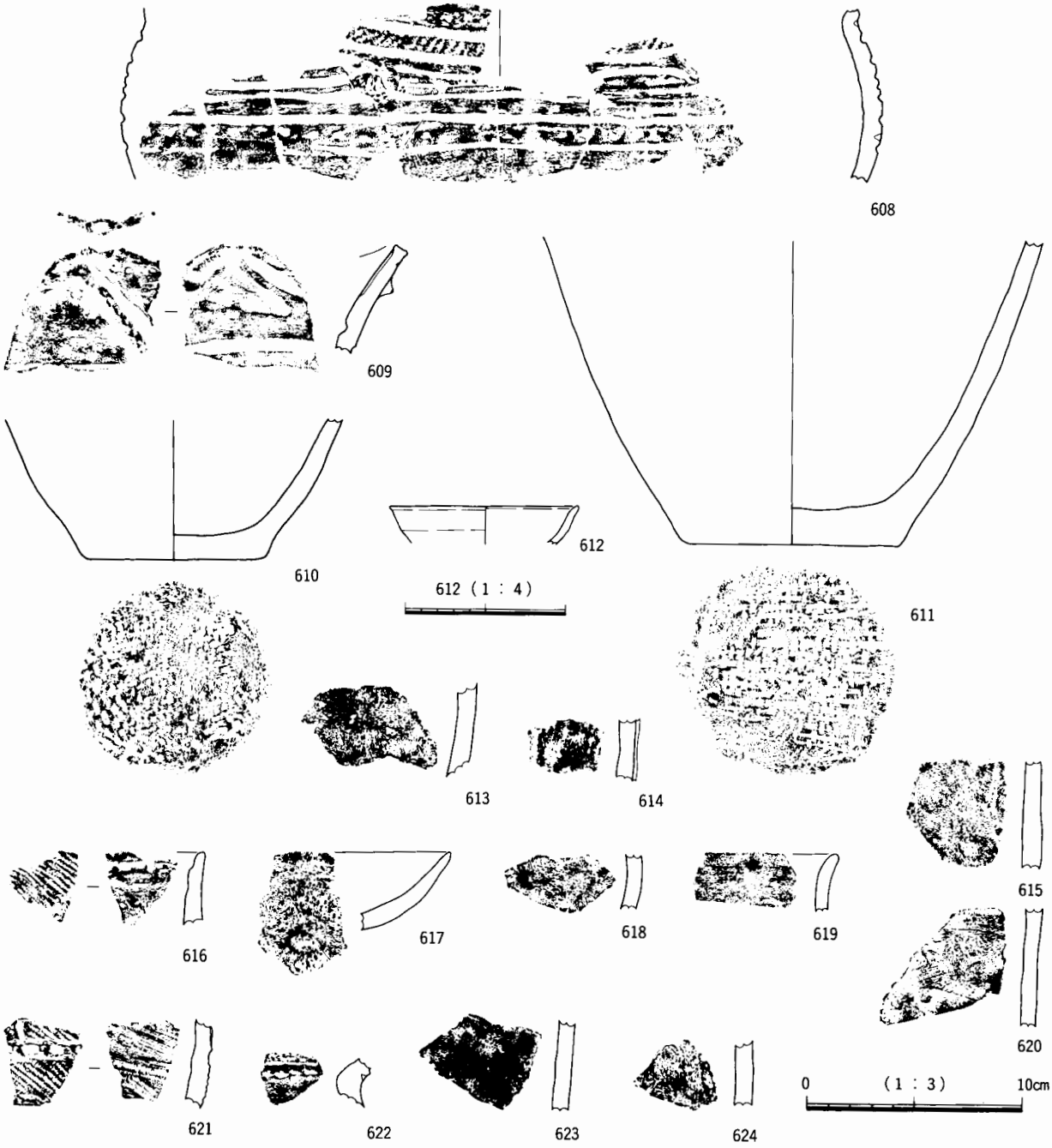
東区No.	No.	遺構名	地区	長径×短径×深さ	遺物	挿図番号
1	3	SK 4	L21III	252×127×26	縄文土器片22	60—613～615
2	4	SK 5	L21III	150×84×38	縄文土器片2　打製石斧1	
3	5	SK 6	L21III	96×68×30	縄文土器片1	
4	6	SK 7	L22III	120×100×28		
5	39	P30	L23III	40×28×24	縄文土器片1	
6	40	P31	L23III	50×40×23	縄文土器片3	60—616
7	41	P32	L23III	28×25×20		
8	42	P33	L23III	25×22×23	縄文土器片1	
9	43	P34	L23III	28×25×18	縄文土器片1	
10	44	P35	L23III	28×28×17	縄文土器片1	
11	45	P36	L23III	32×24×20		
12	46	P37	L23III	28×24×19	縄文土器片1	
13	47	P38	L22III	32×25×20		
14	48	P39	L22III	28×28×24		
15	49	P40	L22III	60×40×20		
16	50	P41	L22III	56×52×24		
17	51	P42	L22III	76×45×18		
18	52	P43	L21III	36×32×22		
19	53	P44	L21III	48×40×23	縄文土器片1　炭約10g	60—617
20	54	P45	L21III	17×15×20	縄文土器片1	
21	55	P46	L21III	36×32×20	縄文土器片1	60—618
22	56	P47	L21III	28×20×18		
23	57	P48	L22III	92×40×20		
24	58	P49	L22III	40×38×18		
25	59	P50	K23III	50×45×20	縄文土器片2	60—619・620
26	67	P60	L23III	38×32×20	縄文土器片5　石器剥片1	60—621～623
27	68	P61	K23III	40×30×26	縄文土器片1	60—624
28	69	P62	L23III	32×25×18		
29	70	P63	L23III	28×20×20		
30	71	P64	L23III	48×36×21		
31	72	P65	K23III	52×25×30		
32	73	P66	K23III	30×28×40		
33	74	P67	K23III	36×32×26		
34	75	P68	K23III	36×25×21		
35	76	P69	K23III	28×24×25		
36	77	P70	K23III	38×28×45		
37	81	FP 1	L20IV	84×72×40	炭	

SK 5（第59図、図版31）

SK 5はL21区で検出した土坑である。大きさは150×84×38cmで、楕円形である。炭化物を多く含む黒色土中から、縄文土器片2点と打製石斧1点が出土した。縄文土器片は磨耗した無文土器で時期ははっきりしない。第59図の607はSK 5出土の打製石斧である。やや風化の目立つ凝灰岩製で、大きさは19.7×6.8×3.9cmである。比較的小型の製品が多い同遺跡の出土品の中では際立つ大きさである。表面に原石の自然面を残し、丸い大きめの川原石が原石として使用された形跡を留めている。

東区の遺構出土の遺物（第60図、図版27）

第60図の608～611はSX22周辺より出土した土器である（第57図）。608は粗大な工字文と列点文で飾られた胴部破片である。609は列点文を伴う口縁部で、裏面に凹線による施文がある。610･611は無文の粗製土器で、網代圧痕を伴う底部は磨耗している。SX22周辺の土器は大洞Ｃ２式段階と考えられる。613～615はSK４から出土した。614が微隆起線文の西区Ⅳ期第１群の土器で、他は無文である。616はＰ31出土の縄文施文の口縁部破片である。617はＰ44出土の晩期の粗製浅鉢、618はＰ46出土の晩期の無文土器である。619はＰ50出土のやや外反する口縁部の破片で無文である。620は同じくＰ50出土で晩期の無文土器である。621～623はＰ60より出土した。621には押引き刺突文が、622には列点文がみられ、623は無文である。624はＰ61出土の晩期の無文土器である。



第60図　東区の遺構出土土器

第３節　包含層出土遺物

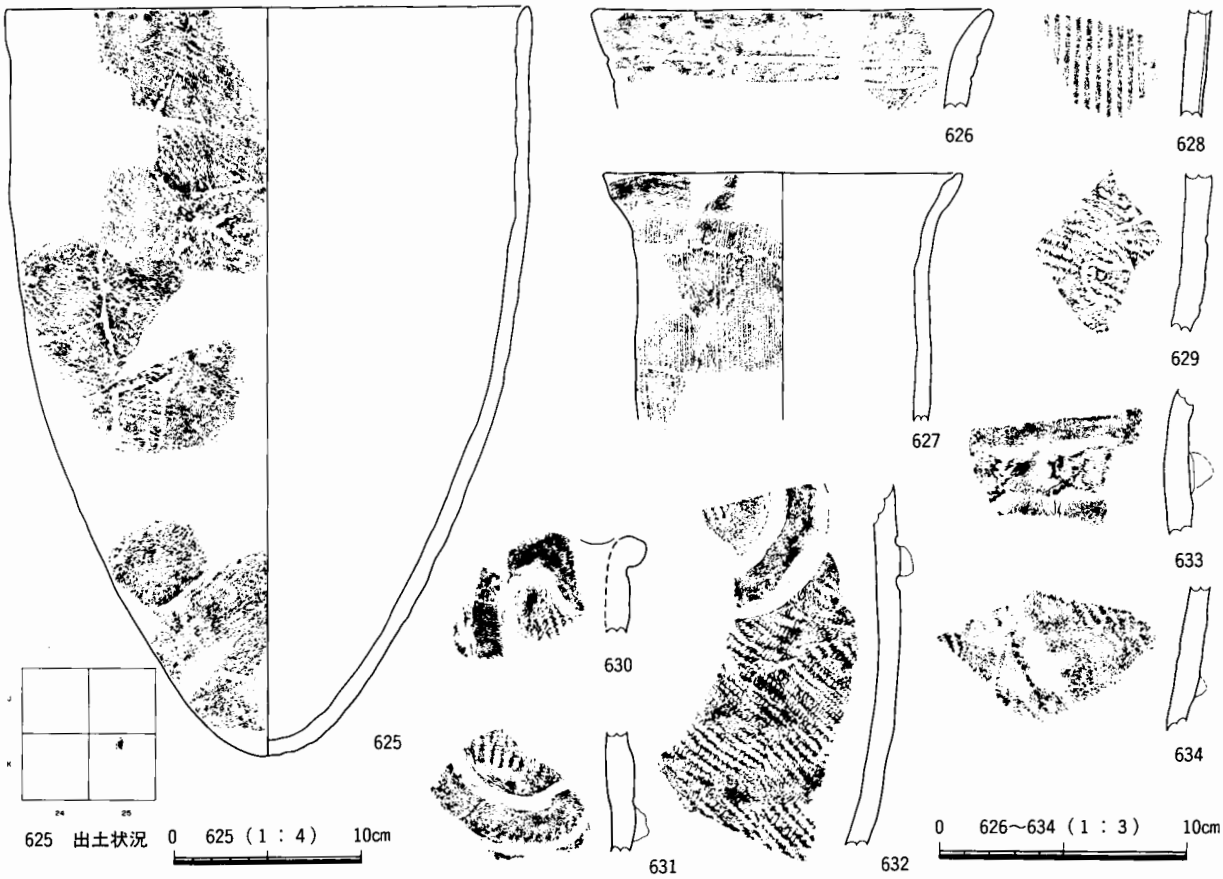
東区では遺物包含層の大半が失われていたので、ほとんどの遺物は攪乱層からの出土である。層位的な追究は困難であるが、縄文土器については西区と同様に６期に大別して報告することとする（第３章第３節参照）。なお、東区ではII期の土器は確認できなかった。

１　Ｉ期の土器（第61図―625、図版27）

縄文早期後葉の土器が調査区の北東部より出土している。第61図の625はＫ25区IV層より出土した口径約27cm、高さ約40cmの貝殻条痕文系の土器である。胎土に植物繊維を含み、暗褐色を呈する尖底の深鉢である。グリッドの北側に大きさ1.5×１×0.8m程の岩があり、ちょうどその手前の地点から１個体分の破片がまとまって出土した。周辺では他の遺物の出土は見られなかったが、約40m南西のＬ20区IV層で検出した炉穴（FP１）が同期のものと推定される（第56図）。

２　III期の土器（第61図―626～634、図版28）

ＫおよびＬ列のIII層より縄文中期後半の土器が出土している。第61図の626はＫ～Ｌ22区より出土した厚手の土器口縁部で、横位の楕円形区画文がみられる。627はＬ22区周辺より出土した口縁部が直線的に広がり胴部が少し膨らむ器形の土器である。櫛歯状工具による条線が縦方向に施され、口縁部は



第61図　東区Ｉ期・III期の土器

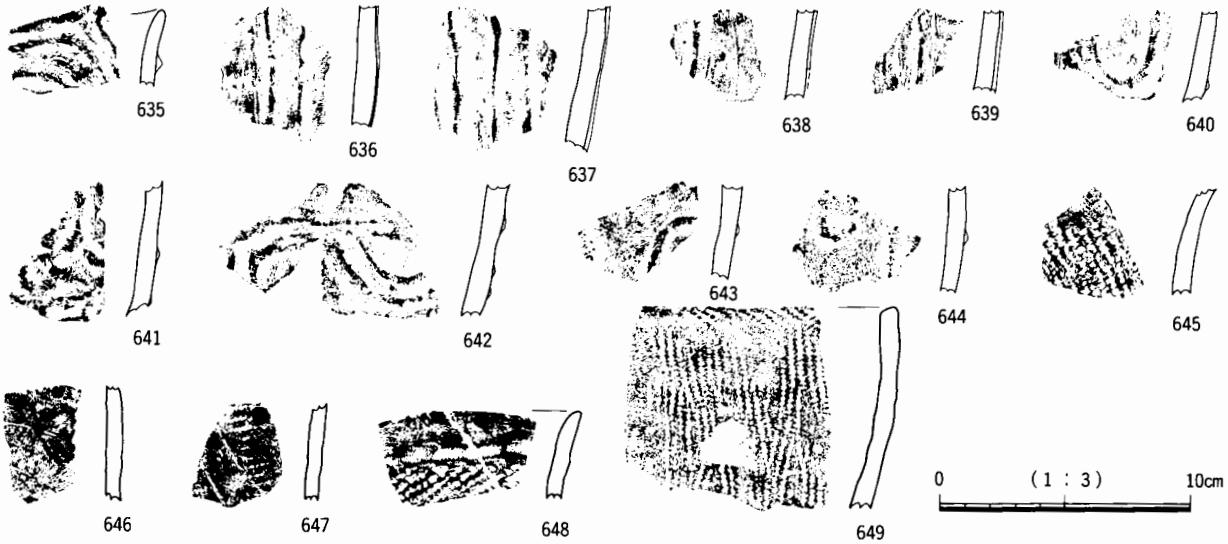
有段の無文帯となっている。630～632はK23区を中心に出土した地文に縄文を施す土器である。幅の広い隆帯の両脇に沈線を加え曲線的な文様を描く土器で、口縁部の破片を含んでいるがその全体像はつかみ難い。628はK21区II層より出土した。櫛形文の一部と考えられる胴部破片である。629はK23区III層より出土した。地文に縄文を施す土器で、蛇行沈線が縦に１条垂下している。633はK24区III層より出土した。リボン状突帯が巡る土器の胴部破片である。634も同じくK24区III層より出土した。RLの縄文が施され、隆帯で飾られた土器の一部である。

3　IV～V期の土器（第62・63図、図版28）

東区出土の縄文後期の土器は西区に比べると非常に少なく、また破片の劣化や磨耗が顕著である。東区からは西区のIV期第１群に含まれる微隆起線文の土器が全部で20点出土している。そのうちの10点を第62図の635～644に図示した。635はK23区III層出土の口縁部破片で、IV期第１群１類または２類の土器である。636～640はK～M区の広い範囲で出土し、IV期第１群１ｃ類の土器によく似た胎土と文様の土器である。641～644は劣化が著しい胴部破片で、横位の文様展開を含む。642はM23区III層より出土し、他の３点はL21区II層より出土した。645～647は西区の第IV期第９群の土器と同じと考えられる。645はK22区III層出土の破片で、外反する口縁部の無文帯部分がみられる。K22区III層出土の646・647は西区H11区III層出土の454（第40図）と同質で同様の調整痕をもつ土器である。648は口縁部に無文帯を持つ土器で、境目部分に浅い凹線状のナデを伴っている。胴部には縄文が施されている。649はL21区III層出土の土器である。縄文の施文方向が口縁部は斜位で、胴部では縦位となっている。後期後葉に属すると考えられる。第63図の650はJ24区I層出土の土器で、胴部および底部は無文である。上方に細い２条の沈線による方形の文様の一部を残している。

4　VI期の土器（第63～65図、図版29・30）

東区出土の縄文土器の大半は無文の粗製土器の破片である。その胎土等からほとんどが晩期の土器と考えられる。ここでは、東区出土の縄文晩期のおもな土器を３群に大別して報告する。西区VI期と同様の群分けをしたが、類分けは共通ではない。



第62図　東区IV～V期の土器

第１群　晩期前半の土器（第64図、図版29）

１類　沈線文や刺突文をもつ土器（第64図―665～669）

第64図の665はＬ22区Ⅱ層出土の口縁部破片で、口唇および内面が沈線で刻まれている。666は矢羽状沈線と２条の沈線が巡る破片で、M23区Ⅲ層より出土した。667はM22区Ⅱ層より出土した。横走する沈線がみられ、縄文が施されている。668は横に巡る沈線の下に、斜め方向の沈線が数条垂下し、さらに列点文を伴う胴部破片である。M22区Ⅱ層より出土した。669は刺突による方形の列点文が口縁部を巡る土器である。M23区Ⅱ層より出土し、一部に刻みのある小突起を伴っている。

２類　内面に凹線をもつ土器（第64図―670～683）

口縁端部内面に１～２条の凹線が巡る土器である。波状口縁の波頂部の内面では凹線の部分が三角形に拡張するものや、文様を描くものがみられる。670・671では口縁部に隆帯を貼付け肥厚させ、その上側に沈線を加え文様を描いているようである。ほとんどがSX22周辺のM22区Ⅱ層出土であるが、小破片のためその全体像はつかみ難い。

第２群　晩期後半の土器（第63・64図、図版29・30）

１類　三叉状の文様をもつ土器（第64図―684～697）

沈線による横展開の文様をもつ土器である。第64図の685～693は三叉文の連結部に瘤状の突起を伴っている。M22～24区より出土したが、全体が磨耗しているものが多い。694・695は同一個体と考えられる口縁部破片で、炭化物が付着している。694はＫ24区Ⅲ層出土、695はＬ23区Ⅲ層出土である。696・697は部分的に丹彩が残る土器で、炭化物の付着もみられる。696はＬ24区Ⅲ層より、697はＬ23区Ⅲ層より、それぞれ出土した。

２類　浮線文系の土器（第63図―651～653・第64図―698～713）

磨き込んで隆線部を作り出す浮線文的な土器を「浮線文系の土器」とした。

ａ類（第63図―652・第64図698～707）

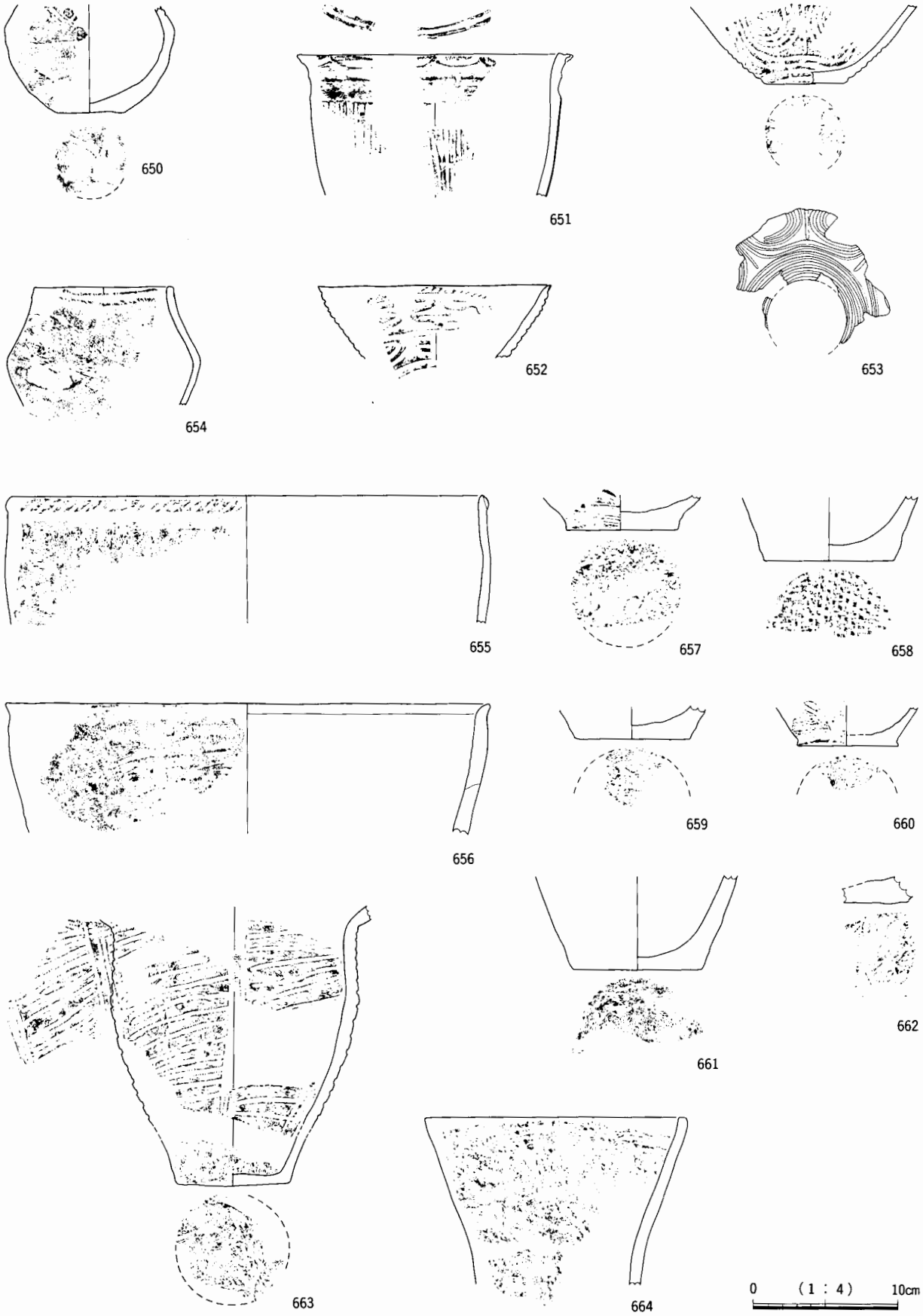
沈線部に彫刻的な手法がみられ、器面がよく磨き込まれた土器である。第63図の652はＫ22区Ⅲ層より出土した。鉢形の土器の口縁部で、端部を右上がりの短沈線で刻んでいる。文様部分は工字状文や多重円状の文様が交錯する複雑な構成とみられる。第64図の698はやや口縁部が外反する器形の土器である。Ｋ22区Ⅲ層出土の口縁部破片にＬ21区Ⅲ層出土の破片が接合したものである。壺形の土器と考えられ、補修孔を有している。口縁端部を短沈線で刻み、その下を３条の沈線が巡っている。無文帯が続き、その下を再び沈線が巡っている。小破片の699～707のほとんどはＫ22区Ⅲ層より出土している。707は底部付近の破片で、８条の沈線が巡り隆線部を形成している。

ｂ類（第64図―708～712）

沈線と短沈線によって施文され、磨き込みが弱い一群である。短沈線は、右上がりのものがほとんどであるが、712では右下がりのものを併用している。708はＫ22区Ⅲ層、709・710はＬ22区Ⅲ層、711はＫ23区Ⅲ層、712はM23区Ⅲ層より、それぞれ出土した。

ｃ類（第63図―651・第64図―713）

図63の651は口縁外帯をもつ深鉢である。Ｋ22～23区Ⅲ層出土で、平口縁の口唇部を1条の沈線が巡っている。器面はよく磨かれており、頸部を浮線状の細隆線が巡っているようにみえる。胴部には縦方



第63図　東区Ⅵ期の土器(1)・時期不明の土器

向の沈線が施されている。第64図の713は口唇部の処理が同様と考えられる口縁部破片で、K22区Ⅰ層とM22区Ⅱ層より出土した。口縁部を横走する３条の沈線のうち２条目は幅広である。

ｄ類（第63図―653）

第63図の653は沈線によって曲線文が描かれる土器の下半部である。底部周辺を５条の沈線が巡り、下から６および７条めの沈線は渦巻状の文様につながっているようである。渦巻状の文様は対向しており、間に１条の縦の沈線を挟んでいる。N23区Ⅱ層より出土し、部分的に復元できた土器である。

３類　突帯文をもつ土器（第63図―654）

第63図の654は肩部で屈曲する器形の鉢形の土器である。M22区Ⅱ層出土で、口縁部を１条の突帯が巡っている。その隆起は低めで、右下がりの刻みを有している。器厚４㎜前後の薄手の土器で、内外には箆状工具によると考えられる調整痕がみられる。

４類　沈線や短沈線で施文される土器（第64図―714～730）

ａ類（714～718）

第64図の714～717はK22区およびL22区Ⅲ層から出土した。716は底部に近い部分の胴部破片で、２～３条の縦走する沈線と、縦方向の短沈線列がみられる。715では縦走する沈線の横で斜位の短沈線が対向しながら縦方向に並んでいる。718は同様のモチーフをもつ表採資料である。器面はよく磨かれ２類の土器との関連が考えられるが、その全体像がつかみ難い土器である。

ｂ類（719～727）

第64図の719～727はN23区Ⅱ層より出土し、同一個体と考えられる土器である。724は口縁部の破片で、４条の沈線が横走し、口唇部には箆状工具等によると考えられる刻みがみられる。内面には施文具を下から上へ動かしたような跡のみられる沈線が５条残っている。胴部の破片では、斜位の沈線が無造作に交差しているような印象を受ける。本類は、破片が小さく器形や文様構成が不明の不安定な一群である。

ｃ類（728～729）

728はK22区Ⅱ層出土の土器口縁部である。１条の沈線が巡る下側に、右下がりの細い短沈線が引かれている。729はM23区Ⅲ層出土の口縁部破片である。３条の沈線が横走し、沈線間を押圧気味に右下がりに刻んでいる。

第３群　無文土器（第63～65図、図版30）

１類　口縁部を飾る土器（第63図―655・第64図―730～733・第65図734～738）

ａ類（730）

K23区Ⅲ層出土で、2条の沈線が横走している。第２群の土器に多い胎土や調整の土器である。

ｂ類（731）

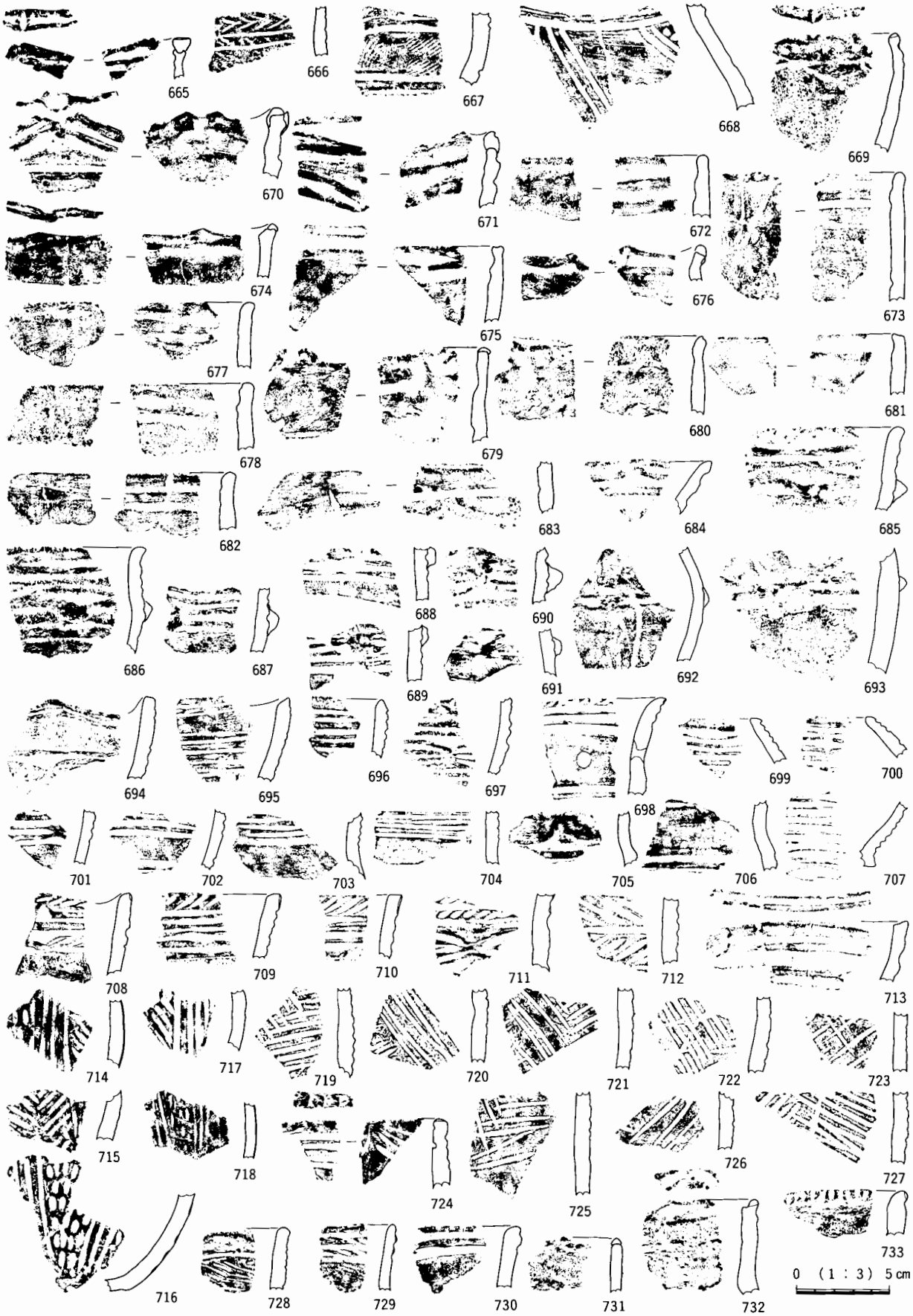
M22区のⅡ層より出土した。小突起をもち、地文は擬縄文である。

ｃ類（732）

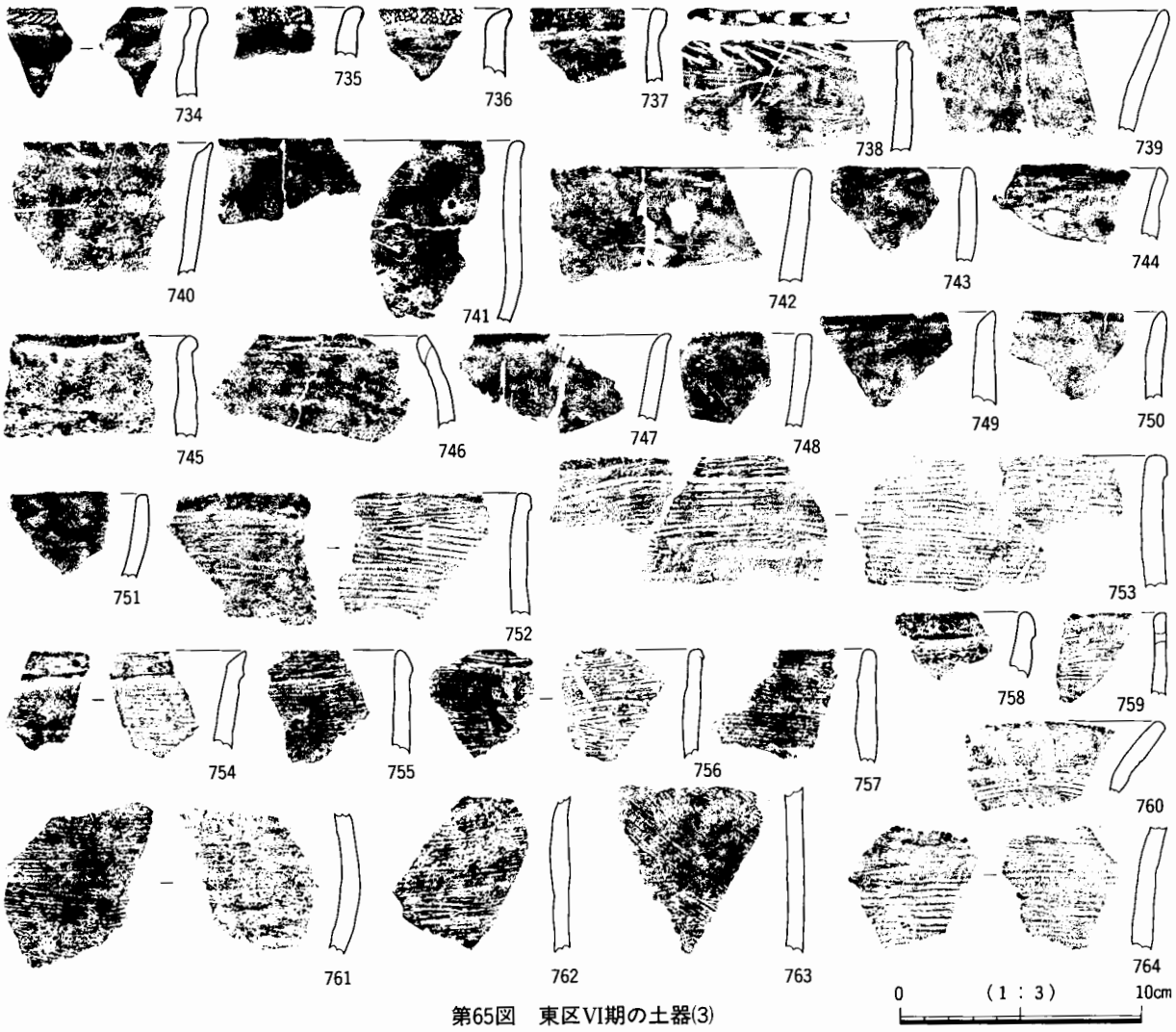
L22区Ⅲ層より出土した。口唇に内側で交差する方向で２条の斜位の刻みがみられる。

ｄ類（733）

N23区Ⅱ層出土で、口縁端部に縦位の刻みがみられる。第１群土器に多い胎土の土器である。



第64図　東区VI期の土器(2)



第65図　東区VI期の土器(3)

e類（734）

肥厚した口縁端部に縄文を施し、内面には凹線が2条みられる。M22区II層出土である。

f類（735～737）

M22区出土で、肥厚した口縁端部に細かい刺突文を施している。737の肥厚部は無文である。

g類（738）

L21III層出土で、端部は右下がりの短沈線で刻まれている。口唇は押圧されている。

h類（第63図―655）

肥厚した口縁端部を右上がりの短沈線で刻んでいる。器面の調整は箆状工具によると考えられる。K22区III層、M22区III層およびM20区II層より出土した破片が接合できたものである。

2類　無文の粗製土器（第63図―656・第65図―739～750）

a類（656・739～746）

粗い調整の粗製土器である。第63図の656はN24区より出土した。端部を少し外反させている。739～746は小破片が多く全体像はつかみ難い。口縁部が直立するものが多いようである。

ｂ類（747～751）

第65図の747～750は器面が内外とも丁寧に磨かれており、第２群２類の土器と関連が深いと考えられる一群である。K22区III層を中心に周辺から出土している。

３類　条痕文の土器（第65図―752～764）

内外に条痕文がみられる土器である。口縁端部が若干肥厚しているものが多い。752はM21区II層出土、753・759・760・764はL22区III層出土である。L23区III層出土の755・757・758・761～763とK24区III層出土の756には炭化物が付着している。

底部（第63図―657～662）

東区からは63点の土器底部が出土している。第63図の657はL21区II層出土の第３群３類土器の底部である。658はL22区II層出土で胴部は無文である。どちらも底部の網代圧痕は「２本越え１本潜り１本送り」である。659～662の底部には、葉脈圧痕がみられる。

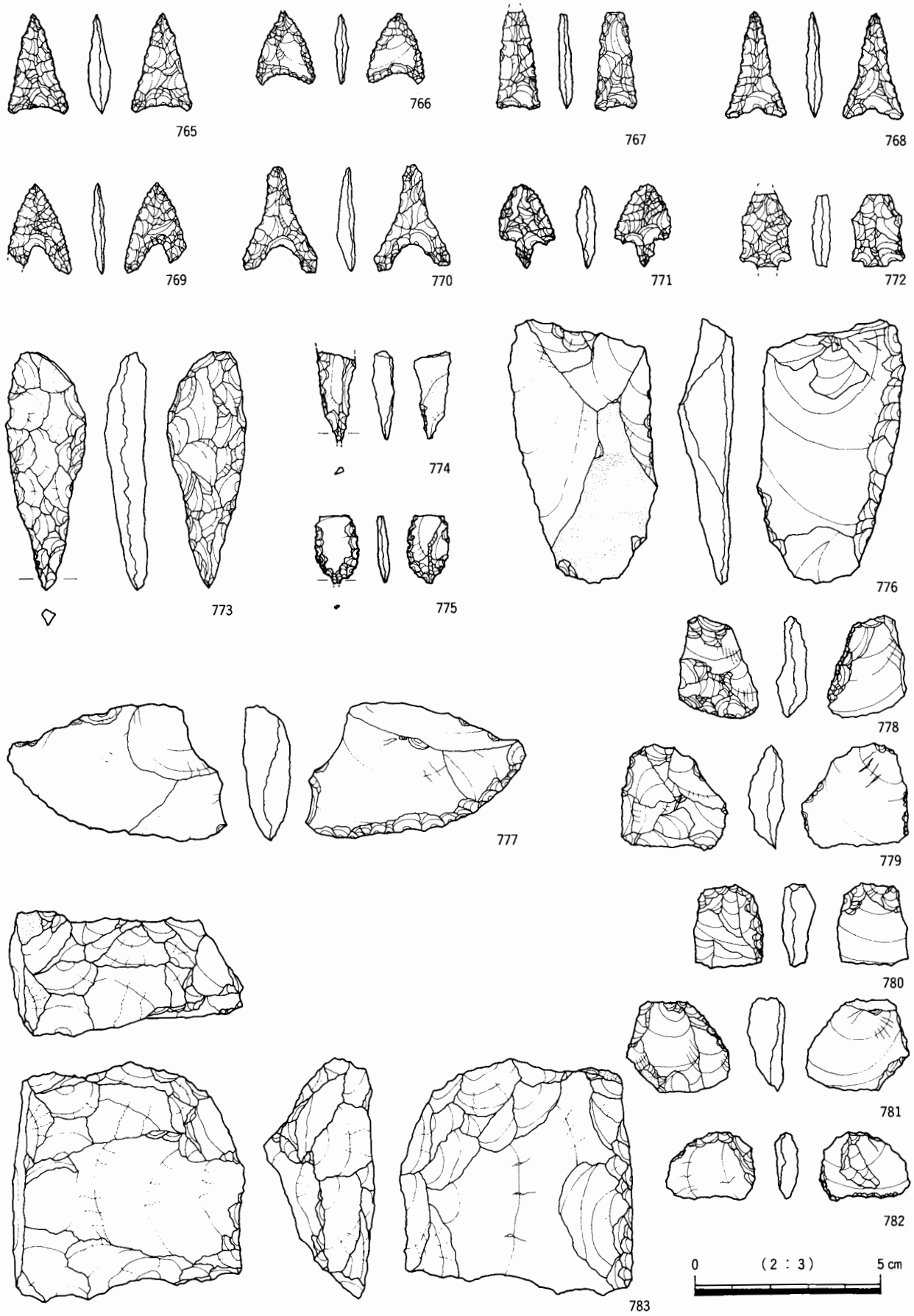
５　時期不明の土器（第63図―663・664）

第63図の663はL25区およびL23区III層から出土した口縁部を欠く深鉢である。丸みをもつ胴部には全面に沈線文が施されている。２条単位の沈線が縦に垂下し、その間をやや右上がりの横位の沈線が埋めている。664はN22区でVI期の土器が出土した層（II層）のやや下層から出土した無文の深鉢である。口縁部がやや開く器形で、口縁端部を半截竹管状の工具によると考えられる細い平行沈線が巡っている。

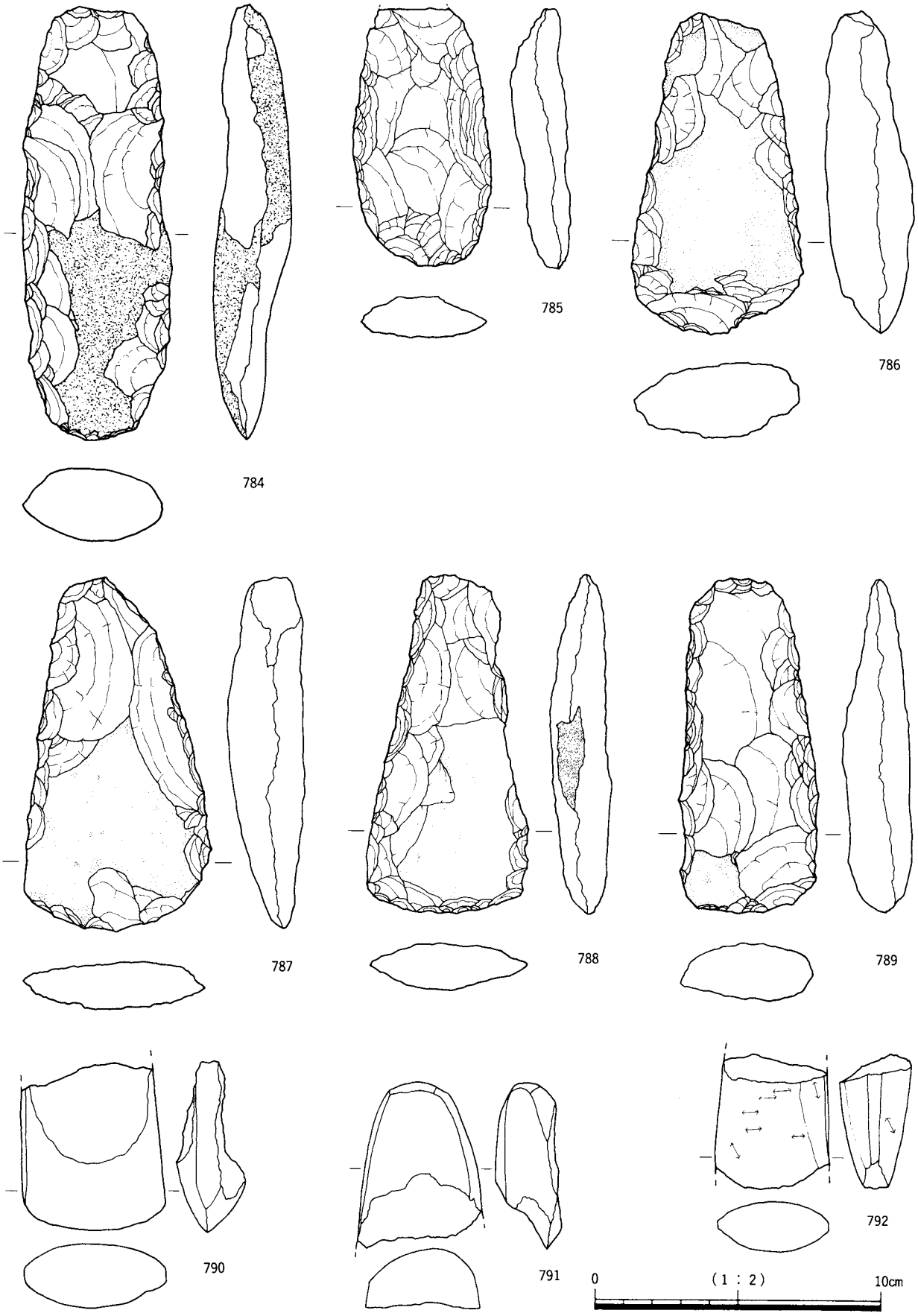
６　東区出土の石器・石製品（第66～69図、図版31・32）

東区からは、425点（23.9%）の石器類が出土している。内訳は、石鏃17点、石錐５点、削器３点、両極石器３点、二次加工のある剥片６点、使用痕のある剥片７点、石核２点、打製石斧112点、磨製石斧11点、磨石・凹石類50点、砥石３点、剥片類206点である。土器の出土状況からその大部分がVI期に属すると考えられるが特定は困難である。

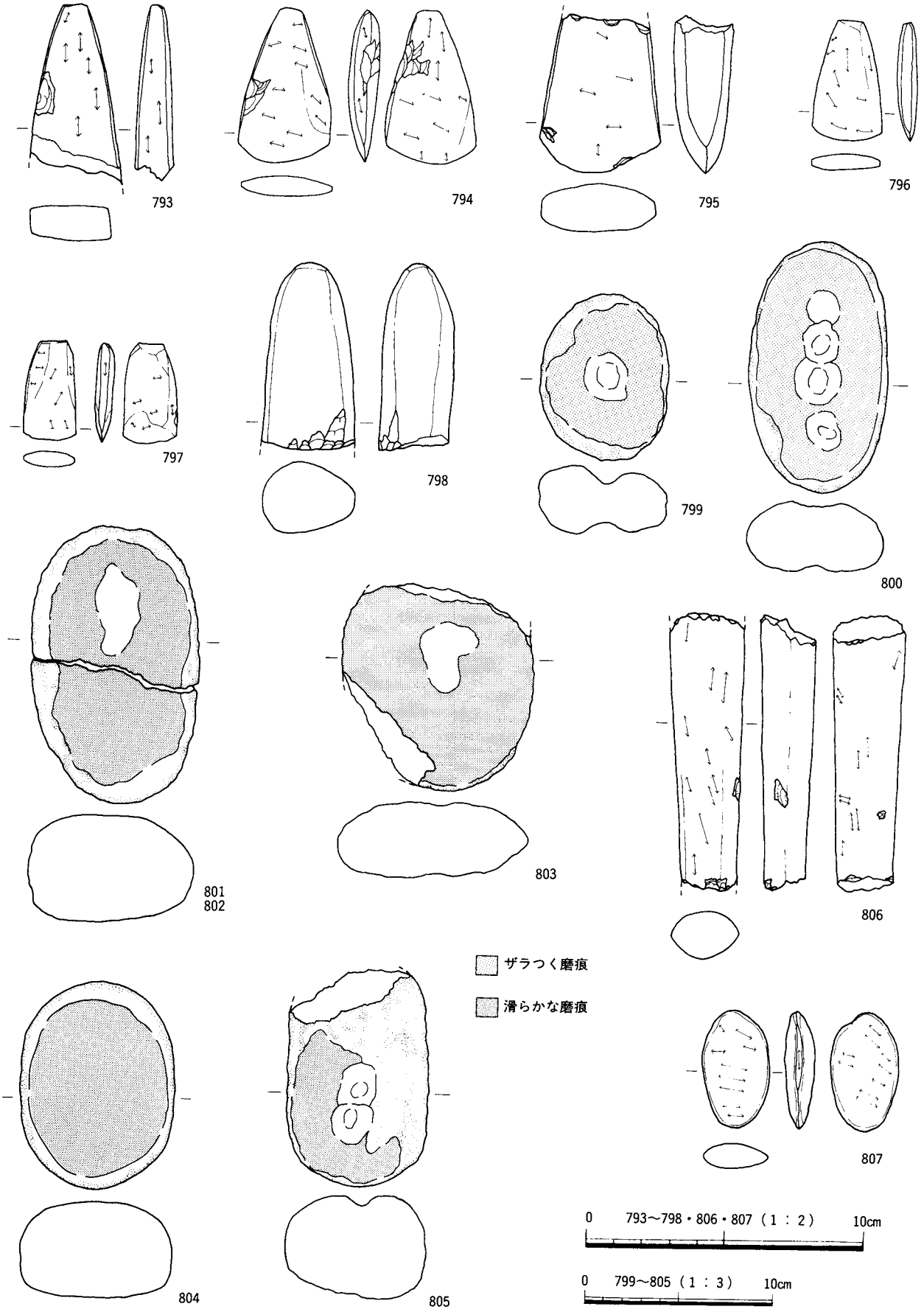
第66図の765～772は東区出土の石鏃である。765・766はともにチャート製で、I層から出土した。基部の抉りが浅いタイプで、765は肉厚である。767はL22区II層より出土した。下呂石製で両側縁に１ヵ所ずつ抉りを意図的に入れているようである。768はM22区II層出土の下呂石製である。769は基部の抉りが大きい薄手の凹基無茎鏃である。灰色チャート製で、L22区II層より出土した。770はL22区II層出土で、石材は下呂石である。先端は丸く、側辺部が凹状の独特の形態を呈している。771はM21区の砂層より出土した黒曜石製の有茎鏃である。772はL22区II層出土の下呂石製の有茎鏃で、破損しているがいわゆる飛行機鏃の形態を保っている。石錐は３点図示した。773はK22区II層出土の下呂石製で、大型の棒状タイプである。774はM22区III層出土の棒状の石錐で、下呂石製である。775はL22区III層出土のチャート製で、つまみ状の頭部を持つが錐部が著しく短いタイプである。776はK22区III層から出土した下呂石製の削器である。縦長剥片の一方の側辺部に片面加工の刃部を有している。777はM21区II層出土の削器である。横長の下呂石剥片を用い、長辺に片面加工の刃部を作り出している。778はM21区III層出土の削器である。黒曜石製で、辺縁部に２ヵ所やや急角度に調整された片面加



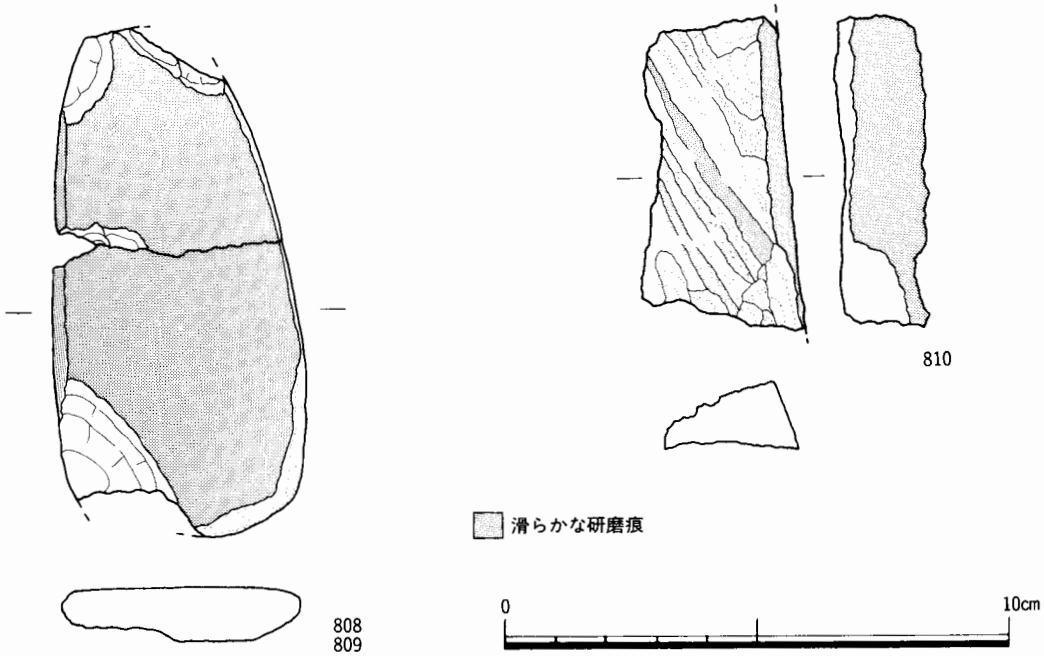
第66図　東区出土石器(1)



第67図　東区出土石器(2)



第68図　東区出土石器(3)・石製品



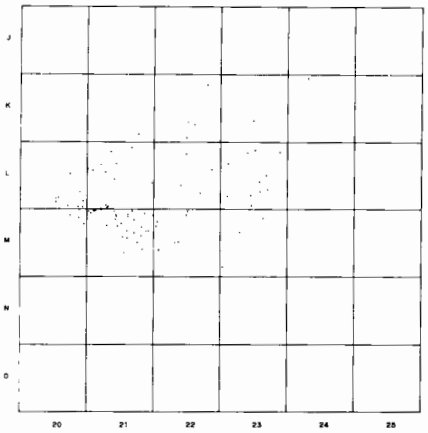
第69図　東区出土石器(4)

工の刃部を有する。779は両極剥離痕のある石器で、M21区III層より出土した。780は側縁に連続剥離痕が認められる黒曜石剥片で、二次加工のある剥片としたものである。781・782は使用痕のある剥片としたもので、781は下呂石、782は玉髄である。783はL22区III層より出土した下呂石の大型石核である。

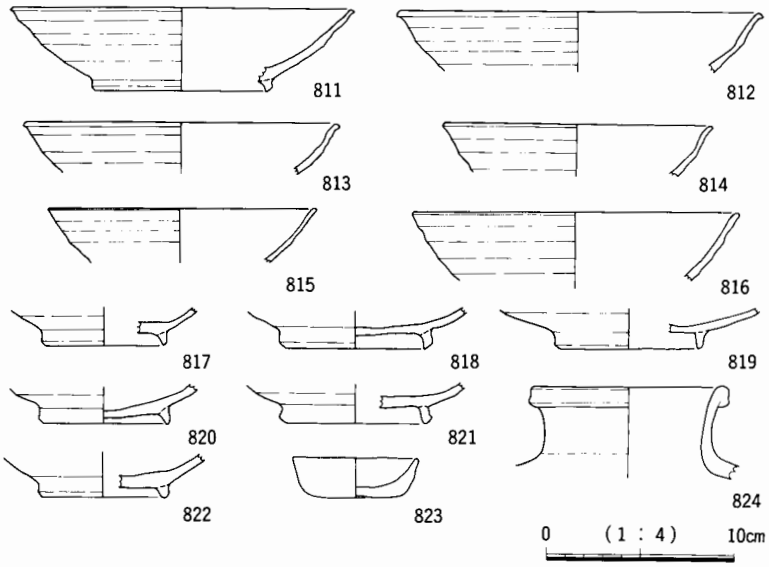
第67図に打製石斧を6点図示した。784はL21区II層より出土した。表裏両面に敲打により整形がなされた面を多く残し、磨製石斧の未製品を転用した可能性が考えられる。785～789の石材はすべて凝灰岩である。西区のIII層では小型で偏平な川原石を原石として利用しているものが目立ったが、東区出土のものは比較的大きめの礫から素材剥片を得たと考えられるものが多い。790～792はK区およびL区のIII層より出土した磨製石斧である。ともに砂岩製で、変色が認められる。被熱により破損したものと考えられる。

第68図の793の磨製石斧はM21区II層出土で、直線的で念入りな面取り加工が施されている。794はM22区II層出土で、素材剥片の形状を留めていると考えられる。795はM22区II層出土で基部を欠損している。796・797は完形の小型磨製石斧である。796はN22区I層より出土し、797はM21区II層より出土した。ともに蛇紋岩製で色調は前者が薄緑色、後者は濃灰色である。798はM22区I層より出土した。磨製石斧の分類に含めたが石棒の可能性もある。磨石・凹石類は6点図示した。磨石と凹石の両機能を兼用するものも多い。799・800は磨面がややザラつくタイプで、801～805は滑らかな磨面を有する一群である。806はK22区III層より出土した粘板岩製の石剣の破片である。807はM23区II層より出土した石製品である。薄緑色の蛇紋岩製で、全面研磨されているが穿孔はない。

第69図の808～810は東区出土の砥石である。808・809はともにK25区II層より出土し、石材は砂岩である。同一個体であるが色調がやや異なり、被熱による変色も認められる。板状の偏平な石のほぼ



東区　灰釉陶器出土状況



第70図　東区の歴史時代の遺物

全面に磨面を残している。810はM22区のII層出土で、石材は砂岩である。破片資料であるが、細い溝状部分と側面に顕著な磨面を残している。ともに攪乱層出土のため縄文時代に限定はできない。

7　歴史時代の遺物（第70図、図版32）

東区から出土した古代～中近世の遺物は、接合前の破片数で灰釉陶器212点、土師器２点、古瀬戸15点である。人為的な削平や埋め戻しが繰り返されたため、散逸したり小破片となったものが多く、接合できるものは僅かであった。第70図に灰釉陶器の出土状況を図示したが、水路の右岸側の広い範囲から出土している。なお、灰釉陶器とスモモ種子が一緒に出土した SX26はM23区内である。

第70図の811～822が東区出土の灰釉陶器のおもなものである。口縁部から底部までを全体に復元できたのは811の碗１点のみである。器厚は４㎜前後で、口縁に近づくにつれて薄くなっている。口縁端は外反気味で、部分的に外へ曲げまるめている。同様の口縁端部の処理は812ではより顕著である。811では、外面に刷毛がけと考えられる施釉がみられる。815では内外につけがけをしている。図示した他の３点の口縁部では施釉は確認できなかった。付高台の外面は付根部分から外傾させ、下部を面取りしているものも目立つ。全体に胎土はやや粗く、色調は灰白色～灰色を呈している。美濃窯の編年に比定すると、光ケ丘１号窯式から大原２号窯式に該当すると考えられるが、当地方の古窯の調査研究が十分に行われていない現状では時期の特定は困難である。823はＬ23区出土の土師器皿である。824はＬ22区から出土した瀬戸美濃の瓶子類の口縁部である。胴部の破片も出土したが小破片のため全体の復元はできなかった。14～15世紀のものと考えられる。

第5章　自然科学分析

たのもと遺跡の自然科学分析として、遺構出土の遺物を中心に大型植物化石の同定、放射性炭素年代測定、出土材の樹種同定を行った。以下、(株)パレオ・ラボに委託した自然科学分析の報告を掲載する。

たのもと遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

たのもと遺跡は岐阜県大野郡丹生川村に所在する。本遺跡は、荒城川右岸の段丘上に立地しており、縄文時代後期の住居跡や縄文時代早期から晩期の遺物が検出されている。今回は、本遺跡周辺の栽培状況や古植生を明らかにする目的で大型植物化石群集の検討を行った。

2．試料と方法

大型植物化石の検討は、SX21、SX22、SX26の3遺構（地点）より出土した大型植物化石について行った。これら3遺構はいずれも不明遺構であるが、水場に関連した遺構である可能性が高い。時代については、SX21が出土遺物から縄文時代後期、SX22が縄文時代晩期（放射性炭素年代測定で2,810±110yrBPの年代が得られている）と考えられている。大型植物化石の採集は、SX21(A)、SX21(B)、SX22は堆積物試料を0.25㎜目の篩を用いて水洗篩分けをすることにより行った。処理量はSX21(A)、SX22は約100cc、SX21(B)は、大型植物化石の出土個数がやや少ないため約400ccについて行った。SX21（共通）、SX26は現地で取り上げて洗い出しをした大型植物化石を採集した。なお、SX21の堆積物は、一部砂が卓越した所があり、砂が卓越した所をA地点［SX21(A)］、砂が少ない所をB地点［SX21(B)］として堆積物を採取した。SX21（共通）は、A地点、B地点の区別なく、SX21から出土した大型植物化石を採集した。

3．出土した大型植物化石（図版33）

全試料から出土した大型植物化石は木本17分類群、草本15分類群である。木本ではヒノキ、オニグルミ、カバノキ属、クリ、コナラ属、クワ属、ホオノキ、スモモ、キイチゴ属、フジ属、キハダ、ミツバウツギ、カエデ属、トチノキ、マタタビ属、タラノキ、ミズキが出土した。草本ではスゲ属、クワクサ、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、カタバミ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、キランソウ属、ナス属、メナモミが出土した。これら出土した大型植物化石の一覧を表1に示す。以下に各試料から出土した大型植物化石について記載する。

・SX21(A)の大型植物化石：木本ではオニグルミ、カバノキ属、クワ属、フジ属、ミツバウツギ、カエデ属、タラノキが出土し、フジ属はやや多産する。草本ではスゲ属、クワクサ、タデ属A、ナデシコ

科、キケマン属、カタバミ属、ツリフネソウ属、スミレ属、ナス属が出土し、スゲ属、タデ属A、ツリフネソウはやや多産する。

・SX21(B)の大型植物化石：木本ではクリ、コナラ属、キハダ、マタタビ属、タラノキが出土し、タラノキはやや多産する。草本ではタデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、カタバミ属、ウド、ナス属、メナモミが出土し、ウドはやや多産する。

・SX21（共通）の大型植物化石：木本のみで、オニグルミ、クリ、ホオノキ、ミツバウツギ、トチノキ、ミズキが出土した。

・SX22の大型植物化石：木本ではヒノキ、オニグルミ、カバノキ属、キイチゴ属、トチノキ、タラノキが出土し、カバノキ属、キイチゴ属、トチノキ、タラノキは比較的多産する。草本ではタデ属A、ナデシコ科、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、キランソウ属、ナス属が出土し、タデ属Aは比較的多産する。

・SX26の大型植物化石：木本のみでスモモ、トチノキが出土した。

4．考察

a．栽培・利用植物

出土したもののうち栽培植物と思われるものは、SX26から出土したスモモである。オニグルミ、クリ、トチノキなども食用として利用可能であり、貯蔵用とされていた可能性がある。他に、コナラ属、クワ属、キイチゴ属、マタタビ属、ミズキなども食用にはなる。

b．周辺植生

［縄文時代後期の古植生］

木本で出土した分類群は、概ね落葉広葉樹であり、遺跡周辺にはカバノキ属、クリ、コナラ属、クワ属、ホオノキ、キハダ、ミツバウツギ、タラノキ、ミズキなどからなる落葉広葉樹林が成立していたものと思われる。オニグルミ、カエデ属、トチノキなどは谷筋といった場所に生育していたのであろう。こうした森林にフジ属、マタタビ属といったつる性植物が絡みついていた。一方、SX21付近にはスゲ属、クワクサ、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、カタバミ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、ナス属などが生育しており、ツリフネソウなどは幾分湿った所に、クワクサ、シロザ近似種、ナデシコ科、カタバミ属、スミレ属などは幾分乾き気味の所に生育していたのであろう。

［縄文時代晩期の古植生］

周辺には針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のカバノキ属が生育していたものと思われる。オニグルミ、トチノキは主として谷筋に、キイチゴ属は林縁にみられたであろう。一方、SX22付近にはタデ属A、ナデシコ科、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、キランソウ属、ナス属などが生育しており、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウなどは幾分湿った所に、ナデシコ科、キランソウ属などは幾分乾き気味の所に生育していたものと思われる。

5．大型植物化石の記載

ヒノキ　*Chamaecyparia obtusa* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. 小枝

小枝には鱗片状の葉が十字対生に付き、葉は鈍頭で先端は茎に密着する。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr. 核

核は完形であれば、側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

カバノキ属　*Betula* 果実

果実は茶褐色で広楕円形、長さ2.7～3.4㎜、縁辺は翼状となり、翼は果体の長さの半分程度。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実

果実は黒褐色で完形であれば、扁円形。表面には縦に細かな筋が多数走る。

コナラ属　*Quercus* 果実

果実は茶褐色、表面には縦に細かな筋が多数走る。

クワ属　*Morus* 種子

種子は黄褐色、側面観は扁楕円形、上面観は扁三角形。表面はややざらつく。

ホオノキ　*Magnolia obovata* Thunb. 種子

出土したものは破片であったが、完形であれば種子は広楕円形、腹面は中央部が溝状にくぼみ、下部に小さなへそがある。表面は、腹面にやや著しい凹凸があり、ざらつく。背面は線状のくぼみがある。径10㎜程度。

スモモ　*Prunus salicina* Lindl. 核

核は淡褐色でやや扁平な楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。出土したスモモの核は、げっ歯類による食害を受けたものが多くみられた。

キイチゴ属　*Rubus* 核

核は淡褐色、側面観は腎形、上面観は狭楕円形。表面には隆起があり、網目模様をつくる。

フジ属　*Wisteria* 芽

芽は黒色ないし黒灰色、基部はこぶ状に膨らみ、表面は縦方向の隆起がある。

キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr. 種子

種子は黒色、歪んだ狭倒卵形で一方の側面にはやや細長いへそがある。表面には全体に微細な網目が発達する。

ミツバウツギ　*Staphylea bumalda* (Thunb.) DC. 種子

種子は黄褐色ないし淡褐色で強い光沢があり、倒卵形。

カエデ属　*Acer* 果実

果実は灰褐色で翼の一部が僅かに残っており、鋭角に開く。果柄に付着する部分の長さは3.3㎜程度。果体は扁平で長さ7㎜程度（翼を含めると14㎜以上）、幅4.5㎜程度。表面には弱い隆起がある。イタヤカエデの可能性が高いものと思われる。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume 種子

種子は光沢のある黒色の部分と光沢のない黒灰色の部分がほぼ半分ずつある。

マタタビ属　*Actinidia* 種子

種子は完形であれば、側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。表面には穴が規則的に配列する。

タラノキ　*Aralia elata* (Miq.) Seemann 核

核は褐色ないし茶褐色、側面観は半月状で上面観は扁平。背軸側にはやや明瞭な溝が2～3本ある。

ミズキ　*Cornus controversa* Hemsley 核

核は淡褐色、扁円形で基部に大きなへそがあり、表面には浅い縦方向の溝が走る。

スゲ属　*Carex* 果実

果実は褐色で三稜形。

クワクサ　*Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai 果実

扁三角形で背面の中央はややへこむ。

タデ属　*Polygonum* 果実

タデ属Aは黒色の二面形、タデ属Bは黒色の三稜形。

シロザ近似種　*Chenopodium* cf. *album* Linn. 種子

種子は黒色で鈍い光沢がある。側面観は円形、上面観は楕円形。1本の不明瞭な筋が中央付近まで入る。

ナデシコ科　Caryophyllaceae 種子

側面観は円形、上面観は楕円形。表面には多数の突起がある。

キケマン属　*Corydalis* 種子

種子は光沢のある黒色で円形。表面には長方形から六角形の模様がある。

ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属　*Duchesnea, Fragaria,* and/or *Potetilla* 核

核は淡褐色、側面観は歪んだ狭倒卵形、上面観は狭楕円形。

カタバミ属　*Oxalis* 種子

種子は黒色で側面観は卵形、上面観は扁平。表面は両側面に横長の網目が三列に並ぶ。

ツリフネソウ　*Impatiens textori* Miq. 種子

種子は光沢のある黒色で側面観は長倒卵形、上面観は楕円形。表面には不規則な不連続な網目模様がある。

スミレ属　*Viola* 種子

種子は淡褐色で側面観は下端が尖る倒卵形、上面観は円形。

ウド　*Aralia cordata* Thunb. 果実

果実は淡褐色で側面観は半月状、上面観は扁平。

キランソウ属　*Ajuga* 果実

果実は楕円形、表面には網目模様があり、腹面の下半部には大きなへそがある。

ナス属　*Solanum* 種子

種子は扁平な円形で表面は網目模様。

メナモミ　*Siegesbeckia pubescens* (Makino) Makino 果実

果実は黒色で歪んだ倒卵形。

第7表　大型植物化石一覧表　　数字は個数、（　）内は破片の数、Bはかみあと

分類群	部位	SX21(A)	SX21(B)	SX21(共通)	SX22	SX26
木本						
ヒノキ	小枝				1	
オニグルミ	核	(3)		1(1)	(1)	
カバノキ属	果実	1			7	
クリ	果実		(3)	(7)		
コナラ属	果実		(2)			
クワ属	種子	1				
ホオノキ	種子			(2)		
スモモ	核					7B10
キイチゴ属	核				7	
フジ属	芽	6				
キハダ	種子		1			
ミツバウツギ	種子	(1)		4(1)		
カエデ属	果実	1				
トチノキ	果実			1(2)		
	幼果			4(6)		
	種子			(1)	(31)	(2)
マタタビ属	種子		(1)			
タラノキ	核	1(1)	7(2)		17(1)	
ミズキ	核			5(4)		
草本						
スゲ属	果実	3				
クワクサ	果実	1				
タデ属A	果実	4(1)	1		9	
タデ属B	果実		2			
シロザ近似種	種子		1			
ナデシコ科	種子	(1)	1		1	
キケマン属	種子	1(1)	(1)			
ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属	核				1	
カタバミ属	種子	1	1			
ツリフネソウ	種子	(4)			2	
スミレ属	種子	1			1	
ウド	果実		3		1	
キランソウ属	果実				2	
ナス属	種子	1	1		1	
メナモミ	果実		1(1)			

放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1．放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400ccを用いて、β-線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期として Libby の半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料のβ-線計数率と自然計数率との差が2σ以下の時は、3σに相当する年代を下限の年代値として表示し、試料のβ-線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon)の計数率との差が2σ以下の時は、Modern と表示し、^{14}C (Sample)/^{14}C (Modern)の値を付記し、^{14}C（Sample)/^{14}C（Modern)＜1であれば、yrBP の値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値 (yrBP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出に CALIB3.0 {Stuiver and Reimer, 1993: IBM-PC 用:Reference (Pearson & Stuiver, 1993)} を使用した。なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約一万年前から AD 1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を＊＊＊または Modern と表示する。また、AD 1,955＊は Modern を意味する。

2．放射性炭素年代測定結果（第8表）

測定No.	試料	^{14}C 年代値	補正暦年代
PLD-160	炭化材 (SX2)	3,430±130yrBP (BC 1,480年)	交点年代値　BC 1,740、1,710、1,700年 1σ年代値　BC 1,890to1,530
PLD-161	炭化材 (SB1)	3,860±120yrBP (BC 1,910年)	交点年代値　BC 2,320年 1σ年代値　BC 2,470to2,140
PLD-162	炭化材 (FP1)	6,670±160yrBP (BC 4,720年)	交点年代値　BC 5,580、5,540、5,530年 1σ年代値　BC 5,670to5,440
PLD-176	トチノキ種子 (SX22)	2,810±110yrBP (BC 860年)	交点年代値　BC 930年 1σ年代値　BC 1,120to830
PLD-201	ケヤキ根 (F10III)	3,850±100yrBP (BC 1,900年)	交点年代値　BC 2,290年 1σ年代値　BC 2,460to2,140
PLD-202	樹皮 (SX21)	4,010±110yrBP (BC 2,060年)	交点年代値　BC 2,550、2,540、2,490年 1σ年代値　BC 2,850to2,830 BC 2,660 to 2,640 BC 2,620 to 2,400 BC 2,370 to 2,360

〈引用文献〉

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

たのもと遺跡の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

当遺跡は岐阜県大野郡丹生川村大字折敷地字西田に所在する。荒城川右岸の標高850～870mの段丘上に位置し、縄文時代早期～晩期のピット群や土坑などの遺構や多くの遺物が出土しており、縄文時代後期の住居跡も検出されている遺跡である。ここでは、主に縄文時代後期～晩期の遺構から出土した木材の樹種同定結果を報告する。

2．方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3方向を薄く剝ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。

組織標本は㈱パレオ・ラボに保管してある。

3．結果

SX21から出土した薄い板状の材はサワラ、細い角棒状はヒノキ科、放射性炭素年代測定に用いられた材はトチノキの根材であった。

SX22から出土した2点はともにクリであり、SX24の杭もクリであった。

SX21の西側に位置するF10区III層から出土した材はカツラであり、F10区III層から出土し放射性炭素年代が測定された材はケヤキの根材であった。

M22区II層から出土した一端に焦げ跡のある丸木はヒノキ属であった。

以上の同定結果を表にまとめ（第9表）、同定の根拠となった組織観察結果を下記に記載する。

1．サワラ　*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科　図版34　1a.-1c.（SX21出口薄板状）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪後半に散在する。分野壁孔は大きなヒノキ型で、孔口はやや大きく開き、1分野におもに2個が水平に整然と配列する。孔口の開口がヒノキより水平に近い角度で大きく開いていることからサワラと同定した。

2．ヒノキ属　*Chamaecyparis* ヒノキ科　図版34　2a.-2c.（M22II層）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は非常に少なく狭い。樹脂細胞は年輪の後半に接線状･散在状に分布する。分野壁孔はやや小さく、外形は丸いヒノキ型で1分野に1～3個、孔口の開き具合は狭いものからやや広いものまで変化する。ヒノキまたはサワラと思われるが、年輪が非常に詰まっており、典型的な形質を観察できないのでヒノキ属としておく。

樹脂道を持たず、樹脂細胞を持ち、仮道管にらせん肥厚がない、似たような形質を持つ他の分類群とは次の点で識別した。同じヒノキ科のネズコは晩材部の量がやや多く分野壁孔も2～6個あり多い、アスナロは分野壁孔がヒノキ属のそれより小型で数も2～4個とやや多く放射組織は5細胞高以下が

多い点で区別した。スギは晩材部の量が多く分野壁孔の輪郭は大きな惰円形で孔口は水平に大きく開いており、モミ属は晩材部の量が多く樹脂細胞は無く放射柔細胞の接線壁に数珠状の肥厚があることで容易に区別できる。

ヒノキ属は温帯に生育し高木となる常緑針葉樹でヒノキとサワラがある。ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、サワラはヒノキより分布域が狭く東北地方南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。いずれの材も耐朽性・耐水性・切削性・割裂性にすぐれる。

3．ヒノキ科　Cupressaceae　図版34　3a.-3c.（SX21　角棒状）

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の仮道管は厚壁で晩材の量はやや多い。樹脂細胞は晩材部に散在する。分野壁孔は1分野に2～4個、壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材であることが判るが、細胞壁の不朽により分野壁孔の特徴が十分確認できないので分類群を絞ることはできなかった。

4．クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科　図版35　4a.-4c.（SX22―①）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、接線状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・柵状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

5．ケヤキ（根材）　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino ニレ科　図版35　5a.-5c.（F10III層―②）

材の中心部に髄がないことから根材であることが判る。単独または2～3個が接合した中型の管孔が不規則に分布し、所々にやや小型～非常に小型の孔径の異なる管孔の集合が見られ、年輪界は不明瞭である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管は層階状で内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の大きく背も高い紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸の陽光地に生育する落葉高木である。

6．カツラ　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科　図版35　6a.-6c.（F10III―①）

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは水平に開いた孔口の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔、内腔には水平のチロースがある。放射組織は異性、1～2細胞幅、多列部の上下端に方形・直立細胞からなる単列部が1～3細胞高ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

7．トチノキ（根材）　*Aesculus turbinata* Blume トチノキ科　図版36　7a.-7c.（SX21 PLD-202）

小型～中型の管孔が単独または2個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状配列の傾向が見られ、道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。幹材に比べ、管孔の分布は粗で少なく、繊維細胞と放射柔細胞が大きいことから根材と同定した。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易いが耐久性は低い。

4．まとめ

不明遺構であるSX21とSX22はオニグルミ核とトチノキの実がまとまって出土し、SX21ではクリの実も出土することから、これらの遺構は水場関連の遺構と考えられており、大型植物遺体の分析も行われている。SX21は縄文時代後期の遺物を伴い、出土した材の放射性炭素年代値は4,010±110yrBP（PLD-202）で同様な時期を示す値が得られている。放射性炭素年代測定を行った材は、外形と外観から根材と見られ組織観察からもトチノキの根材であると同定された。この根材の放射性炭素年代測定値は出土遺物の示す縄文時代後期に近い値であることから、縄文時代後期の遺構周辺にはトチノキが生育していたといえる。またほぼ同時期の放射性炭素年代値を示すケヤキの根材も出土している。縄文時代後期から出土したトチノキ・ケヤキ・カツラ・サワラはやや湿った谷筋に生育する樹種であり、縄文時代後期の遺構の古地形が谷部であった発掘状況と非常によく一致する結果であった。

SX22からは縄文時代晩期の土器が出土しており、出土したトチノキの実の放射性炭素年代測定値も2,810±110yrBP（PLD-176）で遺物の時期と一致していた。この遺構のサンプリング資料からは、クリ果実は検出されなかったがクリの材が出土している。

今回の分析で当遺跡から出土した針葉樹を挙げると、材ではSX21からサワラ・ヒノキ科が、M22区II層からはヒノキ属が出土した。すべてヒノキ科に属するものであり、ヒノキ属に属するものが多い。中部地方は現在もヒノキ属のサワラとヒノキが豊富に生育することで知られており、このような植生の特徴を縄文時代後期から晩期の遺構の分析からも読み取ることができ、また現在でも有用材として用いられているヒノキ属の材が縄文時代においても利用されていたことを知ることができた。

第9表　たのもと遺跡出土木材の樹種同定結果

出土遺構等	樹　種	備考（形状・出土遺物時期・^{14}C測定値など）
SX22	クリ	φ7㎝半截　平面図木片―1　縄文時代晩期
SX22	クリ	平面図木片―2　縄文時代晩期
SX24	クリ	杭　φ15㎝
SX21	サワラ	出口　薄い板状（厚み5㎜）　縄文時代後期
SX21	ヒノキ科	細い角棒状（厚み5㎜）　縄文時代後期
SX21	トチノキ（根材）	8㎝　^{14}C測定(PLD-202　4,010±110yrBP)
F10III層―①	カツラ	φ10㎝　縄文時代後期
F10III層―②	ケヤキ（根材）	φ6㎝　^{14}C測定(PLD-201　3,850±100yrBP)
M22II層	ヒノキ属	φ15㎝　一端焦げ跡あり（遺物番号10911）

第6章　まとめ

1　西区III層出土のIV期の土器について

たのもと遺跡から出土した縄文土器のうち砕片等のため未報告の資料は、約22,000点(111.8kg)で、そのうち約63%の14,000点（54kg）が西区III層出土である。実測図を掲載した縄文土器は約580点で、そのうちの約63%が西区III層出土のIV期の土器である。また、完形に近い形まで復元を試みた個体は12点で、そのうちの8点が西区III層出土のIV期の土器である。今回の発掘調査において、その出土遺物の中心的存在といえる西区III層出土のIV期の土器について、若干考察を加えてみたい。

西区III層は上層に厚い砂礫層を挟み、縄文後期中葉以降の遺物包含層との分層が可能な比較的安定した遺物包含層である。出土した土器はほとんどが小破片で、その復元が困難なものが多かった。地下水等の影響によるものか、同一個体でその色がそれぞれ異なる破片が目立つが、全体に破片自体の残り具合は良好なものが多い。西区III層出土の土器は一部に縄文中期のものを含むが、そのほとんどは一括性の高い縄文後期の土器と考えられる。本文中では西区III層出土の縄文後期の土器を、後期前葉に属するものと想定して、器形や文様構成から9群に大別し分類している（第3章第3節4）。

第1群土器は微隆起線によって施文される深鉢である[1]。縦方向に文様が展開し、微隆起線の一部がループ状になりその先端を下から上へ巻き込むような処理が特徴的な一群である。微隆起線文をもつ樽形の器形の土器については、1類は桜洞遺跡（紅村1974）に、2類は寺東遺跡（吉朝1988）にその類例がみられる[2]。口縁部がやや内彎する5類は、沈線文の併用等もみられ、時期差を想定すべきであろう。第1群土器の遺構における他群の土器との共伴関係を示す確実なものはSK2の事例で、1a類の土器胴部と第2群土器の橋状把手部が同じ土坑より出土している（第18図・第10表）。

第2群土器は微隆起線文によって施文される壺状の土器である。3個体が復元でき、全部で7個体

第10表　遺構出土のIV期の土器（西区）

遺構名	第1群土器	第2群土器	第3群土器	第4群土器	第5群土器	第6群土器	第7群土器	第8群土器	第9群土器
SB1	2類？(1～7) 3類？(19) 3類？(22・23)	(20) (21)	3b類(12)	(9)	7類(13～15)	1類(16) 2類？(25)	1a類(10)	2c類(28) 2c類(29)	2c類(8) 4類(32) 5類(44)
SX4	3類？(77)								
SX6		(83～85)		？(82)		2a類(86)			
SX7			1b類(91)		7類(92)			？(93・94)	
SX8		(98)							1b類(100)
SX11						2類？(104)			
SX13	？(106～109)						(110・111)	2c類(104)	
SX21	1c類(127)								
SX23									4類(135)
SK1		(137・138)							
SK2	1a類(139)	(141)		？(140)					4類(142)
P1									2c類(145)
P3					7類(148)				2a類(147) 2c類(146) 2c類(151)
P5					7類(157)				
P8			1b類(209)						
P73			1b類(91)					2c類(170)	

以上の存在が確認できる重要な土器群である。第１群土器と比較すると、１本線を基調とした施文法やモチーフは２類土器に共通するものがあり、胎土や器厚等では３類土器に同質のものが含まれている。類例は少なく、吉城郡上宝村の大楢遺跡出土の胴部破片（大江1958）や益田郡小坂町の水口遺跡出土の橋状把手破片（大江1965）などが同類かと類推される程度である[3]。遺構出土では、SB１およびSX６で、第６群の鉢形土器との共伴がみられた。

第３群土器は西日本系の縁帯文土器に比定できる一群で、成立期のものを含んでいると考えられる。胴部文様が不明のものが多いが、口縁端部の肥厚具合や口縁部の文様帯のあり方等から、ある程度の時期幅を想定すべきであろう。遺構からの出土が確認できたものは、３ｂ類（SB１）と１ｂ類（SX７・Ｐ８・Ｐ73）で、第８群の２ｃ類と共伴である。

垂下隆帯をもつ第４群土器については、確認できたのは１個体のみである。SB１出土の破片が１点含まれ、第２群土器や第６群土器と共伴関係にある。垂下隆帯や沈線による渦巻文と斜行文などの胴部文様から堀之内１式段階と想定できそうであるが、口縁端部の文様や頸部が大きく外反し胴部が膨らむ器形は、第３群土器に通じるものでもある。

第５群の沈線文が主体の土器では、第５類および第６類の口縁部から頸部にかけて横方向の文様が展開する土器が、ともに上層部分から出土している（216・365～367）。また、第６類土器と同質の胎土で、微隆起線をもつ口縁部破片（第８群１類403～405）が、同様に上層部分より出土している。これらの土器は、III層出土の大半の土器に後続する様式である可能性が大きい[4]。

第６群の１・２類は口縁部の内屈が強い鉢形土器である。SB１およびSX６では、第２群土器と一緒に出土している。類例は、真脇遺跡（加藤1986）、気屋遺跡（米澤1996）、吉野ノミタニ遺跡（米澤1997）など北陸の遺跡において、後期前葉の土器群の中にみられる。

第８群および第９群は、その大半がいわゆる粗製土器の範疇に含まれる土器群である。口縁部から頸部にかけて無文帯を残し、縄文の施された胴部は丸く膨らみ、器厚が５㎜前後の薄手の土器という特徴がみられる。頸部の外反具合や口唇部の施文等の違いは時期差と考えられる。

一応 SB１からは第１群から第９群までの全群の土器が出土しているが、破片が小さく特定が困難なものが多い。従って、住居跡内の土器のセット関係も不明確な部分が多い。本遺跡の所在する丹生川村に隣接する吉城郡上宝村の大首遺跡では、縦展開の微隆起線文がみられる樽形の深鉢（第１群１類）と、口縁部が内屈する鉢形土器（第６群１・２類）、口縁部には丸い刻み付きの隆帯を有し外反する頸部は無文で胴部は縄文の土器（第８群２ｃ類）等が出土している（大江1958）[5]。これらは本遺跡の西区III層出土の土器群と同様のセット関係が類推可能な資料である。

本遺跡の西区III層から出土した在地色の強い第１群および第２群土器を後期前葉に位置づけた根拠は、第３群土器の存在である。今後さらに検討を加える必要があるが、現時点では同層出土の土器群の中で指標となり得る有力な土器群は縁帯文系の第３群土器群である。その器形等から第３群土器については１類→２・３類、第１群土器については１・２類→５類、第９群土器については２ｂ類→２ｃ類→３類といった変遷を類推し、その中心時期は後期前葉の前半と推定しておく。

たのもと遺跡出土の縦展開の微隆起線文をもつ深鉢（IV期第１群土器）および微隆起線文の壺状土器（同第２群）は、資料の希薄なこの地方の縄文後期前半の様相を明らかにする上で重要な土器群である。関連する前後の時期の土器が出土している周辺の遺跡との関係等を探りながら、今後の研究を

深めていきたい[6]。

2　石器について

たのもと遺跡の石器類の出土総点数は、1,779点である。地区別の組成は第30表に示したとおりである。前述したように石器類の分類については、五味原遺跡群報告書の第1集「西田遺跡」(谷口1997)に準拠している。巻末の第11表から第29表に器種別の計測表を掲載した。本文中では個々の石器について出土地区や層位に応じて順次報告しているので、最後に遺跡全体について概観しておきたい。

石鏃は86点出土し、遺構出土分も含めてその約70%がⅣ期の土器に伴うものと考えられる。この時期の特徴としては、鋸歯状側縁が顕著で、基部の抉りが深めで薄手の凹基無茎鏃が多いことを指摘できる。石材はチャートが半数以上を占め、下呂石が多い西田遺跡の後晩期とは様相が異なっている。

石錐の出土は全部で22点で、そのうち約68%が西区Ⅲ層出土である。西田遺跡で多数出土した棒状タイプ（1類）については西区Ⅲ層からの出土は皆無で、東区より3点が出土したのみである。Ⅳ期の土器に伴うものは、そのほとんどがチャート製である。その他の剥片石器や使用痕のある剥片等でも、同様に西区Ⅲ層ではチャートの占める割合が大きい傾向にある。

石錘の出土は五味原遺跡群では全般に少なく、本遺跡でも西区Ⅲ層より有溝石錘が3点出土しただけである。本遺跡出土のものは、長さが7㎝前後で、重さ70～100ｇのやや大型の製品である。

打製石斧の出土総数は226点である。そのうち西区Ⅱ層出土が41点(18.1%)、東区出土が112点(49.6%)と、西区Ⅲ層からの出土が顕著な剥片石器類とは異なる分布状況を示している。製品は全体的に小振りなものが多いが、本文中で触れたように、西区Ⅲ層出土のものと東区出土のものに時期差によると考えられる違いが一部認められる。後期前葉が主体と考えられる西区Ⅲ層出土の打製石斧では、表裏両面や刃先に原石の自然面を残すものがあり、偏平な小型の川原石（凝灰岩）が原石として用いられたようである（64・66・123・522・523)。また、緑色片岩製で側縁部に敲打痕のようなツブレを伴うものも目立つ（168・169・521)。晩期が主体の東区出土の打製石斧は、比較的大きめの礫から素材剥片を得たと考えられるものが多い。横刃形石器は遺構分を含めて5点すべてが西区Ⅲ層出土である。SB1出土のものは厚手で（63)、他は薄手の製品である。

西区Ⅲ層からは、飛騨ヒスイ製の礫器が2点出土している（527･528)。荒城川上流原産のこの石はヒスイより硬度の低い軟玉で、縄文時代の装飾品にはあまり用いられなかったようである。原産地に近い五味原遺跡群では、各遺跡から原石の出土がみられるが、製品の出土は稀である。

磨製石斧は全部で27点出土している。西区Ⅲ層出土で特徴的なものは、欠損部分に顕著な敲打痕を残す2点である（125･531)。東区出土のものでは長さ4㎝前後の小型の磨製石斧が晩期に属すると考えられる（796・797)。

磨石･凹石類は全部で137点出土しているが、約半数が後期前葉と考えられる遺構および西区Ⅲ層からの出土である。特にSB1出土のものは顕著な使用痕を残している（67～74)。水場遺構などから出土したトチやクルミ等の堅果類の加工処理等との関連を考えたい。

3　遺跡の変遷について

たのもと遺跡出土の最古の資料は、東区出土の縄文早期後葉の貝殻条痕文系の土器である（625)。

同区で検出した炉穴の炭化材の年代測定値は6,670±160yrBP を示している。約500m下流の西田遺跡では、早期の焼礫集積遺構が多数検出されているが、本遺跡の炉穴とは形態が異なるものである。西田遺跡や牛垣内遺跡などで押型文土器が出土しているが、本遺跡では確認できなかった。

縄文前期（II期）の資料は西区の西側の部分から出土している。繊維土器と北白川下層IIｂ式に比定できる破片で、ともに単独出土である。前者は西田遺跡との関連が考えられる土器で、後者は五味原遺跡群内では希薄な時期の資料である。丸山遺跡の主体をなす前期末から中期初頭の遺物については、本遺跡からの出土は未確認である。

縄文中期（III期）の資料は断片的なものが多い。西区では前半の平出III類Ａ式土器（194）や後葉と考えられる隆帯文の土器（196）などが単発的に出土し、東区でも５～６個体分の破片が確認できたに過ぎない。この時期の遺物がまとまって出土した牛垣内遺跡や対岸のカクシクレ遺跡などとの関連を探る必要があるが、今回の発掘範囲内に中期の居住域があった可能性は低いと考えられる。

縄文中期末から後期初頭に特定できる資料は現段階では見当たらない。西区III層の主体をなす時期は縄文後期前葉（IV期）と考えられる。今回の発掘調査では、この時期の竪穴住居跡１軒と周辺の焼土跡群・土坑・ピット群および水場遺構等を確認した。背後（東側）が急斜面となるわずかな平地（緩斜面）に住居が設けられ、その前方（西側）は再び急斜面となっている。比較的多くの土器片が出土したＧ９区・Ｇ10区は、住居の北西の谷部にあたり、その先に水場（SX21）が位置している。居住区の南側は現在の道路によって削り取られているが、等高線をみる限りでは平地は限られていたようである。現在の荒城川は、遺跡の約12m下方を流れているが、地形的には当時も同程度の高低差があったと考えられ、生活用水には谷水や湧き水を利用していたと考えるのが妥当であろう。Ｉ16区やＫ23区などからも僅かではあるがIV期第１群の土器などが出土しているので、西区の上段に相当する遺跡の東側の部分も同時に活用されていたようである。同時期と考えられる遺物の出土は、五味原遺跡群の他の遺跡では希薄である。続く後期中葉（Ｖ期）との間に本遺跡の西区では、背後の谷の氾濫等により砂礫の堆積が起こり、埋没谷のように地形が豹変したと考えられる。その後の西区は、谷水や湧水の流路が定まらない不安定な斜面となり、居住区は東区へと移り変わったと考えられる。

本遺跡の後期中葉以降の遺構面は、この地域の多くの縄文後晩期の遺跡と同様に、後世の開墾等によって失われた可能性が高いが、特に東区はその出土遺物や自然流路内の遺構等から、縄文晩期中葉から後葉には居住域であったと推測される。周辺の遺跡で晩期の遺物がまとまって出土したのは、牛垣内遺跡と西田遺跡およびカクシクレ遺跡Ａ地点である。

東区はその出土遺物から、平安時代の中頃に再び居住区として利用された可能性が高く、その時点で縄文時代の遺構や包含層の多くが失われたことも推測される。同時期のものと考えられる住居跡が牛垣内遺跡で検出され、同時期の遺物が西田遺跡やカクシクレ遺跡Ｃ地点より出土している。

たのもと遺跡の変遷を五味原遺跡群の他の遺跡と関連づけながら概観してみたが、今後は各遺跡の発掘結果を比較検討しながら、遺物編年や集落の変遷および集落構造等についての研究を深めることを課題としたい。

１）隆線の両脇がナデにより断面三角形に仕上げられた微隆起線によって文様が描かれるこの地方の土器

は、「宮田式」として報告されることが多い。たのもと遺跡出土のⅣ期第1群土器は、設定時の「宮田式」土器に含まれる土器（紅村・増子1978）であるが、縦方向の文様展開をもつ深鉢主体というより限定される要素が強いので、本文中では「宮田式」という形式名は用いてない。戸田論文では「宮田古式」と位置づけられた土器（戸田1993）、および増子論文の「宮田式1段階」に含まれる土器（増子1992）との関連が考えられる。なお、本遺跡の土器では粘土紐を貼り付けた後に、その両脇を工具で調整した工程が推測されるものも目立つ。出来上がった断面三角形の隆線は、隆起線あるいは隆線という表現の方が適切と思われるものもあったが、本文中ではそのほとんどを微隆起線と表記したことを断っておく。

2）第10図―50（紅村1974）、挿図62―5・77―56（吉朝1988）。寺東遺跡出土のものは口部が楕円形の樽型で山並状突起を有している点などが特徴的である。

3）図版15上図で上から2段目の左から2点目（大江1958）、図版23上図の右上（大江1965）。第2群土器については、その系譜を西日本系の双耳（四耳）壺や東日本系の瓢形注口土器等の中に見出せないかと考えたが結論を出せないのが現状である。橋状把手の位置等が類似の土器は、真脇遺跡第13群土器（前田式）図3―28（加藤1986）にみられる。

4）口縁部から頸部にかけて主に横方向に微隆起線文が展開する土器は、萩原町宮田遺跡・禅昌寺遺跡（増子・紅村1978）等から出土し、「宮田式」設定のきっかけになった土器である。また、「宮田」式には、L字ないしT字状に内屈した口縁部に微隆起線文がみられる土器（南垣内型鉢）が存在するが、たのもと遺跡からは出土をみなかった。

5）図版15の下図（大江1958）。土器は現在、上宝村教育委員会に保管されている。なお、上宝村上地ヶ根大首遺跡出土の縄文後期土器については、「後期の土器は気屋式土器比定のものが目立ち注目すべきである。（中略）その他後期の土器は磨消縄文、ミミズ張り状の隆起線を有するものがかなり見られる。口縁部が肥厚して、その部分に縄文が施文された縁帯文を有するもの、又、外反する器形の口縁部で、口唇部が平であり、その上に工具で綾杉状の文様が沈線で施文されているものなどが出土している。」（大江1958）というように微隆起線文の土器とともに、たのもと遺跡のⅣ期第3群1b類と考えられる土器の記述がみられるが、現物は確認できなかった。

6）発掘調査により縄文後期前半の土器が出土した周辺の遺跡としては、同じ荒城川沿いの西田遺跡（谷口1997）や荒城神社遺跡（本永1993）、古川町の中野山越遺跡（戸田1993）、高山市の垣内遺跡（田中1991）などがあげられる。

第11表　石鏃計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
1	SB1		2317	下呂石	18.5	14	3.3	0.8	1E		13-48	
2	SB1		3045	下呂石	15.6	7.5	2.2	0.2	2C		13-49	鋸歯状
3	SB1		3139	下呂石	(16.2)	9	2.5	(0.4)	1C	b	13-50	鋸歯状
4	SB1		3334	下呂石	(15)	(4)	1.2	(0.2)	1C	f		鋸歯状
5	SB1		3483	黒曜石	(13.8)	(7)	1.5	(0.2)	1C	b	13-51	
6	SB1		10881	下呂石	(15)	9.5	2.5	(0.4)	1C	a	13-52	鋸歯状
7	SX8		2545	下呂石	(15.9)	(7.2)	1.5	(0.2)	2C	b	16-101	鋸歯状
8	SX11		2831	チャート	(13)	(7.6)	1.1	(0.2)	1C	b	16-102	
9	SX15		4302	下呂石	23.5	19.7	3	2	1E		17-118	
10	P3		4508	下呂石	22.9	8.6	1.7	0.4	2C		25-152	鋸歯状
11	F10	II	3742	下呂石	19.3	13.3	6.3	1.7	1D		49-585	
12	G8	II	-1	下呂石	(18.6)	(12.1)	2.5	(0.5)	1C	b		
13	I13	II	754	下呂石	(20.1)	11.9	4.8	(1)	2F	e	49-586	
14	I13	II	3307	下呂石	16.7	11.9	2.9	0.5	1B		49-583	
15	I16	III	3308	チャート	17.3	16.7	1.6	0.4	1C		49-584	
16	G9	III	5414	チャート	25.5	15	2.7	1.6	1E			鋸歯状
17	G10	III	6345	下呂石	21.3	12.3	4.5	1.1	1E			鋸歯状
18	G10	III	6702	下呂石	(22.2)	(9)	3.7	(0.6)	1C	g		鋸歯状
19	G10	III	8675	チャート	(13.1)	(14.1)	1.6	(0.6)	-	d		
20	G10	III	8809	下呂石	28.9	17.5	7.8	3.6	1E		41-486	
21	G10	III	9901	下呂石	19.1	13.8	2.8	0.5	1C		41-473	
22	G11	III	5325	チャート	21.8	17.8	4.1	1.7	1B		41-471	
23	H9	III	5988	チャート	(15.4)	(6.6)	1.5	(0.2)	1C	f		鋸歯状
24	H9	III	6416	下呂石	(12.9)	(10.5)	2.4	(0.4)	1C	e		鋸歯状
25	H10	III	969	下呂石	(14.4)	(5.5)	1.8	(0.2)	1C	e		鋸歯状
26	H10	III	2461	チャート	(9.2)	(4.6)	1.3	(0.1)	-	d		
27	H10	III	3239	チャート	(13.9)	(9.5)	1.9	(0.3)	1C	b		
28	H10	III	3410	下呂石	(26.6)	(7.4)	3.1	(0.6)	1C	e		鋸歯状
29	H10	III	4106	下呂石	(15.2)	(8.8)	3.4	(0.5)	1B	a		鋸歯状
30	H10	III	4739	下呂石	(18)	(10.6)	2.9	(0.6)	1C	a		
31	H10	III	6354	チャート	(16)	(6.7)	1.7	(0.3)	1C	e		
32	H10	III	8365	下呂石	20.5	14.7	4.1	1.2	1B		41-472	
33	H11	III	1859	チャート	(15.3)	(7.2)	1.7	(0.3)	-	c		
34	H11	III	2129	下呂石	(15.7)	(11.2)	1.4	(0.4)	-	d		
35	H11	III	2181	チャート	(22.1)	(10.9)	2.2	(0.5)	2C	b	41-481	鋸歯状
36	H11	III	2194	下呂石	(15.5)	12.5	1.6	(0.6)	1B	a		
37	H11	III	2476	チャート	16.2	8.2	1.4	0.2	1C		41-474	鋸歯状
38	H11	III	2616	下呂石	(16.5)	(15)	6	(1.2)	1B	b		被熱
39	H11	III	2713	下呂石	19.4	9.5	1.9	0.3	5C		41-485	鋸歯状
40	H11	III	2714	チャート	(13.3)	(6.1)	1.6	(0.3)	1C	e		
41	H11	III	2738	下呂石	18	9.8	2.2	0.4	1C		41-475	鋸歯状
42	H11	III	2912	チャート	(11.1)	(6.2)	3	(0.3)	-	d		
43	H11	III	2922	下呂石	(14.9)	(9.2)	2.5	(0.3)	1C	g		鋸歯状
44	H11	III	2965	チャート	(6.3)	(5.4)	1	(0.1)	-	d		
45	H11	III	3102	チャート	(13.6)	(7.7)	1.5	(0.2)	1C	b	41-476	鋸歯状
46	H11	III	3112	チャート	(1.5)	(5.3)	1.4	(0.2)	-	c		
47	H11	III	3188	チャート	(15.1)	(10.9)	2.7	(0.5)	1C	a		
48	H11	III	3235	下呂石	19.2	9.5	2.1	0.4	1C		41-477	鋸歯状
49	H11	III	3537	下呂石	(13.9)	10.9	2.9	(0.6)	1B	a		鋸歯状
50	H11	III	6265	下呂石	(15.7)	(13.5)	1.7	(0.5)	-	b		未製品
51	H11	III	10543	チャート	23.7	20.7	5.2	2.6	1E			未製品
52	H11	III	-2	下呂石	(17.5)	15.6	4.2	(1.4)	1B	a		

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
53	I 10	III	836	下呂石	(21.4)	10.9	2.7	(0.5)	1C	a		鋸歯状
54	I 10	III	927	チャート	(12.4)	(10.2)	1.9	(0.3)	-	d		鋸歯状
55	I 10	III	994	チャート	(16)	(7.2)	1.5	(0.1)	2C	g		鋸歯状
56	I 10	III	1191	チャート	(18)	(9.5)	2.5	(0.5)	1C	e		鋸歯状
57	I 11	III	256	チャート	(11.5)	9.1	2.1	(0.3)	1C	a		鋸歯状
58	I 11	III	287	下呂石	22.7	10.4	2.2	0.4	2C		41-482	鋸歯状
59	I 11	III	295	チャート	(18.9)	9.1	2.6	(0.4)	2C	a	41-483	鋸歯状
60	I 11	III	314	チャート	14.9	9.6	1.7	0.3	1C			鋸歯状
61	I 11	III	608	黒曜石	(13)	7.4	1.7	(0.2)	1C	a	41-478	
62	I 11	III	1588	黒曜石	(19.3)	(11.3)	1.9	(0.5)	1C	b	41-479	鋸歯状
63	I 11	III	2339	チャート	(17)	(9.7)	2.8	(0.5)	1C	b	41-480	
64	I 12	III	3145	チャート	(22.9)	(8.5)	1.7	(0.4)	2C	b	41-484	鋸歯状
65	I 12	III	3287	下呂石	(17.5)	(9.7)	2	(0.3)	1C	b		鋸歯状
66	I 12	III	3392	チャート	16.1	8.7	2.9	0.4	1B			
67	I 12	III	3555	チャート	(12)	10.1	3.1	(0.5)	1C	a		
68	I 12	III	-6	チャート	(13.3)	(11.7)	4.8	(0.8)	-	d		
69	K22	II	-1	下呂石	(18.5)	17.2	3.8	(1.5)	1D	a		以下東区
70	K22	III	1817	下呂石	25.9	14.9	5.1	1.3	1F			
71	K24	II	6993	下呂石	(15.1)	(11.3)	2.1	(0.3)	1C	b		
72	L20	IV	7584	チャート	21.7	15.8	2.9	0.7	1A			
73	L22	I	6752	チャート	26.7	15.5	5.2	1.5	1B		66-765	
74	L22	II	7073	チャート	(23.9)	15	2.4	(0.8)	1C	b	66-769	
75	L22	II	7459	下呂石	27.4	19.2	4.2	1.2	5C		66-770	
76	L22	II	7460	下呂石	(18.4)	13.5	14.5	(1.4)	4F	e	66-772	
77	L22	II	8545	下呂石	(25.4)	11.1	13.4	(1)	2B	a	66-767	
78	L23	II	8751	チャート	(16.8)	16.9	5	(1.7)	1B	a		
79	L23	III	8149	下呂石	(19.4)	14	2.9	(1)	1C	a		
80	M21	III S	9496	黒曜石	21.1	14.7	14.6	1.1	1F		66-771	
81	M22	II	9367	下呂石	28	15.7	3.5	1.1	1C		66-768	
82	M22	II	9370	チャート	24.9	12.7	13	1	1B			
83	M23	II	9147	黒曜石	25.2	13	3.9	1.1	1B			
84	P23	I	7581	チャート	(19.5)	14.8	2.9	(0.8)	1B	a	66-766	
85	P23	II	-1	下呂石	(19.4)	11.8	3.8	(1.1)	2D	a		
86	表採		-1	下呂石	(16.8)	(19.4)	5.6	(1.6)	-	d		出土区不明

第12表　石錐計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
1	SB1		2464	チャート	(11)	0.9	1.7	(0.2)	3B	基部		
2	SB1		3332	チャート	(15.4)	(10.2)	3.7	(0.7)	4B	尖端	13-53	
3	SB1		3385	チャート	(14.4)	(9.4)	2.4	(0.4)	3B	基部	13-54	
4	SX15		4582	玉髄	38.2	17.7	4.9	3	5		17-119	
5	H11	III	1532	チャート	27.4	11.3	2.4	0.9	4A		41-491	
6	H11	III	2357	チャート	22.5	19.8	7	2.6	4A			
7	H11	III	2834	チャート	(15)	13.7	3	(0.9)	3A	尖端	41-489	
8	H11	III	3707	チャート	18.8	8.9	4.3	0.9	3B		41-490	
9	H11	III	-3	チャート	19.9	19.4	4	2	3A			
10	H11	III	-7	チャート	(30.3)	17.7	8.3	(5.2)	4A	尖端		
11	I 11	III	449	チャート	(20.8)	15.4	5.1	(1.9)	2A	尖端	41-487	
12	I 11	III	6408	玉髄	28	25.1	5.7	2.1	2B		41-488	
13	I 12	III	2346	チャート	13.6	5.4	1.5	0.2	4B			
14	I 12	III	2349	チャート	17.2	9	1.6	0.4	4A		41-492	
15	I 12	III	-1	下呂石	28.8	17.4	6.6	2.3	4B			

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備　　考
16	K22	II	7679	下呂石	62.5	19.9	10.1	12.4	1B		66-773	以下東区
17	L21	II	-1	下呂石	36.4	16.4	5.6	3.2	4A			
18	L22	III	-1	チャート	17.4	11	2.2	0.7	3A		66-775	
19	M22	III	9972	下呂石	(22.6)	(9.6)	4.7	(0.9)	1B	基部	66-774	
20	N22	II	-1	下呂石	(22.9)	7.6	4.3	(1)	1B	基部		
21	表採		-2	下呂石	(56.4)	22.1	16.3	(13.9)	5	尖端		西区
22	表採		-3	チャート	29.7	14	3.9	1.6	2B			出土区不明

第13表　削器計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	分類	挿図番号	備　　考
1	SB1		3330	チャート	43	29	9	14.8	1	13-55	
2	H11	IId	-1	チャート	31	50	6	15.3	1	49-587	
3	H11	IIIL	10679	チャート	39	55	7	22.3	3	41-493	
4	I10	III	980	チャート	31	28	7	7.9	3		
5	I11	III	2116	下呂石	30	(18)	5	2.9	2	41-495	No.6と接合
6	I11	III	10528	下呂石	28	(12)	3	1.9	2	41-494	No.5と接合
7	K22	III	9127	下呂石	71	36	14	31	1	66-776	以下東区
8	M21	II	10753	下呂石	35	58	12	21.1	1	66-777	
9	M21	III	9278	黒曜石	26	21	7	3.6	1	66-778	

第14表　ヘラ形石器計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	分類	挿図番号	備　　考
1	P3		-1	チャート	30	17	6	4.1	1	25-153	
2	H10	III	5647	チャート	32	13	10	3.9	2	41-496	
3	H11	III	-5	下呂石	18	13	3	0.8	2		

第15表　両極剝離痕のある石器計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	分類	挿図番号	備　　考
1	SB1		3548	チャート	21	19	6	2.8	3	13-56	
2	SB1		4348	下呂石	17	10	6	1.3	1	13-57	
3	G10	III	6547	チャート	21	18	6	3.4	1	41-497	
4	G10	III	8890	下呂石	23	20	11	6.5	1		
5	G11	III	4997	チャート	18	19	4	2	3		
6	H10	III	3407	下呂石	24	20	7	3.3	1		
7	H10	III	3419	チャート	26	18	7	3.5	1		
8	H10	III	4405	下呂石	22	30	8	6.7	2	42-499	
9	H11	III	2715	下呂石	25	15	7	2.7	1		
10	H11	III	3028	下呂石	39	24	10	10	1		
11	H11	III	3514	チャート	23	26	6	3.5	3		
12	H11	III	4380	チャート	28	19	8	5	1	41-498	
13	H11	III	4575	玉髄	17	20	7	2.5	3	42-500	
14	H11	III	4576	下呂石	22	27	9	5.8	2		
15	H11	III	10675	下呂石	27	24	5	3.5	3		
16	H11	III	-4	下呂石	18	25	6	1.7	1		
17	I12	III	-2	下呂石	22	15	8	3.3	1		
18	I12	III	-3	下呂石	22	17	8	8.1	1		
19	I12	III	-4	下呂石	18	14	4	3.8	1		
20	M21	II	7870	下呂石	27	28	19	6.4	2	66-779	以下東区
21	M22	II	9971	下呂石	37	29	18	7.7	1		
22	M22	II	10172	下呂石	22	17	5	2.3	1		

第16表　抉入石器計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	H11	III	1533	チャート	22	27	3	2.9	42-501	
2	H11	III	3095	チャート	18	22	6	5.7	42-502	
3	I12	III	1631	下呂石	32	15	9	8.7	42-503	

第17表　二次加工のある剝片計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	SB1		2998	チャート	(21)	(14)	6	(2.4)	13-58	欠損
2	SB1		3781	チャート	36	33	11	12.2	13-60	
3	SB1		10886	チャート	25	18	4	2.5	13-59	
4	SK10		-1	下呂石	26	24	11	8.5	25-143	
5	P9		-1	下呂石	49	39	8	13.5	25-160	
6	F8	II	30	黒曜石	11	16	3	0.5		
7	I12	II	1046	チャート	49	37	17	36.5	49-588	
8	I13	II	157	黒曜石	14	15	2	0.4		
9	I13	II	1364	下呂石	21	29	8	4.7		
10	G10	III	8805	チャート	37	26	8	8.2	42-508	
11	G10	III	9329	チャート	24	9	8	2.2	42-504	
12	G10	III	9900	下呂石	40	28	7	7.5		
13	H10	III	1897	チャート	(28)	(13)	5	(1.9)		欠損
14	H10	III	6000	黒曜石	22	14	5	5.2	42-505	
15	H10	III	6117	チャート	55	34	11	18.6		
16	H10	III	-1	チャート	(18)	(11)	6	(1.9)		欠損
17	H10	IV	5231	チャート	25	21	9	5	28-190	
18	H11	III	2818	チャート	(13)	16	2	(0.7)		欠損
19	H11	III	3765	チャート	24	15	6	2.1		
20	I11	III	316	チャート	26	24	4	2.5		
21	I11	III	1712	下呂石	(19)	17	2	(0.9)	42-507	欠損
22	I11	III	4052	チャート	19	12	3	3.5	42-506	
23	I12	III	4345	チャート	(19)	(16)	8	(2.7)		欠損
24	L22	II	-2	黒曜石	24	11	5	1.3		以下東区
25	M22	II	10458	チャート	17	13	3	1.1		
26	M22	II	-1	黒曜石	21	18	8	3.1	66-780	
27	M23	II	10917	下呂石	26	24	6	4.1		
28	P23	II	-2	下呂石	28	18	5	2.7		
29	P24	II	660	黒曜石	(15)	(15)	4	(0.9)		欠損
30	表採		-4	黒曜石	18	9	2	0.5		出土区不明

第18表　使用痕のある剝片計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	SB1		470	下呂石	31	22	9	4.6	13-61	
2	SB1		2390	チャート	33	12	4	2.1		
3	SB1		2639	チャート	23	17	7	3.3		
4	SB1		2640	チャート	28	17	4	1.9	13-62	
5	SB1		2687	チャート	26	12	2	1.2		
6	SX11		2807	チャート	33	17	5	2.9		
7	SX11		2808	チャート	23	21	5	2.9		
8	SX11		2832	チャート	46	32	8	12.5	16-103	
9	SX15		4468	玉髄	23	13	5	1.4		
10	SX21		-1	チャート	24	20	4	2.4	23-130	
11	SX23		10688	チャート	25	13	4	1.1	23-136	
12	P3		4516	下呂石	30	14	4	1.6	25-155	
13	P3		4517	チャート	41	17	7	5.5		
14	P3		4519	チャート	26	20	6	4	25-154	
15	P9		-2	下呂石	46	32	10	11.9		
16	P28		-1	チャート	50	19	9	3.1		

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備　　考
17	P54		10430	チャート	28	15	6	2.7	26-166	
18	G10	II	6018	下呂石	40	15	7	5.5		
19	I 8	II	1833	下呂石	54	46	8	14.3	49-589	
20	I 15	II	-1	玉髄	29	17	6	3.4		
21	I 16	II	937	チャート	7	8	4	1		
22	G9	IV	5931	チャート	34	44	10	15.3		
23	G10	III	8849	チャート	32	20	4	3.8	42-509	
24	H9	III	3950	チャート	33	33	7	6.1		
25	H10	III	968	下呂石	24	16	8	3.1		
26	H10	III	2409	チャート	41	20	5	4.4		
27	H10	III	4101	チャート	43	21	8	7.9		
28	H10	III	4816	チャート	27	30	6	6.8		
29	H10	IV	5643	チャート	23	17	6	3.2	28-191	
30	H11	III	1998	チャート	50	24	10	10.1	42-510	
31	H11	III	2212	チャート	24	17	5	2.7		
32	H11	III	2363	玉髄	29	16	3	1.3		
33	H11	III	3883	下呂石	26	14	7	2.3		
34	H11	III	4780	チャート	36	27	8	6.3		
35	H11	III	4908	玉髄	27	37	13	9.9	42-511	
36	H11	IV	5643	チャート	23	17	6	3.2		
37	H11	IV	10887	チャート	48	46	11	21.1	28-192	
38	H12	III	2720	下呂石	37	27	16	7.7		
39	I 10	III	523	チャート	36	19	5	3.3		
40	I 10	III	1000	チャート	41	34	11	14.9		
41	I 10	IV	-2	チャート	33	23	7	5.5		
42	I 11	III	2300	玉髄	34	20	10	4.9		
43	I 11	III	2308	下呂石	33	23	6	3.4		
44	I 11	III	4135	下呂石	29	21	8	4.7		
45	I 11	III	4154	下呂石	24	13	6	2		
46	I 11	III	4315	下呂石	21	8	3	0.4		
47	I 12	III	1222	チャート	63	41	14	37.2		
48	L21	III	-2	黒曜石	21	12	5	1.5		以下東区
49	L23	III	8570	玉髄	17	23	3	1.7	66-782	
50	M21	II	-1	下呂石	22	38	4	3.7		
51	M22	I	-2	黒曜石	15	20	4	1.4		
52	M23	III	9591	下呂石	23	15	3	1.1		
53	M23	III	9697	黒曜石	24	26	8	5.2	66-781	
54	P23	II	7756	黒曜石	15	22	5	1.7		

第19表　石核計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備　　考
1	G10	II	5844	下呂石	95	54	22	121.3	49-590	
2	G10	III	6184	チャート	24	20	15	7	42-513	
3	H11	III	2136	チャート	32	26	9	7		
4	H12	III	1525	下呂石	29	39	11	11.3		
5	I 9	III	9556	下呂石	35	46	24	34.8	42-512	
6	L22	III	8396	下呂石	61	62	28	124.2	66-783	東区
7	P24	III	9139	黒曜石	29	23	10	6.4		東区

第20表　石錘計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　　材	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備　　考
1	F10	III	10132	凝灰岩	72	42	24	97.3	42-514	
2	G11	III	6256	凝灰岩	59	45	22	68.7	42-516	
3	H11	III	4975	凝灰岩	70	41	24	87.6	42-515	

第21表　接合剝片（SX15）計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	SX15		4583	玉髄	27	16	12	4.4	17-120	
2	I 11	III	4043	玉髄	34	31	13	10.9	17-121	
3	I 11	III	-7	玉髄	25	13	9	1.8	17-122	

第22表　打製石斧計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
1	SB1		2323	凝灰岩	97	41	16	88.1	1		13-64	
2	SB1		3143	凝灰岩	95	44	18	115.1	1		13-66	
3	SB1		3452	凝灰岩	(52)	(34)	(9)	(21)	-	e		
4	SB1		5853	緑色片岩	97	47	20	106.2	3		13-65	
5	SX7		4451	凝灰岩	95	54	11	79.7	3		13-97	
6	SX17		4763	凝灰岩	(69)	56	16	(89.5)	3	b	19-123	
7	SK5		9395	凝灰岩	197	68	39	612	1		59-607	東区
8	SK10		9754	緑色片岩	(90)	43	18	(71.5)	1	a		
9	P56		-1	緑色片岩	104	40	16	88.8	2		26-168	
10	P56		-2	緑色片岩	(107)	50	20	(146.3)	2	b	26-169	
11	F9	II	2778	凝灰岩	(106)	(66)	28	(235.6)	3	a		
12	F10	II	5533	凝灰岩	(92)	47	17	(120)	1	a		
13	F10	II	-1	緑色片岩	(40)	(57)	(16)	(54.4)	-	b		
14	G9	II	1692	凝灰岩	(106)	69	29	(290.5)	3	b		
15	G9	II	3865	凝灰岩	(111)	54	25	(205.1)	1	b		
16	G9	II	4869	凝灰岩	(79)	48	11	(70.7)	1	a		
17	G10	II	3465	凝灰岩	(100)	62	26	(177.8)	3	a		
18	G10	II	4593	緑色片岩	(40)	48	12	(27.7)	-	b		
19	G10	II	5846	凝灰岩	114	53	22	158.9	1		49-592	
20	G10	II	-1	凝灰岩	(53)	48	22	(74.6)	1	b		
21	G11	II	-2	凝灰岩	(80)	(40)	23	(81.1)	1	d		
22	H7	II	10658	凝灰岩	(63)	58	22	(102.9)	1	a		
23	H7	II	10660	凝灰岩	(135)	63	26	(239.1)	3	a		
24	H7	II	10670	凝灰岩	(42)	(49)	11	(36.6)	-	b		
25	H12	I	18	凝灰岩	(46)	49	17	(54.4)	1	b		
26	I 10	II	25	緑色片岩	118	41	26	155.9	1			
27	I 11	II	42	凝灰岩	(67)	88	22	(173.2)	-	b		
28	I 11	II	-2	凝灰岩	(95)	55	11	(112.3)	3	b		
29	I 11	II	-3	緑色片岩	(97)	43	14	(80.6)	1	c		
30	I 11	II	-4	凝灰岩	(84)	48	20	(98.2)	3	a		
31	I 12	II	19	凝灰岩	101	54	23	153.6	3		49-593	
32	I 12	II d	910	凝灰岩	106	47	17	113.7	1		49-591	
33	I 13	II	72	凝灰岩	(82)	(56)	19	133.7	1	d		
34	I 13	II	122	凝灰岩	(99)	(45)	26	(156.1)	3	a	50-594	No.35と接合
35	I 13	II	123	凝灰岩	(72)	52	25	(85.7)	3	b	50-595	No.34と接合
36	I 13	II	132	緑色片岩	118	59	27	245.5	3			
37	I 13	II	1115	凝灰岩	73	47	19	47	1			
38	I 13	II	-1	凝灰岩	(54)	(42)	(14)	(29.9)	-	e		
39	I 13	II	-2	凝灰岩	(67)	(56)	20	(100.9)	1	a		
40	I 15	II	-2	凝灰岩	(128)	81	28	(380.9)	3	b		
41	I 15	II	-3	凝灰岩	(80)	68	17	(111.3)	3	b		
42	I 15	III	2223	凝灰岩	(62)	(46)	(26)	(89.2)	1	a		
43	I 15	III	4539	凝灰岩	(76)	(52)	(16)	(73.8)	3	a		
44	I 16	III	1644	凝灰岩	(54)	(55)	15	(55.5)	-	d		
45	I 16	III	1292	凝灰岩	(49)	(51)	(16)	(47.6)	-	b		

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
46	I 16	III	-1	凝灰岩	(58)	(38)	(13)	(34.5)	-	e		
47	I 16	III	-2	凝灰岩	(51)	43	19	(51.6)	1	a		
48	J 16	III	3642	凝灰岩	(96)	77	27	(219.4)	3	d		
49	J 16	III	4484	凝灰岩	(80)	64	18	(133.4)	1	b		
50	J 16	III	4546	凝灰岩	102	48	25	134.1	3			
51	J 16	III	-1	凝灰岩	(44)	(53)	17	(45.6)	-	e		
52	F9	III	5029	凝灰岩	96	41	23	114.6	1		43-518	
53	F9	III	5726	凝灰岩	114	54	25	199.9	1			
54	F9	III	-1	凝灰岩	(90)	45	14	(81)	1	d		
55	F9	III S	-2	凝灰岩	(71)	80	29	(201.9)	3	b		
56	F10	III	10695	緑色片岩	(69)	48	18	(87.3)	2	d		
57	G9	III	3652	凝灰岩	(80)	59	12	(63.0)	3	d		
58	G9	III	4422	凝灰岩	(97)	58	23	(155.5)	3	a	43-519	
59	G9	III	5596	凝灰岩	107	43	25	152.5	1			
60	G9	III	5246	凝灰岩	(95)	46	25	(158.4)	1	b		
61	G9	III	5879	緑色片岩	109	51	18	105.5	3		43-520	
62	G10	III	5797	凝灰岩	(56)	47	19	(53.2)	3	a		
63	G10	III	6457	凝灰岩	(107)	(54)	15	(94.9)	3	b		
64	G10	III	9191	凝灰岩	(85)	50	18	(112.6)	1	b		
65	G10	III	9217	緑色片岩	(49)	(61)	(15)	(48.7)	-	e		
66	G10	III	9256	凝灰岩	(70)	(48)	33	(106.8)	3	a		
67	G10	III	10300	緑色片岩	(82)	50	12	(73.7)	1	d		
68	G11	III	4918	緑色片岩	(96)	55	16	(91.7)	3	a		
69	G11	III	5144	凝灰岩	(94)	41	17	(83.2)	1	a		
70	G11	III	5162	緑色片岩	90	44	18	89.3	3			
71	G11	III	5936	凝灰岩	83	51	21	115	1			
72	G12	III	6269	凝灰岩	(72)	51	14	(68.4)	1	d		
73	H7	III	2397	凝灰岩	(126)	66	24	(246.8)	1	b		
74	H9	III	5835	凝灰岩	(64)	(36)	(14)	(32.7)	-	e		
75	H10	III	342	泥岩	130	65	25	(232.1)	3	c		
76	H10	III	2899	緑色片岩	(81)	(59)	15	(107.2)	1	d		
77	H10	III	3077	緑色片岩	(62)	(38)	12	(38.3)	2	d		
78	H10	III	3090	緑色片岩	157	63	18	241.1	3		43-521	
79	H10	III	3397	凝灰岩	(116)	80	34	(368.8)	1	b		
80	H10	III	5461	凝灰岩	117	43	13	86.5	3			
81	H10	III	6244	凝灰岩	83	42	16	76	3			
82	H10	III	-4	凝灰岩	(45)	(47)	(17)	(45)	-	e		
83	H11	III	2478	凝灰岩	157	66	26	410.6	3		43-522	未製品
84	H11	III	3005	凝灰岩	111	45	19	112.3	1			
85	H11	III	3461	凝灰岩	(102)	59	21	(162.7)	3	b		未製品
86	H11	III	3610	凝灰岩	127	45	21	145.6	1			
87	H11	III	4352	凝灰岩	(71)	(47)	(22)	(95.2)	1	a		
88	H11	III	4578	緑色片岩	(81)	51	(12)	(54.6)	1	a		
89	H11	III	4696	緑色片岩	(85)	(46)	(11)	(60.9)	1	d		
90	H11	III	5024	緑色片岩	107	40	17	90.2	3			
91	H11	III	5397	凝灰岩	(52)	(52)	(15)	(46.3)	-	d		
92	H11	III	6011	凝灰岩	(58)	(50)	(15)	(55.6)	-	a		
93	H12	III	2259	凝灰岩	101	48	19	126.4	3			
94	H12	III	2420	凝灰岩	(58)	(53)	(15)	(65.7)	1	a		
95	H12	III	3144	緑色片岩	87	51	14	76.2	3			
96	H12	III	3622	緑色片岩	108	47	15	99	3			
97	I 9	III	1683	凝灰岩	(87)	69	23	(198)	1	b		
98	I 9	III	6467	凝灰岩	(118)	54	(25)	(193.9)	1	c		

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
99	I 9	III	9271	凝灰岩	(123)	77	(26)	(363.2)	1	b		
100	I 9	III	-1	凝灰岩	(59)	(55)	(30)	(137.8)	-	d		
101	I 10	III	1450	緑色片岩	(74)	48	13	(57.5)	1	a		
102	I 11	III	315	凝灰岩	131	148	25	160.2	3		43-523	
103	I 11	III	4307	凝灰岩	(132)	68	(31)	(375.2)	1	b		
104	I 11	III	5804	緑色片岩	(73)	34	7	(24.3)	3	c		
105	I 12	III	3165	凝灰岩	(104)	52	14	(79.9)	1	a		
106	J 25	III	1474	緑色片岩	116	49	19	131.4	1			以下東区
107	K22	II	585	凝灰岩	(90)	(59)	30	(214.2)	3	a		
108	K22	II	-2	凝灰岩	(99)	61	23	(150.2)	1	a		
109	K22	III	6913	凝灰岩	118	59	18	(132.1)	1	c		
110	K22	III	1947	緑色片岩	(88)	54	18	(131.7)	1	b		
111	K22	III	6760	凝灰岩	(75)	82	24	(180.8)	1	b		
112	K22	III	7040	緑色片岩	99	46	19	137.1	3			
113	K22	III	7119	凝灰岩	(53)	61	21	(104.5)	1	b		
114	K22	III	7221	凝灰岩	(133)	(73)	35	(406.1)	3	a		
115	K23	II	6986	凝灰岩	(70)	44	14	(56.6)	1	b		
116	K23	III	7365	凝灰岩	(106)	75	17	(167.6)	1	b		
117	K24	II	6787	凝灰岩	137	45	30	220.4	1			
118	K24	II	9603	凝灰岩	(41)	(49)	13	(32.7)	1	b		
119	K24	III	7350	緑色片岩	(79)	65	15	(104)	1	d		
120	L20	II	7455	凝灰岩	(91)	47	16	(90.5)	3	c	67-785	
121	L20	II	7457	凝灰岩	(73)	(47)	16	(68.1)	3	d		
122	L20	III	7509	凝灰岩	(70)	(47)	10	48.1	3	d		
123	L20	III	7794	凝灰岩	(74)	(51)	14	(72.4)	3	d		
124	L21	II	6892	凝灰岩	(78)	60	15	(111.9)	1	b		
125	L21	II	6956	凝灰岩	(75)	47	18	(84.3)	1	b		
126	L21	II	7137	凝灰岩	151	52	26	251.7	1		67-784	
127	L21	II	7138	凝灰岩	(112)	53	21	(173)	1	a		
128	L21	III	7066	凝灰岩	(104)	(65)	15	(108.3)	3	a		
129	L21	III	7072	凝灰岩	(80)	(59)	20	(116.9)	3	a		
130	L21	III	7203	凝灰岩	(47)	44	12	(35)	-	b		
131	L21	III	7215	凝灰岩	(68)	48	24	(87.2)	3	b		
132	L21	III	7216	凝灰岩	(24)	(51)	10	(17.5)	-	e		
133	L21	III	7247	凝灰岩	(92)	(57)	22	(163.4)	1	a		
134	L22	II	649	凝灰岩	(96)	(61)	21	(152)	1	a		
135	L22	II	7204	緑色片岩	(45)	63	17	(67.2)	-	b		
136	L22	II	7465	凝灰岩	(92)	(58)	23	(129.7)	1	a		
137	L22	II	7467	凝灰岩	(65)	(52)	26	(118.6)	-	a		
138	L22	II	7541	凝灰岩	(109)	45	20	(95.7)	1	a		
139	L22	III	8028	砂岩	134	61	16	183	1			
140	L22	III	8101	凝灰岩	(55)	(37)	9	(26.1)	1	d		
141	L22	III	8102	緑色片岩	(94)	(51)	17	(102.8)	3	a		
142	L22	III	8111	凝灰岩	(99)	60	29	(231.7)	1	b		
143	L23	II	-3	凝灰岩	(37)	(37)	6.1	(11.3)	1	b		
144	L23	III	7233	凝灰岩	(86)	52	25	(144.4)	1	a		
145	L23	III	8399	緑色片岩	(79)	(55)	11	(63.8)	-	d		
146	L23	III	8916	凝灰岩	(82)	43	19	(61.5)	1	d		
147	L23	III	10016	凝灰岩	(102)	(54)	23	(142.9)	3	d		
148	L24	III	7161	凝灰岩	(76)	(56)	17	(85)	-	a		
149	L24	III	8050	凝灰岩	102	42	19	101	1			
150	L25	III	6748	凝灰岩	(93)	57	25	(147.7)	3	b		
151	L25	III	6879	緑色片岩	(69)	56	11	(66)	1	d		

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
152	L25	III	6880	凝灰岩	112	52	23	203.4	1			
153	M21	II	7913	凝灰岩	(86)	58	18	(118.6)	3	b		
154	M21	II	8746	凝灰岩	150	65	28	303.1	3			
155	M21	II	8759	緑色片岩	73	37	9	39.1	3			
156	M21	II	8903	凝灰岩	(77)	(48)	21	(88.3)	3	a		
157	M21	II	9273	凝灰岩	113	60	28	219.3	3		67-786	
158	M21	II	10723	緑色片岩	(98)	53	24	(153.7)	1	a		
159	M21	III	9470	凝灰岩	(111)	61	24	(220.7)	3	d		
160	M21	III	10035	凝灰岩	(61)	50	17	(67.9)	1	b		
161	M21	III	10037	凝灰岩	139	57	23	251.1	1			
162	M21	III S	-2	緑色片岩	(67)	46	7	(39.7)	1	b		
163	M22	II	9705	緑色片岩	(78)	43	14	(66.5)	1	a		
164	M22	II	9958	緑色片岩	(69)	41	11	(42.6)	1	a		
165	M22	II	9961	凝灰岩	141	43	32	220.6	1			
166	M22	II	9705	緑色片岩	(78)	43	14	(66.5)	1	a		
167	M22	II	9958	緑色片岩	(69)	41	11	(42.6)	1	a		
168	M22	II	9961	凝灰岩	141	43	32	220.6	1			
169	M22	II	9963	緑色片岩	(99)	(42)	14	(68.8)	-	b		
170	M22	II	9975	凝灰岩	(65)	(51)	25	(71.6)	3	a		
171	M22	II	9976	凝灰岩	124	66	25	239.1	3		67-787	
172	M22	II	10095	凝灰岩	(102)	91	28	(328.9)	3	b		
173	M22	II	10163	凝灰岩	(97)	69	22	(193.8)	3	a		
174	M22	II	10191	凝灰岩	114	59	19	150	3			
175	M22	II	10255	凝灰岩	(89)	(53)	24	(154)	3	a		
176	M22	II	10335	凝灰岩	(55)	49	23	(73.6)	1	b		
177	M22	II	10338	凝灰岩	(74)	76	22	(166.8)	3	b		
178	M22	II	10356	凝灰岩	(68)	46	16	(69.8)	3	b		
179	M22	II	10371	凝灰岩	(102)	60	16	(110)	1	b		
180	M22	II	10491	緑色片岩	(61)	(45)	10	(29.6)	3	d		
181	M22	II	10505	凝灰岩	119	62	16	138.5	3			
182	M22	III S	9499	凝灰岩	91	48	19	95	1			
183	M23	I	9134	凝灰岩	100	48	16	103.7	3			
184	M23	II	8567	凝灰岩	(99)	54	20	(135.2)	3	b		
185	M23	II	9624	凝灰岩	96	46	21	103.9	1			
186	M23	II	-1	凝灰岩	118	53	25	188.9	3			
187	M23	III	9587	凝灰岩	112	48	18	143	1			
188	M23	III	9867	凝灰岩	109	50	12	86.3	3			
189	M23	III	10101	緑色片岩	89	45	47	(90.9)	1	c		
190	M23	III	10119	凝灰岩	97	54	10	64	1			
191	M23	III	10178	緑色片岩	(96)	56	21	(176.1)	1	a		
192	M23	III	10513	緑色片岩	(63)	(51)	10	(60.4)	1	b		
193	M23	III	10770	凝灰岩	(89)	(49)	15	(85.7)	1	a		
194	N22	II	9622	緑色片岩	(114)	60	19	(139.1)	3	c		
195	N22	II	9623	緑色片岩	84	49	17	80.4	1			
196	N22	II	10633	凝灰岩	(80)	(52)	21	(105.9)	3	a		
197	N22	II	10635	砂岩	(95)	50	17	(103.3)	3	c		
198	N22	II	10638	凝灰岩	(87)	49	26	(114.1)	3	b		
199	N23	II	7572	凝灰岩	(106)	49	26	(158.1)	1	a		
200	N23	II	7575	凝灰岩	118	56	20	131.4	3		66-788	
201	N23	II	7578	凝灰岩	(86)	66	17	(106.1)	3	b		
202	N23	II	7813	凝灰岩	92	45	16	83.4	3			
203	N23	II	7880	凝灰岩	(117)	(70)	22	(246.6)	1	a		
204	N23	II	8060	凝灰岩	(80)	70	21	(151.1)	3	b		

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
205	N23	II	8129	流紋岩	124	68	18	184.3	3			
206	N23	II	8131	凝灰岩	(103)	48	24	(148.9)	1	a		
207	N23	II	8133	緑色片岩	(103)	54	24	(146.5)	3	a		
208	N23	II	8786	凝灰岩	117	47	23	158.8	3		67-789	
209	N23	II	10589	緑色片岩	89	48	10	71.8	1			
210	P23	II	9038-1	凝灰岩	(100)	(51)	25	(163)	3	a		
211	P23	II	9308-2	凝灰岩	(70)	57	12	(57)	3	b		
212	P23	II	9308-3	緑色片岩	85	47	14	59.9	1			
213	P23	II	9308-4	緑色片岩	(57)	(43)	18	(52.4)	3	a		
214	P23	II	9308-5	緑色片岩	(59)	(53)	12	(50.7)	1	d		
215	P23	II	9308-6	緑色片岩	(68)	(45)	11	(37)	-	d		
216	P23	III	8134	凝灰岩	(99)	52	27	(189.3)	1	a		
217	P23	III	8136	凝灰岩	(65)	52	22	(95.9)	1	b		
218	表採		-5	緑色片岩	(79)	(40)	9	40.1	-	e		以下出土区不明
219	表採		-6	凝灰岩	(71)	(47)	14	(55.8)	3	a		
220	表採		-7	凝灰岩	(89)	54	23	(153.3)	1	a		
221	表採		-8	凝灰岩	102	74	21	144.3	3			
222	表採		-9	緑色片岩	(69)	55	21	(100.2)	1	b		
223	表採		-10	凝灰岩	(87)	(54)	25	(127.5)	3	a		
224	表採		-11	凝灰岩	(120)	63	20	(189.3)	1	a		
225	表採		-12	凝灰岩	(89)	(61)	21	(121.2)	-	d		未製品
226	表採		-13	凝灰岩	(65)	(77)	25	(192)	-	d		

第23表　横刃形石器計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	SB1		2458	凝灰岩	104	78	42	351	13-63	
2	P54		-1	凝灰岩	(52)	(45)	8	(6.9)	26-167	
3	H9	III	4611	凝灰岩	49	90	9	44.4	43-524	
4	H10	III	-3	凝灰岩	48	76	9	37.6	44-525	
5	I 12	III	1267	凝灰岩	56	68	9	45.3	44-526	

第24表　礫器計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	H11	III	2712	飛騨ヒスイ	81	93	55	573.5	44-528	
2	H12	III	2230	飛騨ヒスイ	57	46	33	113.4	44-527	

第25表　磨製石斧計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備考
1	SB1	P22	-1	蛇紋岩	(10)	(22)	(2)	(0.9)	-	e		刃部
2	SX17		4760	蛇紋岩	(113)	(47)	20	(190.8)	2A	a	19-125	
3	SX17		4761	蛇紋岩	52	29	10	28.7	2B		19-124	
4	SX17		4762	凝灰岩	(153)	59	37	(498.9)	2A	a	19-126	
5	G10	II c	3975	蛇紋岩	125	41	31	289.3	2A		50-597	刃こぼれ
6	I 12	II d	903	凝灰岩	163	60	35	539.5	2A		50-596	刃こぼれ
7	G10	III	9110	蛇紋岩	(97)	51	20	(146.7)	2B	c	45-534	
8	H9	III	3958	蛇紋岩	(74)	56	26	(191.9)	2A	b	44-530	
9	H9	III	4654	凝灰岩	81	39	19	93.2	1			刃こぼれ
10	H11	III	1946	蛇紋岩	(54)	(29)	14	(43.4)	2B	a	44-531	
11	H11	III	2377	砂岩	(51)	(65)	(7)	(31.2)	-	e		
12	H11	III	3187	蛇紋岩	(11)	(13)	(1)	(0.3)	-	e		
13	H11	III	-6	蛇紋岩	(14)	(14)	(6)	(1.5)	-	e		刃部
14	I 10	III	-2	斑れい岩	(37)	29	8	(18.8)	2B	b	45-533	

No.	地 点	層位	遺物番号	石　材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	折損	挿図番号	備　考
15	I 11	III	317	蛇紋岩	46	29	9	20.5	2B		44-532	刃こぼれ
16	I 12	III	3814	砂岩	(114)	(68)	(31)	(282.5)	2A	d	44-529	被熱
17	K22	III	6823	砂岩	(47)	(40)	(24)	(64.2)	2B	d	67-792	被熱　以下東区
18	K24	III	7294	砂岩	(59)	50	(21)	(65.6)	2B	b	67-790	被熱
19	L23	III	7517	砂岩	(58)	(43)	(17)	(57.9)	2B	a	67-791	被熱
20	M21	II	8083	蛇紋岩	(63)	(31)	(13)	(39.3)	2B	a	68-793	
21	M21	II	8753	蛇紋岩	34	20	6	7.7	2D		68-797	
22	M22	I	9481	凝灰岩	(65)	(33)	24	(83.1)	3	a	68-798	
23	M22	II	10087	蛇紋岩	53	32	10	22.9	2B		68-794	
24	M22	II	10835	蛇紋岩	(54)	42	20	(75.4)	2B	b	68-795	
25	M22	III	-3	砂岩	(12)	(31)	(10)	(3.5)	-	e		刃部
26	N22	I	10545	蛇紋岩	41	23	7	11.5	2B		68-796	
27	N23	II	7754	蛇紋岩	(17)	(19)	(7)	(3.3)	-	e		刃部

第26表　磨石・凹石類計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石　材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	凹の数と形状等	挿図番号
1	SB1		475	凝灰岩	184	119	70	1820	2B	ザラつく磨痕	14-67
2	SB1		2637	凝灰岩	75	73	55	366	1B	ザラつく磨痕	14-68
3	SB1		3375	凝灰岩	78	62	40	221	2B	ザラつく磨痕	14-69
4	SB1		3446	凝灰岩	128	120	116	2260	2A	ザラつく磨痕	14-71
5	SB1		3447	凝灰岩	115	87	51	649	2B	1・1・0　ア	14-70
6	SB1		3448	凝灰岩	(116)	(67)	45	(437)	2D	2・0・0　イ	14-72
7	SB1		3679	凝灰岩	124	111	60	1087	2B	滑らかな磨痕	14-74
8	SB1		4327	凝灰岩	144	77	43	617	2B	4・3・3　アイ	14-73
9	SB1	P14	-1	凝灰岩	121	114	59	956	2B	ザラつく磨痕	
10	SB1	P14	-2	凝灰岩	120	(84)	61	(735)	2B	ザラつく磨痕	
11	SK10		9753	凝灰岩	113	74	56	567	2B	ザラつく磨痕	25-144
12	P5		4910	凝灰岩	161	113	56	984	2B	3・0・0　ア	25-156
13	SX21		10814	凝灰岩	89	73	37	253	2B	ザラつく磨痕	23-131
14	SX21		-2	凝灰岩	(71)	79	52	(364)	2B	ザラつく磨痕	23-132
15	F9	II	3212	凝灰岩	125	102	73	1200	2B	ザラつく磨痕	
16	F9	II	10802	凝灰岩	86	71	40	238	2B	2・2・0　アイ	
17	F10	II	4330	凝灰岩	99	69	32	286	2B	2・2・0　アイ	50-599
18	H6	II	10905	凝灰岩	115	70	47	419	2C	1・2・0　イウ	
19	H7	II	10659	凝灰岩	150	77	54	749	2B	4・3・1　アイ	50-598
20	H9	II	3862	凝灰岩	105	81	50	749	2B	ザラつく磨痕	
21	H9	II	-1	凝灰岩	110	59	41	316	2C	3・3・0　ア	
22	H10	II	-5	花崗岩	142	122	74	2100	2B	滑らかな磨痕	
23	H10	II	-6	凝灰岩	111	71	59	519	2B	1・0・0　ア	
24	H11	I	66	凝灰岩	119	72	58	723	4	長軸一端に敲打痕	
25	H11	II	149	凝灰岩	125	81	59	701	2B	ザラつく磨痕	
26	I 8	II	228	凝灰岩	104	92	51	663	2B	2・2・0　ア	
27	I 8	II	1882	凝灰岩	93	77	22	179	2C	1・2・0　ア	
28	I 10	II	24	凝灰岩	105	54	43	304	4	0・2・0　ア	
29	I 10	II	68	凝灰岩	120	117	68	1250	1B	ザラつく磨痕	
30	I 12	II	-5	凝灰岩	88	81	55	496	1B	ザラつく磨痕	
31	I 13	II	269	凝灰岩	116	80	29	329	2C	ザラつく磨痕	
32	I 13	II	-3	凝灰岩	143	137	71	1800	1B	ザラつく磨痕	
33	J 16	II	-2	凝灰岩	85	(67)	45	290	2B	ザラつく磨痕	
34	F9	III	5614	凝灰岩	82	60	39	258	2B	1・1・0　イ	
35	F9	III	5826	凝灰岩	106	94	48	674	2B	0・2・0　ア	
36	F9	IV	6135	凝灰岩	(119)	78	71	(993)	4	ザラつく磨痕	28-193

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	分類	凹の数と形状等	挿図番号
37	F10	III	10056	凝灰岩	98	77	52	454	2B	ザラつく磨痕	
38	F10	III	10682	凝灰岩	(54)	(80)	40	(227)	-	1・1・0　アウ	
39	G8	III	5964	凝灰岩	118	82	60	739	2B	ザラつく磨痕	
40	G8	IV	3868	凝灰岩	116	100	59	856	2B	ザラつく磨痕	
41	G9	III	4871	凝灰岩	(79)	46	45	(179)	2A	ザラつく磨痕	
42	G9	III	4872	凝灰岩	59	56	37	162	2B	ザラつく磨痕	
43	G9	III	5749	凝灰岩	90	88	52	515	1B	0・1・0　ウ	
44	G9	III	5822	凝灰岩	66	59	48	218	2A	1・2・0　アイ	45-535
45	G9	III	6101	凝灰岩	99	90	52	647	2B	ザラつく磨痕	
46	G10	III	6391	凝灰岩	87	64	43	289	2B	ザラつく磨痕	
47	G10	III	9202	凝灰岩	82	54	32	167	2B	1・1・0　イ	
48	G10	III	9958	凝灰岩	134	100	100	828	2B	ザラつく磨痕	
49	G10	III	10697	凝灰岩	122	96	39	654	2C	ザラつく磨痕	
50	G11	III	5336	凝灰岩	105	75	50	506	2B	ザラつく磨痕	
51	H7	III	2519	凝灰岩	80	57	49	284	2A	ザラつく磨痕	
52	H9	III	3818	凝灰岩	119	102	68	972	2B	1・2・0　ア	
53	H9	III	4098	凝灰岩	113	98	64	976	2B	3・2・0　アウ	
54	H9	III	4163	凝灰岩	125	102	61	1031	2B	滑らかな磨痕	45-537
55	H9	III	6461	凝灰岩	110	98	65	859	2B	ザラつく磨痕	
56	H10	III	341	凝灰岩	144	53	33	316	2C	1・1・0　ア	
57	H10	III	407	凝灰岩	107	69	40	356	2B	3・2・0　イ	45-538
58	H10	III	521	凝灰岩	106	95	48	613	2B	ザラつく磨痕	
59	H10	III	2855	凝灰岩	94	65	50	339	2B	2・2・0　イ	
60	H10	III	2890	凝灰岩	175	163	88	3200	2C	ザラつく磨痕	
61	H10	III	4194	凝灰岩	96	92	44	485	1B	ザラつく磨痕	
62	H10	III	4808	凝灰岩	117	91	48	682	2B	ザラつく磨痕	
63	H10	III	4892	凝灰岩	172	149	84	2900	2B	ザラつく磨痕	
64	H10	III	6052	凝灰岩	125	94	67	983	2B	ザラつく磨痕	
65	H11	III	3725	凝灰岩	90	83	58	539	1B	ザラつく磨痕	
66	H11	III	3901	凝灰岩	97	(58)	50	(329)	-	ザラつく磨痕	
67	H11	III	4029	凝灰岩	106	84	55	652	2B	ザラつく磨痕	
68	H11	III	4030	凝灰岩	99	78	61	530	2B	ザラつく磨痕	
69	H11	III	6062	凝灰岩	58	71	68	346	4	長軸端部に敲打痕	45-541
70	H11	III	4642	凝灰岩	111	(88)	53	(580)	2B	ザラつく磨痕	
71	H11	III	4782	凝灰岩	107	58	40	407	2B	ザラつく磨痕	
72	H11	IIIL	6116	凝灰岩	84	78	40	339	1B	ザラつく磨痕	
73	H11	III	10540	凝灰岩	119	81	49	563	2B	2・1・1　ア	45-536
74	H11	III	10698	凝灰岩	149	82	58	903	4	長軸一端に敲打痕	45-542
75	H12	III	10135	凝灰岩	130	93	54	813	2C	ザラつく磨痕	
76	I9	III	-2	凝灰岩	67	57	29	130	2C	ザラつく磨痕	
77	I10	III	842	凝灰岩	(62)	58	35	125	-	1・0・0　イ	45-539
78	H11	III	4129	凝灰岩	65	72	68	524	4	No.69と接合	45-540
79	I11	III	3225	凝灰岩	97	93	59	695	2B	2・1・0　ア	
80	I11	III	3810	凝灰岩	118	99	63	905	2B	ザラつく磨痕	
81	I11	III	-5	花崗岩	(89)	(105)	56	(703)	2B	滑らかな磨痕	
82	I12	III	1045	凝灰岩	(121)	(108)	71	(1069)	2B	ザラつく磨痕	
83	I12	III	1630	凝灰岩	102	76	48	504	2B	1・1・0　ウ	
84	I13	III	987	凝灰岩	165	113	72	1650	2B	ザラつく磨痕	
85	I13	III	1291	花崗岩	(97)	(104)	69	(773)	-	滑らかな磨痕	
86	I13	III	1323	凝灰岩	57	50	37	129	2B	ザラつく磨痕	
87	K22	III	6815	凝灰岩	(88)	105	63	(679)	2B	ザラつく磨痕	
88	K22	III	9061	凝灰岩	90	64	33	248	2B	1・1・0　ウ	
89	K22	III	9301	凝灰岩	148	98	62	1154	2B	ザラつく磨痕	

No.	地 点	層位	遺物番号	石　材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	凹の数と形状等	挿図番号
90	L20	II	575	凝灰岩	117	64	42	361	2B	ザラつく磨痕	
91	L20	II	576	凝灰岩	(71)	(86)	54	(456)	2B	No.92と接合	68-802
92	L21	II	6961	凝灰岩	(74)	89	55	(516)	2B	1・0・0　ア	68-801
93	L21	II	9068	凝灰岩	112	105	52	787	1B	ザラつく磨痕	
94	L21	III	7238	凝灰岩	(108)	102	38	(598)	2C	1・1・0　ア	68-803
95	L22	III	7387	凝灰岩	55	49	29	81	2B	ザラつく磨痕	
96	L22	II	6975	凝灰岩	107	98	48	526	1B	1・1・0　イ	
97	L22	III	7787	凝灰岩	128	80	57	717	2C	ザラつく磨痕	
98	L22	III	8042	凝灰岩	(115)	75	55	(620)	2D	2・1・0　アイ	68-805
99	L22	III	8305	凝灰岩	90	75	47	436	2B	ザラつく磨痕	
100	L22	III	10495	凝灰岩	81	80	48	400	1B	ザラつく磨痕	
101	L22	III	10771	凝灰岩	(102)	(95)	36	(358)	1B	ザラつく磨痕	
102	L23	II	6928	凝灰岩	94	61	46	342	2B	0・2・0　ア	
103	L23	II	9382	凝灰岩	103	93	59	691	2B	ザラつく磨痕	
104	L23	III	7235	凝灰岩	(117)	78	58	(663)	2B	ザラつく磨痕	
105	L23	III	9702	凝灰岩	71	64	36	206	2B	ザラつく磨痕	
106	L24	II	6999	凝灰岩	75	67	33	203	2B	ザラつく磨痕	
107	L24	III	8082	凝灰岩	(130)	69	66	732	2A	ザラつく磨痕	
108	M21	II	596	凝灰岩	128	103	95	1600	2A	ザラつく磨痕	
109	M21	II	8743	凝灰岩	106	59	30	298	2B	1・2・0　イ	
110	M21	II	9056	凝灰岩	92	81	40	356	2B	ザラつく磨痕	
111	M22	II	6899	凝灰岩	88	68	35	229	2B	1・1・0　イ	68-799
112	M22	I	9703	凝灰岩	98	78	39	370	2B	2・3・0　イ	
113	M22	II	9825	凝灰岩	129	65	42	471	2B	ザラつく磨痕	
114	M22	II	9964	凝灰岩	(100)	73	50	(502)	2B	1・1・0　ア	
115	M22	II	9966	凝灰岩	94	70	40	335	2B	1・1・0　ア	
116	M22	II	9967	花崗岩	(67)	(82)	42	(354)	2B	No.134と接合	
117	M22	II	10337	凝灰岩	72	64	50	255	2B	ザラつく磨痕	
118	M23	II	-2	凝灰岩	(79)	(37)	42	(145)	-	ザラつく磨痕	
119	M23	II	-3	凝灰岩	(54)	(43)	44	(115)	-	滑らかな磨痕	
120	M23	III	7483	凝灰岩	128	96	54	732	2B	2・2・0　ア	
121	M23	III	7557	凝灰岩	(102)	99	50	(669)	2B	2・3・0　アウ	
122	M23	III	9453	凝灰岩	107	86	45	390	2B	2・2・0　ア	
123	M23	III	9588	凝灰岩	132	73	36	391	2B	4・2・0　イ	68-800
124	M23	III	10001	凝灰岩	169	80	66	865	2A	全面敲打痕	
125	M23	III	10113	凝灰岩	(76)	(69)	59	(330)	-	ザラつく磨痕	
126	M24	II	657	凝灰岩	141	83	65	1068	2B	ザラつく磨痕	
127	M24	III	7127	凝灰岩	89	68	24	175	2C	ザラつく磨痕	
128	M24	III	7132	凝灰岩	125	87	43	626	2B	ザラつく磨痕	
129	M24	III	7214	凝灰岩	66	53	29	130	2B	ザラつく磨痕	
130	N22	II	10654	凝灰岩	127	115	59	1166	1B	ザラつく磨痕	
131	N22	II	10760	凝灰岩	(88)	52	36	(162)	2B	1・1・0　ア	
132	N22	II	10761	凝灰岩	133	92	60	946	2D	ザラつく磨痕	
133	N22	II	-2	凝灰岩	(123)	(74)	47	(485)	2B	1・2・0　ア	
134	N23	II	7763	花崗岩	(75)	(81)	40	(344)	2B	0・1・0　ア	
135	P23	II	7759	花崗岩	110	81	52	808	2D	滑らかな磨痕	68-804
136	P23	III	8137	凝灰岩	133	105	66	1131	2B	ザラつく磨痕	
137	表採		-14	凝灰岩	112	92	61	850	2B	ザラつく磨痕	

第27表　石皿計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	SB1		3658	凝灰岩	(15)	(23)	(12)	(3.35)	14-76	No.2と接合
2	SB1		10812	凝灰岩	(12)	(16)	(11)	(1.95)	14-75	No.1と接合
3	I 11	III	4303	凝灰岩	28	19	9	7.35	46-544	
4	I 11	III	-6	凝灰岩	36	35	9	16.25	46-543	

第28表　砥石計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	H11	III	2337	砂岩	40	25	6	7.5	42-517	
2	K25	II	1423	砂岩	(46)	(43)	9	(21.8)	69-808	No.3と接合　東区
3	K25	II	1986	砂岩	(56)	49	12	(51)	69-809	No.2と接合　東区
4	M22	II	10189	砂岩	(60)	(31)	(16)	(31.2)	69-810	東区

第29表　石製品計測表

No.	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	挿図番号	備考
1	H9	II	2395	緑色片岩	(90)	(29)	(23)	(115.7)	50-600	石剣
2	K22	III	6725	粘板岩	(97)	(26)	(19)	(79.1)	68-806	石剣　東区
3	M23	II	7962	蛇紋岩	41	24	9	14.6	68-807	玉　東区

第30表　石器組成表

種別	遺構	西区IV層	西区III層	西区I・II層	東区	地点不明	合計
石鏃	10	0	53	5	17	1	86
石錐	4	0	11	0	5	2	22
削器	1	0	4	1	3	0	9
ヘラ形石器	1	0	2	0	0	0	3
両極石器	2	0	17	0	3	0	22
抉入石器	0	0	3	0	0	0	3
二次加工剥片	5	1	13	4	6	1	30
使用痕剥片	17	5	21	4	7	0	54
石核	0	0	4	1	2	0	7
石錘	0	0	3	0	0	0	3
打製石斧	10	0	54	41	112	9	226
横刃形石器	2	0	3	0	0	0	5
礫器	0	0	2	0	0	0	2
磨製石斧	4	0	10	2	11	0	27
磨石・凹石類	14	2	51	19	50	1	137
石皿	2	0	2	0	0	0	4
砥石	0	0	1	0	3	0	4
合計	72	8	254	77	219	14	644
下呂石剥片	40	2	397	32	121	1	593
チャート剥片	31	0	246	25	27	2	331
黒曜石剥片	3	0	36	2	41	0	82
その他の剥片	55	2	48	6	17	1	129
総合計	201	12	981	142	425	18	1779

主要参考文献

赤木　清　1936「江名子ひじ山の石器時代遺蹟　その四」『ひだびと』第４年―第７号
池谷信之　1990「綱取・堀之内型注口土器」『縄文時代』第１号
石井　寛　1993「堀之内１式土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』
石井　寛　1995「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』
石川日出志　1985「中部以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃』第37巻第４号
泉　拓良　1981「後期の土器　―近畿地方の土器―」『縄文文化の研究』４
泉　拓良　1989「縁帯文土器様式」『縄文土器大観』第４巻
植田文雄　1996『正楽寺遺跡』（能登川町埋蔵文化財調査報告書　第40集）
大江　命・下形　武　1958『上宝村の先史時代』
大江　命　1965『飛騨の考古学Ⅰ　―益田川流域の縄文文化―』
加藤三千雄ほか　1986『真脇遺跡』（能登町教育委員会）
金子直行　1997『戸崎前遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第187集）
木下哲夫ほか　1985『右近次郎遺跡Ⅱ』（大野市文化財調査報告書　第３冊）
木下哲夫　1993「気屋式以降(1)」『先史考古学研究』第４号
工藤俊樹ほか　1987『鳴鹿手島遺跡』（福井県埋蔵文化財調査報告書　第15集）
河野典夫ほか　1996『杉原瑞穂遺跡発掘調査報告書』（宮川村教育委員会）
紅村　弘・増子康眞ほか　1978『東海先史文化の諸段階　資料編Ⅱ』
紅村　弘ほか　1974『飛騨桜洞遺跡発掘調査報告書』（萩原町教育委員会）
上嶋善治ほか　1994『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書　第18集）
上嶋善治ほか　1997『カクシクレ遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書　第32集）
鈴木徳雄　1992「縄紋後期注口土器の成立　―形態変化と文様帯の問題―」『縄文時代』第３号
鈴木徳雄　1993「称名寺式の変化と中津式　―型式間交渉の一過程―」『縄文時代』第４号
田中　彰ほか　1991『垣内遺跡』（高山市埋蔵文化財調査報告書　第19号）
谷口和人ほか　1997『西田遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書　第29集）
田村清一郎ほか　1997『見蔵岡遺跡　其の二』（竹野町文化財報告書　第11集）
丹野雅人　1985「注口土器小考」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集Ⅲ』
千葉　豊・仁保晋作　1989「名張市赤目町中戸遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（三重県埋蔵文化財調査報告79）
千葉　豊　1989「縁帯文土器の成立と展開」『史林』第72巻第６号
千葉　豊　1991『病院構内の先史時代遺跡』（京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ）
千葉　豊ほか1990『小森岡遺跡』（兵庫県城崎郡竹野町教育委員会）
戸田哲也　1993「飛騨を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第４号
戸田哲也ほか　1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』（古川町埋蔵文化財調査報告書　第３集）
長沢宏昌ほか　1996『中谷遺跡』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　台116集）

長屋幸二ほか　1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書　第22集)

西田泰民　1989「堀之内・加曽利B式土器様式」『縄文土器大観』第4巻

藤沼邦彦　1989「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観』第4巻

穂積裕昌　1992「縄文時代後期の壺形土器」『考古学と生活文化』(同志社大学考古学シリーズV)

増子康眞　1992「宮田式土器細別(試論)」『どっこいし』第40号

松田真一　1983「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1981年度』

南　久和　1989「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観』第4巻

本永義博・野村宗作ほか　1994『荒城神社遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書　第16集)

柳沢清一　1997「西日本における縄紋時代後期中葉編年の検討」『古代』第103号

山本正敏ほか　1990『安居五百歩遺跡I』(福野町教育委員会)

吉朝則冨ほか　1988『寺東遺跡・西保木(対岸)遺跡』(高山市埋蔵文化財調査報告書　第13号)

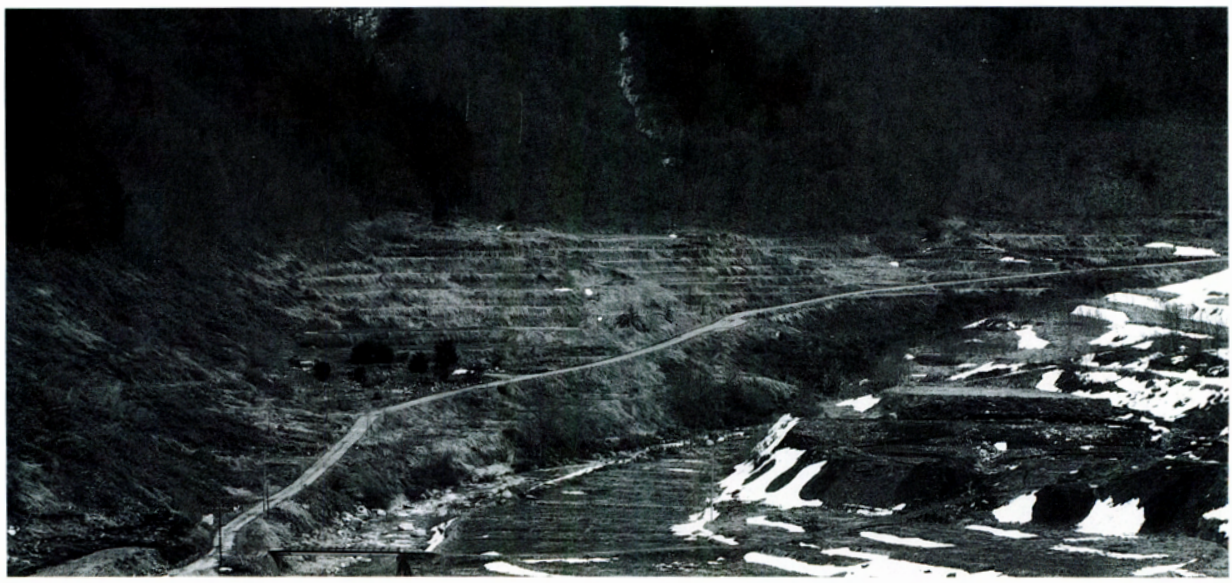
吉田　稔　1995『修理山遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第158集)

米澤義光ほか　1996『宇ノ気町気屋遺跡』(石川県河北群宇ノ気町教育委員会)

米澤義光ほか　1997『吉野谷の石器時代III』(石川県石川郡吉野谷村教育委員会)

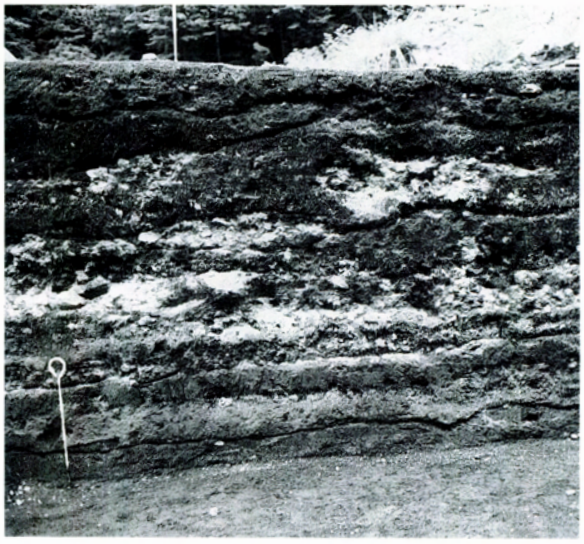
領塚正浩ほか　1992『堀之内貝塚資料図譜』(市立市川考古博物館)

図　　版



1

2



3

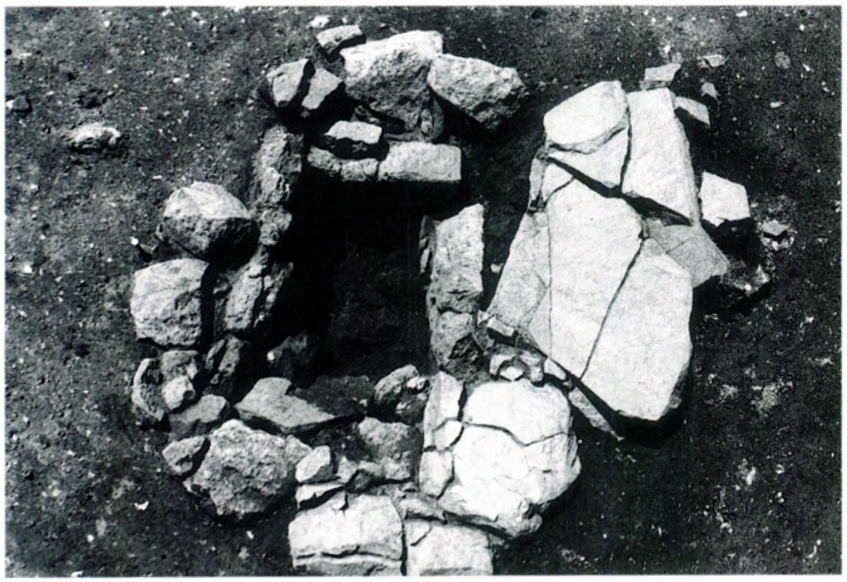
4

1．遠景　2．遺跡全景　3．Ⅰ列北壁セクション　4．西区作業風景

図版 2

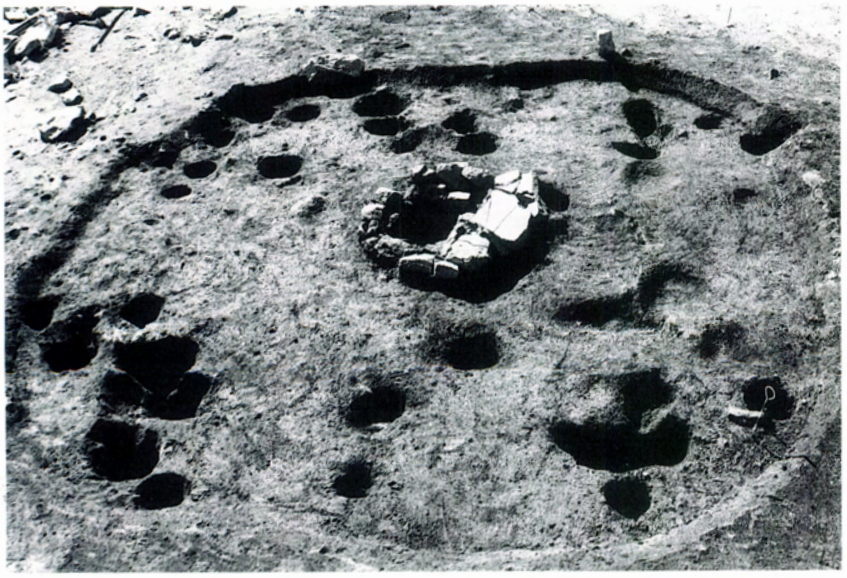
5

6



7

9

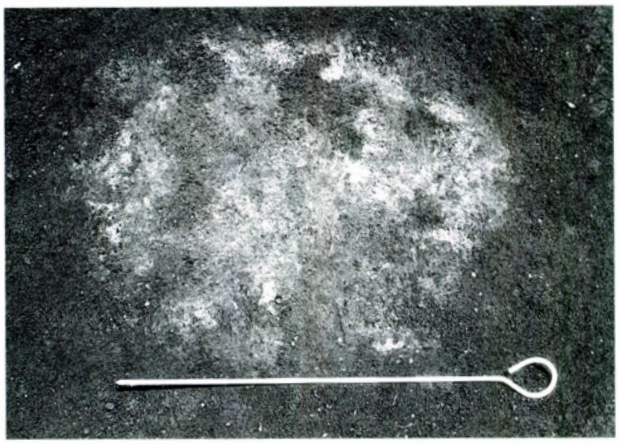


8

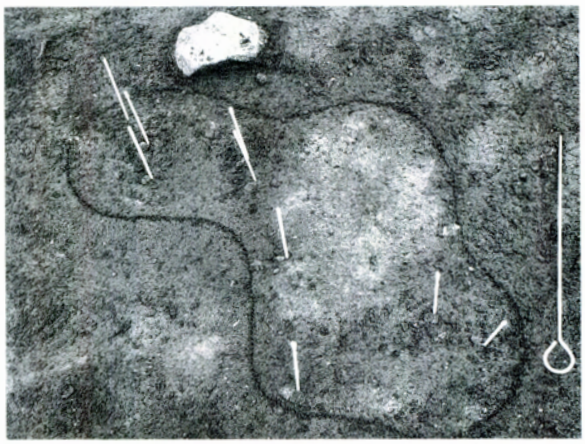
10

5．西区全景　6．SB 1（検出前）　7．SB 1 石囲炉　8．SB 1
9．石鏃出土状況（SB 1）　10．削器出土状況（SB 1）

11



12



13

14

15

11. 土器出土状況(SB 1 炉内)　12. 焼土址①(SX 1)　13. 焼土址⑨(SX11)
14. SX17遺物出土状況　15. P 3

図版 4

16

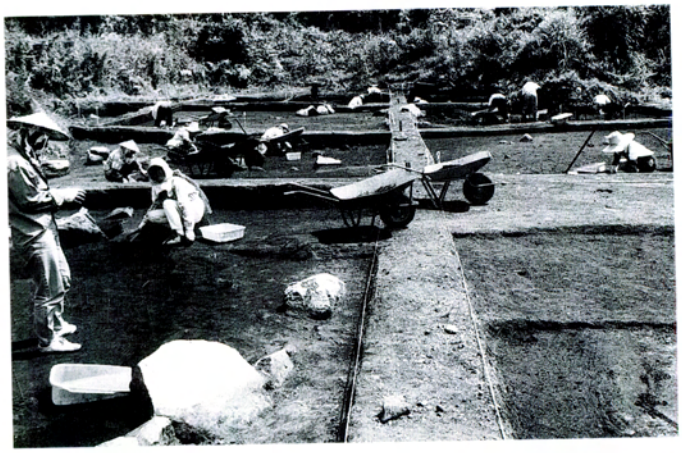
17

18

19

16. クルミ出土状況(SX21)　17. 水場遺構(SX21)
18. 木片出土状況(F 10区III層)　19. IV期第 5 群 5 類土器出土状況(G 9 区III層)

20



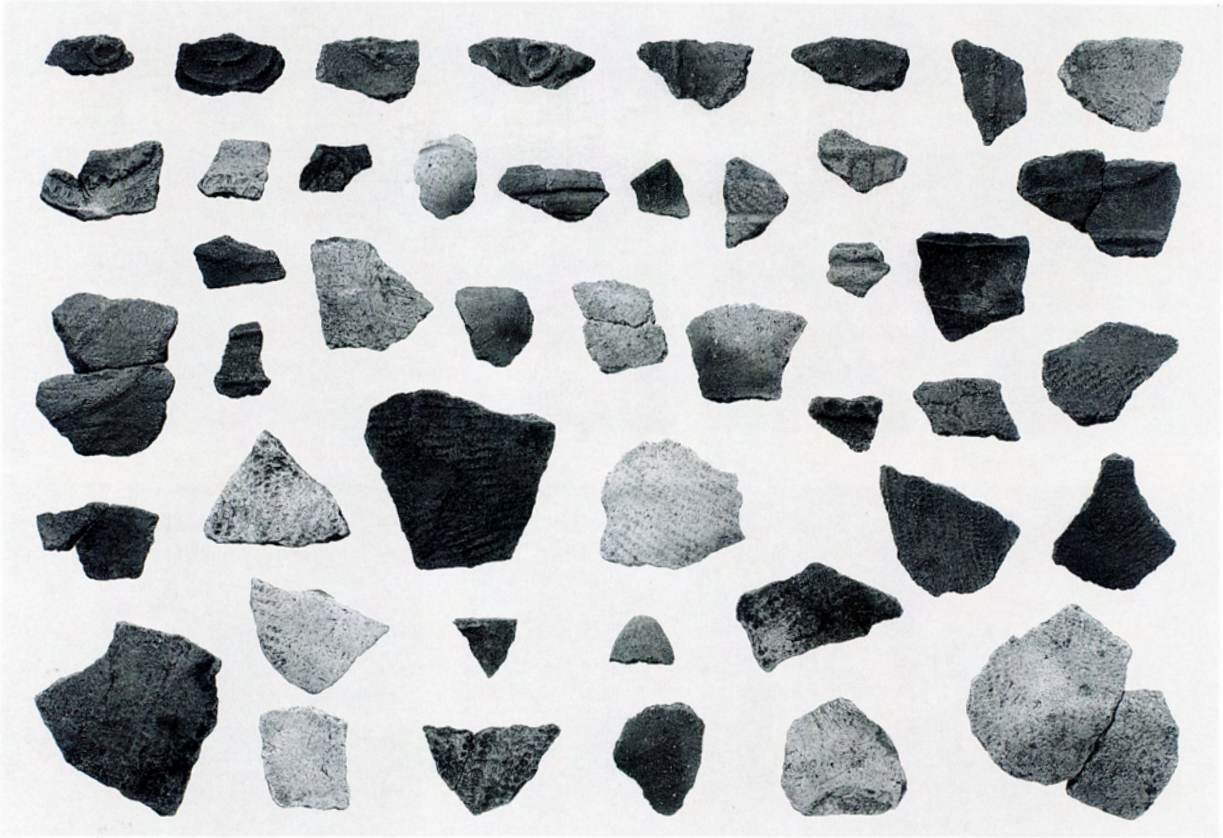
21

22

23

24

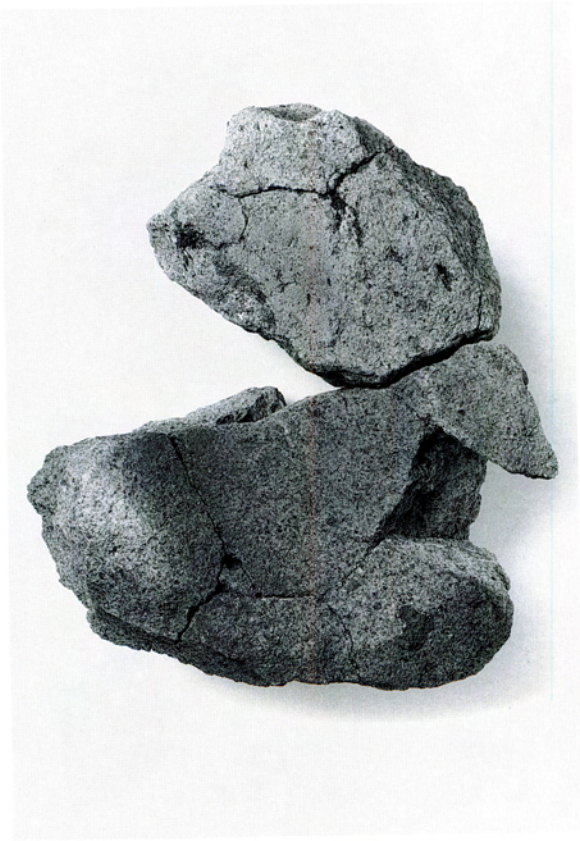
20. 東区全景　21. 東区作業風景　22. SX22
23. 木杭(SX24)　24. クルミ出土状況(SX22)



25. SB 1 出土土器

26. SB 1 出土石器 1 ・西区遺構出土石器 1

27. SB 1 出土石器 2



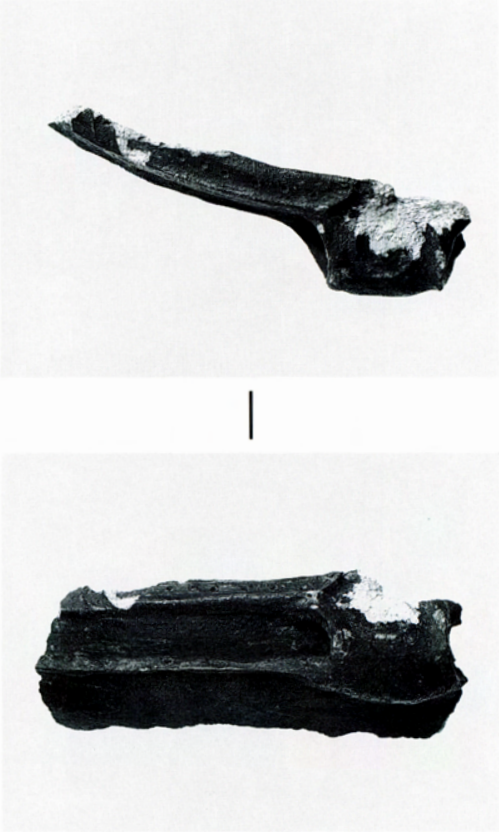
28. SB 1 出土石皿

29. SB 1 出土石器 3 ・西区遺構出土石器 2

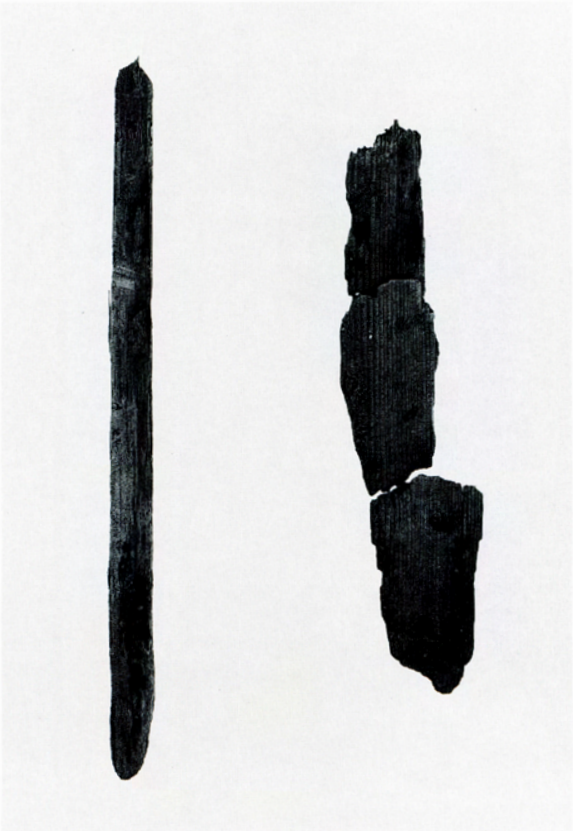
30. 西区遺構出土石器 3

31. 西区遺構出土土器 1

32. SX21出土土器 1

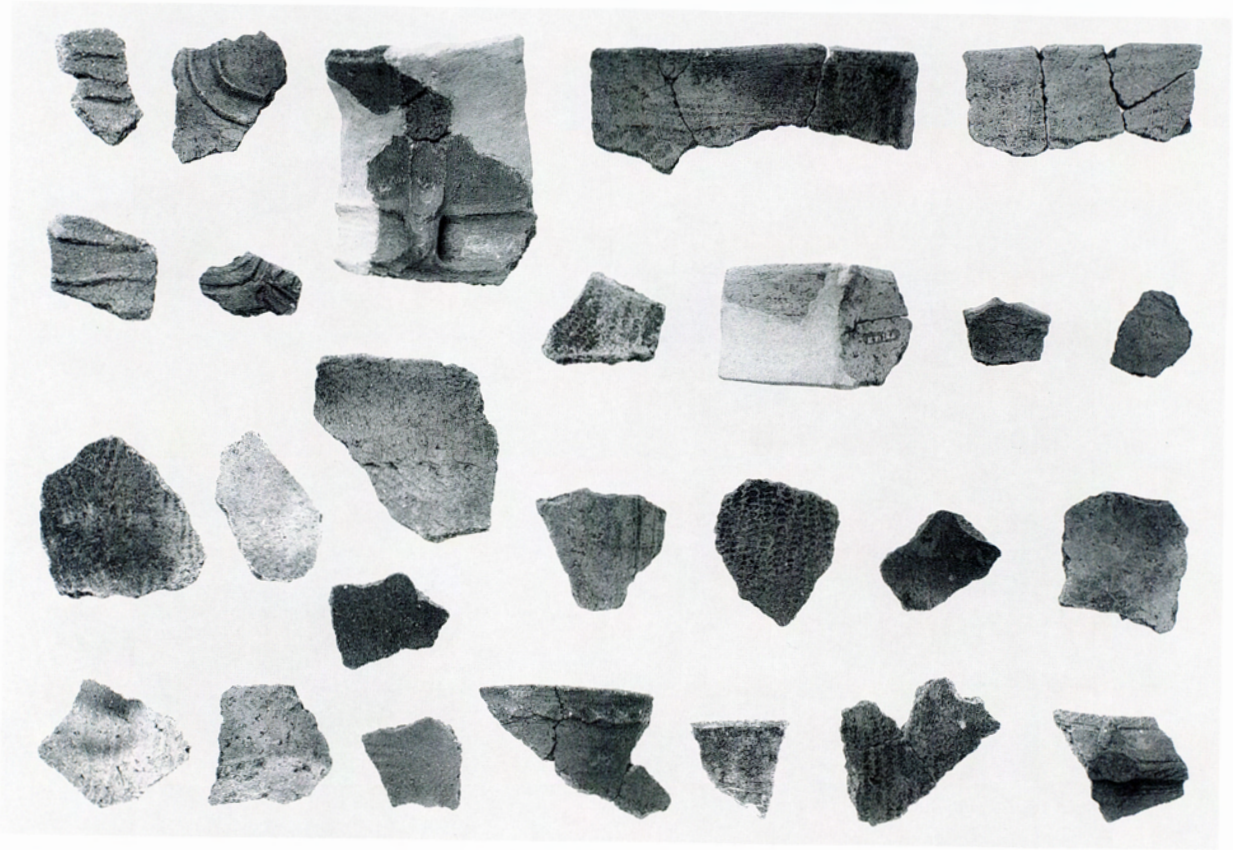


33. SX21出土土器 2



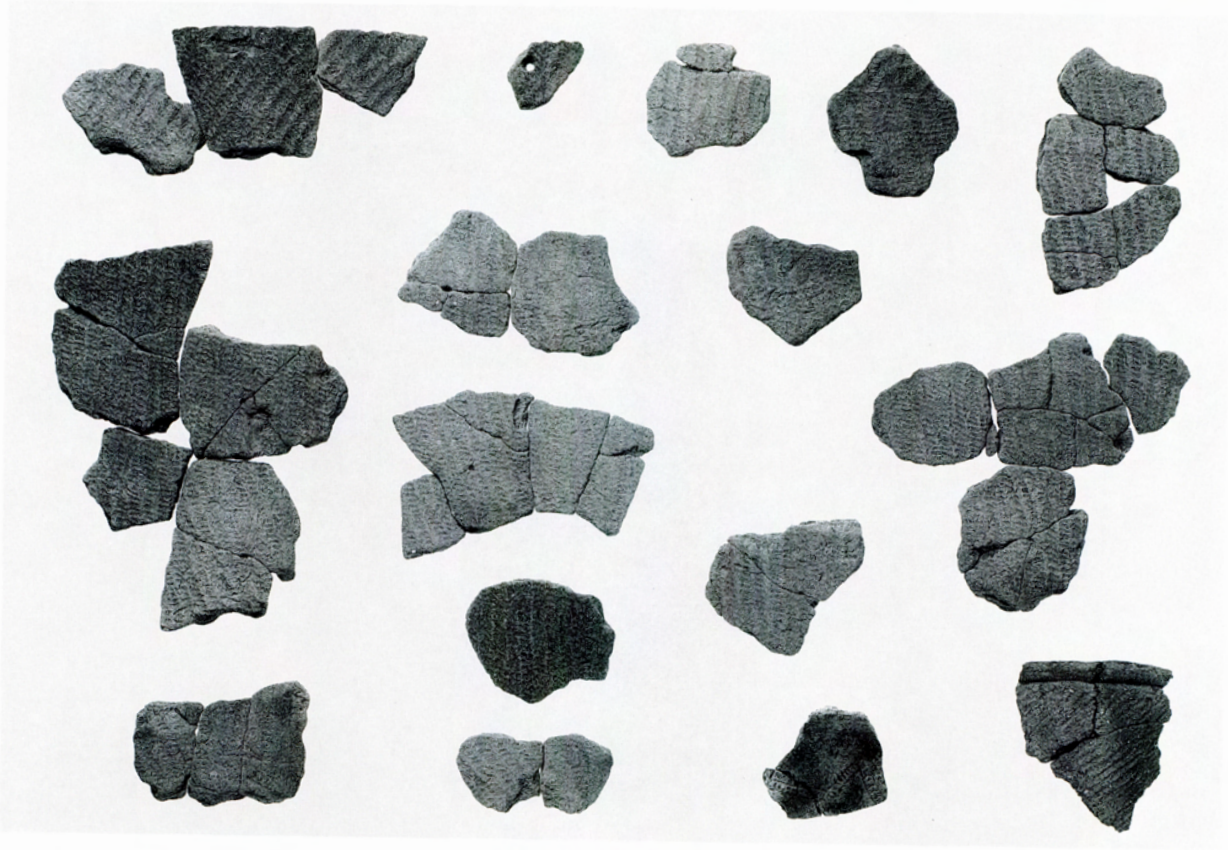
34. SX21出土木片

35. SX23出土土器



36. 西区遺構出土土器 2

37. SX 2 出土土器



38. 西区II期の土器

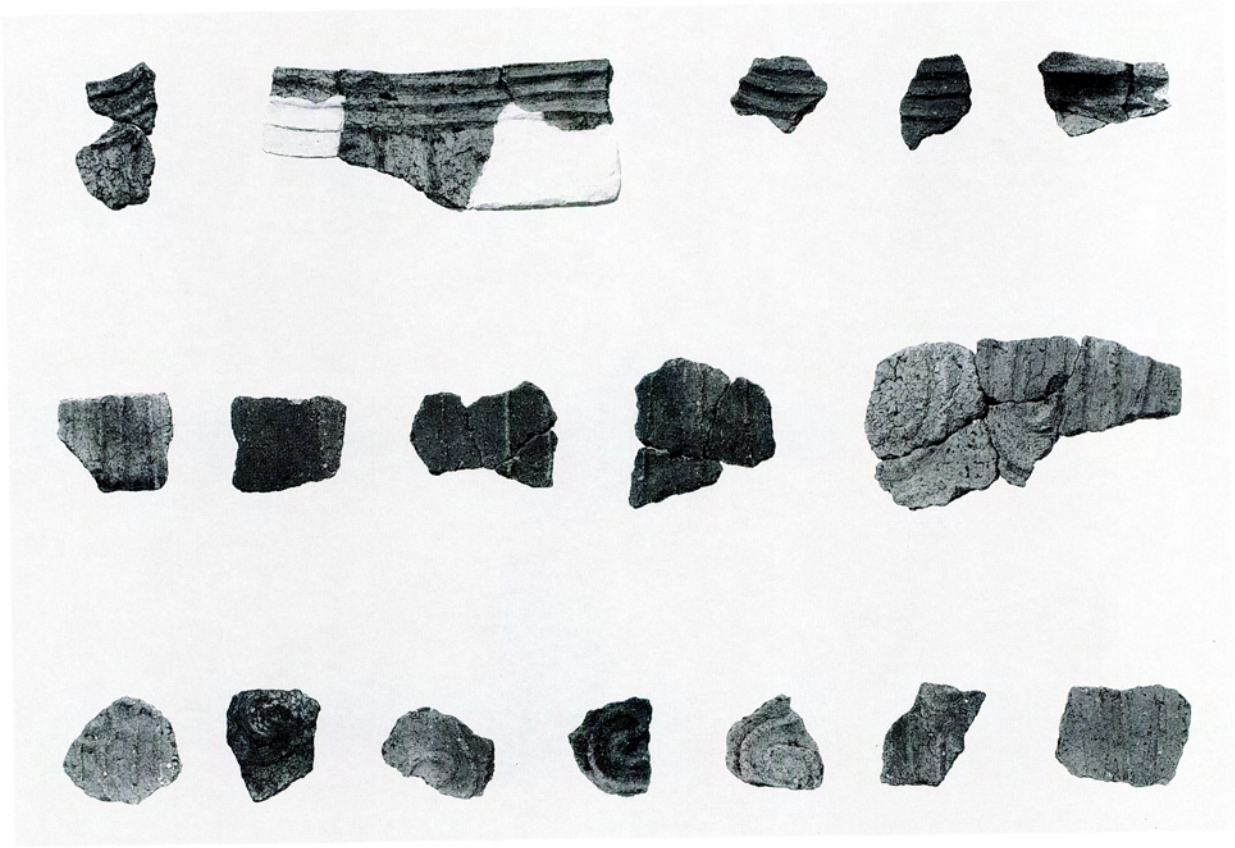
39. 西区III期の土器（第29図—194）

40. 西区III期の土器 2 （196）

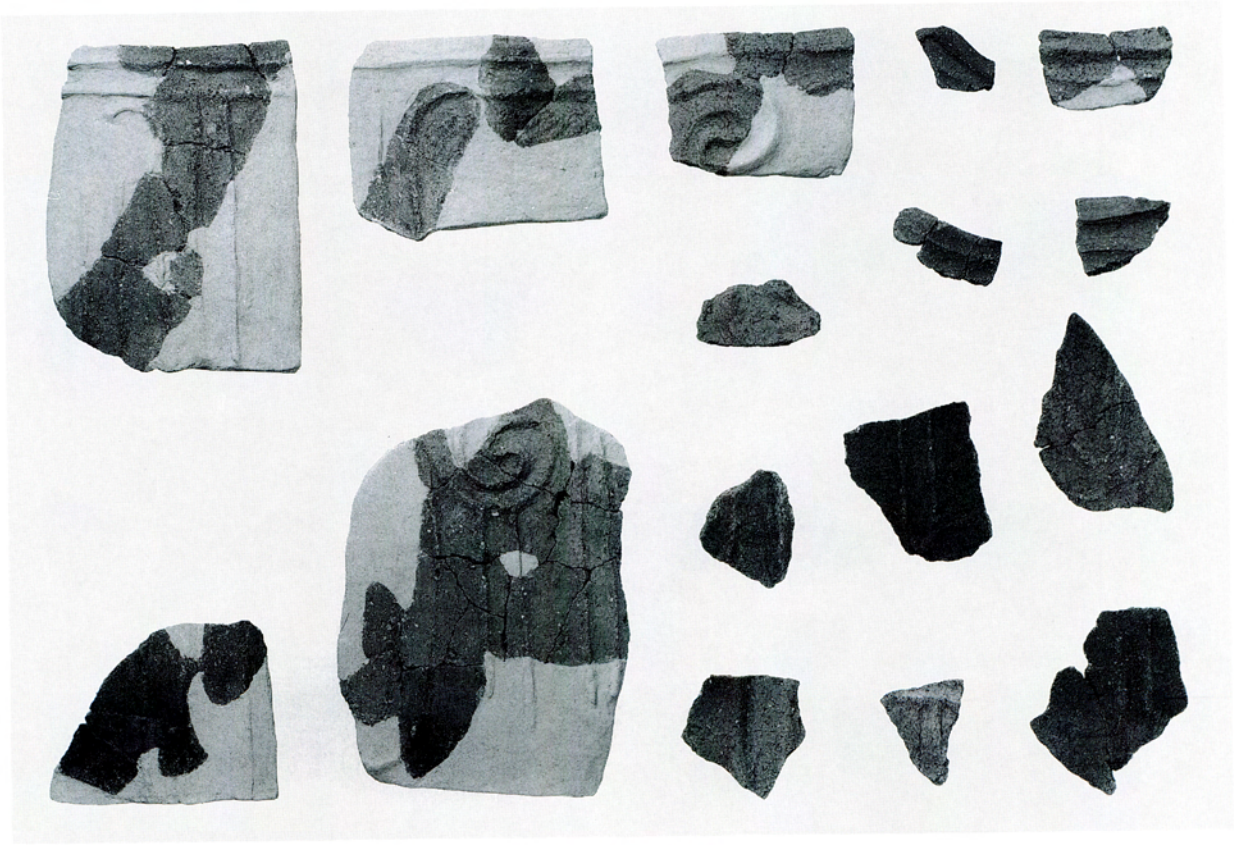
41. 西区Ⅳ期の土器 1 （第 1 群 1 a 類197）

42. 同 2 （同198）

43. 同 3 （同 2 類199）

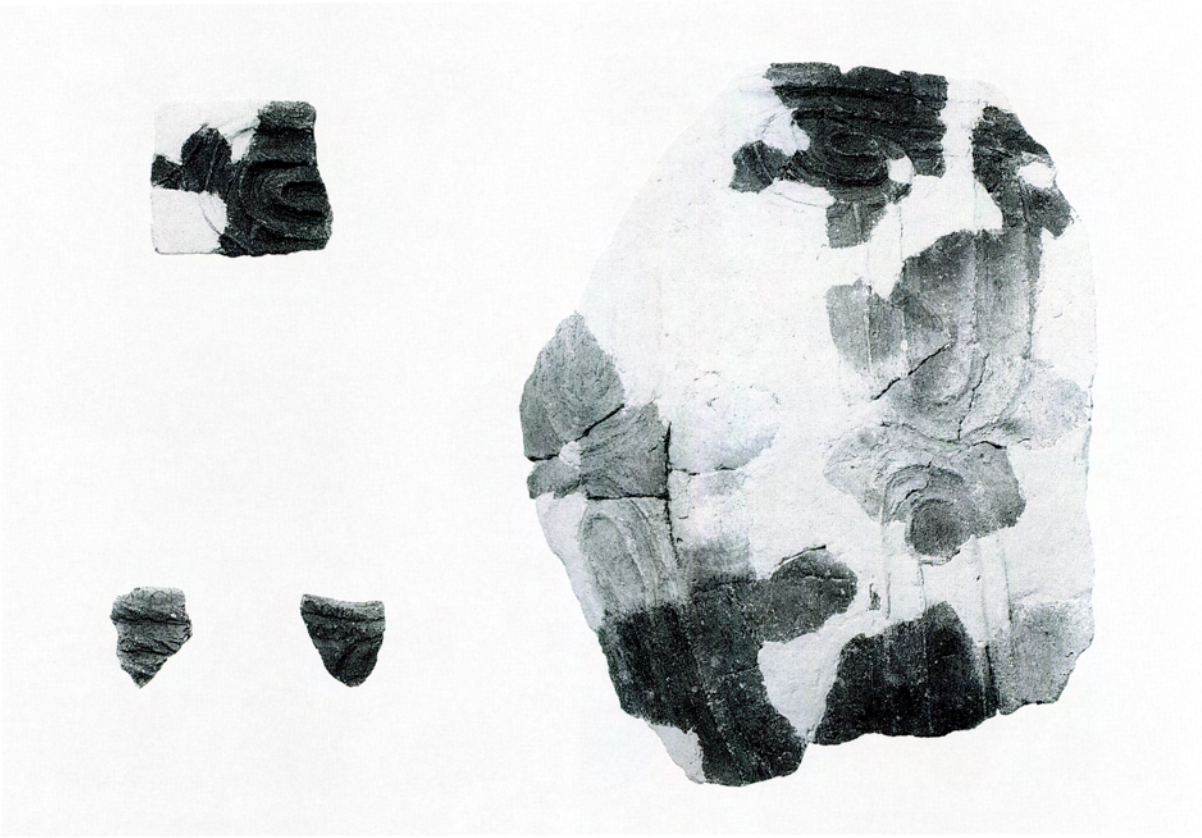


44. 同4（第1群1ａ類）

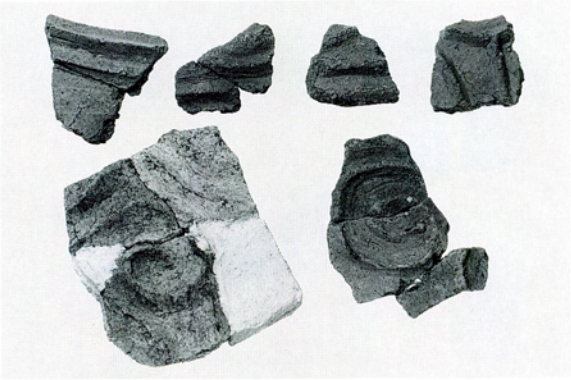


45. 同5（同1ｂ類）

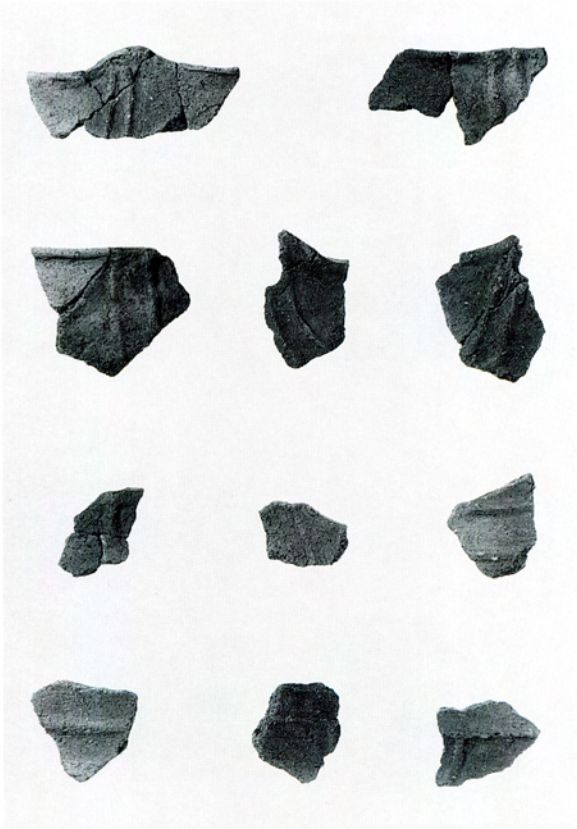
図版14



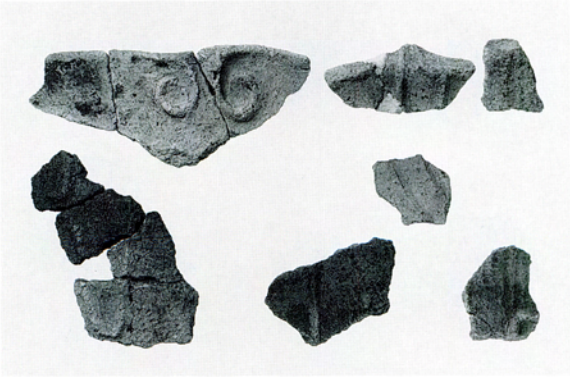
46. 同6（第1c類）



47. 同7（同2類）

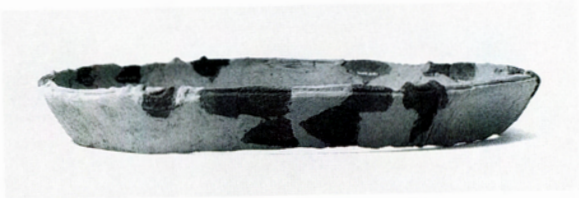


48. 同8（同3類）



49. 同9（同4～6類）

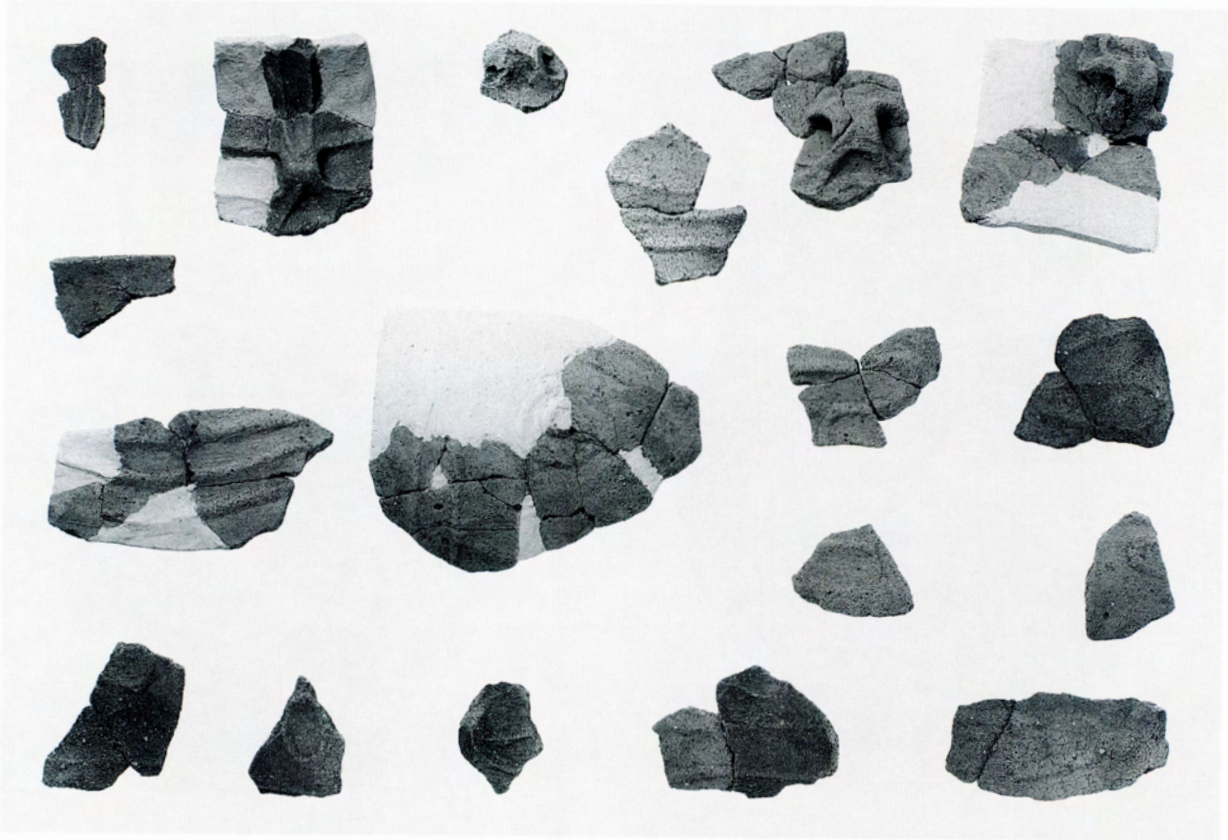
50. 同10（同５類201）



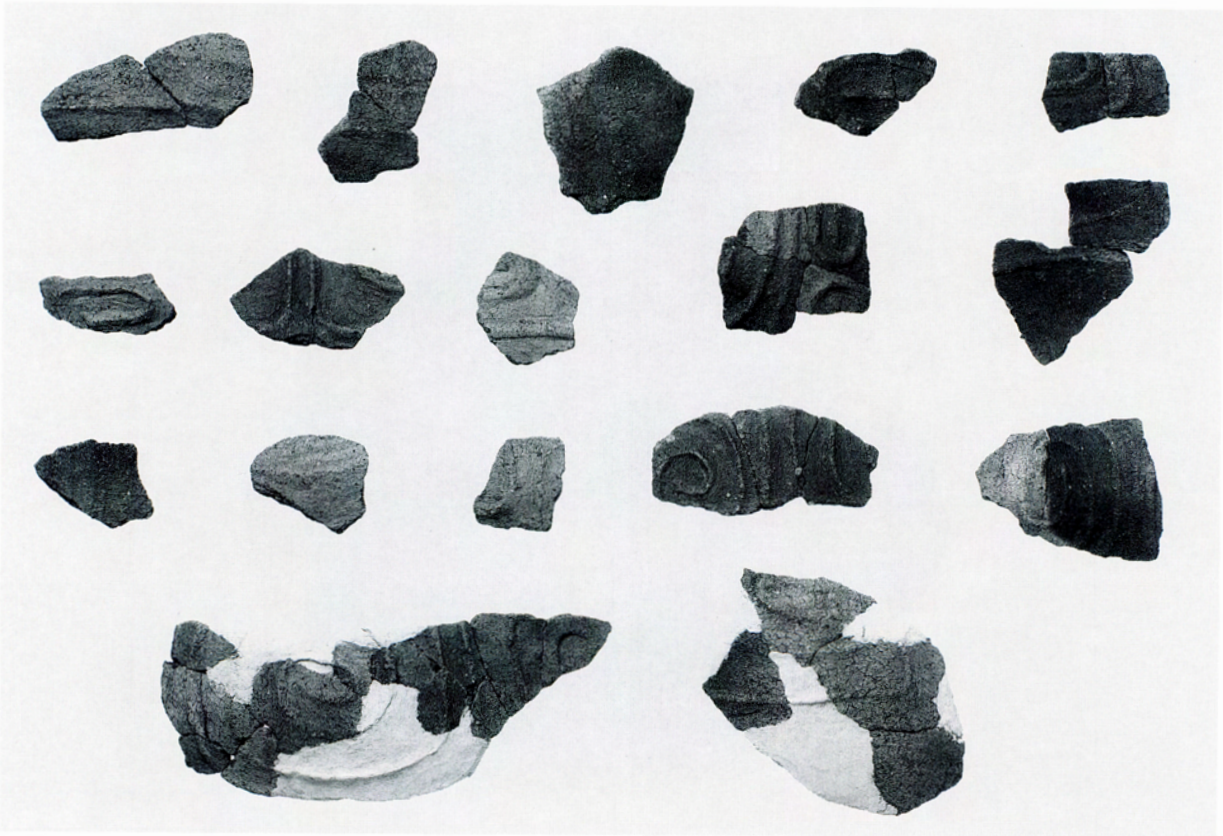
51. 同11（同202）

52. 同12（第２群203）

53. 同13（同204）

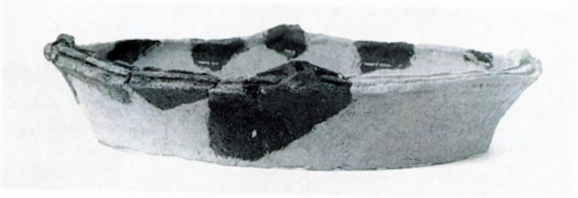


54. 同14（第２群）



55. 同15（同）

56. 同16（同205）

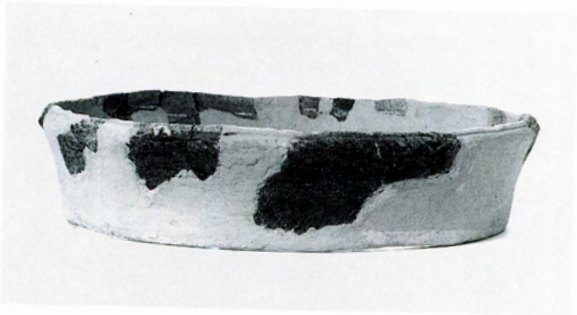


57. 同17（第３群１ａ類206）

58. 同18（同207）

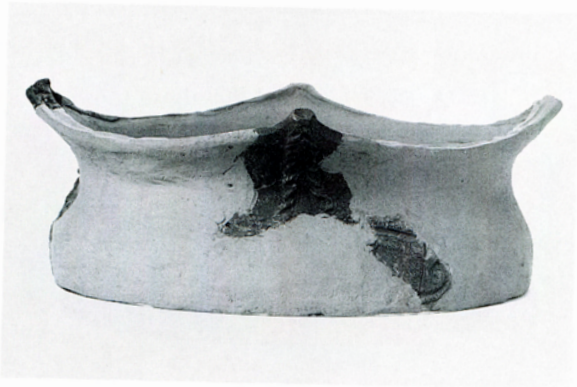
60. 同20（同１ｂ類209）

59. 同19（同208）



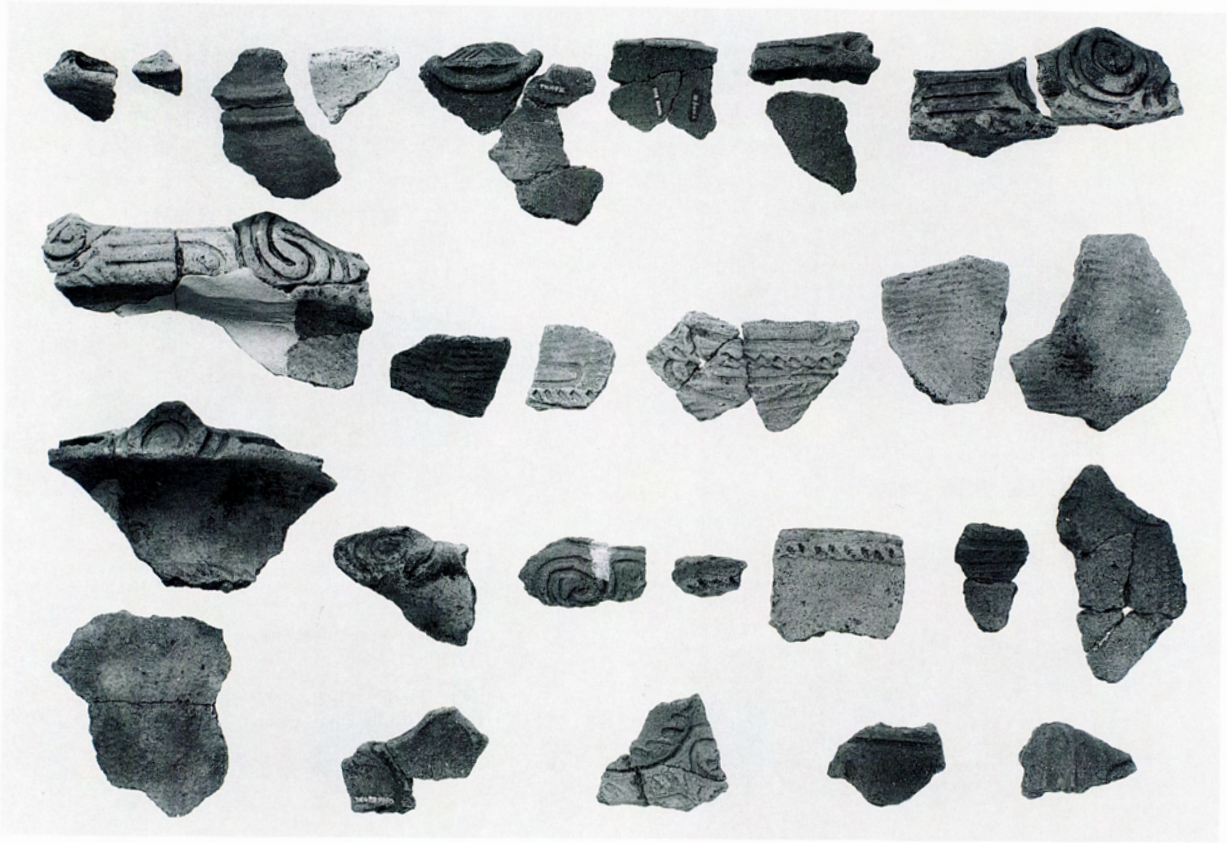
61. 同21（同２類210）

62. 同22（同６類211）



63. 同23（第４群214）

64. 同25（第２群330）



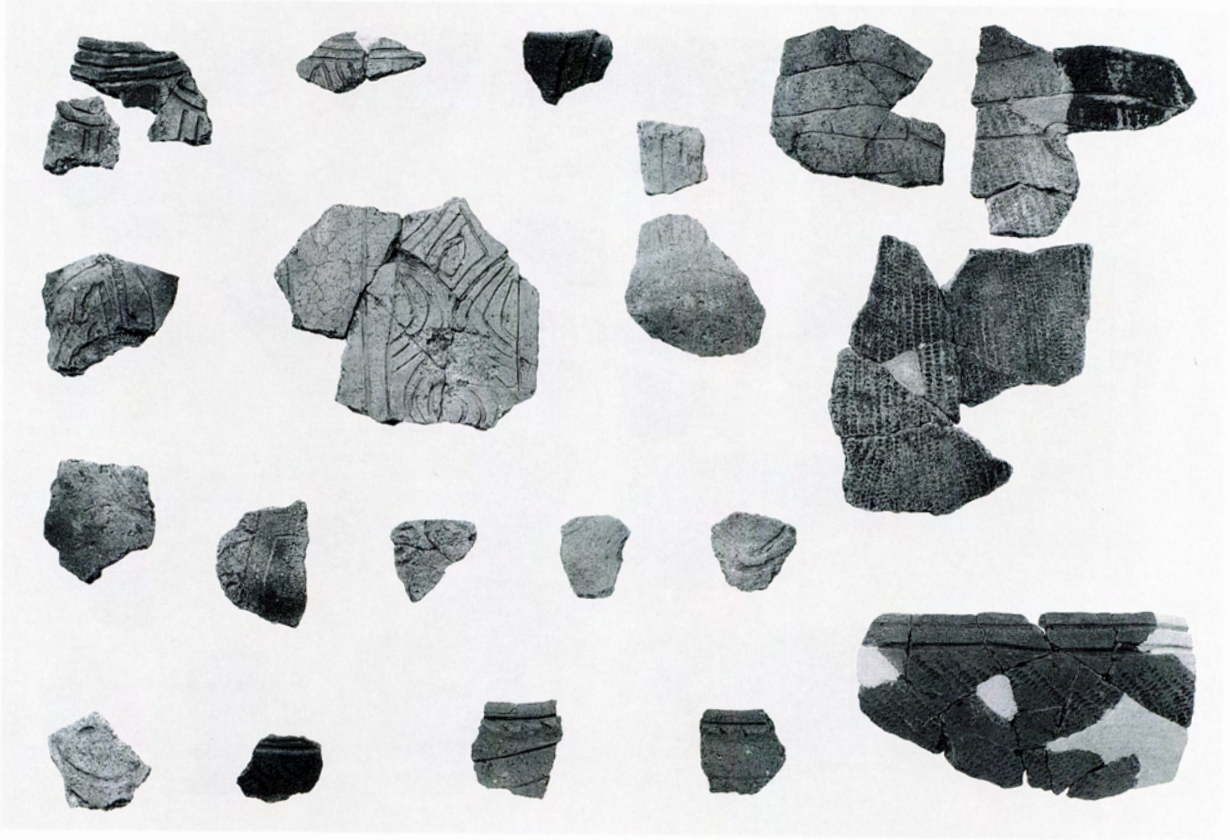
65. 同26（第３・４群）

66. 同27（第５群４類215）

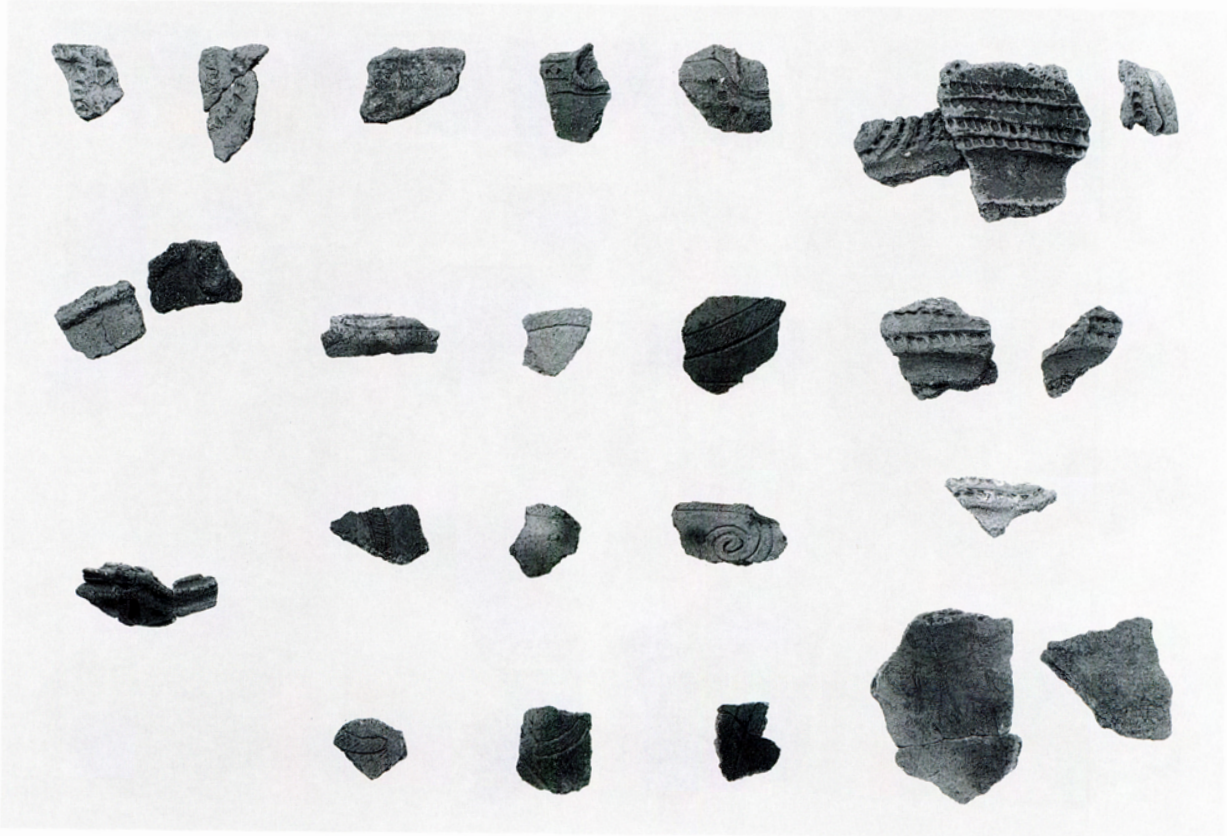
67. 同28（同５類216）

68. 同29（第６群１類218）

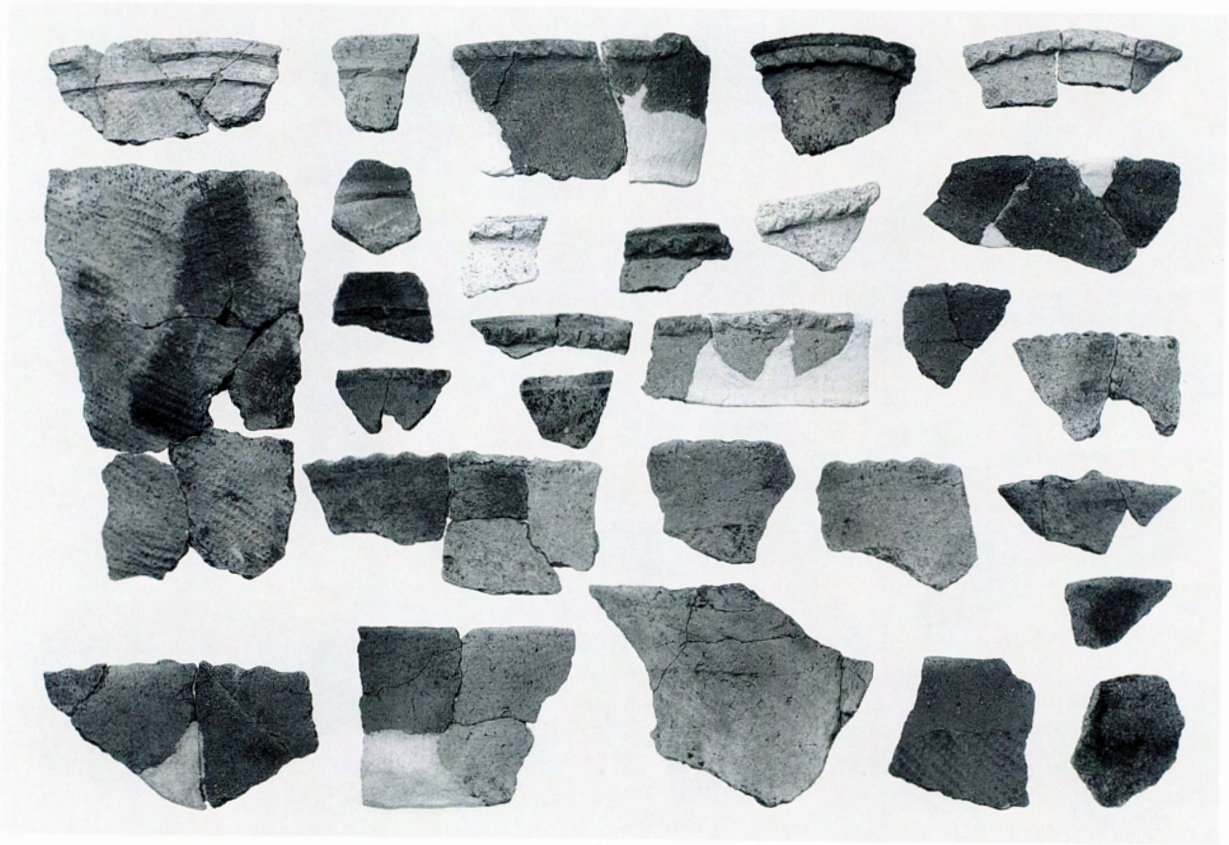
69. 同30（同２ａ類219）



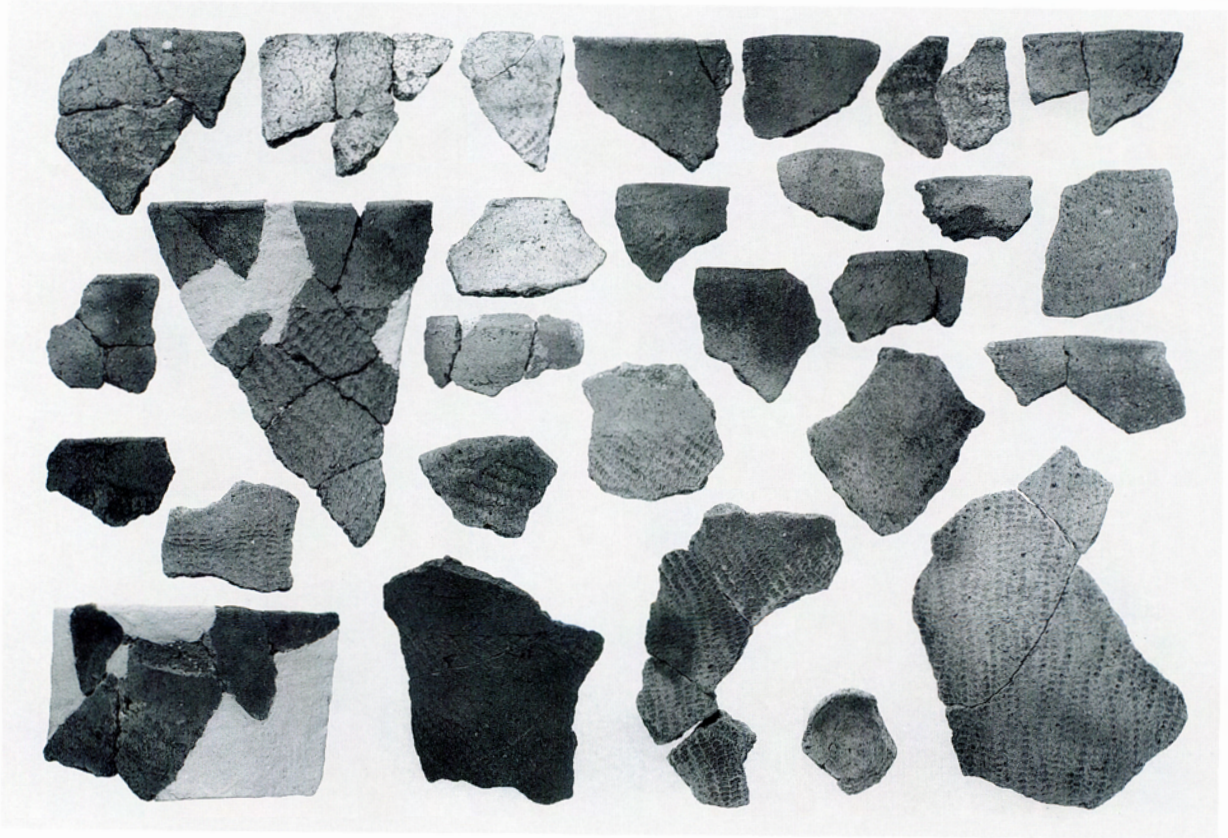
70. 同31（第５～６群）



71. 同32（第７群）

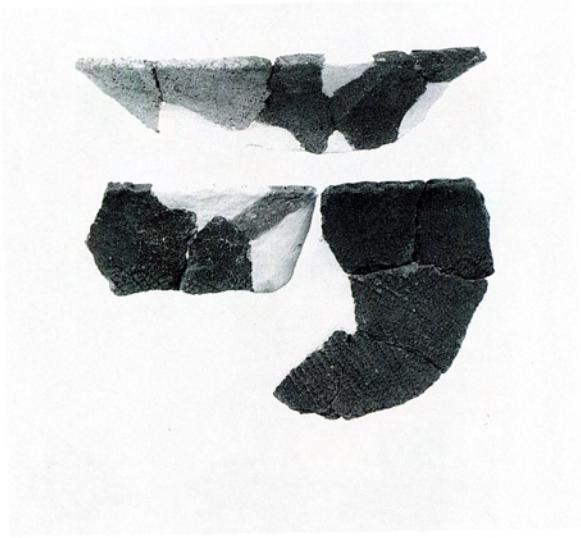


72. 同33（第８～９群）



73. 同34（第９群）

74. 同35（第８群２ｂ類221）

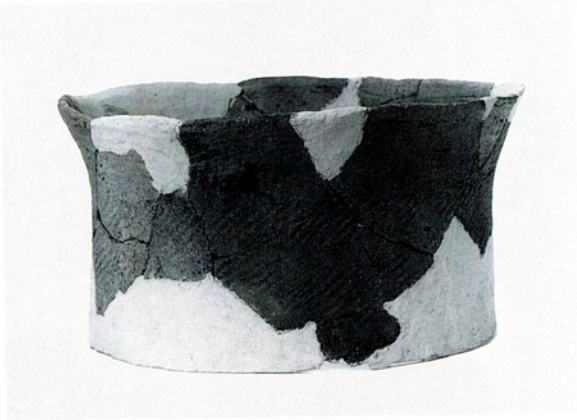


75. 同36（第９群１ａ類222・同１ｂ類224）

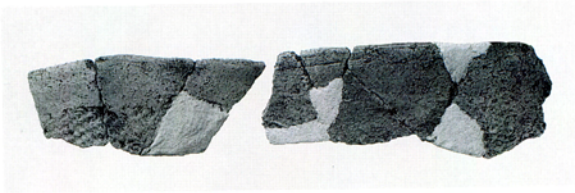
76. 同37（同１ｂ類226）

77. 同38（同２ａ類228）

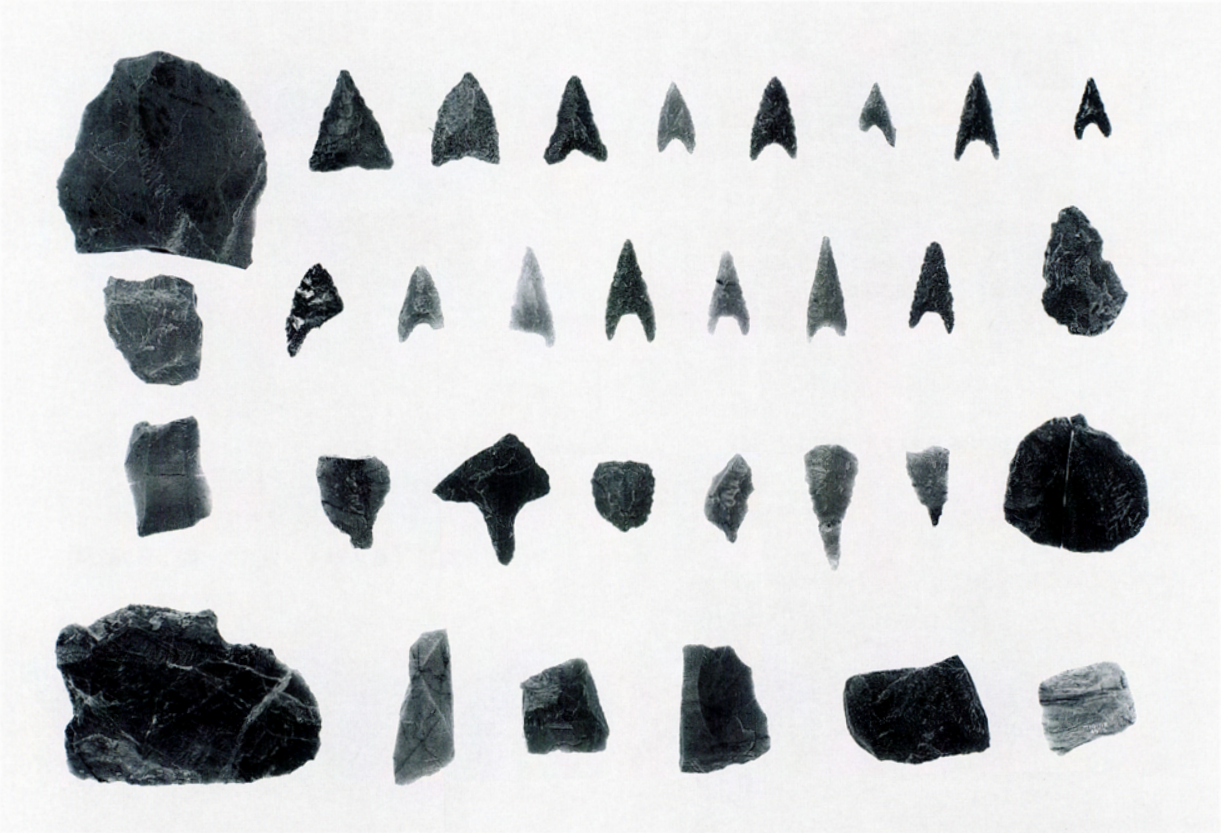
78. 同39（同１ａ類223）



79. 同40（同２ｂ類229）

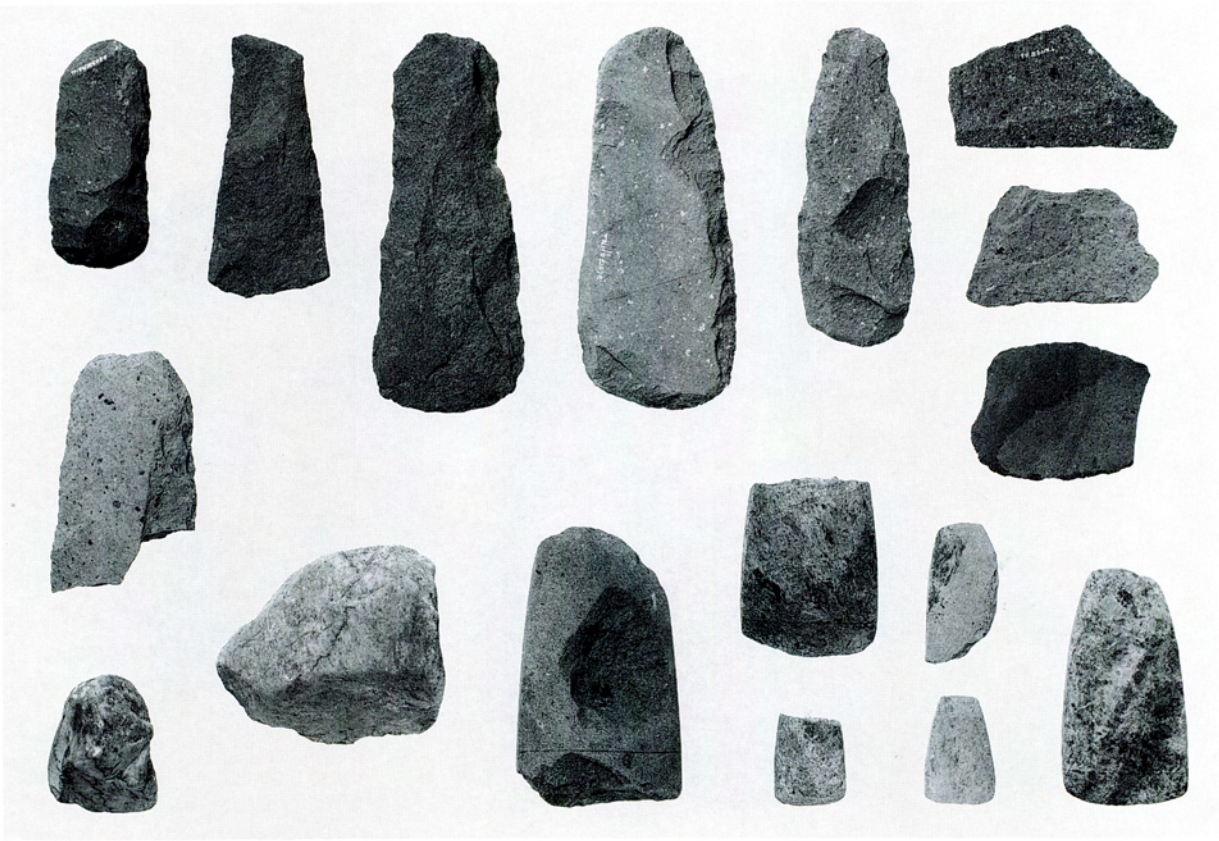


80. 同41（同３ｂ類231・232）



81. 西区Ⅲ層出土石器 1 （一部Ⅳ層出土石器）

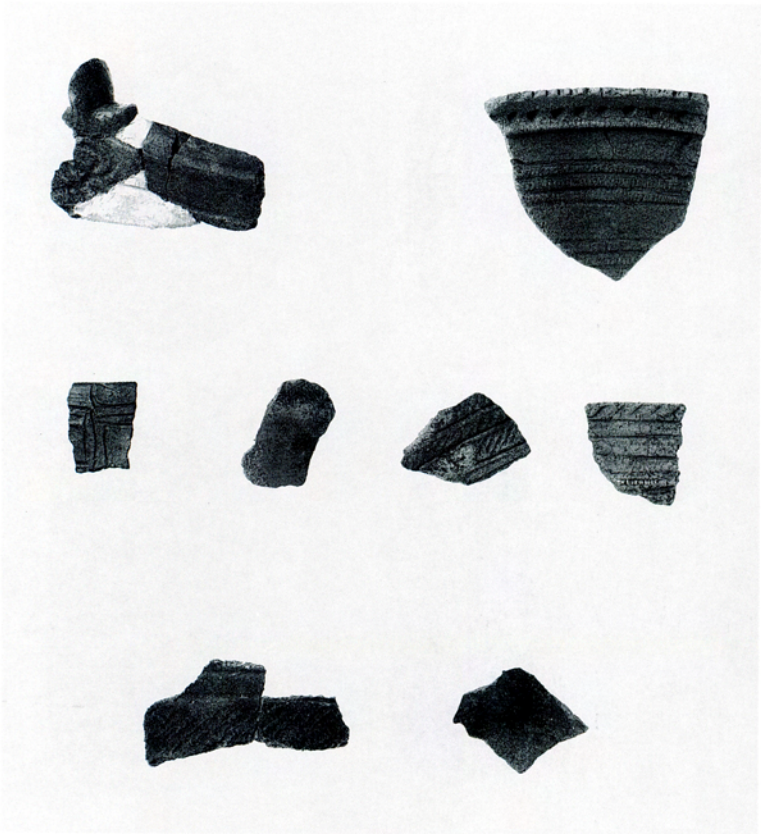
82. 西区Ⅲ層出土石器 2



83. 西区Ⅲ層出土石器 3

84. 西区Ⅲ層出土石器 4 （一部Ⅳ層出土石器）

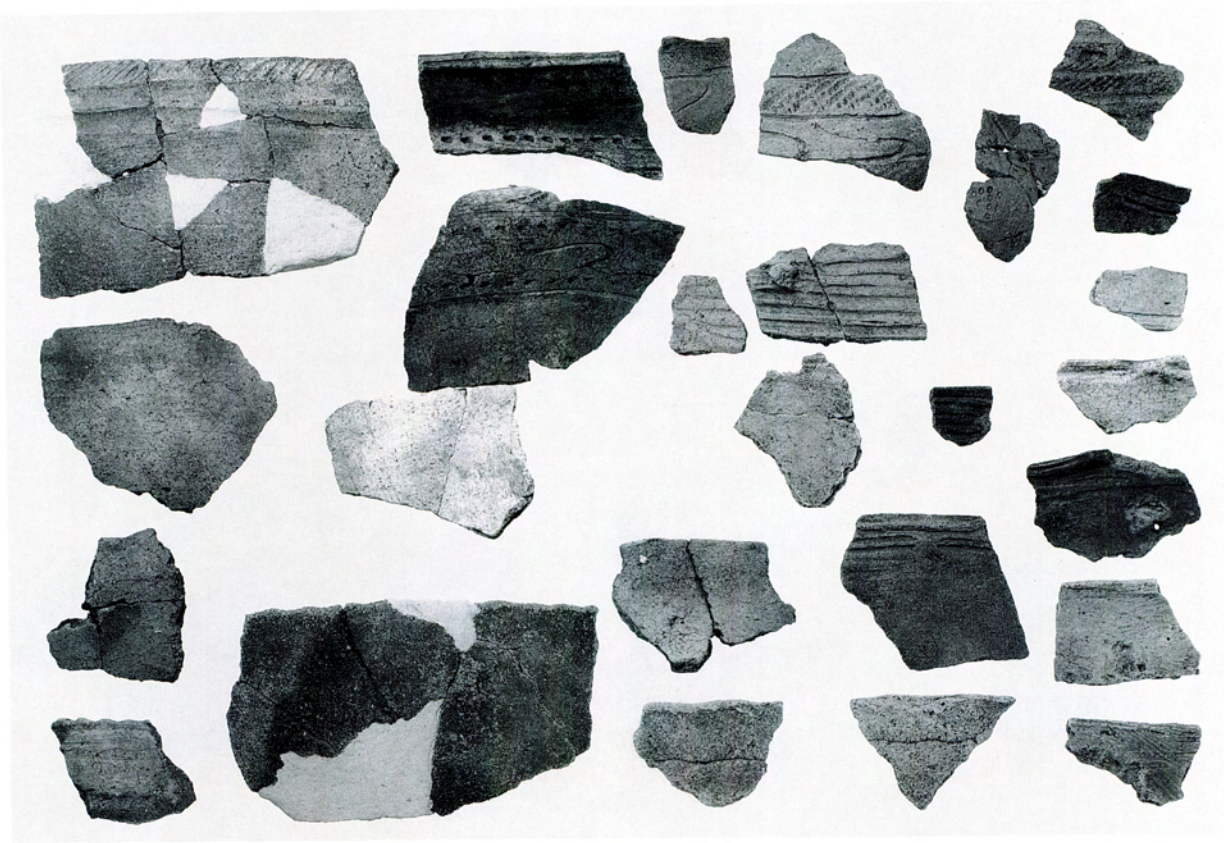
85. 西区Ⅲ層出土石器5（石皿）



86. 西区Ⅴ期の土器1

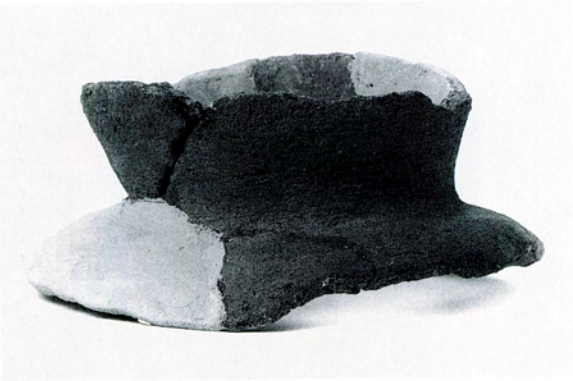
87. 同2（551）

88. 西区出土の土偶



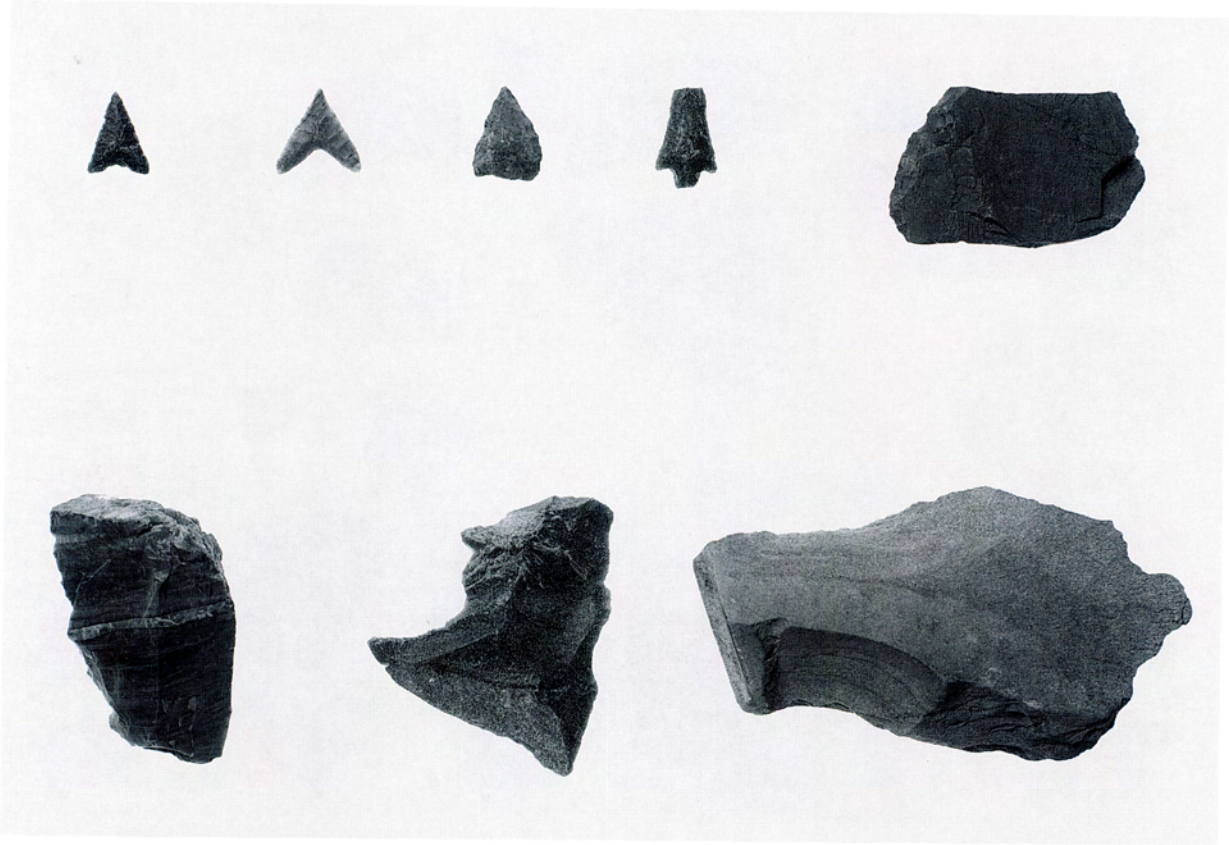
89. 西区VI期の土器 1

90. 同 2 (554)

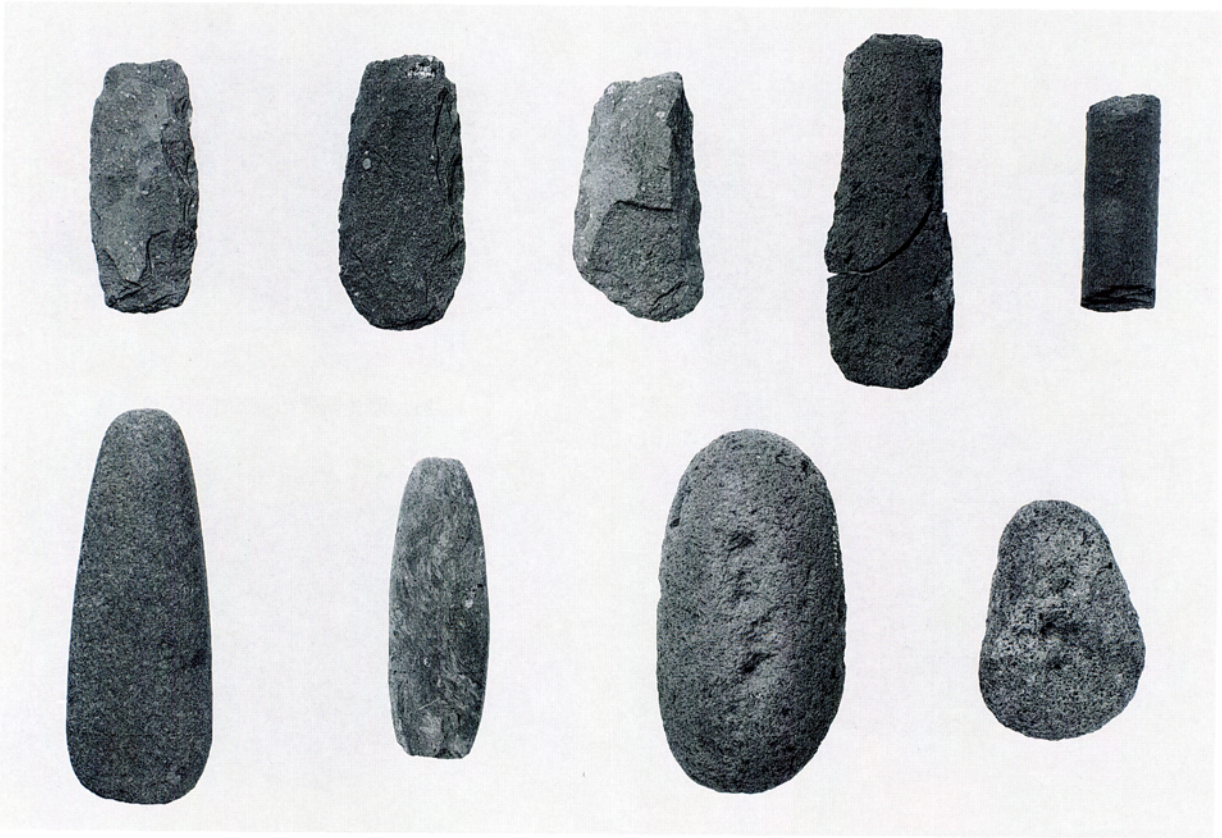


91. 歴史時代の遺物 1 (604)

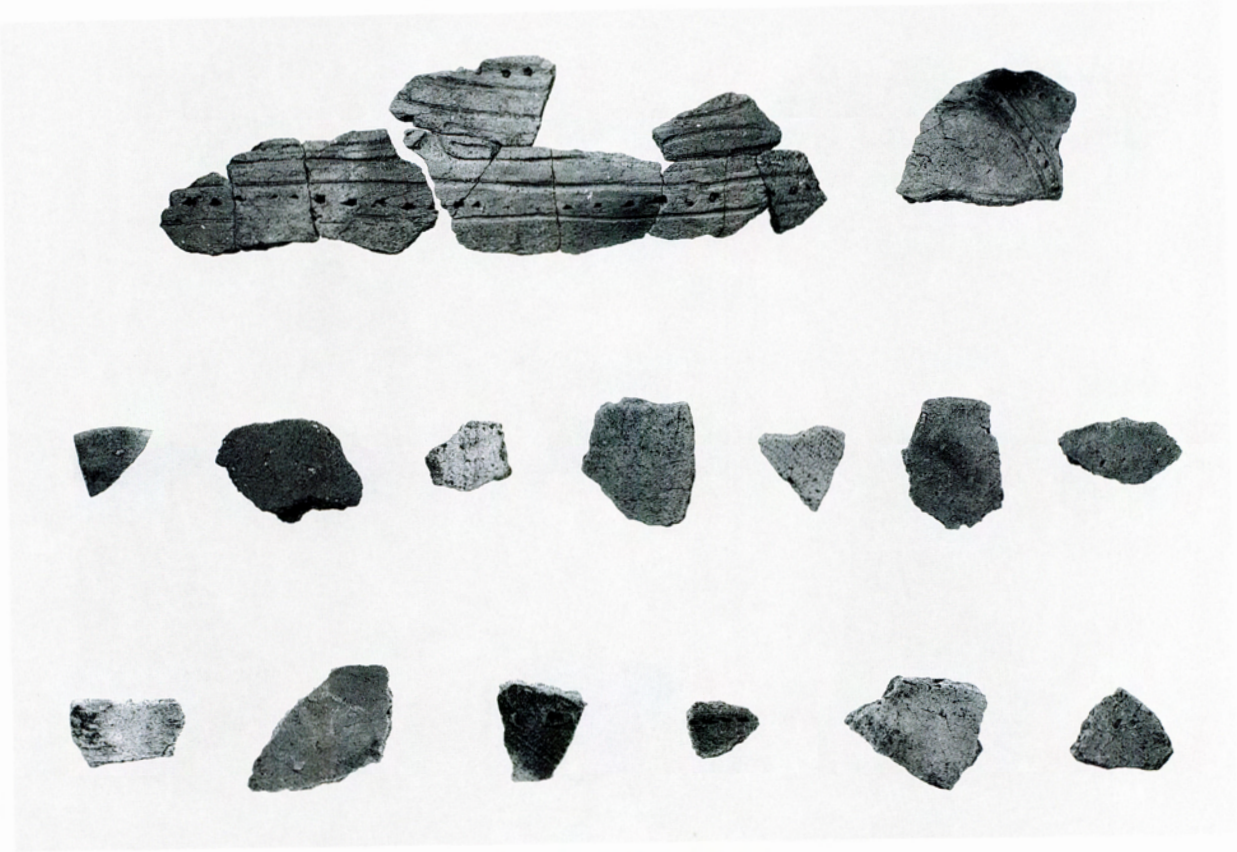
92. 同 2 (605)



93. 西区II層出土石器 1



94. 西区II層出土石器 2

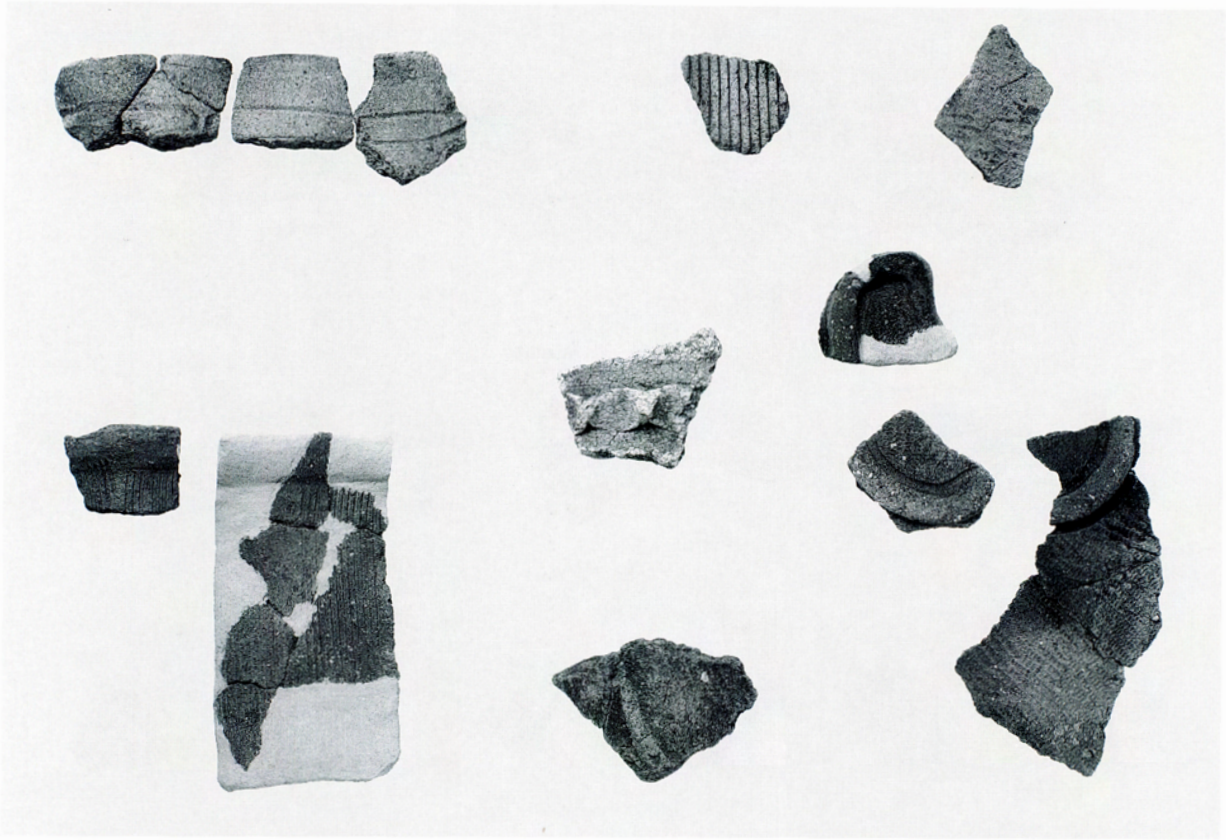


95. 東区の遺構出土遺物

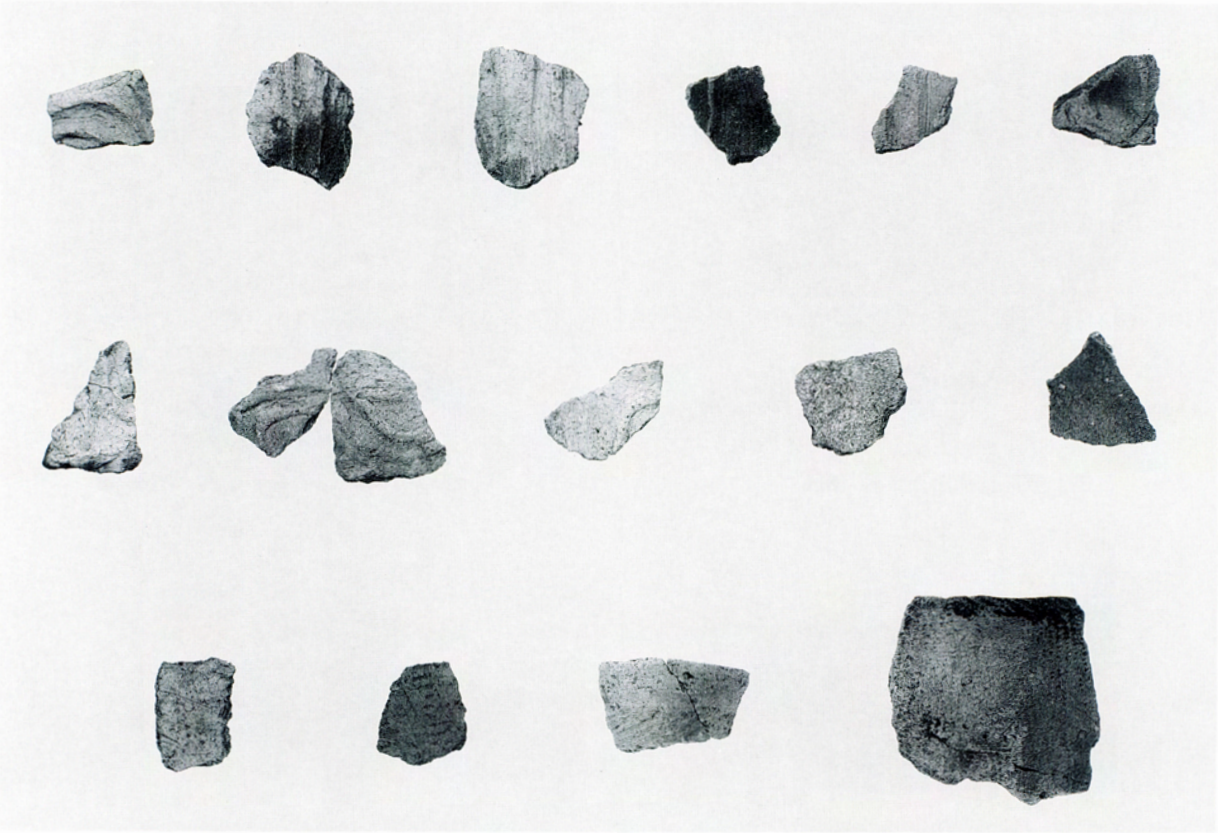
96. 東区遺構出土土器（611）

97. 東区遺構出土土器（610）

98. 東区Ⅰ期の土器（625）



99. 東区Ⅲ期の土器



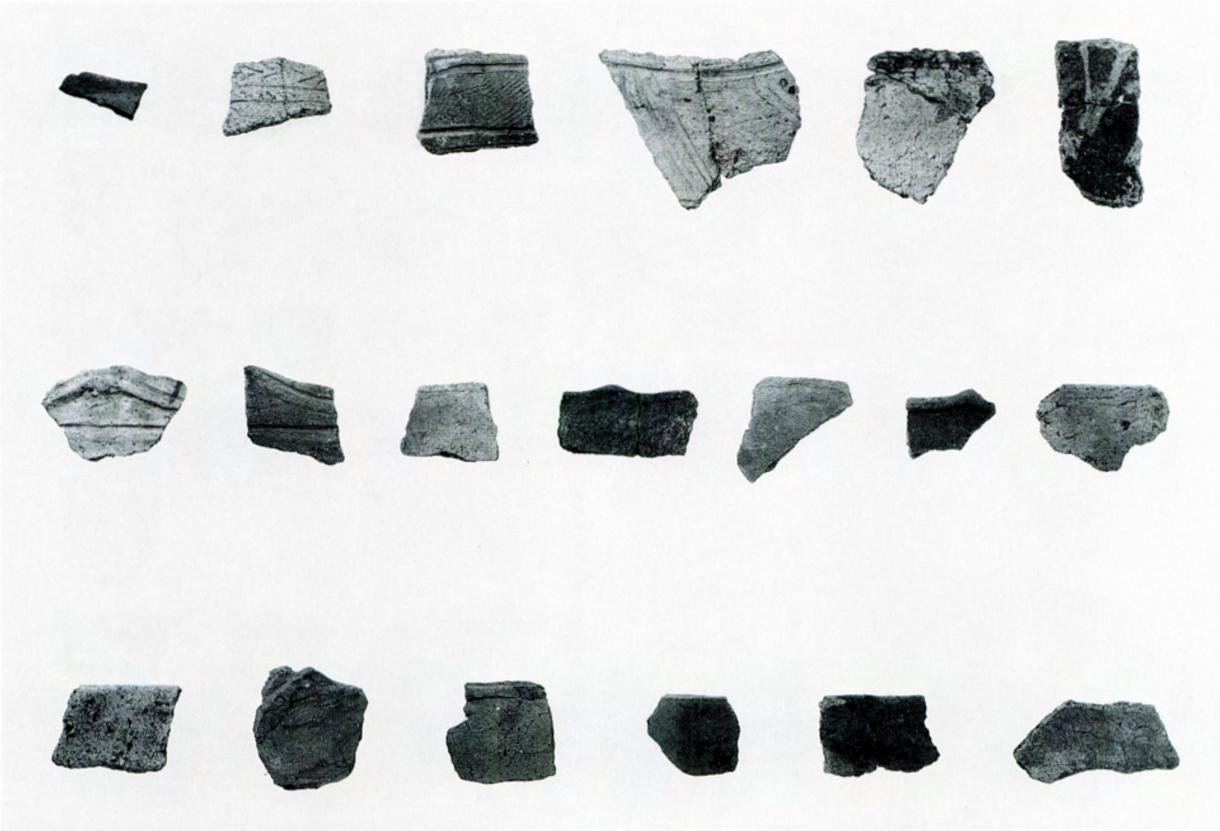
100. 東区Ⅳ～Ⅴ期の土器

101. 東区Ⅳ～Ⅴ期の土器（650）

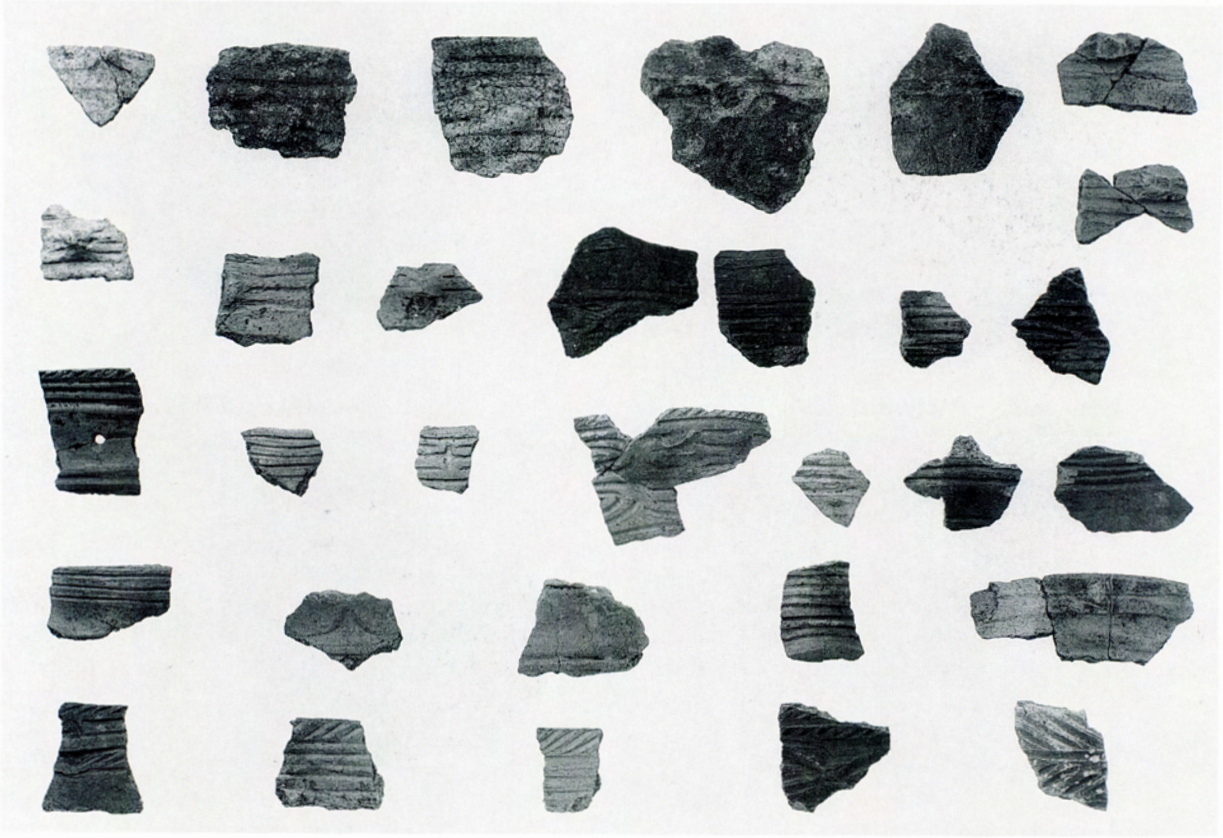
103. 同２（同２ｄ類653）

102. 東区Ⅳ期の土器１（第２群２ｃ類651）

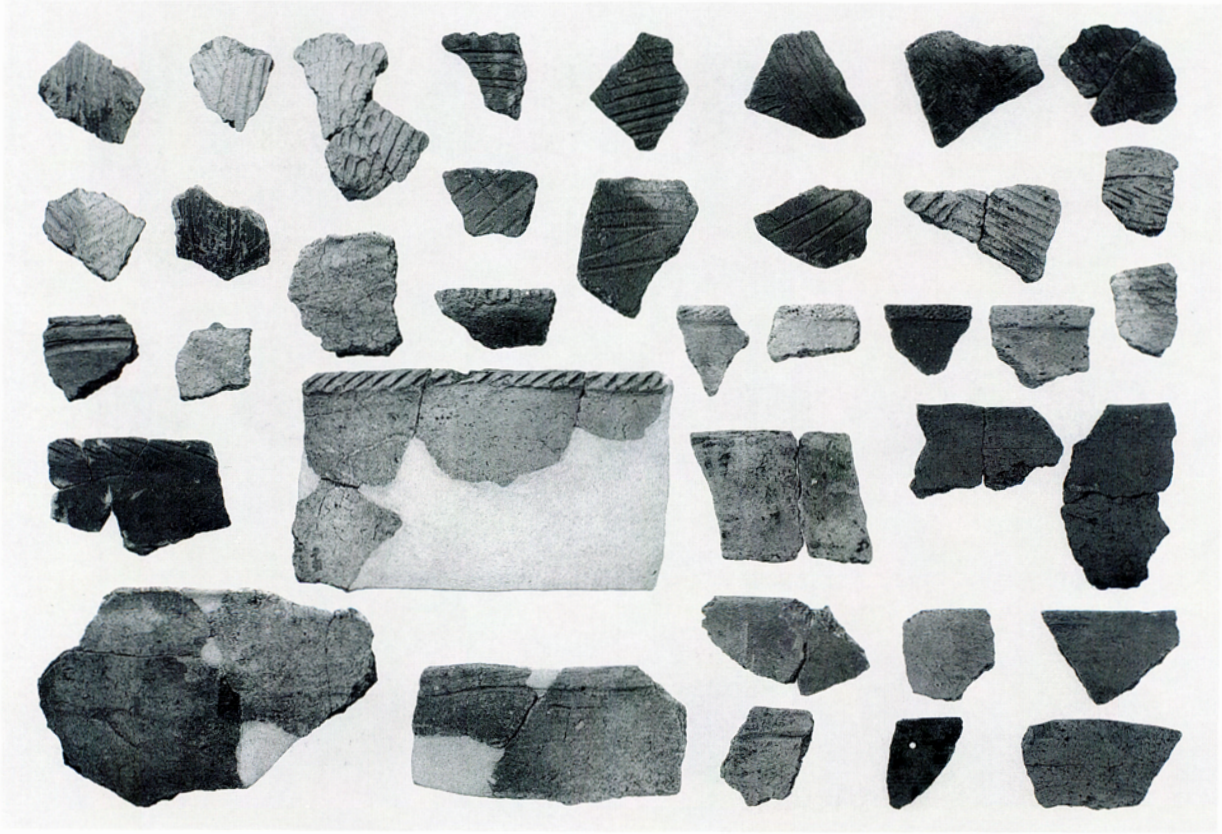
104. 同３（同３類654）



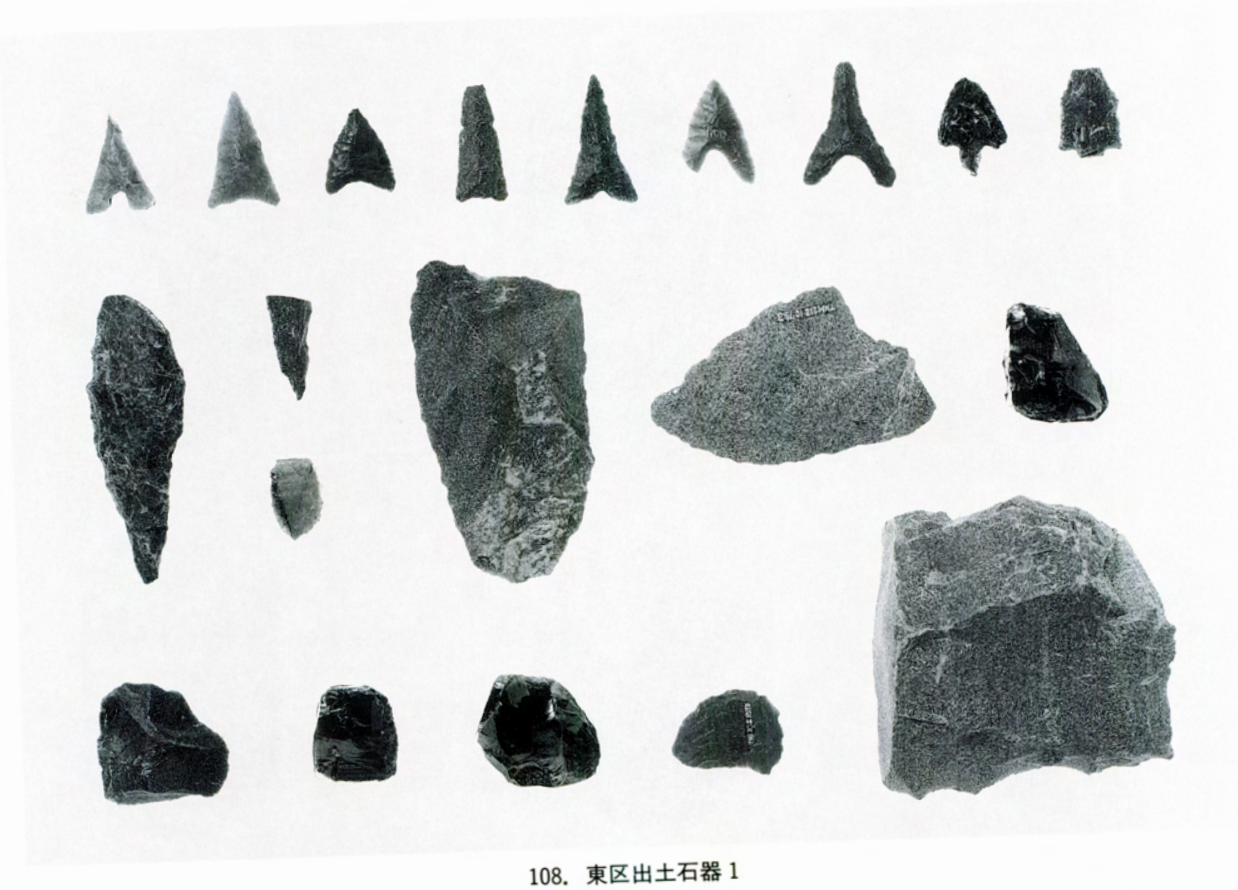
105. 同４（第１群）



106. 同5（第2群1類～2類）



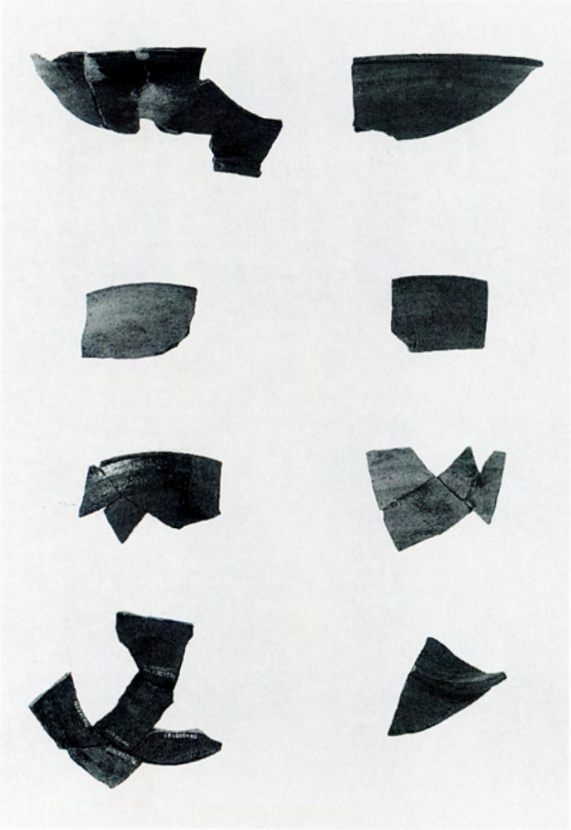
107. 同6（第2群4類・第3群）



108. 東区出土石器 1

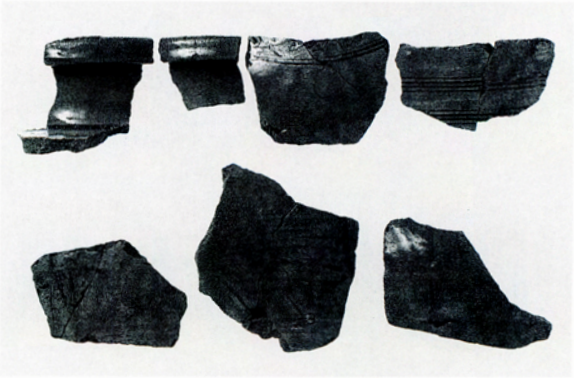
109. 東区出土石器 2

110. 東区出土石器 3

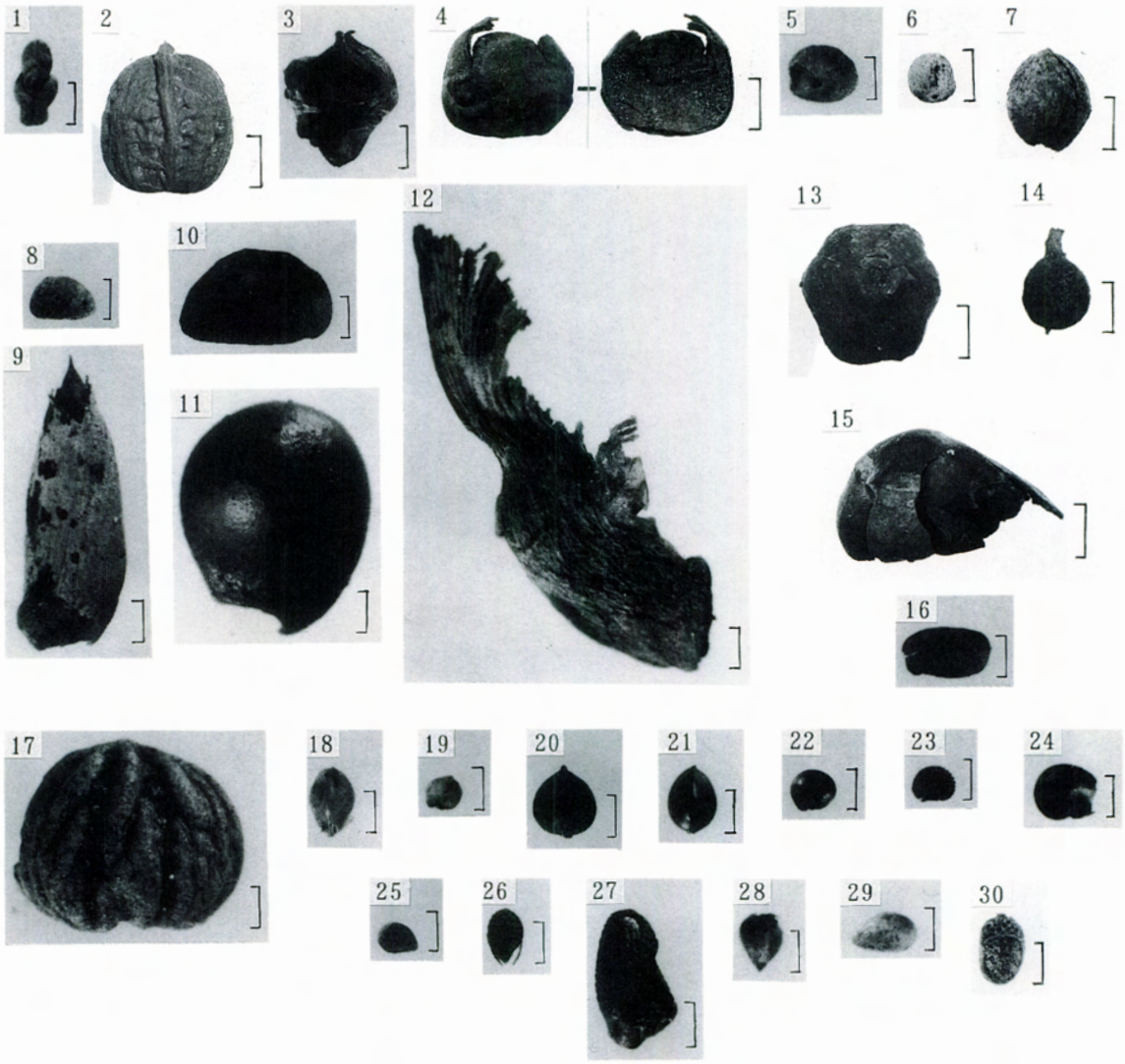


111. 東区出土灰釉陶器 1

112. 東区出土灰釉陶器 2

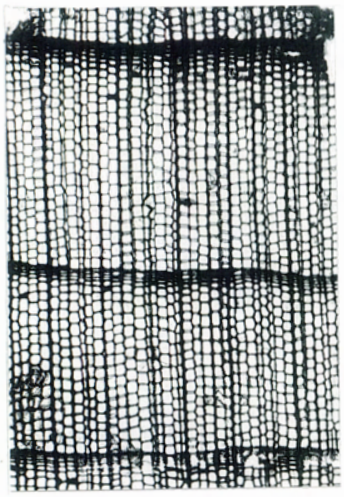


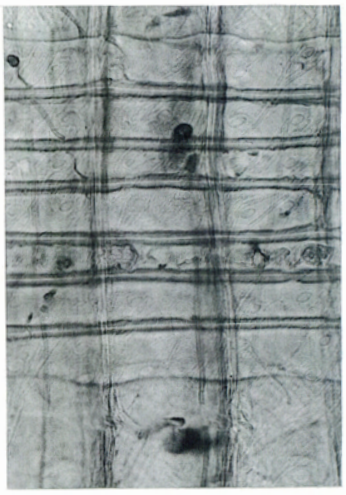
113. 東区出土陶器



図版33　出土した大型植物化石（スケールは1、3、5、8～12、16～30は1㎜、2、4、6、7、13～15は1㎝）
1．ヒノキ、小枝(SX22)　2．オニグルミ、核(SX21共通)　3．カバノキ属、果実(SX22)　4．クリ、果実(SX21共通)　5．クワ属、種子(SX21A)　6．ホオノキ、種子(SX21共通)　7．スモモ、核(SX26)　8．キイチゴ属、核(SX22)　9．フジ属、芽(SX21A)　10．キハダ、種子(SX21B)　11．ミツバウツギ、種子(SX21共通)　12．カエデ属、果実(SX21A)　13．トチノキ、果実(SX21共通)　14．トチノキ、幼果(SX21共通)　15．トチノキ、種子(SX21共通)　16．タラノキ、核(SX21B)　17．ミズキ、核(SX21共通)　18．スゲ属、果実(SX21A)　19．クワクサ、果実(SX21A)　20．タデ属A、果実(SX22)　21．タデ属B、果実(SX21B)　22．シロザ近似種、種子(SX21B)　23．ナデシコ科、種子(SX22)　24．キケマン属、種子(SX21A)　25．キジムシロ属、オランダイチゴ属またはヘビイチゴ属、核(SX22)　26．カタバミ属、種子(SX21B)　27．ツリフネソウ、種子(SX21A)　28．スミレ属、種子(SX21A)　29．ウド、果実(SX21B)　30．キランソウ属、果実(SX22)

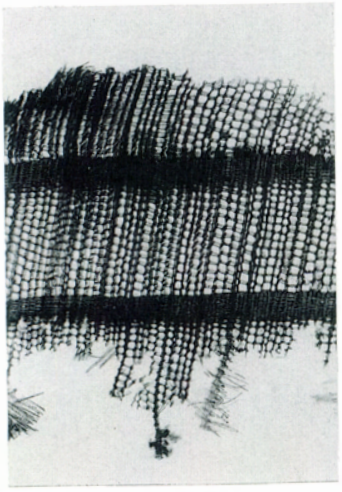
図版34　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)





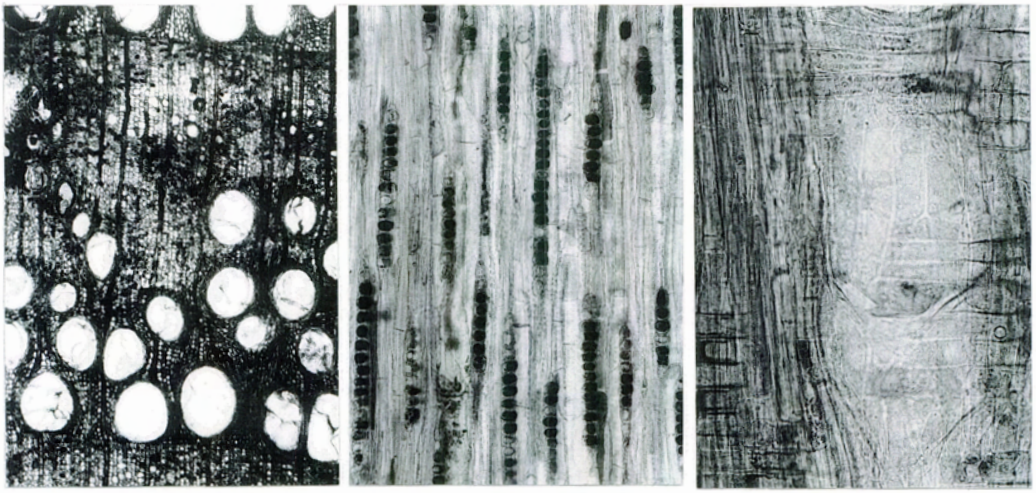
1a．サワラ（横断面）　1b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　1c．同（放射断面）　bar:0.05㎜
SX21出口 薄板状　bar:0.5㎜

2a．ヒノキ属（横断面）　2b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　2c．同（放射断面）　bar:0.05㎜
M22II層 φ15㎝丸木　bar:0.5㎜

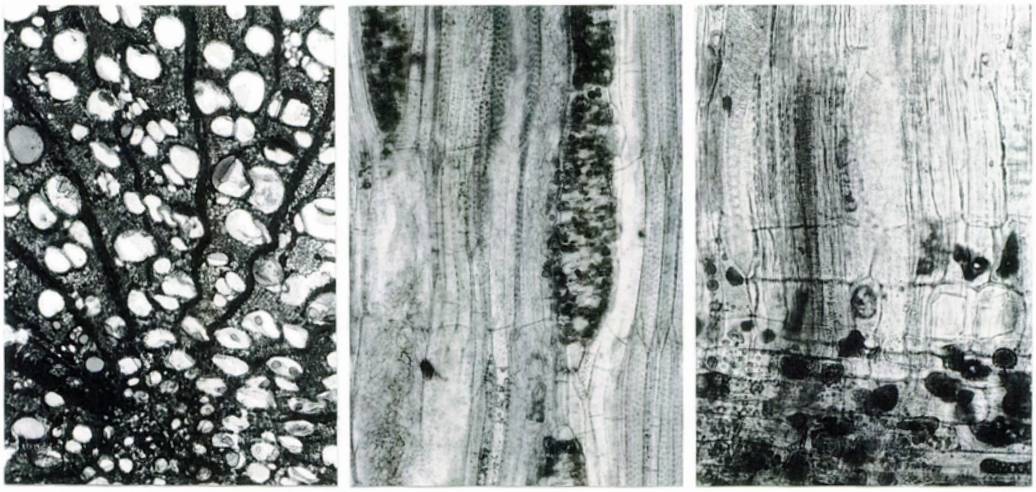


3a．ヒノキ科（横断面）　3b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　3c．同（放射断面）　bar:0.05㎜
SX21 角棒状　bar:0.5㎜

図版35　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)



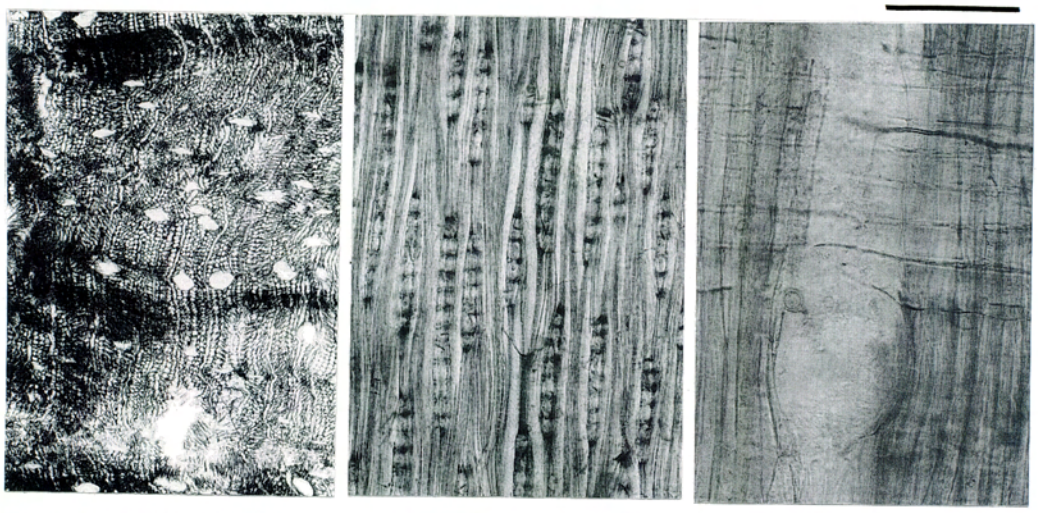
4a．クリ（横断面）　SX22-①　bar:0.5㎜　4b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　4c．同（放射断面）　bar:0.1㎜



5a．ケヤキ根材（横断面）　F10Ⅲ層-②(PLD-201)bar:0.5㎜　5b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　5c．同（放射断面）　bar:0.1㎜

6a．カツラ（横断面）　F10Ⅲ-①　bar:0.5㎜　6b．同（接線断面）　bar:0.2㎜　6c．同（放射断面）　bar:0.1㎜

図版36　たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)



7a.トチノキ根材（横断面）　SX21(PLD-202)　bar:0.5㎜　7b.同（接線断面）　bar:0.2㎜　7c.同（放射断面）　bar:0.1㎜

報告書抄録

ふりがな	たのもといせき
書名	**たのもと遺跡**
副書名	丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第5集
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	上原真昭　岩田　修　古田奈緒子　新山雅広　山形秀樹　植田弥生
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒500-8708　岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）TEL058-(264)-1111(814)
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
たのもと遺跡（いせき）	岐阜県大野郡（ぎふけんおおのぐん） 丹生川村折敷地（にゅうかわむらおしきじ）	21601	08762	36° 12′ 55″	137° 23′ 00″	19960430 ～ 19961115 1,900㎡	丹生川ダム建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たのもと遺跡	集落	縄文 平安	竪穴住居跡1軒 炉穴　1基 水場遺構　2基 焼土跡群 ピット群	縄文土器 石器 土偶 植物遺体 （トチ他） 灰釉陶器	竪穴住居跡は縄文後期前葉。縄文後期前葉および晩期の遺構や遺物が中心。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第46集

たのもと遺跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）
埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集

1998年３月25日　印刷
1998年３月31日　刊行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）
印　　刷　西濃印刷株式会社